

明治文學研究（1）

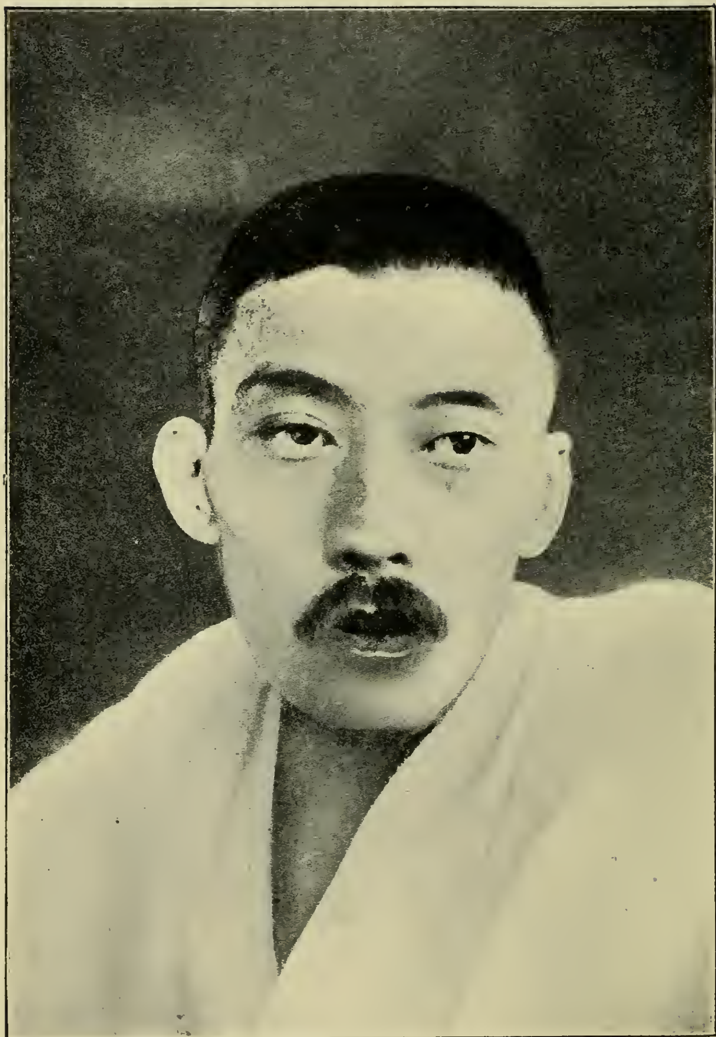
藤村作編

福田清人著

硯友社の文學運動

山海堂出版部


LIBRARY
SEP 15 1965
UNIVERSITY OF TORONTO



晩年の尾崎紅葉



明治三十九年の硯友社同人 後列右より 江見水蔭・石橋思案・川上眉山
前列右より 久我亀石・武内桂舟・岡田虚心亭・廣津柳浪・巖谷小波

序

明治時代は昭和の新時代に到達するに、日本が是非通過すべき一段楷であつた。明治の文化は昭和以後の新文化の爲に、必要な一任務を負ふものであつた。日本文化の長い歷史の中に、明治維新を境界線とする前後ほど著しい變化はない。而して今日以後永遠に傳はるべき世界的なる日本文化は實にこの明治を發祥地とするのである。

明治文化の各方面には、傳統の破壞と西洋文化の輸入とがある。而して傳統の破壞は傳統の廢棄を意味するものでなく、傳統の舊殼を壞して、それに新生命を芽ぐませんとするものであつた。西洋文化の輸入は、單にそれを鵜呑みにし、摸倣せんとしたものでなく、舊文化新生の爲の糧とせんとするものであつた。これは今日及び將來の日本文化の事實がこれを證明するであらう。

明治文學はそれ自身完成された文學とも見られるが、寧ろ現代文學の爲に新境地を開拓したもので、西洋の文學理論や文學に依つて、我が舊文學の改造

をなしたものである。永遠に傳ふべき金玉の名什必ずしも多いとはいひ難いが、これを他の時代に比べて少いともいひ難からう。而してその有つ特徴に至つては、いづれの時代のそれよりも、現代の我々の文學には最も近いものである。故にその研究は一應甚だ容易なやうに見えて、その實勞苦の多く、又困難の多いものである。資料の莫大なる、その蒐集の困難なる、著作年次の知り易からざる、關係の遠く外國文學に及べる、生活、思想の複雜なる等、研究者の爲に難儀な關所が所々にある。

余等の如き若き日をこの時代に送つて來て、その文學に最も愛好の情を捧げた少青年時代を經驗したものは、餘りに濃い、懷かしい思ひ出を持つから、研究の對象をこゝに求める氣が起らないが、若い學徒諸君は、この時代を普通の歷史時代として靜觀し得る餘裕を持つてゐるが故に、却つて余等よりも、明治文學研究の熱意の熾んなものを持つてゐられるやうである。隨つて資料の蒐集・探訪に於ても、古典文學研究者の古典に於けると同樣の勞苦を重ねて倦まないのである。

本叢書はこれらの若い研究者諸君の間に企圖せられたものである。諸君

はいづれも明治文學研究の風潮の先頭に立たんとする熱心な人々である。而してこゝに上梓に及んだ、福田清人君の「硯友社の文學運動」を始めとして、爾後續々刊行の豫定である。本叢書中に列するものは、いづれも數年研究の功を積んで、豐富な收穫を得てゐられるものに就いて、各自に纒めて貰ふ筈で、敢へて題目を分擔して、急速に研究の功を擧げることを期しない。即ち資料の豐富と、判斷の公平と、研究の眞摯とは、これをすべての卷に缺かないやうにしたい積りである。

こゝに第一卷の刊行に際して、一言所思を陳べて序に代ふる。

藤村作

硯友社の文學運動 目次

口繪目次

挿繪目次

硯友社の文學運動

序説

硯友社とは、改めて記すまでもなく、明治十八年五月創刊の『我樂多文庫』を機關雜誌として、その創めより、或はその後より、これに參加した尾崎紅葉、石橋思案、巖谷小波、川上眉山、大橋乙羽、廣津柳浪、江見水蔭、及び中途にして文筆を捨てた丸岡九華、又やがてこれより脫退した山田美妙を主なる同人として結成され、而して明治文學前半期の主軸を形成した文學的結社である。

その結社に基づく文學運動は、もとより一つの明かなる文學的所信、新たなる文學觀を抱いて、その共通の旗の下に集り、意識的に結合し、集團の力をもつて進んだものではない。その初め、單に道樂的な筆のすさびに打興じた、ささやかなる文苑より次第に生長し、やがて文學者としての自覺より、社會的な認識をも得んがため、卽ち文壇登場のために、箇々の力を合せて進出しようとした出發が、內には結合されて、單なる友人關係以上のものとなり、外には彼等の進出、存在をさまたぐるものと抗爭しつつ、自らの地位を確保

しながら、明治文學前半期の史的展開の頁を、彼等の活動によつて厚く占めてしまつた。

硯友社の生れ出づる前後の社會狀態、及び文學界の事情については、やがて述るであらうが、當時の新文學に對する氣運に乘じて、坪內逍遙、二葉亭四迷、幸田露伴、森鷗外など獨力、文學的處女地の荻を切開いてゐる者もあり、而して彼等は優れた先驅者であつたが、時流が、やうやく新文學を迎ふるに、寛かならんとしつつあつても、尙、古風な傳統と觀念の翳が黑く世間を支配してゐた時代において、孤立的に一人一人步む事は、かなり困難なものがあつたであらう。集團の力はかかる折その効果を箇々の總和以上に持つものである。

かかる折から硯友社の參加者は、少數とはいへ、一箇の集團結社として、その存在理由を持つたのだ。分散した箇々であつたなら、時の嵐に一たまりもなく吹き散らされたであらう分子も、集團的に構成されることによつて、勢ひづき、よく文學的荒野の中に、その芽をのばすことを得たものがあつた。

顧るに、文學運動上の結社は、日本文學の史上にもいくつも見られるが、それ等は短歌や俳句を作る人々に多かつた。然したとへば短歌の「家」の如く、それ等は勿論政治的な結社と異り、明確な歌論、文學觀を掲げ、それに從つて積極的な働きかけを、對社會的、對文學界的に及ぼすといふものでなく、ただ一家の歌風を傳統的に墨守し、之を將來に傳ふるに過ぎない、一箇の權威に裏付けられた消極的存在で、それに名を連ねる一家の人々は、それにより體面を保ち、經濟的にも生存してゆくのである。例へば中世の昔、藤原定家の後、分派した二條家、京極家、冷泉家の如きはその一例であらう。また近世の俳諧における、貞門、談

林、蕉門などにも、結社性が見られるが、それ等は箇々の人が同じ文學への見解で集つて、その地位を確保したといふより、松永貞德なり、西山宗因なり、松尾芭蕉なり、一人のすぐれたる藝術の師を中心として、集つた師弟關係の固い結合で、明治文學以後に見られる新しき文學主張のための結社と、本來の性質をやや異にするものの如く思はれる。

即ち、芭蕉においては、そのため、正岡子規が『芭蕉雜談』で、これを皮肉つて、

その多數の信仰者はあながちに芭蕉の性行を知りてそを慕ふといふにあらず、芭蕉の俳句を誦してそを感ずといふにもあらず、唯芭蕉といふ名の自ら尊くもなつかしく思はれて、かりそめの談話にも芭蕉を呼びすつる者はこれ無く、或は翁といひ、或は芭蕉翁と呼び、或は芭蕉樣と呼ぶこと恰も宗教信者の大師樣、お祖師樣などと稱ふるに異ならず、甚しきは神とあがめて廟を建て本尊と稱して堂を立つること是れ決して一文學者として芭蕉を觀るに非ずして一宗の開祖として芭蕉を敬ふ者なり。

といつた風にその門の流れを汲む狂信者たちが狂態を示すに至つたものである。狂信者たちは、かく偶像を崇拜すると共に、自らは偶像の光の下にある選民たることを他に示し、もつて、功利的に自己の地位を確保しようと計つたものといふことができよう。

かくの如く、かかる傾向を持つ前者はすでに占められた地位を保持する爲の努力であり、明治文學以後に見る後者は、今よりその地位を占めようとする努力に重心がおかれる。

明治、大正、昭和を通じて、文學的結社を構成する同人の機關雜誌により、一の文學運動を起して、ある

ひは文學理論により、又は作品行動によつて、その主張する文學をひろめ、從つてその文學の價値によつて、主張者等自らも、新しく文學者としての社會的な認識をかち得ようとする努力は、無名の作家のとる一方法である。硯友社はこの意味における、小說の分野においての文學結社、及び文學運動のこの國における最初のものであつたと思ふ。硯友社を最初にして、かうした運動は次々に起つた。卽ち續いては明治二十六年一月創刊の『文學界』の若やかなロマンチシズムの情熱に彩られた群がある。北村透谷、馬場孤蝶、島崎藤村、平田禿木、星野天知、戸川秋骨、同殘花はここに結合された。自然主義運動は、あまりに範圍が廣く、統制のとれた結社的統一の中心的凝固性が散漫ではあるが、機關誌的に言へば第三期の明治三十九年一月發刊の『早稻田文學』同じく三月創刊の『文章世界』等がその中心となつたともいへる。かくて又、若き貴族的な新しき理想主義者をもつて結ばれた明治四十三年四月創刊の『白樺』は、同人雜誌より明確な方向を掲げて進出した典型的な例である。その後も大正期に入つて、豐島與志雄、山本有三、芥川龍之介、久米正雄、菊池寬、松岡讓等を生んだ新現實主義文學ともいふべき第三次、第四次の『新思潮』や、大正末期の固定しかけた表現形式に、鮮魚の樣な潑剌さを持ちこんだ橫光利一、中河與一、川端康成等で代表されて新感覺派と稱せられる『文藝時代』又その視野を階級において、戰鬪的な文藝陣を布いてゐる無產派の文學結社、これに對して、あくまでも藝術を政治の支配下におくをいさぎよしとしない、幾つかの藝術派結社等が續いて起伏した。

然しながら、かうした同人雜誌の先驅者であつた硯友社の作家は、前に述べた通り、はつきりとした主義、

藝術觀の下に結成されたのでなく、ただ作品主義をもつておし進んだのである。その事は同時に明治十八年坪內逍遙の『小說神髓』によつて、初めてまとまつた文學論を見た如く、文學の理論的な荒地であつたその時代を念頭において考ふるべきである。かく文學理論によつて、集められなかつたにせよ、その作品行動によつて、共同進出を計つた硯友社へ、田山花袋は

三十年間、私の見て來た日本の文學者の交遊では、紅葉を中心にした硯友社が一番賑かで面白さうであつた。かれ等は一緒に飮み、語り、且つ伴れ立つて旅行した。しかしその交遊なり旅行なりが、興味を中心にしたもので、互に啓發したり、互に勵まし合つたりするものでなかつたことは事實である。かれ等の旅行は駄洒落と道樂との旅行であつた。これが卽ちその交遊が面白さうに見えたり思はれたりするところで、單に外面的に過ぎなかつたのである。眉山君などは、後にはその交遊の愚なることを度々私に滴した。（註1）

と局外より嘲笑的な言葉を述べ、同人自らの中にも江見水蔭氏の樣に硯友社は、文學運動の爲めの團結ではなく、社交的機關――平つたく云へば遊び仲間――進んでは兄弟關係であつたことを繰返し言つて、

閥とは何だ！然う叫ばずにはゐられないのだ。黨同伐異、それを我等が試みたらうか。それは黨を作した。紅葉を中心に多數の文士は集つた。硯友社といふ團體は形ち作つたが、單にそれは交遊機關に過ぎなかつた。他を害するやうな事は決して仕なかつた。味方を擧げて、味方ならざる者を抑へるやうな、そんな賤しい事は一ツもしてゐないのだ。我等は攻擊すべき武器！――批評論議を一切持たなかつた。自己

が攻撃されても隱忍してゐた位だ。（註２）と強く言はれる。かく硯友社を單純に社交機關と見る事は至當であらうか。後年に至つて、結社の內部の附隨的心理として、かうした傾向に移つて行つた事は認めねばならないが、兩者の視點はいささか感情に走りすぎてゐる氣がする。また局部にのみ注がれ過ぎてゐる氣がする。我々はその二十年に亙る展開の跡を冷靜に客觀しなければならない。その結社が共通のイズムの下になかつた事が、かく見られる傾向があつたとはいへ、その日常生活に時として、見られた遊戲的な營みが、硯友社作家のなすすべてであつたらうか。その他愛のない談笑の中に自ら心に抱く文學觀をもらさなかつたであらうか。彼等の口よりもれるものは駄洒落や、うがちや、街角の煙草屋の娘や、若い女の噂ばかりであつたらうか。さうした談笑ばかりでなかつた事が、たとへば、

硯友社としては、社中の著作に對して、嚴密な批評會を數囘催した。それは紅葉が一時本鄕森川町に堀紫山と二人で佗住居をした事がある。其の當時で、乙羽の『露小袖』や、僕の『櫻月』など解剖的に批評されたものだ。それは實に眞劍に論じ合つて、一頁々々、一字一句、微細に亙つて評し合つた程だ、それから「觀察が銳く成るし物をツカミ得られるから。」とつまり著作の補助機關として俳句の研究をも始めたので有つた。（註３）

といふ水蔭の文章でも證明される。その習作期、彼等が如何に藝術欲求に燃えてゐたかは後に說くであらうが、一つの團體、そして同じ仕事に從ふ人々同志の中には、いつか自然共通の氣分が醸しだされ、一つの

議論が提出された場合、少數の反對者の意見はその中で反駁され、修正されて集團としての氣分、意見、考といつたものがやがて平衡に保持されるものだ。硯友社もその成立の當初は友人關係によつて結合されつつ、やがて次第に社會的にその地位を確保されるに至つて、やうやく世間に擴つた攻擊の火の手をながめながら、有機的な自己を凝視する事が出來たと思ふ。そしてまた自然その作家として、人間としての才能より統率者となつた尾崎紅葉の、文學へ對する殉教的熱意はまた等しく他の同人の胸にも燃え、文學へ對する情熱は共通的な考へ方を持たせたに違ひない。かくては單なる社交機關以上に客觀さるべき、文學的結社としての存在である硯友社の、明治文學の展開上に占めた力强い步調をわれわれは見出さざるを得ない。

然しながら、藝術作品の創造の世界は、箇々の作家の自由な箇性に依る所が多い。一つの結社とはいへ、その多くの作家の作品を盡く、一樣の殼の中に籠らせて、類型的に述る事はもとより不可能である。私の論じようとする試みは、硯友社の文學運動の根本的な目的であらう所の、新文學の創作と文壇進出の過程において、その自然劃される各段階に、彼等はその爲め如何に苦しみながらその作品に精進したかの態度、又その作品そのものに如何なる展開、進步或は衰退を見たか、それについて彼等を抱いて生長する、若き明治の社會とその文學の直接の對照である讀者とに關連させて考察し、一部の人はすでに認めてゐるが、尙ややもすれば多くの人々より、先入主的に硯友社の作家は、氣まぐれな苦悶の足りない、傳統的な戲作者視される事について反對したく、それを明白に具體的に論じようと思ふのである。

かく直接に硯友社の內部を見て、しかる後ち、全體として、その明治文學、又廣く日本文學の展開上に占

むる地位、その功績をも正確に價値づけておきたいと思ふのである。

註1　田山花袋著「東京の三十年」四四七頁。「東京の三十年」は花袋らしい感傷を交へながらも、生彩のある雰圍氣を彼の見た明治文學の流れに立ちのぼらして興味深い書である。この書は彼の親んだ佛蘭西自然主義の文人アルフオンス・ドオデ（1840—1897）の「巴里の三十年」によつて、これを書いたことと思はれる。同じやうに文學に憧れて巴里に出て、色々の苦澁を經て文人となつたドウデの追憶に、花袋も東京に於ける自らを比したに違ひない。そこに彼の感傷性がこみ上げては、折々その筆を誇張させてゐる理由がある。

註2　江見水蔭著「硯友社と紅葉」三八頁。

註3　同二三頁。

第一章　硯友社成立の背景

一　當時の社會背景

言ふ迄もなく、一の時代の文學は、その當時の社會を母胎とした、文化現象の一つの現れである。それ故に社會を基調とした、其のさまざまな變革は、直接間接、その時代の文學の表現形式、その精神內容、素材に影響を波及する。卽ち社會の繁榮は、やがて必然に文學の繁榮を來すであらう。日本文學史を繙しみて、その劃された文學的期間の、史上に占むる頁數の厚い時期は、社會の繁榮をみた時代でなかつたらうか。萬代に傳ふべき萬葉集の編れた時期は、咲く花の匂ふが如き奈良朝であつた。平安朝の貴族文化は、源氏物語以下の夥しい作品を生んだ。西鶴、近松は近世の平民階級の勃興を待つて生れたものではなかつたか。そしてその逆も亦眞である。文學の暗黑時代は、社會の蒼ざめ痩せさらぼへた時代であつたのだ。

かくて硯友社の生れた、若き明治の十年代の終る頃は如何なる時代であつたらうか。

思ふに、明治文化の發生の導火線となつた明治維新は、武士階級の支配下にありながら、經濟的に膨れ上つた平民階級が、薩長の小身なる武士と結合し、三百年間日本の事實上の支配者であつた德川幕府を打倒して、新興日本の礎石を置き、外に自由に鎖國の鐵扉を解放したといふより、寧ろ進んで、先進諸國の文物、制度を飽食するまでとり入れて、日本を新しく、鮮かなペンキで塗り初めた一大變革の發端であつた。

過ぎさりゆく時代の黄昏と、新しく生れんとする時代の夜明けとに混沌とした時代。莹けづりの掟や、古きに馴れて、新しき喜ばぬ徒輩の鎭定、全ての過渡期の附隨物として、その隅々に生む小さな波瀾旋風、例へば熊本、秋月、萩の亂が、西南の役を大きな段階として治まり、十年代の暮るる頃は、餘りに速すぎる時代の廻轉にブレーキをかけたい程の滑かさであつた。

試みに明治初年の年表を繰れば、次々に加つてゆく新しい設備制度、――たとへば明治元年、江戸を東京に改むから初まつて、明治二年、藩籍奉還につづいて、東京横濱間に始めて電信線を架す、明治三年、英國に鐵道敷設のために外債三百萬磅を募る、同四年、大阪造幣廠なり金銀貨幣鑄造、同五年更に輕便な紙幣發行――すると淡暗い『夜明け前』の日本に、行燈より明るい瓦斯燈が港町横濱に、ぽつかり灯つた。

かうした反面に、古い傳統は次々に抹殺されて行つた。明治三年庶民の腰から殺伐な刀はとり去られ、四年散髮令は出て、人々の頭上に朗かな陽は照つた。六年外人とも結婚は許されて、ラシヤメンの汚名を港の女達からとり去られた。その頃、或は武士道の誇りだつた、しかし野蠻な原始的な復讐は嚴禁された。

それから十年たち――十五年以後の年表を見よう。十五年、すでに瓦斯燈に代つて、明々と電燈が街には輝いてゐる。國家の中央金庫日本銀行も、がつしりと建ち、民間には政治思想に眼ざめた人々の政黨がいくつも樹立された。十七年華族令は成り、新國家の功勞者のために榮光の座が規定された。海には朝鮮へ連る海底電線が沈められた。横須賀には、軍艦を浮べて、海岸線を守る鎭守府がおかれた。遠く、日本の軍艦は歐洲の港を巡歴し、東洋の新興國の威力を示し、一方外國との交情を求めた。十八年郵船會社は起り、日本

と地球上の國々との距離を短縮する日本の海圖が彩られた。異國の文物は一層迅速容易に舶來される譯だ。内閣は新しく組織され新しい政治を企劃した。

新しきものへ、新しきものへの建設！かくては極端な歐洲心醉——それは必然にあらゆるものに具體化される。すでにそれより十年前、服部誠一の『東京新繁昌記』にさへ學校、人力車、新聞社、貸店舗、寫眞、牛肉店、等數十項にわたる、目ざましい首都の景物の相が素描されてゐるのであるが『きのふけふ』の著者は更に十年代の後半の、生々しい首都の印象を省みながら次のやうに描いてゐる。

鐵道馬車が新橋と上野淺草の間を疾駈して、到る處で脱線するのが東京の誇りとなつてゐた頃、(註鐵道馬車の開通は明治十六年)霞關附近へ行くと瀟洒な洋裝をした貴婦人の二人や三人に必ず邂逅つたもんだ。右も左も洋風の家屋や庭園の連續した此界隈の一種特異な貴族的の空氣に浸りながら霞關を下りると其頃練兵場であつた日比谷の原を隔てて壯麗なる鹿鳴館(今の華族會館)の白堊がエキゾチックの波動を周邊に漂はして行人に文明の微醺を與へた。

其頃鹿鳴館の名はエキゾチックの響きを傳へて直ちに舞踏會を聯想させた。今では舞踏會は天長節の夜會の儀式となつて、少數外交團に專有されてるが、其頃は殆んど連夜の催しであつて、遠くからでも鹿鳴館の白堊を見るとオーケストラの美くしい旋律が耳を掠めるやうな心地がした。(註1)

さうした歐化主義の華麗な粹を集めて、鹿鳴館に打興ずる人々を、社會の上層にいただいた日本の思潮の流れが、上を倣ふに過敏な、大衆に如何にその影響を及ぼしたであらうか、凡そ知るべきである。

さて、そこには尙内容の虛しい、外核のみ彩られた華やかさはあつたといへ、この時こそは暗い過渡期の昏迷がやうやく明けて、やゝ安らかに息づく快いひとときであり、急迫した世相をくぐり拔けて立つことを得た安全地帶で、維新の勝利者達の誇らかに舞ふ饗宴の日であつたのだ。

嵐は靜まつた。荒々しい鬪爭と、角立つた政治と、新しい社會組織とに熱中してゐる間は、輕視された藝術、文學の新しい芽が萠え出るのはかかる時でなければならぬ。硯友社を生む母胎である社會の背景は、まさにかかる時期であつたのである。そこは十分に肥沃な、養分を保つた土地とは云へなかつた。然しながら、少くとも、芽が萠えても、いきなり洗ひ流し、又刈りとるやうな殺伐な時とは異なつてゐた。

やがて硯友社の同人となり、文學活動を起す人達は、この頃殆んど明治の年號と同樣若々しく、うろうろひゆく社會の姿を母の背から眺め、やがて木の香の新しい學舍に學びなどして、生長してゐた。即ち、明治以前の空氣を吸つた硯友社同人は、文久元年に生れた廣津柳浪が、最年長者であつた。尾崎紅葉、石橋思案は明治改元の前年に生れた。山田美妙は改元の年、川上眉山は明治二年に、巖谷小波は明治三年に生れてゐる。

明治十八年、彼等が生長し硯友社を結成した年、彼等の若々しい瞳に觸れ、また、その精神を動かしてゐた社會の動向は、およそ、前に述べたやうな背景であつたのだ。かうした點景から、又生活形式から、かかるものを派生した、巨きな社會の内臟機構の盛り上つて行く樣を、我等は思ひ浮べることができると思ふ。

註1　内田魯庵著「きのふけふ」二頁。同書中の「硯友社のむかしの憶出」は硯友社を知る一資料である。

二 當時の文學背景

硯友社を生んだ時代には、既に前に述る如く、その時代に適應した、新しい文學の發生を促す氣運が、次第に立ちのぼりつゝあつた。

然しながら、すべての事象と等しく文學とても、突然その時代獨自のものが、他と何等の聯關もなく生れ出でる譯ではなく、文學それ自體の流れを汲んで、先行のものを受けては、時にそれを更生させ、或は新しき要素を加へて一新してゆくものである。それ故に硯友社の文學の出發を見るためには、先明治初期より、硯友社生誕當時の周圍の文學を一應見なければならない。それに併せて、當時の世人の文學へ對する態度をも考へてみねばならない。

硯友社の生れる前後の讀書界の傾向はどうであつたらうか。明治四年に生れて、生長すると共に、漠然文學生活に憧れてゐた田山花袋は『東京の三十年』に

漢詩と、八家文と、和歌と、ビイコンスフイルド卿の小說と、『佳人の奇遇』と、英語と、馬琴と、春水と、岩見重太郎と、『頴才小說』と、さういふ雜然とした空氣が、私の十六、十七の二年を領した。

と交錯した册子の名を擧げて、時代の有樣を示し、硯友社同人の一人巖谷小波も、少時の愛讀書として、次の樣に記してゐる。

例の文學好の傾向は、其頃からます〳〵甚しくなつて、今は貸本などで追付かず、自ら進んで本屋を

漁り、小説や、お伽噺や、乃至脚本など云ふものに、少からず浮身をやつした。

例の帝國圖書館も、其時分は湯島の聖堂にあつた。學校はまた明神下、まことに近所であつたから、學校の歸途許りか、時には學課を休んでまでも、圖書館へ入りびたつたものである。

又僕の父は、可なりの藏書家であつたから、土藏の半分は本箱で充たされ、その半分は唐本であつたが、又日本文の軟かい書物も無いでは無かつた。

で、毎年夏になると、一週間位はその土用干をやる、これは書生達の仕事だが、僕はまたそれを樂みにして、頼まれもしないのに手傳ひながら、その中で彼方此方讀みかじつた事もある。

それからまた兄の部屋には、澤山獨乙書があつた。兄の專門は採鑛冶金學なので、それ等の本には無論用も無いが、その間から、文學書や、雜誌の合本を探し出して時々拾ひ讀なぞもした。

今試みに、當時の愛讀書を擧げて見ると、西洋事情、輿地誌略、水滸傳、西遊記、海底旅行、剪燈新話、空中旅行、アラビア物語、イソツプ物語、八笑人、七偏人、其他淨瑠璃本をはじめ、馬琴物は一番好きで、盛んに讀み耽つたものである。（註1）

これ等によつて、青年を主體とする當時の讀書界を支配したものは、支那の典籍我が國の化政期の小說、及び次第に流れこむ西歐の科學的な讀物や、政治的な題材を主とする小說、それ等の飜譯であつた。

これ等のうち、硯友社の成立前後には、舊き傳統と摸倣を汲む戲作小說、舊體の小說がやうやくその姿を沒し、海彼岸の思想、風物を喜ぶ傾向が、必然に飜譯の科學小說を生み、青年の政治的關心がそれに加つて

飜譯や創作の政治小說の洪水を來した。

それ等はもとよりその文學的價値に著眼して、飜譯され、また創作された譯ではない。リツトン、ヂスレリーの類の政治的角度からの飜譯や、ジユール・ヴエルヌなどの科學的興味から眺められたものであつた。科學的小說は、文明開化の相言葉に、新しい社會組織の發展を促す、モータアと見られた科學への關心から惹きつけられたものであつたが、一方また政治小說が、それが飜譯たると創作たるとを問はず、何故にかく青年の手に持たれたものであつたらうか。

思ふに明治十年の役後、漸進主義的な政府へ對し、より進步的な民衆は自由黨、改進黨を組織した。殊に佛蘭西の政治思想を直譯して、宣傳した自由黨へ對し、平穩無事な國家の秩序を欲する時の政府が烈しい壓迫を試み、彼等の言論、集會、結社の自由を束縛した事は言を俟たない。

かくては烈しい暗鬪の彼岸に、明治二十三年を期して、開かるべき國會への、憲政政治の實現に遠大な期待を投げかけた。時代は政治問題の熱病を病んでゐる。民間で發行される新聞雜誌は政論にあふれる。かくて小說も、理想に燃えた青年政治家の、その身の上に加へられた言論の壓迫の一つのはけ口であつたのだ。末廣鐵腸著の『雪中梅』下編（明治十九年十一月版）に、若き日の尾崎行雄の元氣潑刺たる序が載せてあるのを見るに、

身を百億に現して隨時化導の方便を施す。是れ菩薩乘の所說に非ずや。今日吾人の期する所は此の民を化導して、國家の福利を增進するに在り。其職任の廣大重要なる豈に啻に佛徒の衆生濟度のみならん

や。故に今の政治家たる者は固より、身を千萬億に變現して隨時化導の方便を施さざるべからざる也。然らずんば何を以てか三千年來昏々睡眠する三千餘萬の蒼生を攪起して、富强文明の新世界に入らしむることを得ん。此の故に政治家は亦新聞記者たらざるべからず。亦道德家たらざるべからず。亦學者、著述家、事業家たらざるべからず。特に身を小說家に現し、錦心繡腸を、鏡花水月の幻境に發露し以て大聲をして、里耳に入り易からしむる如きは、今日我國の政治家たる者の最急方便とす。(後略)

として、政治家が自己の理想や意見を、民衆に訴ふる「最急方便」として、小說を取上げて、その功利性のみを見てゐるが、政治小說の創作態度、從つてその本質はこれで十分說明されるであらう。

例へ作者が政治家でなくとも、かくした作爲はその作品へ反映してゐるのである。

ここに政治小說の具體的な一例を示すために、『政海波瀾梅花薫』(殘夢道人著明治二十年刊)の目次を引いてみるならば、

第一章　目出座の演說暗に壯士を刺戟す
第二章　自由樓の宴會壯士初めて名を顯はす
第三章　壯士雨を避て麗人に邂逅す
第四章　麗人情を說て壯士心を愛せず
第五章　壯士衆に推れて黨事に盡力す
第六章　才女琴を彈じ暗に少年の心を惱す

第七章　壯士舟遊暗に奇禍を招く
第八章　報凶を傳へて市街大に騷擾す
第九章　佳人の艷舌壯士の怒を釋く
第十章　鐵窓の感懷壯士容しく涙を飲む
第十一章　美人才女相逢ふて愁を說く
第十二章　壯士病を獄に臥し少年亂を市に企つ
第十三章　美人才女の艷舌新聞社長を動かす
第十四章　新聞社長壯士を囹圄に訪ふて努力せしむ
第十五章　才女美人の專心遂に囹圄の裡より拯出す

一篇はこの荒筋にいくらかの肉を附し、皮膚で覆つて描かれたものに過ぎず、しかして政治小說の一の型であるが、そこに概念的とはいへ、牢獄や演說會、或は市街戰など曾ての小說より一層新鮮な、現實社會の描寫と社會的に壓迫されて、不遇なる著者を想はせる、青年政治家の、日頃抱くであらう淡い夢なる女性の可憐な出現に依つて、かすかなる華かな色彩と香が、夏の宵闇に漂ふ白粉の香の如くして、それ等が若い讀者の心を波立せたことと思へる。

それ等の作品は、もともと二十三年の國會を待つ民衆の聲と呼應しての作者の夢を描いたのであるから、この聲の熱の冷めた頃には、自然消滅するのである。事實二十年二十一年を峠として、急速度に解消して行

つた。

『明治文學史』の著者が「其の著眼と目的とに於て既に根本的の誤謬あり。加ふるに技術の點に於ても脚色は千遍一律意匠の變化殆ど空しく、要するに貪書生が立身出世の夢物語に過ぎず。之を以て高く標置して政治小説と稱するは頗る當を失ふ。其人物も性格偉大欽仰すべき者に非ずして、屑々たる小才子、世渡上手の利巧者にして、當時の批評家の所謂政治社會の丹治郎に外ならず。而して之を叙せる文章修辭の技巧に至りては其缺陷の最大なる者にして、全然文學としての形式を缺けり。」と言ふ如く、作品としての價値評價は、今日の眼からは、その比重輕きものがあらうが、時代と社會とを背景として考ふる時、全然否定的に之を退けるのは極論で、皮相とは云へ、概念的とは云へ、その描いた現實は、一種新鮮なロマンチツクな精神を作品の中に見出すのである。

當時、尙化政期傳承の餘燼消えぬ、讀者の下卑た笑を買ふ爲めにのみ目標をおいて、描かれた作品や、あくどい人間の情痴の世界のみ描いた戯作の類より、卑近とはいへ、理想主義的た立場からは、たしかに超越し、いくらか高尙なる功利性は、功利性とはいへその方面から文學の社會的價値を、自然と高める作用をなした事を見逃す譯には行かない。作家が社會、讀者の意を迎へんと自らへり下つた永い時日の結果、書かれる作品も、書く作家も一種社會の幇間的な觀があつたが、この明治の十年代の末から、次第に作家の地位を向上させて行つたので、その事には政治小說の出現は意義を持つたと云はねばならない。

硯友社結成の前後の文學界は凡そかかる事情のもとにあつたが、一方ほとんど時を同じくして、坪內逍遙

の、新しき寫實主義の文學論『小說神髓』と、その具體的作品としての『一讀三嘆當世書生氣質』の出現は、如何に文學の地位を、世人に宣明したことか。

然し尙世間には、『書生氣質』の後篇の緖言に、著者が苦笑しながら、與へられた批評を集めてゐるが、それを見ればこの書を目して陋猥卑俗文學士の著作に似ずとか、學者はおほむね思想に乏し、政事を談ずるの必要を餘所にして、如斯くだらぬ戲述をなす、實に贅劳の極といふべし、寧ろ政治小說を飜譯するの有益なるに如ずとか、三四年以前の書生の情態にして、方今の書生の情態にあらず、方今の書生何ぞ斯の如く遊蕩にして惰弱ならんとか、又本篇に載る所は悉皆作者自身の經歷なるべし、文學士の履歷果して斯の如き歟、誠に感心なりといつた類の誤算と反動に滿ちた感想で迎へた者もゐたが、少數の心ある人々は、これによつて新しき文學の性質や、今後占むべき文學の社會的地位に深く思ひをひそませてゐたのである。

されば『きのふけふ』の著者の言をかるに「旣に政治小說に覺めて、歐米文學の絢爛莊重なるを敎へられて憧憬れてゐた時であつたから、彼岸の風を滿帆に姙ませつつ、此の新しい潮流に進水（ラウンチ）した春迺屋の『書生氣質』が恰も鬼ケ島の寶物を滿載して歸る桃太郎の舟の如くに歡迎されたのは當然であつた。是れ實に新文學の第一の勝利であつて、天下の青年は爭つて文學の成功に嚮つて趨つた」のであつて、かくして『小說神髓』『書生氣質』は正しく、新しいエポツクを新文學の展開に劃したものであるが、これ等は一面社會的必然性のあつたこと前節に述る通りである。

かかる必然的な文學要求の社會的氣運の中で、硯友社の作家も、この二書の出現と相前後して出發したの

であつた。勿論その出發にこの二書との直接な關係は硯友社作家は有しない。然し等しい社會的な新文學要求の聲の中に出發したのであつた。

この氣運は急速にその密度を增した。二十一年四月六日第十九號の『國民之友』はその論說に曰く、

吾人の考ふる所に於ては、日本の文學は、今や開發の最中にて、時々刻々變化し行けり。若し試みに四五年前の新聞紙を採つて、今日の新聞紙と比較せよ、其文字、文句、文體の相ひ異なる殆んど四、五百年を隔てたるが如きの思ひあらん。蓋し今日日本の文學は實に急流中を流れ行くものなり。若し人あり岸の上へに立ち現今の情勢に無頓著にて、種々樣々の批評を爲さば、誠に奇怪千萬なる事もあらん。評を爲す素より可なり…(中略)今日の文學は、坩堝の中に在る礦物にして、未だ何とも其形の附かざるものなればなり。漢文の要素あり、和文の要素あり、歐文の要素あり、俗語の要素あり、單純體あり、複雜體あり、馬琴風あり、爲永風あり、三田風あり、坪內風あり、各種の文體合戰最中にて從て各種の文字文句皆な火爐の中に跳り廻れり、如何に賴山陽の如き精妙奇警なる批評家あるも、天保時代の眼を以て、現今の文章を見ば唯だ呆然茫然筆を着する能はざるべし。蓋し今日の文體文章は、唯だ今日の社會に在る可き筈はなしと思ふ、而して其何れが正しきを得たるや、優勝劣敗の戰場を經たる後にあらざればば、之を知る能はざるべし。

と、いささか誇張的ながらも、社會を流れる文學的奔流の可成りな凄まじさを示してゐるが、その中に立つて、めいめいの方向を摸索する文學者の樣が客觀されると思ふ。

以上述る如く、硯友社成立の背景として、先社會的な事情も、明治維新より生長して、舊き封建制度の後始末より、漸次新しき立憲制度、國會開設に至る線へ上昇し來つて、やうやく新興日本の安定せる狀態に落著き、進步的なる國民のエネルギイの專ら注がれた政治形態を初め、社會建設の實際的、直接的方面からの餘剩が、ここに藝術・文學方面へも注がれる時を持つたのであり、文學さへもすべてかうした時代につきものの、その功利性を利用されて、政治と結合して政治小說となり、科學と結んで科學小說となつて、ゐたものが、やうやく文學へ對する正しき認識のもとに、反撥してそれ獨自の道を進むやうになつたのである。またすべて舊きものに訣別して、新しき創造への關心は、化政期風な低調な文學態度、文學觀を次第に拔けて、一面功利性によつてはゐたが、在來より高尙な眼で、文學を見る眼を讀者に與ふる意味で功果を持つた政治小說の類より、進步的な讀者を獲得して、文學も文學者も社會に一つの席を與へられて、專心ここに進むべく、新文學はその流るる前の渦卷を見せた。

硯友社作家もこの渦卷の中に立ち、自らの溝を掘つて、その大きな流を誘つて行つたのである。

註1　巖谷小波「我が五十年」七八頁。この書は題名の如く小波の自傳で、硯友社作家との交渉が記され硯友社を知る一資料である。

第二章　硯友社の成立とその組織

一　硯友社の成立

背景の調和はととのへられた。硯友社の活動の舞臺は、もはや彼等の登場を待つばかりであつたのだ。

硯友社がその機關雜誌『我樂多文庫』を公刊する事によつて、社會的に進出したのは、明治二十一年の五月の事であり、それ以後をいはば公的な硯友社とも稱してもいいのであるが、その以前私的な存在としての硯友社が、明治十八年の二月結成され、手寫をもつて『我樂多文庫』を廻覽し、それが生長して十九年十一月印刷する運びにまで至つたのである。それについて同人の一人故丸岡九華が生前まとめたまま、筐底に秘められて、今は前田曙山氏の藏本である『初蛙』なる未刊の稿本によつて、この萠芽時代の硯友社、及び筆寫された『我樂多文庫』の全貌について知らうと思ふ。

『初蛙』は六卷よりなり、二十五字詰二十四行の原稿紙九百二十八枚、それに附錄として九華の二十二年十二月十二日より二十三年三月三十一日までの日記九十九枚が別に、一卷となつてゐる。九華はそのはしがきに、

此の一卷は、昔自分が尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案三君と硯友社を組織し、其機關雜誌として我樂多文庫を發行した當時社內外の狀況を書綴つたもので、其材料は、手許に保存して居る我樂多文庫と、當時同人間の往復文、又は日記など其他雜多な印刷物やら、殘簡零片などから記憶を辿つて漸く取纏め

たものである年が經つにつれて、事實を忘れてもしまひ、材料も紛失して益不明になる事が多いので、ともあれ現在に分つて居るだけでも取纏めて、後日の參考にしようと、我面目に試みたまでである。稿を起して見ると、不明になつた事も非常に多いが、しかしまた不思議に昔なつかしい心持が出て、連鎖的に思起す事もあつて一部は現實のやうな、又一部は夢を辿るやうな思ひで、此幾冊が出來たのである。且は稿成つてから讀返して見ると、硯友社の來歷談とも、我樂多文庫の變遷史とも、又社中同人の逸話集ともつかぬ、極めて散漫たるものになつてしまつた。昔の硯友社及我樂多文庫時代には、こんな事があつたといふ一種の雜記錄見たやうなものが出來てしまつた。もう少し整つたものにと思つた豫期に反して、全然失敗に終つたのであるが、然し是は自分が抑も初蛙の稿を思立つて筆を執り初めてから、數へると前後七八年にもなつてゐる。稿を改める事前後幾回、其間には故人になつた人もある。又材料が散逸したりしてしまつて、後には最初の稿が却つて唯一の備忘錄となつたやうな場合もあつた。

とはいへ、氏は明治文學研究者のかなり硯友社へ對する誤傳や思ひ違ひを指摘して、

然し折角硯友社が傳へられ、我樂多文庫が記錄されるならば、出來得る限り其眞相と事實を傳へてもらひたく思ふ。假初めにも事實を取違へ後人を誤るやうな事は假に些細な事でも遺憾千萬に感ずる。過去に起つた一事一業の終始を過ちなく記錄し傳へる事は、何事でも面倒な事で、些細な事でも其眞相を捕へやうとするには、案外面倒な調査もいる。意外な勞苦を要するのである。先其一事一業の起元や沿革は勿論の事、それが成功し又衰廢した徑路、加へては經濟的方面倫理的方面、最後に政策的經營的方

面、と云つた樣に各方面から觀察し、調査し、考證しなければ其眞相は傳へられない。假に硯友社にしても、元來何の因緣で此結社が出來たか、此一團體が當時の文壇にどれ程の技藝的價値及び影響を與へたか、それに內部の經營方法、卽ち經濟はどうして居たのか、又結社した同人間の緣故や情誼や意氣はどんなであつたか、最後に此一結社が他の一般社會及文壇に對する政策又交渉狀態はどんなであつたか、概要此五項目が、ある程度まで說明され諒解されなくては斷じて其眞相は傳へられないのである。微々たる硯友社僅かに三四の靑年同好者が、偶然に創造したものが、何時の間にか發達して世間から一團體として認められるやうになり、兎も角に明治文學の勃興に、其一助となつて幾多知名の文士が此結社中から世に現はれたのみならず、當時一般の文藝に變動を與へた事、並に此結社が明治二十二年の暮秋になつて廢滅して、遂に文壇から形を消す最後の命運まで落込んで行つた眞相は、それを傳へるに決して容易の業でない。且は永く文墨の技から遠ざかつた自分などの到底企て及ぶ處ではないのだが、然し自分として之を企てたのは、幸にも創立以來關係して當時の狀況を目擊した記憶もある。且は幾多世間に滅絕した材料を保有して居る便宜もあるからで、それ等を取纏めた此初蛙の雜記錄も出來たのである。…（後略）

と記されてある。氏の執筆の態度も察せられであらう。『初蛙』とは初稿が明治三十九年の五月であつた爲め、別段の意味なく斯く題し、更に筆を加へ材料を合せて大正十四年三月完成されたので、其後同人であつた石橋思案、久我龜石の兩氏の閱讀を經たもので——卷中所々に石橋思案の朱筆の補正批評を散見する——硯友社の創立より文庫廢刊までの事情、作品について內部的な記錄はこれ以上のものはないのである。『早

稻田文學』の明治文學號に連載され、又文藝市場社發行の『複刻我樂多文庫』の附錄となつた『硯友社と我樂多文庫の由來』なる小冊子はこの原本より一部を拔粹したものであらう。

九華は文學結社としての硯友社の運動を、機關雜誌をもつた期間のみに認め『文庫』の廢刊をもつて、硯友社は消滅解消したと狹義に解釋して、そこで稿を結んでゐるが、其後私的な交際機關以上に、社會的文壇的な存在として硯友社を客觀する著者は、後章において、展開の區劃の際述るが、此の期をほぼ同人の習作期としたいと思ふ。而してこの習作期については、主として『初蛙』を資料として記述したい。

さて、硯友社の成立をはらむ時代の社會、文學の空氣は前章に素描した通りである。かかる空氣の濃かつた明治十八年に硯友社はその結社を構成した。それについて丸岡九華はまた次の如く述べてゐる。

明治十八年は自分は二十歲、尾崎石橋二子は各十九歲、山田は十八歲、久我君は二十二歲であつた。さて此處で創業當時の模樣に移るが、ある日一橋舊高等商業學校の後庭で、佛語科の久我須之助君が自分に向つて、今度友人の尾崎緣山石橋雨香の二氏が發企して文墨の會を起すといふ計劃がある。君も豫て好きな事だから是非加盟して盡力してくれないかと話した、先にも記した通り自分には其後此種の會合がないので、相手ほしやの情に堪えなかつた時であるから、「そりや有難い。尾崎石橋二君は文友會凸々會以來の舊友で猶更面白い。外に誰が加るのか」と聞くと「今一人は豫備門の友人で山田武太郎だ」といふ。此時分自分はまだ山田を見ず、どんな經歷でどんな文章を書く人だか知らないが「書生同志なら結構だ。そして其の談はいつするのか」と聞くと「今日の午後神田三崎町の石野といふ下宿屋で、僕も

尾崎も同宿して居る。山田も石橋も皆來る筈だから君も是非來たまへ」「よろしい行かう」と共日放課後に久我君と同道して三崎町の石野へ行つた。

九華が文中「共後此種の會合がないので」と記したのは、彼が明治十六年頃發企して文友會といふ、漢詩文を中心とし批評添削の會を開き、毎月一回集つてゐた。尾崎紅葉もこれに入會してゐたが、一年半程で解散し、運動、遠足、演説を主旨とする凸々會に轉身したが、此の會も亦廢絶したのであつたのを言ふので、かかるささやかな會合も亦硯友社成立の一暗示となつたと思ふ。

一方、九華等に働きかけた紅葉、美妙等の主體の成立について、紅葉の思ひ出より之を記さう。

それには紅葉と美妙の遠い交渉が機緣となる。即ち明治十五年頃、東京府の第二中學に、紅葉が入學した時、彼より二級上に山田武太郎、後年の美妙が在學してゐた。彼は文學的な才能をすでに惠まれて、校内で評判の學生であつた。亂暴な悪戯好きの紅葉と較べて溫厚で孤獨的であつたが、二人はいつか友情を結んだ。話合つて見ると、五六歳の頃二人は同じ長屋の一軒おいた隣人で、共に遊んだ事もあつたらしく、かかることから一層親しくなり、學校歸りにも同じ道で、かくて學校外の交りも結ばれた。

しかしながらその交りも二人が中學を出て、學校を異にするや斷たれた。紅葉が大學豫備門の受驗科專門の三田英學校を經て、豫備門に入學して二年過ぎるまで音信不通であつた。しかるに紅葉が二級になつた時、前と反對に彼より二級下に美妙が入學して來た。そこで再び舊交が溫められた。その頃美妙はすでに堅琴草子なる一篇を綴り、かなり文章の修業を積んでゐた。

次に紅葉はその友人久我須之助によつて、石橋思案を知つた。彼も文學愛好者であつた。

美妙は居所芝から一橋まで通學するのはあまり遠いので、駿河臺鈴木町の坊城邸内に移つた。紅葉もやがてそこへ寄宿して、毎日文學談を鬪はした。思案もその頃、九段坂上にゐたがしばしば尋ねて來てこれに加つた。

美妙は外出嫌ひであつたが、紅葉は社交性があつて、豫備門の學生に話合つてゐる内に、多くの文學愛好者を發見しては硯友社の創立の導火線となり、九華もかうして知り合ひとなつたわけである。

その頃美妙は學科より雜書を耽讀し、思案は運動に熱中してゐた。紅葉はどちらともつかなかつた。世間では春のや、南翠、篁村の小説が流行してゐた。それ等を眺めながら、彼等も自らの細い筆を握つたのである。（註1）

かくて文學――といふより筆のすさびの好きなグループが集つて、詩とか俳諧とかに偏せず、小說、戲文、詩歌、都々逸、川柳、冠句付けに至るまで、普く同好の士の種々なる作品を集めて、隔月一回之を雜誌體に山田、尾崎兩人が筆耕編輯して、廻覽し、その際めいめいが批評する事に定め、雜誌の名は思案の發意で、つまりは文筆の娯樂で雅俗を併列する雜誌だから『がらくた文庫』とし紅葉の意見で『我樂多文庫』と萬葉假名で書き、社名は眞面目に永久を意味し且文墨の交であるから硯友社と決めたのである。編輯の體裁から、小說欄を心織筆耕、戲文新體詩を千紫萬紅、狂歌川柳などを飛花落葉とする事をも定めた。

かくして明治十八年五月二日をもつて、手寫本我樂多文庫第一篇はなつたのである。半紙半切位（横四寸

五分縦六寸五分）紙數三十二葉の小本であつたが、後年明治文學前半期の主軸となる芽がこの時地上に萌え出でたのだ。その後の展開內容を考察する前に、硯友社の組織について考へて見ようと思ふ。

註1　「新小說」第六年第一號、明治三十四年一月一日發行所載尾崎紅葉述「硯友社の沿革」に據る。口述筆記につきものの幾らかの誤謬はあるといへ、初期の硯友社の發生展開を知るに、彼自ら語つたものとしては、唯一の資料である。

二　硯友社の組織

その成立の最初は、單なる文學の同好者同志の結合であつた故に、別段組織などといふ政治結社的なものはなかつたが、重なる中心は、その發企者である、石橋思案（當時雨香）尾崎紅葉（當時緣山）山田美妙（當時樵耕蛙船）丸岡九華（當時桂堂）等であり、特に紅葉、美妙はその筆寫時代は編輯筆耕に從事したので、更に重い中心的地位を自然に占めたと見るべきである。

ここに中心をおき、一般社友より廣く投稿を募り、社中の評を加へて誌上にかかげ、一般の發表欲を滿足せしめ、もつて社との結合を密接ならしめた。新加入の社友は時々これを紙上にその姓名を揭げて、他の社友に知らしむると同時に、新加入社員の社友としての意識を鮮かにする効果をつとめたと思へる。卽ち第三號の卷頭には廻覽の順序を示す二十一名の姓名を記してあるが、九華は之に對し、筆を執つて寄稿した者は尠く、他は愛讀又は批評するばかりであつた由を說明してゐる。これは十八年の九月發行であるが、十八年末の第五號には二十三名の同人名簿が卷末に附せられてある。十九年五月の第八號の廻覽人名は十九人、十

租庸調概略

太古御調の事ありし人の代崇神の朝にありて男子は弭調女子は手末調の制を定めしことあり 那人民に調役を課せし始まりなんありけり 孝徳天皇の世には全国の人民に口分田を班ち田より收むるを租といひ人より收むるを庸といひ家より收むるを調とはいふなり

男子十六才以下六十六歳以上及び癈疾ある者妻妾奴婢家人等はすべて調役を免ぜられし て十七才より六十五才までは收庸を定めたれば

租とは年貢米なり 孝徳の制は田一段の租田稲を二束二把と定め一段の收穫凡そ五十束として一束の稲を舂きて白米五升を得れば 一段に五升につき一升一升を貢ぐにあたれば殆ど收穫高五分の一を租となすなり

調とは郷土の物産を貢納とし孝徳の時には絹絁絲綿布等にして男子一人につき絹をもて收めなば廣二尺五寸のもの二丈六尺を貢ぐべし布絁など各其の高下に依りて丈尺に長短あり

庸とは丈役にいふつべきものにして佛小役なり

一日收正丁よりの間四十年に亘る十日丈役使に使はるべく制あれば其人出づる事能はざる時は一日布二尺六寸の算なるを十日分則二丈六尺を收むべきものとす

これより後の世に下りて此制に変更ありしと云へども租庸調の法は孝徳に定まりしものなれば此立法の精神は少しも変る事なく以て此令の一班を知るべし

国文学科第壹年
尾崎德太郎

學生時代の紅葉の手蹟

一月の第九號には社員廿八の雅名調が載せられ、十一號二十年一月發行には、九人の社友の新入社に漣山人の名をも見出される。彼はその以前十七歳の頃から讀賣新聞の寄書欄へ盛んに投書して、さうした事に關心を持つ人たちには、いくらか名前も知られてゐたと自著『我が五十年』に記してゐる。十三號二十年七月には十四人、十四號二十年十月には十八人、同年十二月十五號には十二人の氏名を見る。

印刷するに及んだ後における新入社員は、社規に從つて自身の住所本名雅號を、横三寸縦五寸の奉書にしたため社幹へとどける樣にとの規定で、かなり形式化しそれを實行した。もつて社としての組織を鞏固にしたのであらう。

かくしてやがて發賣された『我樂多文庫』第一號十四頁に、硯友社々則九條がのせられてある。それは九華によれば、社員の增加と、入社手續の問合せの頻繁さに面倒になり、紅葉が一夜、急ぎ草したものといふが、この頃急速に發展をみせた社運を示すものと言ふべく、ここに明らさまな硯友社の目的や、組織や、經營方面の事も分るから、すべてを引用する事にしよう。

硯友社々則

一　本社は廣く本朝文學の發達を計るの存意に有之候得ば戀の心を種として艶なる言の葉とぞなれる都々一見る物聞くものにつけて言出せる狂句の下品を嫌はず天地をゆさぶり鬼神を涙ぐまするなどの不風雅は不致ともせめては猛き無骨もののかどをまろめ男女の中をも和らく事を主意と仕候

但し按摩同席にて讀むやうな投書は一樹の烟一河の水にいたす可候

二　右の主意に御左袒被下一臂の力を借し給はむとの篤志の方々は男女老弱貴賤を論ぜず社員たる事御勝手次第に御座候

三　社員は社費として毎月金十錢を其月の五日迄に御納可被下候

四　入社したまはむとならば社費に添へて住所。姓名。雅號印鑑を御寄送被下度候　用紙は奉書にて巾三寸長五寸

五　社員は文庫發兌毎に只匁五分にて一部進呈可仕其他いろ〳〵德分になる事有之候得共詳にせば天機を洩らすのおそれ有之候まま委細は御入會の上しる人ぞ知るサネ

六　本社は小說の起草。劇場の正本。小說の反譯（潤筆は一字につき千金づつ申受候）廣告の案文。歌句戯文の添削批評等の御依賴に應じ可申候

但し建白書の草案記稿其外政事向の文書は命に替へても御斷申上候

七　世の著作家にして其著書を本社に寄せられなは本社は街談巷說に其批評を掲け尙森羅萬象に於て相當の廣告可致候

八　全國の新聞雜誌等にて本誌を批評し其一葉または一部を本社へ寄送せらるるの勞を賜はば本社は引續き次號を進呈可致候詩に曰く蝦デ釣レ鯛ヲこれこの所謂には無御座候

九　こま〳〵敷事につき御疑問の廉は本社へ願ひたし今回は先づしやそくの間に合せと洒落て條々如件

明治廿一年五月　硯友社

とある。この社則は、半ば眞面目に、半ばふざけたものが見られるが、硯友社の初めての對社會的宣言といふ意味で、眞面目なり、ふざけたなりに彼等の對社會、對文學、對內部への態度を、それだけ明らかに示してゐるものであるから、一應ここで批判しておく必要があると思ふ。

第一條は社の文學へ對する態度、目的を示すものである。

「本朝文學の發達を計る」といふ遠大な目標、文學の優雅微妙な機能を認めつつそれ故に品格のあるものを求め、社友の投書でも按摩同席にて讀むやうなものは「一樹の烟一河の水」となすと、組織の量のみならず質についての關心を寄せてゐる。

第二條は組織に入る者の資格で、それはかうした目的に關心を持つ者は、男女、老弱貴賤を論ぜず、すべてに門戶解放を示して、資格を問はない自由さを認めてゐる。

第三條は社員たるの義務としての負擔を揭げ、その經濟的基礎を固くしようとしてゐる。

第四條は入社形式を揭げたものである。印鑑や奉書までを指定したところ、いくらか形式的な重々しさを示し、社友としての自覺を持たせ、一方社の權威を示さうとした。

第五條は社員の權利を示し、社員たるの利益を揭げてゐる。第六條は、社則といふより、事業計畫で、あるが、一方政治と文學の對立を明かにし、第七條はまた他の新刊へ對する寄贈勸告である。

第八條は全國の新聞雜誌社に對し批評を求め——その事によつて、全國的に我樂多文庫の存在を知らしめ、もつて新しく組織の網を擴大して行きたい目的であつたと思はれる。これには社幹として美妙齋、紅葉山人、

思案外史の名をあげ、また八十五名の社員名字盡が掲げられ、社友として文壇の先輩をあげた中に饗庭篁村、南新二等の名をみる。第三號の新加入社員二十名中に水蔭亭雨外として江見水蔭が加つてゐる。彼が硯友社に近づいたのは、その頃小石川久堅町の杉浦重剛の稱好塾にゐて、そこにたまたま、すでに同人であつた巖谷小波が入塾し來り、その小波の紹介で、會員となつたのである。水蔭は既に二十年秋博文館の『日本之女學』などに小說を寄せて居り、又、『我樂多文庫』について、塾主杉浦重剛が手に入れた同誌を、塾友川那邊貞太郎より廻覽して、二人で入社しようなど一度相談したこともあつたほど豫備智識もあつたのである。（註1）

以上あげた如く、その社友の增加をよく結合させるためには社幹たる者の搖かがざる重心を必要とする。しかるに美妙齋は、孤立的な性格で、また思案はうるさい事務的な勞力に頭を疲らすより、都々逸の一つでも作ることを好んだらしい。かくてその作品にも人一倍精進し人を容れる度量も廣かつた紅葉が、いつか自然と社の頭目的地位に立つに至つたのであつた。それはもともと政黨首の如く、黨員によつて推戴されたのでなく、その仕事、性格、名聲の故に、自然事實上社の指導者となつてしまつたのである。

評論家的傾向より、むしろさうしたことをさける、創作三昧の境致にひたる事を好んだ者が多かつた硯友社故に、內部において明確な文藝上の意見の對立も示さず、そのめいめいの信ずる道を步き、後年に及んでも、かつて友人として共に文壇に出でた事が、自然主義以後よくみる自己孤獨の殼に籠る箇人主義の性癖をみせず、特に山田美妙を社より失つて後は、彼とことさら對峙する者もなく、或者は頭首的な紅葉に心服し、或者は彼を賴るべき友人とし馴れたであらう。紅葉も亦彼の作品「靑葡萄」に見られる子弟へ對する眞情を

等しく同人一様に浴せたであらう。かくして硯友社同人は、形式的な組織をもつて、その基礎を固むる以外に、圓滿な交際により、同人間の融和を計つた。それは局外者も羨むべき圓滿な交りであつた。平素の生活もさうであつたが、それがまた具體的に表れた例を二三拾つて示すことにしよう。

硯友社同人は明治二十三年一月、相集つて、文士劇を催した。演し物として水蔭作「增補太平記」、柳浪案、水蔭作「積怨切子燈籠」「花競八才子」等を、小石川水道町の黃鶴樓なる邸宅で催した。その頃演劇改良の聲が、次第に盛り上つてゐたが、別にさうした方面への積極的意志表示でもなく、半公開的な趣味的催し物で、かたはら同人の親睦を示したものであつた。

また二十六年の四月十二日、紅葉、水蔭、乙羽、花瘦四人は東京を出發して當時、京都日出新聞社へ記者として、京都へ行つてゐた同人、巖谷小波を訪ねて、旅をした。

月ケ瀨より芳野をへ大阪に出て、京都へ至る行路であつた。これを機として、小波主催の關西文學會が、京都共樂館で開かれた。集る者百餘名。中に神戶にゐた、同人丸岡九華も來り會してゐる。

かうした、長途の旅の外、明治二十九年、相州片瀨にひつこんだ、江見水蔭を訪ねて、紅葉、小波、思案、柳浪、鏡花、風葉、春葉等が數日の行樂を共にしたことも、樂しい追憶として水蔭の著『硯友社と紅葉』の中に語られてゐる。

かくて紅葉を盟主の如くして、硯友社の組織は鞏固となつて、發展して行つた。後年紅葉の死が、一面その後より來る新しい文學運動の故でもあつたがとにかく細々ながらつづいて來た社の命脈を、ほとんど絕え

だえに搖るがしたのはこの反證と言ふべきである。この關係はあたかも後年の『白樺』に於ける武者小路實篤、『新思潮』に於ける菊池寛の如きものである。最初は同じ出發點を持つ他の同人より花々しい作品行動を示し、その先、占めた作家としての社會よりの認識、それに基づく地位が、一種社會的勢力を作つて、その作家の背光をなし、その作家を作品價値によるもの以上に評價させる場合がある。紅葉がその名聲は作品活動以上に、彼の社交性をも一原因と見ねばならない。そして生活の憂ひなからしむる確かな發表機關を生涯持つた事である。これ等が他の同人へどんな便宜を與へたであらう。この確保した經濟的事情が紅葉の地位を他より一段と高めた事も一面から言へると思ふ。

現代は、精神的、物質的、ありとあらゆる物が販賣價値となり、その最も正當な價値で値ぶみされる爲に、市場へ運びゆかれる社會の組織をもつた時代である。以前は傳受されたが、決して交換されず、贈與されたが決して購賣されなかつた德、愛、意見、科學、良心凡そあらゆるものが、交易の目的となるに至つたのである。藝術、文學もこの例にもれない。

なる程、その作品創造過程には純粹なものがあらうが、今ここで角度を變へて論ずる事は主觀的な作品の鑑賞とか分析以外に、經濟的要素、商品的な見方による文學作品についてであつて、問題は自ら別と知らなければならない。かつて元祿の昔に松尾芭蕉は次のやうな手紙を書いた。

新麥一升、筍三本、油のやうな酒五升と云は富貴の沙汰也。蕎麥粉一重、小遣錢二百文忝存參らせ候

水油なくてねる夜や窓の月

枕屛風むだ書致し、則御使へ相渡申候。臑半せんたく糊少少と御申付可被下候。已上。

はせを

杉風様。おふくろ様。

口上にかき落しけり土大根

俳聖として仰がれた芭蕉の懐かしい生活、人間味を十分見られるこの斷片に、その輕い剽逸な筆致の故に、彼のパンに代へられた藝術才能をみのがしてはならない。とはいへ彼はおそらく未だ人情厚き世に生れて、パンの脅威にはかられなかつたであらうが、彼の時代より更に去る事遠く、かかる人情さへ消えた、自ら食ふ事に汲々たる明治以後の現代に、もし文學作品を賣つて生活せねばならない作家が、その作品が市場に賣れなかつた場合は、陋巷に窮死するより外はなからう。

過去においては商品的性質が稀薄であつた藝術作品が、かくきはだつて商品化して來た時、その市場ともいふべき發表機關を固く把握してゐるといふ事は作家の強味である。紅葉が硯友社の進展に、他の同人より重んぜられた理由、又一方硯友社の他の作家がその地位を永く保ち、硯友社の基礎が固かつたのは一面この發表機關の確保の故と知らねばならない。

鞏固なる組織には統率者の强權か、組織を構成する人員の熱心なる義務、服從が必要であるが、經濟的事情の裏付が更に厚くこれに加はる時、一層鞏固となる。作家にとつてよき發表機關を持つ事は、必然にこの條件を充すこととなる。それ故に、われわれは次に硯友社作家の作品の發表機關について知らうと思ふ。

註1　江見水蔭著「硯友社と紅葉」二頁。

三　硯友社作家の發表機關

作家はその生産した作品を、その生産過程に於いて、單に創造の喜びに、自己滿足する以外に、他へ對してもこれを發表して、作品の鑑賞享受をなさしめたい望みを持ち、一方またかかる作品へ觸れたい憧憬も、讀者としての人々の本質的な心である。文字を傳達の方法として使用する藝術・文學は、曾つて印刷術の發明されなかつた時代には、書寫によつてこの目的に添つて少數の滿足をかちえた。しかしそれは恐しい勞力を費した。これはひとりこの國ばかりでない。片上伸の『露西亞文學研究』の中に、「その國のある寫字生が、いくらか詩人的素質のあつた青年であつたらしいが、彼が一冊の書寫の勞苦を果した後の氣持を、「花婿がその花嫁を見て喜ぶやうに、寫字生はその寫し取られた書物の最後の一枚を見て喜ぶ。商人が利得を受けて喜ぶやうに、また舵取が波止場に着くのを喜ぶやうに、更にまた巡禮がふる里に歸るのを喜ぶやうに、丁度そのやうに書物を寫し取るものは、その勤勞を終るのを喜ぶのである」と、彼の寫本の奥へいたづら書したと記してあるが、かうした寫字生の苦心もさる事ながら、容易に手に入りがたい作品に、觸れたい多くの人々の渇も當時誠に甚だしいものがあつたであらう。

筆寫より木版への進歩も驚くべきものがあつたが、更に進んで活字の發明は、如何に文學の社會への普遍化を扶けて、讀者大衆を喜ばせた事であらう。

明治十二年七月出版の『民情一新』の中で、福澤諭吉も近時文明の原動力の元素として、蒸氣船車、電信、

郵便と共に、印刷の効力を擧げて、經世的角度から論じてゐるが、明治十年前後を轉機として、あらゆる出版物への活字の利用は、又文學方面にも勢ひ波及して、萌芽期の明治文學のよき助産婦となつた事は特筆すべきであらう。

ここに幕末より明治初年にかけての印刷界の事情を見るに、幕末長崎に於て本木昌藏が和蘭人について初めて、歐洲風の活版術を學んで、明治二年長崎に活版傳習所を設け、自ら鉛版活字を製造した。

世人之に注目して、遂に政府の印刷局設置となり、築地活版製造所の創立となり、次々に日本の出版界は、鉛の活字を用ふるに至つた。かくて元來使用された木版の印刷物は、より便利なこの鉛の活字に壓されて行つた。印刷機械も、手刷より圓筒印刷機となり、進んで輪轉機が動くやうになつて行つたのである。

この事が新しき資本主義的企業と結合し、印刷工場が設けられ、新聞紙、雜誌、單行本の發行出版となつて、文學發展の一動力となつた事を知らねばならない。かくて作家は、その社會的な發表機關といふ意味で、これと結合しなければならなくなつた。發表機關の確保といふことは、作家にとつて第一義的ではないが、文學生產の上に極めて重要な事となつたのである。

書肆と作家との密接な關係は、德川時代からも次第にその度合を增して來たのであるが、『文學者となる法』の著者の皮肉な觀察は次のやうに見てゐる。

書肆の主人は一般に大企業家なれば、拔山翻海の意氣込ありて著作者を小兒同樣に掌上に弄び內心の內心にては飽くまでも馬鹿にして、好加減に綾なせども表面は先生と呼びて優遇等閑にあらず。

此故は操觚者は貧乏人なれば昭はすに利を以てすれば必ず自由になる者と高をくくりながらも禮を文士に缺くの拙策を執らずして敬して遠ざくるの工風を廻らすに巧みなり。若し夫れ數でこなす轆轤細工的著述に堪能なる著作家を遇するに到つては、活版拾ひの小僧を睨視するの眼を以て之をみる。（註1）

と、その頃――硯友社作家の立上つた頃、言つてゐるのも、作家と書肆との關係を一面穿つてゐると言はねばならない。

さて硯友社の作家が、長い年月にわたりその地位を固く保つた事は、一面から見れば、容易に發表機關を持つ事の出來た故であつたと見るべきである。彼等は當初は發表機關『我樂多文庫』を自ら持つ事によつて、その作品の發表欲及を滿足せしむると共に、一方社會的に認められた。

その最初は二十一年八月『夏木立』一卷によつて、一躍水準より浮び出でた山田美妙で、續いて紅葉が二十二年二月、吉岡書籍店發行の『新著百種』に『二人比丘尼色懺悔』を第一號として出し、彼の名と共に硯友社の名は更に社會的に擴まつたのである。

この『新著百種』について、紅葉自ら三十四年一月の『新小說』誌上に、「私が文壇に立つに就ては、前後三人の紹介者を勞したので、其の第一が此の吉岡君、則ち新著百種の出版元です、第二は文學士高田早苗君、私が讀賣新聞に薦められた、第三は春陽堂の主人故和田篤太郎君、私の新聞に出した小說を必ず出版した人、其の吉岡君が來て、毎號一篇を載せる小說雜誌を出したいと云ふ話、そこで新著百種と名けて、私が初篇を書く事に成つて、二十二年の二月に色懺悔を出したのです、私が春のや君に面會したのも、篁村君を識つた

のも、此の新著百種の編輯上の關係からです」と述べてゐる。文壇進出のみならず、紅葉の文壇人として色色の機緣を作つたものとしての意義が見出される。

彼はひとり自己のみ進む事をせず、硯友社同人を推薦する事を忘れなかつた。即ち『新著百種』には、小波の『妹背貝』、思案の『乙女心』、柳浪の『殘菊』、眉山の『墨染衣』、乙羽の『露小袖』、虛心亭の『妾薄命』など續々と發表され、同人の進出を見、一方彼が讀賣新聞に入社した事は、ひとり彼のみならず、他の同人達の作品發表に極めて便利となつた譯である。

硯友社唯一の機關誌『我樂多文庫』は二十二年一月第十六號まで自營して、續刊したけれど、翌二月十七號より『文庫』と改題、吉岡書籍店發行となつて每月二回、二十七號で十月十六日發行のものを終刊號としてゐる。

『我樂多文庫』十六號卷末に、『文庫』と改題についての抱負が「我樂多文庫再度の大改良」として次の如く記してある。

我樂多文庫は十七號（本月二十五日）より「文庫」と改題す
文庫は紙數を七十頁以上として紙面を改良す
文庫は定價を金七錢とす
文庫は挿畫を高名の畫家に依賴す
文庫は十七號より淨瑠璃滑稽小說物語（ティル）の三種を加へ名家の特別寄書を揭ぐ

文庫は十七號より小說上の議論を揭ぐ
文庫は一派の戲文及新體詩等を精選して每號之を揭ぐ
文庫は古聞新報の欄を改良して小說早學びともいふ可き古文逸聞を揭ぐ
文庫の批評は最激烈に最公明なるべし
文庫は實に我朝文學社會小說雜誌の海導師たり木鐸たり先陣者たり開祖たり世間後の雁にして先のやうな事を臆面なくいひ觸らす曲者ありといへども色をも香をも知る人ぞ知る

『文庫』はこれ等の抱負で刊行されたのであるが、その廢刊となるや、硯友社系統の雜誌として、二十二年十一月創刊の『小文學』があり、二十三年四月、九號まで續いた。續いて『江戶むらさき』が、二十三年六月、同じく柳浪を編輯者として發刊され、二十三年十二月十二號まで續いた。その後『千紫萬紅』が、二十四年六月創刊、翌年四月をもつて休刊、硯友社系の『詞海』に合流してゐる。

この他、二十二年に編輯まですまして發刊に至らなかつた『今樣卌子』があり、江見水蔭編輯の箇人雜誌『小櫻縅』が二十五年十一月創刊されてゐるが、是等の內容については後に述ることにする。

是等の小雜誌で、最も活動したのは、紅葉よりむしろ殘りの同人達であつた。彼等もやがて社會的に認められるに從つて、『都の花』や『日本之文華』等に夫々活動の舞臺を得た。乙羽が博文館に入つて、主人の妹婿となり、出版の機務に參ずるなどの便宜を得た外、各よるべき新聞雜誌に固く結合された。

硯友社作家のかかる發表機關との結合を、外部にあつて一人の道に煩悶してゐた田山花袋は、當時を省みて

硯友社の强味は、出版業者との堅い結托であらねばならなかつた。當時、出版界に於て有力者と云はれた春陽堂、博文館、すべて硯友社の自由になつた。紅葉が頭を横に振れば、何んなすぐれた作家も、本を出版することが出來ないやうになつてゐた。從つて當時の文學靑年は、その質に於て、またその氣分に於て、甚だ硯友社と相容れないものまでも、皆な紅葉の幕下に赴くやうになつてゐた。（註2）と言つてゐる。花袋の文章には、いくらかの感情も籠つてゐるであらう。かかる排他的傾向の事實の有無は問はぬまでも、硯友社と發表機關の結合の固さは、かくの如きものがあつたであらう。

前にも述べた如く、紅葉を盟主とする、硯友社のジアナリズムへの力、そのギルド化が背景となつて、生活を擁護し、その文學の生長を扶けつつ、文壇的に勢力を擴大した事は非常なものであつたと思はれる。

註1　三文字屋金平著「文學者となる法」一七三頁。著者は内田魯庵の匿名といふ。

註2　田山花袋著「近代の小說」六〇頁。彼の「東京の三十年」と並行して、同書と同じ意味で明治文學の空氣を生々しく描いて興味のある書である。

四　成立後の展開區劃

硯友社の發展、展開を裏づくる條件は、前章のごとく眺められる。然しこの條件の發生も、所詮はよき作品の存在と、その進展とに相俟つものである。かかる背景を一應頭に容れて、我々は硯友社各作家の作品を、直接論じて行く事にして、即ち作品それ自體を主として、これに社會事情、文學上の時代思潮をむすびつけ

展開の跡を辿る事にしよう。

さて、不斷に流動變轉してゆく文學の史的な相を、その飛躍や沒落の節々によつて、區劃し、その時期に適した言葉をあてて考察する例に慣ふのであるが、二十年の短日月の硯友社を展望するに、この區劃はかなり困難である。

硯友社作家を貫く線は、生長の步調に伴つて大體ロマンチシズムより、リアリズムへの道を基調とする。その文學思潮の上に、樣々な內容と形式を持つた作品が、箇性と時流に從つて叢生した。硯友社の時代には、作品の傾向が、短い間にかなり相貌を變更して行つた。文學それ自體への深い省察を經なかつた時代で、讀者の態度も作家の態度も落著いた著實性に淡いものが自然あつたと見られる。かかる場合であつたから、作品の傾向で區劃して辿る事も出來るであらう。

當時は、時代が新しい表現形式をうむ陣痛期であつたから、硯友社の作家の第一の苦心は最初そこにあつた。この表現形式といふ事もまた彼等の展開の一觀察點となるであらう。

しかしながら硯友社の文學運動は、前にいふ如く主として、イズムの爲のそれでなくして、文壇登場及びその文壇保持の爲の、作品による運動と見るべく、文學それ自體の展開は後から客觀者の觀察を彼等の側面に加へる事によつて、その傾向、色彩を見出される譯である。であるから、彼等の展開を見る時の劃り方について、硯友社の文壇登場の過程を土臺として、興亡流轉の樣を見、それに他の社會事情、又各作家の作品の內容、表現形式の問題を結合させて考察するのが便利であらう。かく見る時、凡そ次の四期に分つて、こ

れを考察することが出來ると思ふ。

1　習作期　明治十八年より二十二年まで

2　進出期　二十三年より二十六年まで

3　活躍期　二十七年より三十年まで

4　解消期　三十一年より以後

勿論、大抵の文學史の年號區劃の斷りと同樣、極めて便宜的で、その劃期の接線は、それ程明瞭ではないのであるが、とにかくかうした、大まかな區劃が見出される事と思ふ。

その各々の時期に於ける硯友社の動向、同人の作品について記述論評する事は、本書の最も主要な部分をなすもので、詳しくは、そこで述る事として、今簡單に、この四期の說明と、ここを結んで展開する硯友社の、外周をなす硯友社を含む明治の小說の傾向を記しておく事とする。

習作期――『我樂多文庫』は所謂手習草紙であつた。然し、硯友社の周圍には、新文學の黎明が來てゐた。『小說神髓』の、明治文學の建設第一步の礎石となつた事や、『書生氣質』の新小說のサンプルが出た。二葉亭四迷の『浮雲』が出た。文學の價値の發見が、作家としての自尊心を持たせた事から、筆のすさび、道樂氣分は一轉して新文學への實驗となつた。

舊體の戲作小說、功利主義的な政治小說等やうやく姿を沒してゐる時であつた。純文學の處女地に、試みに播かれた種子は、時機を得たのでのびて行つた。かくて硯友社同人は、新しき文壇へ揃つて登場する。

進出期——習作期、社會は歐化主義の峠であつた。それが、この頃日本的、傳統的なるものへの省察が世上を流れた。祖國へ歸れ、さうして古典の尊重は古典の叢書刊行となつて、文學界へも影響をもたらした。西鶴の研究——それが外國文學からヒントを受けた寫實主義と結んでといふより、文章、表現への關心となつて、生れたばかりの言文一致の文體を放りだして、この期の主流となつた。

落合直文における和歌、正岡子規における俳句の正しき反省があつた。綠雨、篁村などの傳統的作家もあつた。しかし『新著百種』における紅葉を先頭に進出してきた、硯友社作家の風貌は颯爽としてゐた。紅葉は特に精力的であつた。

活躍期——日清戰爭を挾んで、その後に連る。前期より賑うつたロマンチツクな精神は、いよいよ盛り上つて、文學界にあらはれては、最もかうしたものが、躍動的に表現される詩歌の生命を燃し、小說においては、大衆的な浪六の世界、怪奇な涙香の世界への憧憬となつて、又華やかな歷史小說も描かれた。

戰爭後の好景氣から、出版界の活氣——戰爭によつて招來された文學と社會の接近——かくて甘美な戀愛三昧より、深刻な社會面に接して、かうした方面に題材を求める傾向が文壇の勢力を占めた。硯友社作家中、柳浪、眉山等が、文壇的に最も仕事をした。紅葉は行きづまりを示してゐた。

しかしすでに背後より若やかな作家の芽が萠えてゐた。透谷、一葉、樗牛などが短い生涯にめいめいの仕事を殘した。

解消期——より若やかな、より新しい芽が硯友社をつつんで壓倒的にのびて來た。紅葉は病患のうちにあ

つて全精力を傾けて、大作へ打ちこんでゐた。しかし、一方より進歩的な文學理論を持つた人々、まとまつた作品が次々に現れて來た。國木田獨歩、小杉天外、田山花袋——自然主義の波が次第におしよせて來た。それ等に對比する時、硯友社の作家の古風さ——十年、十五年の作家生活にやうやく疲れて、方向を失つた時に、それ等の勢力は烈しい壓力を持つたに違ひない。

桂石紅葉は、遂に病んで倒れた。その事が一層硯友社の勢力を足許から搖るがしたに違ひない。かくて、約二十年間支配した文壇のヘゲモニイは彼等の手から脱落した。

以上、あわただしく素描したやうた經過を、明治の前半期の文學史の間に、硯友社は辿つてゐるのである。それは彼等の色彩で過半の部分を彩つてゐる事が知れよう。

かくの如く、その作品行動、從つて文壇的に占めた勢力の興亡起伏が見られる外、結合の組織の鞏固性から見れば、大體二十七、八年を境界として、前後二期に分つべく、前の分け方の習作期、進出期が、最も固く結合されてゐた時代で、又、箇々の作家の側からみると紅葉が最も活躍を示した時代であつたが、つづいて、活躍期に到つて、一には紅葉の精力の缺乏と、周圍から起る攻擊と、一方柳浪、眉山の進出が、結合性をゆるめ、解消期に到つて、自然主義勃興以前、旣に紅葉の死が、土臺から硯友社の結合をゆるめほとんど解消同樣の狀態へ導くに至つたものである。

われわれは、この區劃によつて、一々彼等の辿つた跡を、明確に眺めて行く事にしたいと思ふ。

第三章　硯友社の展開　その一

一　習作期　（明治十八年――二十二年）

明治十八年二月、硯友社の成立より、『新著百種』において、先紅葉が作家として社會的に認められる前後までを、硯友社作家の習作期とする。その間に彼等の唯一の發表機關である『我樂多文庫』は、凡そ次の樣な變遷を經たのであつた。

手寫本時代	八冊	明治十八年五月――十九年五月
印刷非賣本時代	八冊	明治十九年十一月――二十一年二月
發賣時代	十六冊	明治二十一年五月――二十二年二月
文庫時代	十一冊	明治二十二年二月――十月

これは雜誌の形態、及び對社會的關係より見たものであるが、尾崎紅葉は、更にこの間と一部本書では進出期に入れた分を合して、九期に分つて說明してゐるから、それをも參考として述べてみよう。

第一期、これは最初の手寫本時代を云ふので、社友は廻覽の期限が三日間であつたがその名がやうやく世間に知れると、入會者が多く、一人一日としても一冊の冊子を見るに一月もかかるので、印刷して頒布しようといふ說が思案、美妙、紅葉の間にもち上つた。



硯友社の機關雜誌（I）公賣我樂多文庫と文庫

第二期、これは、前に掲げた印刷非賣本時代のことである。第一期月三錢かの會費を、十錢にあげて、四六版三十二頁許りの雜誌を作る計畫で、社員を募つたところが、百名餘も申込を得たのである。編輯は紅葉と美妙が主としてあたり、出版については美妙の緣故のある、神田今川小路の金玉出版會社といふのに掛合つた。思案は庶務に當つて奔走した。

第三期、對社會的に進出して、發賣時代となつた譯で、定價を三錢にした。印刷所も飯田町中坂にある同益社に變へて、發行所にその眞向ふの家を借りて、ことと定め社務の發展を示した。

第四期は第十號明治二十一年十月二十五日發行のものから、二十二年二月十日發行の、第十六號に至る間でそれまでのものと異つた所は、頁數を倍にし、別表紙を附けて、又別摺の挿畫を二枚入れ、三錢であつた定價を十錢に値上したのであつて、非常な革新といはねばならない。

第五期は『文庫』と改題、型を菊版にして、『新著百種』の發行所吉岡書籍店が引受け、前の號數を追うて、刊行された。

第六期は『文庫』の二十三號、卽ち二十二年七月に、表紙を武內桂舟の花鳥風月の圖に替へて、大刷新を計つたが、十月發行の二十七號を終刊として、しばらく硯友社の正統的な機關誌は斷たれた譯である。

然し紅葉は、更に硯友社の血脈をひく、その後の雜誌を擧げて次のやうな區劃を示してゐる。

第七期として、二十二年十一月に吉岡書籍店より廣津柳浪を主筆として發行した『小文學』を以て、この時期にあててゐるが、同誌も二十三年四月で、九號を以て廢刊した。

第八期は、二十三年六月二十日に創刊して、年内に十二號で廢刊に及んだ『江戸むらさき』の時期を言つてゐる。

第九期は、二十四年六月創刊の『千紫萬紅』で、それは會員組織で出され、硯友社作家のためといふより、新しい青年作家のためで、社名も盛春社として、紅葉の道樂半分に出されたものであつた。

これが習作期における、手習草紙から次第に發展して行つた徑路で、この間に同人達の文學へ對する態度も移り變りを示したので、成立の初めは、他日文壇へ雄飛せんが爲の習作といふ意識もなく、半ば遊戲氣分であつた事を丸岡九華も『初蛙』中に

當時山田、尾崎、石橋君にしても、自分にしても皆學生で、硯友社我樂多文庫の事業は、是又娛樂の意味でやつて居る。誰一人として文墨の技を以つて終生の業としようなどといふ考はなかつたのである。

と言ひ、石橋思案もここに、閱覽中に朱點を打つて注意を喚起してゐるのは同感の印であらう。それ故に第一號に載せられた思案の祝辭の

文運日に開け、月に進み、新聞雜誌は更にもいはず百家の著書に至るまで、和漢洋の差別なく、號を追ひ編を重ねて啻に棟に充て牛に汗するのみにあらず。其隆盛なる未だかつて見ざる處なり。然りといへども其書たるや悉皆一方に偏し、和は和、漢は漢、洋は洋に留まりいまだ和漢洋なんでも皆集覽すべき書なし。これ聖世の一缺點、豈慨すべきの甚しきに非ずやと、何もそう七六づかしくいふほどの事もなければど、かかる日進の世の中に剛に過ぎず、柔に流れず、丁度程のよい書物なきを歎きて同氣求むる硯

友諸子に相謀り。

と、雜誌の目的を誇稱したのは、祝辭の故に少々氣どつて述べたに違ひない。

かくて娛樂と習作を兼ねた出發が、號を重ねるに從つて、娛樂的要素から、習作方面に重きをおくやうになつた。同じく九華が後に『初蛙』中で

又此手寫本我樂多文庫は、當時各自が作品を娛樂的に唯編輯しただけのものでなく、一々精細に批評し、論難し、互に鐵槌となり、坩堝となつて、終始研鑽鍊磨の道場たる觀があつた。單に娛樂一片で世間普通の天狗連が鼻競べの材料では決してなかつた。

と、前言を修正するやうな言葉を洩してゐるのは、眞摯なる態度へ次第に移つて行つた過程を示してゐると思ふ。

手寫本が、印刷本となり、次いで一般へ發賣する頃に至つて、意識的に文筆を以つて生涯を送らうといふ決心がついたと見らるべきであらう。公賣『我樂多文庫』十、十一、十二、十三の四號に連載された紅葉の「紅子戲語」には、その頃の同人の生活の横顏が描かれてゐて興味深いものがある。

飯田町中坂硯友社の編輯室——見晴しわるき二階八疊の一と間、そこに居るのは、毬栗頭で色のくつきりと黑い男、不作法に大きな眼へ鼻眼鏡の思案外史、奧州訛で、これも毬栗頭、色靑ざめ頰の肉落ち、風邪といふ氣味で、垢染みた寢衣の袷に薄きたないかいまきを羽織つて、唐机へ倚り掛り仔細らしく原稿を扱つてゐる香夢樓綠、その二人がしきりに駄洒落を飛ばしてゐると、階段に足音あつて現れたのは、フロツク姿を

ミルトンに、容貌をバイロンに氣取る詩人の丸岡九華である。程なく、柳原仕立の背廣の縫目高なるを一著して、前下りに藤色の米利堅帽子を被つた山田美妙齋が入つて來る。
雜誌『都の花』に關係した美妙の事を話してゐる所へ、たそがれ色の小袖、肩白の羽織、博多帶に銀鎖の川上眉山と、スコッチのモーニング、縞ズボンの漣山人が入つて來る。つづいて紅葉と月のやまどかが入つて來る。
一同は揃つて雜談してゐる所へ、小僧が一通の手紙をもたらす。都々逸欄廢止勸告の投書である。思案がその主意を說明すると、美妙はそれに贊成するが、月のやは、別に都々逸があつても雜誌の格が下りはしないと反對する。紅葉も時代性に從つて廢止した方がよからうといふのだ。さうした意見を中心に、戲文的な話は進むのであるが、われわれは、ここに描かれた駄辯、哄笑の中から、いくらかの未來への進步上昇の氣配をかぐ事ができると思ふ。
かくして、次第に發展してゆく間に、積極的に筆をとつたのは、その中心である美妙、紅葉、思案、九華等で、他の社員は、その發表されたものを讀んで樂む、鑑賞者の側に立つものが、大多數を占めてゐて、發行當時は大抵學生であつたものが、卒業後その志す職業についてしまひ、結局後年文學界に、作家として活動したのは、この中心の人々と——九華さへ間もなく筆を投じたが、それにその後入社して、專心精進を續けた廣津柳浪、江見水蔭、大橋乙羽などの少數でしかなかつた。
紅葉が、その後十年餘を經て、明治三十四年一月の『新小說』に

今日になつて見ると、右の會員の變遷は驚く可き者で共内死亡した者、行方不明の者、音信不通の者等が有るが、知れて居る分では、諸機械の輸入の商會に居る者が一人、地方の判事が一人、法學士が一人、工學士が二人、地方の病院長が一人、生命保險會社員が一人、日本鐵道の驛長が一人、商館番頭が築地（諸機械）と、横濱（生絲）とで二人、漁業者と建築家とで阿米利加に居る者が二人、地方の中學教員が一人、某省の屬官が二人、大阪と横濱とで銀行員が二人、三州の在に隱れて樹を種ゑて居るのが一人、石炭の賣込屋が一人、未だ〳〵有るが些と胸に浮ばない、先づ這麼風に業體が違つて居るのです。而して、後々硯友社員として文壇に立つた川上眉山、巖谷小波、江見水蔭、中村花瘦、廣津柳浪、渡部乙羽、などと云ふ面々は、此の創立の際には盡く未見の人であつたのも亦一奇と謂ふべきであります。

と記してゐる。手寫本もつて出發した際、發企者の三人が、各自手分して集めた約二十五名の社員の經過した十年の時間が、かうしためいめいの方向に人々を流し去つた事について、暫く問題を離れて、人生流轉の相をしのばさしめるものがある。

二　習作期に於ける傾向

さまざまな形式、さまざまな種類の文學作品を載せたとはいへ、『我樂多文庫』で最も力を入れたのは、心織筆耕欄、即ち小說欄であつた。硯友社の文學運動は、小說のそれであつた故に、主として小說について論ずるのであるが此の習作期は、すべて文章に對する實驗的態度をもつて終始した。先何等新文學といふもの

の形式内容を見ない彼等の摸索は、勢ひ過去の文學にふりかへつた。彼等はその模倣より次第に自己を築いて行つた。身に近い過去といへば、化政期の作家である。それ等が多く彼等に作品の型を示したのである。彼等は、自由にその好む作家について、文體や內容をかりて、それにほのかな時代の新しい香をまぜた。その例を示すため二三の作品の數行を引いて、各作家の作風とその生長の跡をたどる事にしよう。

紅葉は手寫本の一號から八號に亙つて「江島土產滑稽貝屛風」といふ作品を連載してゐる。その冒頭より引用すれば、

爰に芝浦の畔に愚二郎、鈍太郎、猪尾介といへる三人の放蕩漢（ノラクラモノ）ありける。年猶若ければ定まる妻もなく、出金（ワリマヘ）の賃居に一つの鍋の飯を安らけく喰ひ、遊蕩三昧滑稽一方、己れの馬鹿にて世を馬鹿にし、九尺二間の裏居に安じて金殿玉樓を羨まず、三年前の古褌猶しめかへざるは、蓋し晏平仲の狐裘に擬するもの乎。三人共に揃ふての變屈人、長屋中爪彈きとなり、誰一人名を呼ぶものなく、芝浦の半仙人とぞ渾名しける。……

といふ書出しで、この三人が折からの暑氣の中にあつて、五六ケ月分の家賃をふみ倒して、一緒に江島巡りをする途中の失敗を一九、三馬ばりの洒落と、滑稽とで書綴つてゐる。『初蛙』の註によれば、石橋思案と池田氷山との江島紀行をモデルにしたものといひ、十七年夏そこへ遊んだもので、紅葉が以前親んだ漢文より離れて最初の作品であつて、十七八歳の頃の作であるといふ。

すでに才氣煥發な洒脫な紅葉の性格がうかがはれ、それによつて、後年の才氣ある作風の萠芽を見られる

るが、續いて八號に、春亭鬼笑の名をもつて「僞紫怒氣鉢卷」を發表してゐる。

菜の花に飛ぶ胡蝶、池の水にすむ鴛鴦、いきとしいけるものさへ、さとらぬが色の道、まして若き身の情知らざるべき。知らぬが木佛石佛、色を是空と說きたまふ心の程こそいぶかしけれ。されば昔茂りたるよし原に鳴音寂しき閑古鳥、今はもうし〳〵と呼子鳥、移り變る世の中に、かはらぬ色街廓の北の一ト廓、そが中に裏見屋といふ亡八屋あり。小格子ながら大門口の柳腰仲の町の花の顏あまた抱へ、お職の儘川と呼ぶ當世女、ことし二十一二突出しは十五六の情しら糸の色に染らぬ頃より起請の書方無心の言ひやうなにくれとなく柿女郎の傳授習ふよりなれて……

といふ書出しは、尙三馬、京傳の世界よりうけついだ香であり、洒落や穿ちをねらつてゐる、紅葉の態度をしのばせる。

この一篇は、九號に紅葉山人、十一號に愛黛道士の署名でつづけられ小說體のものとしては最初のものである。公刊『我樂多文庫』時代に至つて、彼のとり扱ふ材料に飛躍を見た。第一號より『文庫』にまで及んだ「風流京人形」は作中に、バイロン詩集を愛誦する青年と、庭をへだててクリケツトに興ずる少女、キユピイド、聖書、女學校內など、點景において當時においては、近代的な新鮮な感覺にふれるものを盛り、作品の新鮮味をみせてゐても、後半に筋の古風な性向をみるが、尙當の戀人が、戀愛するに不具的な女性であることがおちで、筋の興味もいくらかつないでゐる。

カルタ會の輕いスケツチである「Yes and No」もその題名から才ばしつた紅葉の當時をみるが、かくして

彼のこの期はその忙しい編輯と、化政期の影響から次第に新しい表現形式への摸索に滿たされてゐた。

山田美妙について見るに、紅葉が一九、三馬、京傳の流れをくんだに對し、彼は馬琴を崇敬しそれを師としたらしく思へる。手寫本第一號に載せられた「竪琴草紙」は英國王アルフレッドの傳を小説風に書いたものであるが、冒頭から引けば、

抑英倫（イングランド）と呼做すは、佛蘭西國の北方に海を隔てし嶋國なり、昔は其民野蠻にして取るに足らぬ様なりしも羅馬の大將該遨（シイザル）が一度軍を押進めて蠻民と戰ひつ遂に平定したりしより、日を逐ふて開行き後には羅馬も衰へて、統御昔に事變り有れども無きが如かるにぞ……

と開き直つた筆陣にも、その影響が見られる。第三號に「改號披露　樵耕蛙船戲稿」として「改號二世曲亭馬琴別號樵耕蛙船」と堂々と名乘りをあげ、社中を啞然たらしめた。

その披露を少しく長いが彼の抱負を知る爲に全部を引用する。

抱負極大なるかも蛙船が改號。僅に敗鼓の時あるに誇りて、大日本小説家中の泰斗たる、曲亭翁が名號を襲はんとは餘りなり、止みね〳〵要なかりと言を一斥し去り給はんは、必定必然なるものからかくては諸君も未だ具眼に非ず。よく思ふても見たまへかし。當時果して幾人の小説家出藍の名譽ある者かある。概するに殆んど無きなり。試みに明治以來新輩の操觚者にて稍々世に立つ人を擧ぐれば、曰く假名書魯文、曰く武田文來、曰く岡丈紀、曰く前島和稿、曰く山田風外、曰く伊藤専三、曰く川上鼠文、曰く魁蕾子、曰く柳亭種彥、曰く渡邊文京、曰く宮崎夢柳、曰く小倉枕友、曰く爲永春江、曰く春之屋朧、

曰く矢野文雄、曰く彩霞園柳香、曰く菊亭香水、其他柳條亭等の者に至つては、之を擧くるに遑あらす。而して概皆碌々なるもの、徒らに前人の糟粕を甞め、毫も新機軸を營むものあることなし。唯魯文は頗る好く、和稿稍巧に、魁雷僅に艶々、坪内矢野殆と至れり。然れども未だ其堂に入れるを見す。要するに自餘の輩の如き、或は讃口に長し、或は句偸に秀で、或は放蕩に逸し、假名遣を知らす、小說廿七法を辨へす、文法を曉らす、動辭の簇轉を心得す、古事に暗く、近況を杳せす、其說く處は則偸盜博徒蕩婦妖夫の傳記、其投する處は則ち維新前後、動もすれば幽靈仙人を用ひ（是は初世の曲亭翁も慣用せられたれども、盡いみじき僻事にて、此翁の瑕疵は是になん之につき論あれどもそは他日の便を待たん）ともすれば人究まりて崖谷に陷り命を免かる。一般の趣向之に外ならず。全部の脚色皆似たり。文明國の詩歌とまで世に稱賛せらるる小說稗史の結構配布、すべて右の範圍内を出ること能はざるは、そも〳〵又何事ぞ、唯作者たる者の無學無識に因れるのみ、かかれば明治に純然たる小說家の泰斗てふは、蓋し一人とてもあらす。卽蛙船が傲然と曲亭翁が二世たる所以。凡此等の事どもは、やがて世にも公布せんに、今此文を讀むに及ひ、若し當代の小說の、或は其耳に入る事あつて、憤懣に思ひなば、誰にてもあれ余が廬を尋ね、委細の程を詰問せば、一々指摘して與へん。そは兎もあれ角もあれ、蛙船が自らかく言ふは、莖をこなる業なから當時の詩人が卑屈なるを嘲るの故になん。蛙船已に二世の馬琴なり。眞の曲亭馬琴子は、必諸君の中にあらん、必諸君の外にあらじ。諸君乞ふ旃を勉め希くは二世の馬琴を壓倒し、明治小說の眼目を一新せられん事を。其當時現在の諸氏を壓倒せんことは則蛙船が一臂の力、二世

馬琴が一筆の勢、是れ充分なる處にこそ、是必然なる事になん、嗚呼明治英雄少なし。明治才子罕なり才子々々。英雄々々。甚麽爾後の狀況、什麽將來の光景。喝。

かく馬琴への模倣と、馬琴を偉大なる作家とあがめそれに自己を比して、人を呑んだ彼の態度の中には、燃えあがる野心が藏せられてゐるのに氣付くのである。彼の飛躍もその後急速であつた。第九號十九年十一月には、「嘲戒小說天狗」を發表し十三號まで續けた。九華に從へば當時、流行作家で威張つてゐた須藤南翠をいましめたといふが、さうした作家の生活を、皮肉に描いたといふ點以外に、彼が後年に示した言文一致體への近似をもち、たしかにその過渡を示す作品である事に意義がある。冒頭を例によつて擧ぐれば、

聞ゆるは出鱈目の讀方で大膽にも、テンペストを讀む聲＝ハイル　メーニー　コロルド　メスセンゲル……ワイフウ　オーフー　ジュ…ジュ…ジュピテール

(Hail, many colourled Messenger……Wife of Jupiter)あゝどうも旨いテ。實にシエークスピーア翁の筆力は凄いものだ…感心の外はない。此テンペストの戲曲などは三十餘種の中でも隨分屈指といふ程であつて……通篇何處とて可笑くない處はないテ。そう〳〵こいつを……翻譯でもして――ナア……一番世の中の平凡くた共を吃驚させてやらうか知らん……それもちと可哀さうだナ。何にしろシエー先生は豪氣な人だ＝と言ふ聲のする一室は熱海の宿屋鼻高屋の二階で、此大風呂敷を廣げる先生は湯治に來て居る自稱才子、年はまだ三十に奈良漬の香の物、號をば意外と茶漬の澤庵押が利いた風……

獨白の部分はとにかく完全であるが地の文の部分は、尙「年はまだ三十に奈良漬の」といつた風の臭味を

傳へてゐる。しかし、この文章は注目に價すると思はれる。一方また文中に樣々の歐文に用ひる‖……………などの符號を使用して、新しい功果をあげてゐるのだ。

彼が以上の臭味から拔け出て、言文一致に成功したのは、二十年十二月の十五號より十八號に亙つた「骨は獨逸　肉は美妙　花の茨茨の花」である。

日はやや水平線の領分を離れた身祝ひとて、六尺ばかりの立木にも四五間の影を貸してやり、若草は春雨に呼出されたのを忘れぬ爲か、綠の袖に白玉の飾を澤山着けて居た。原は廣くて處々の木立の外人の目を遮る物を持たず。木立の蔭にて鳥の聲が長閑に聞えて居た。原の片側は絕壁で淵の深さはどの位あるか水色が淸く凄く見へる工合はどうしても淺くはないやうであつた。向岸には苛めしい城が控へて居てその城の橫顏をば、日の光が厚かましく睨て居るので、白壁の高加索色も、今日は薄い亞米利加印度色であつた。其處で窓の眼の玉もまぶしさうに晃々として居た。……

この表現はすでに歐文脈の輸入である。美妙のこの新鮮な試みは、驚異を呼んだにちがひなかつた。美妙は自己の名を次第に世に喧傳さるる一方『夏木立』の出版によつて、硯友社中より最初に作家としての地位を得、家庭の事情等で「情詩人」を最後として硯友社の人々と別れて一人の道を步いた。彼及び言文一致については後に節を設けて述べる事にして、今は他の作家について考察を續けねばならぬ。

思案は第一號に「雨香散史」の名をもつて「仇櫻遊里廼夜嵐」といふ小說を揭げてゐるが、之は京傳と馬琴を交錯させた樣な文體で、その題が示す樣に、題材も在來の遊里の情話である。初の行をとつて見れば

第一齣　凶漢乘醉提少婦
　　佳人憑欄認才子

今は昔、まだ大江戸と呼做せる頃は、彌生の末つ方茶屋が軒端に植連ねたる、櫻の花も爛漫として今を盛と咲き亂れ解說花と嬌を鬪はす。出る生姜あれば入る茗荷あり。粹と不粹の仲の町、浮れくるわの嫖客は引もきらす。三層樓上絃歌涌くが如く、紅燈影暗き處情話濃かなり。……

公賣となつても都々逸欄の主宰者として、思案は尙古風な夢を追ふものの如く見られた。そして、その頃小說は發表しなかつたが、二十一年十一月の十二號に、「紅子戯語」で、都々逸廢止の議が描かれたやうな結果から、さう決つて、彼は「都々逸を送る文」なる戯文を草して、雅趣ある都々逸の改良を計つてゐたのに、それを卑俗なものと心得た同人達が、遂止めさせたといふやうな事を記してゐる。

その後小說としては、二十二年一月の十四號から「花盜人」を揭げ初めてゐる。それは全然口語體で書いてゐる。

春は花、何んとなく物事が陽氣になります昨日まで、苦虫を噛みつぶした樣なコワーイ顏をした借金取も一夜明くれば夷樣のやうなニコ〳〵笑顏をして禮に來ると古い話柄も今更の樣に思はれます年老でさへ年禮をかこつけに屠蘇に浮かれ出す時節、まだから若い女小供は何事も手に附きません、耳朶をちぎつて行きさうな北風を物ともせず二枚糸をたぐる小供は手の掌にタコをこさえて達摩の樣ナ顏をしてうなつて居ます、客歲の淺草市で新調した羽子板の押繪にある姫御前に負けぬ樣と娘子は精一杯身形を

着飾つて其處等中ハネ廻つて居ます。

といつた風の表現である。

次に後れて入社した眉山、漣、柳浪、水蔭、乙羽の最初發表した作品を列擧して、彼等の影響を受けた先行の文學が何であつたかを見よう。

十九年冬入社した眉山は、煙波山人の雅號で、「雪の玉水」を寄せてゐる。非賣印刷本の十號に第一回がのせられたのであるが、『初蛙』に記錄された十號は缺本で、具體的に內容を示してないので、十一號の第二回を引く。

花井君何處へ行きたまふ〽花見さ。〽愚按するに花に引かれて日暮まゐり。〽オホン御自分ながら通じまい。〽大きにヽ然し其處に一寸の差があるネ君は則迷つて行く、僕は則悟つて。〽又味噌を上るよ。味噌を上るは須らく献酬三盃の間に於てすべし。

京傳や三馬の系統と共に『書生氣質』の影響を受けてゐるかの如く見らるるのは、後れて筆をとつた結果ではなからうか。

眉山は、戯文の寄稿が多い。卽ち公賣第二號に「戀」十一號に「枕の賦」十二號に「紅紫亭記」又十三號には傀儡堂忠佛の名で「猫戀辭」等を寄せてゐる。

非賣印刷本の十一號の新入社員に、その名をみせた漣山人は、十二號二十年三月に「眞如の月」を發表してゐるが、彼には當時の新文學の刺戟を、德川期の作品より一層强く受けてゐる樣である。

春は浮氣なり、春は人の若き時なり、故に若き時は浮氣なりとはチトこじつけた三段法だが兎に角そうに違ひなし。男女の差別なく春情の付き初める頃には寄るとさはると男は女の評、女は又男の噂などして無上の樂となす。淫奔ぢや不品行ぢやを誹れば誹るやうなものの蓋し免れざる處なるべし。……

かれはデリケートな感受性を持つてゐて、公刊第一號には言文一致體へ飛躍して、學生生活を背景とした戀愛關係を描いた「五月鯉」を見せ、眉山などが戯文に凝つてゐる間に、進歩的な表現を試みてゐた。即ちその冒頭を引けば、

見渡す限り物寂しくて武藏野の昔時を忍ばれる傳通院の裏手の眺めの向ふの本郷臺は靄に立て籠められて其隙から燈光が二ツ三ツ仔細らしく見えて居る鹽梅は油繪でよく見る樣な景色此方の植物園の森は霞の中に半分隱れて頭だけ黑く顯はした處四條派の墨繪に似て居る十日餘の月ははや半空までせり昇りちんと澄まし込んで下界と見おろして居る。

といつた風な描寫である。柳浪と水蔭はずつとおくれて二十二年六月の『文庫』二十二號に初めて作品をのせた。

廣津柳浪は、紅葉が「硯友社の沿革」中に述べた所によると二十一年の春、少年園の會が不忍池の長酡亭であつて、そこで相識つたといふ。當時柳浪は博文館の『大和錦』の編輯主任であつたといふが、次第に硯友社と接近し遂に同人となつたので、すでに『女子參政蜃中樓』や『二おもて』等を發表してゐた。

『女子參政蜃中樓』は、明治二十年六月、東京繪入新聞に連載した、二十回にわたるかなりな長篇で、十年

後の婦人參政權運動を中心としての構想で、新聞小説的な通俗性はあるけれど、作中にあらはれる、理知的な婦人參政權運動者である女學士や、その從妹である唯感情的な平凡な女性や、參政權反對の新聞記者、奸惡な法學學生などの性格もかなり明白に描き分けられて、時代の思潮に相渉つてゐるが、在來の政治小説に見られる、形式的なところがなく、人情の描寫にも入つて一方、社交の舞踊會の夕べとか、演説會とか、オペラ女優とか、社會面に新時代らしい點景をもたらしてゐる。

場所を大阪にとつて、その町々があらはれるのは、作者が、その前商人たらんとして、大阪商業會議所の書記生活の二年をおくつた土地への回想が浮び上がつてきたためであらう。

さうした、當時としては、新しい題材の小説にも拘らず、男女の愛情的情景の會話には、淡々ならざる化政期風の香をとどめ、また、作中の人物について、奸惡な法學學生を描いた事について、學生の名譽を傷くるものとして、實際の學生より抗議がきたので、漠然と某學校の生徒と修正した附記が十二回に記してある事は、文學へ對する時代の空氣をしのばせる。

この作品の目的は、別に婦人參政への積極的意見を、柳浪が示したものではない事、序に蜃氣樓と同樣「此小説も之と一般で如此出來事が出來ようが出來まいが有らうが無からうが、女子に參政の權が有ると云へば、無いと云ひ、ないといへばかんと云ふ。作者の意匠も有耶無邪で有るから、寓意も有郁無耶の中に有るでもよし無いでもよし。標題に僞りなし。うやむやと筆を擱く」と記してゐることでも明白であらう。かうした文章に馴れた彼であつたから同人となつて、『文庫』に發表したものも、かなり巧みなものである。「柳櫻」の

冒頭から引けば

西日を避けた葡萄棚、甲州種の房長々と、見るから口水の垂るばかり。何様、都のしかも夢香洲に移されし程の果報者、土臭き水呑の手にもかれし身が其白さ――葉の映りて青みたる纖き手の、震へつ……やつと房にさはつたことを思ふ途端（あれヱお師匠樣……）波うつ聲――憎くなし。……

柳浪の藝術家としての素質の優れた事はこの片鱗にも輝いてゐるが、江見水蔭の次に掲ぐる「旅畫師」の文章と共に、文體上では、紅葉がすでに示した雅俗折衷文の要素を含むものの如く思はれる。

そも下なる景色といふは、絶景にして無類なり。後は一日千本てふ櫻林。花まで咲かねど苔づく枝ぶり、さすが名所だけ時ならで感ずるに餘る。前は吉野川の流を望む、鴨の住みかぬる急流とはまこと瀨をつくつて白布を敷ける形、もつとも兩岸の菜種畑は、黄と綠の切續羽織をひろげたる樣にて

大橋乙羽は始め二橋散史の號を用ひ、思案を便つて來て後、同人の列に伍したのであるが、その『文庫』に掲げられた最初のものは、二十三號二十二年七月の「こぼれ松葉」で自傳風の作であつて、口語體を用ひてゐるが、叙述に稚拙さがある。次にその冒頭を掲げることにする。

私は名は花香薫と言つて、三年前東京へ遊學に來た若者です。朋友が私の性質を評して言ひますには、君は事を行ふに綿密でないから、後に悔ゆる事が多いと言つた。が、私はそれを穿つた評語とは思ひません。何故なら別に是と言つて後悔した大した事もない。たまには詩や文章を書いた後で、ア、此句をこうするとよかつたなどと言ふ事はあつたが、……

といつた書方で、主人公と下宿の娘のことを題材としてゐる。

丸岡九華は社中の詩人であつたが延春亭主人の名で「散浮花」といふ男女學生の生活を描いた小說——『書生氣質』を越えない作品——や「移春檻」といふ探偵物の飜案小說があるけれど、專ら精進したのは詩作であつた。初期の『我樂多文庫』に揭げられたものは、美妙、紅葉の分を倂せて『新體詩選』といふ名で十九年八月上梓された。その成立は主として美妙のあづかる所であるから、後で彼の所で述る事にするが、九華は「士卒の夢」(手寫本我樂多文庫四號所載)「路易帝斷頭臺」(手寫本七號所載)「佛國革命歌」(手寫本五號所載)及び「リツプ、バン、ウンクル」を寄せて、新しい叙事詩への試みを意圖しその後も公賣の一號より四號に亙つて「四季の月」第六號より八號まで「狂ふ風、狂ふ花」の詩作等を試み、ずつと續けてゐれば大成すべき素質を見せてゐたが、間もなく學校を卒ふると共に實業界に入り、詩筆を簿記のペンにかへたのであつた。

紅葉も「硯友社の沿革」で「此人は小說も書けば新體詩も作る、當時旣に素人藝でないと云ふ評判の腕利で、新體詩は殊に其力を極めて研究する所で百枚ほどの叙事詩をも其頃早く作つて、二三の劇詩などさへ有りました、依樣我々と同級でありましたが、後に商業學校に轉じて、中途から全然筆を投じて、今では高田商會に出て居りますが、硯友社の爲には惜い人を殺して了つたのです。」と惜しがつてゐる。(註1)

香夢樓綠は「作者身上話」として二十一年十一月の第十一號より、英國の作家サー・ウオークア・スコツトの略傳を連載紹介して、雜誌に一脈の新鮮さを添へてゐる。(註2)

以上述る如く、硯友社作家の生長は次第に文學へ對する眞劍味を帶び、遂に學業を投げてさへ、創作に熱中する態度をとるに至つた。彼等の努力は次第に世人にも認められ『國民之友』はいち早く次の如き評を、二十二年一月二日の第三十七號でなしてゐる。當時發行されてゐた『都の花』(四號まで)『小說萃錦』(五號まで)と併せて合評したものである。『我樂多文庫』はその時十三號まで出てゐたのであるが、それについて

之を貶して謂へば水の出花の道樂息子之を賞めて謂へば胸中綽々として餘裕ある若手の才子達が風流逸事を合して彼の最も淸き最も貴き戀を專究專寫するは我樂多文庫なり。我樂多文庫は此才子達が相集弄び錦心繡腸を漏す一つの機關雜誌にして誠に商法氣少し、此頃都々逸欄を取り除きたるは何故ぞ。これありては文庫の品位を下すの恐れある乎。將た世間の攻擊に堪へ兼しか、さりとは若手に似合ず憶病未練、然し文庫中從來の都々一は名吟少なし、之を除きたるは却つて良策と謂はん歟、文庫の文體は總て言文一致體にして心は純然たる歐洲風

今でも一部では古風な戲作者氣どりの作者で、書かれた樣に先入主となつてゐるそれも、すでに發賣當時では、新鮮な近代性の香氣にみちてゐたのである。二十前後の靑年であつた同人は、新しい表現に腐心し一方、文學と戀愛の夢の一致を求むる心は、人生、社會へ對する視野のまだ定まらず、さうした廣い素材を把握するに小さすぎる年少作家の例として、彼等の身邊から取材した題材を、多く採つたのである。彼等を取捲くよき讀者層も、彼等とほとんど同年輩の靑年子女であつたであらう。そして、作者と同じ境致にあつて、それらの作品に滿足を見出したにちがひない。

しかしながら『國民之友』の批評子福州學人はかく、『我樂多文庫』が當時の雜誌界に於ける地位を明示してくれると共に、一方彼等の文學上の想念イズムの不確立を鋭くついてゐる。

若し吾人に此三雜誌を以つて雪月花に見立ることを許さば吾人は我樂多文庫を雪となし小說萃錦を月となし都の花を花となさんと欲す。我樂多文庫は實に純潔なり。小說萃錦は實に淸涼なり。都の花は實に艶麗なり。我樂多文庫は冷淡淺俗の眼より見るときは多少非難あるべし。然れども眞正の愛を知る者は純潔と評することを許すべし。我樂多文庫はあらゆる小說雜誌の先導者にして小說界の空林枯木を一朝にして吉野山となし小說界の茅舍陋屋を一夜にして玉殿銀閣となしたるの功あり。然れども其常に笑ひ常におどけて其極小說をおもちやにし道德の觀念低きが如きの嫌ひあるは吾人の大に惜む所なり。

と內容についていくらかの不滿をのべ最後に

吾人は終りに望み此三雜誌の諸名家に大聲注文すべきもの二つあり。曰く各小說家其信ずる所の一定の主義即ち道德上の標準を定めて着手せられよ。曰く各小說を起草するに當り其全篇に貫流する概念即ち意匠を豫め抱持せられよ。吾人此三雜誌を一讀するに槪ね一定の主義豫定の意匠なきが如し。是れ吾人が容易に此三雜誌に對して賞辭を呈する能はざる所以なり。

と結んでゐる。これは正しい指摘といふべきである。

この習作期の同人で誰が最も頭角を表してゐたか、後れて入つた水蔭はその思ひ出に次の如く記してゐる。

未だ紅葉山人が偉いのか、思案外史の方が秀れてゐるのか、サツパリ見當がつかなかつた。其仲間の

中では、如何しても山田美妙斎が着目されてゐた。それに巖谷漣山人が認められてゐた。「美妙より漣の方が巧いね。前者はキザな處があるが後者には輕妙洒脱な點があつて、清新だよ。」身びゐきでなく、實際その頃評されてゐた。(註3)

かかる一様な水準から、事實最初に進出したのは美妙である。

註1　丸岡九華の晩年について田中杏村氏が「丸岡九華氏のことなど」(昭和二年十一月二十八日發行第三年一號愛書趣味所載)に「明治四十年頃前田曙山氏の園藝文庫の別巻「花間笑語」を出しただけで外に新聞や雑誌に花卉に關する隨筆など寄せてゐた。明治の末期高田商會を退いてから何となく寂しかつた。倒れかゝつた向島菜壇に關係したが遂に支へきれなくて解散し、番町に東京園藝商會を起したが思はしからず、其後英國サン火災會社の代理店を經營した。」と記してゐる。

註2　香夢樓緑は本名松野徳之助といひ、明治二十二年十二月十六日郷里弘前で二十五の若さで死んでゐる。柳田泉氏「香夢樓緑のこと」(昭和二年七月十五日發行第二年第五號愛書趣味所載)に、彼の七々日の追悼文集「手むけ草」の解説から、故人の一部を知ることが出來る。文集には硯友社同人の追悼の詞文も掲げられてゐるといふ。「江戸むらさき」にも第一號と第三號に左の二篇が載つて彼の死がうかがはれる。

〇悼松野緑　　笠青

無殘や彼旅に病みたりけるを更に知らず、古園に仆れたりけるも亦知らず。文反古引出して遺墨の殘翰を得たりければ、之に對して一炷の香を焚き、一同の志を歎ふ。

知らぬ間に松ば折たり夜の雪

○悼松野緑　眉山

白河の月を抱き青森の雪を荷いて花の都人によき土産せんといひ放ちて出けるは葉月の初なりけるが其人は故園の土に埋もれ此人は京華の空に泣いて空しき音信を軒端の風に恨めども甲斐なしや

其夢の涙にさむる霜夜かな

註3　江見水蔭著「自己中心明治文壇史」五二頁。書名の如く彼を中心とするが、彼の身邊に近い硯友社作家が多く描かれてゐる。

三　美妙の進出

美妙が一躍文壇の寵兒となり、硯友社の同輩はおろか、當時の他の作家等も壓したのは、明治二十一年八月出版の『夏木立』一卷によつてであつた。收められた「武藏野」「籠の俘囚」「花の茨、茨の花」「柿山伏」「贋金剛石」「仇と恩」の六篇の浪漫的な内容と新奇な表現は、新鮮な果物の樣な快さを若い讀者に與へたであらう。

楞牛も一卷を評して

是の書載するところ、意匠嶄新にして文學亦瑰奇富麗を極む。其の景物を叙するや、盛に聯念、照繳の巧を盡して之を脩飾し、切りに直喩、隱喩、若しくは間々活喩等を使用して讀者の奇を好むの心を樂ましむ。若し夫れ其想に至りては、遂に『浮雲』の渾然自然に近きに及ばざること甚だ遠し。然れども美妙の名是れより人の知る所となれり。(註1)

と言つてゐるが、これに買ふべきは、その表現であらう。

今日、ほとんどすべての小說の表現形式を獨占し、我等に何等の奇異な感じを起させもしない言文一致體の發生は、かれ美妙に負ふ所多く、彼と切りはなしては考へられない問題である。勿論それは彼一人の獨創であつて彼――或はその前後について說のある『浮雲』の著者――の箇人の力にのみによつて、今日の普遍化を見たといふのではない。彼等に先行する氣運、彼等の試みを繼承し、更に完成した後の人々の力を併せての共同事業なのである。岩城準太郎氏は『明治大正の國文學』中の「口語體文章の發達」において世には言文一致の源流として、三遊亭圓朝の講演の速記を指摘する評論家がある。けれども美妙齋や長谷川二葉亭の言文一致は、圓朝の『牡丹燈籠』とはまるで緣の無い藝術的作品である。口語體文は、藝術としての文體の名であつて、口語の筆記でない。演說や落語を筆記したものなら、昔から少くない。鳩翁松翁の道話もあれば、平田篤胤の講本もある。圓朝の『牡丹燈籠』を待つまでもないのであるといはれるが、すでに明治十七年の「かなのくわい」の設立や、十八年の「ロオマ字會」の設立等で、社會の文章や言葉へ對する關心が見られ、大槻文彥の『假名の會の問答』(十五年)物集高見の『言文一致』(十九年)矢田部良吉の『羅馬字早學び』(十八年)田中館愛橘の『羅馬字意見』(十八年)等の著書も現れ、また新聞雜誌の簡單な論文、記事文を言文一致で試みるものなどもあつた。

坪內逍遙の『小說神髓』は色々な點で小說の本質について、又方法について、その後の小說の指導的役割を務めたが、同書の中に表現についての關心から下卷に文體論を掲げてゐる。「文は思想の機械(きかい)なり、また粧飾(かざり)

なり。小説を編むには最も等閑にすべからざるものなり。脚色いかほどに巧妙なりとも、文をさなければ情通ぜず、文字如意ならねば摸寫も如意にものしがたし。支那および西洋の諸國にては言文おほむね一途なるから、殊更に文體を選むべき要なしと雖も我國にては之に異なり。文體にさま〳〵の差異ありて、各々一失一得あり、利不利その用ひどころによりて異なる由あり。是小説に文體を選まざるべからざる所以なり。」といつて、傳統的に用ひられた、雅文、俗文、雅俗折衷文の三つの文體を擧げその得失を擧げて各〻を説明してゐる。

即ち、雅文體をいふのは倭文で、優柔で閑雅な性質であるから、婉曲、富麗な文章には適當してゐるが、活潑豪宕の氣がないといふのだ。從つて表現すべき對象によつて適不適があり、俗文體は通俗の言語をそのまま文章となしたもので、從つて文意平易であるが、氣韻が粗野で卑俗になる惧れがあり、冗長に失することがあり、會話はそれでいいが、地の文には不適當な場合があるといふ。

雅俗折衷文體には、大別して稗史體と艸冊子體がある。前者はほぼ雅言の率が俗言より多く、後者はその逆であつて、前者はロマンスを表現するに適し、後者はノベルを表現するに適するやうに思へると大體説いてゐるやうで、彼の小説の文體は雅俗折衷文體に目標をおいて、別に言文一致といふ事は、それまでに思ひついてゐない。

二葉亭四迷が、『浮雲』を書く際、坪內逍遙が、圓朝の講談通り書いて見たらといふ注意から、暗示を得て書いたことを『余の言文一致由來』に記してあるが、その時未だ逍遙は、明確な自信の上に立つて、示した

のでなく一つの試みとして漠然言つたのが、二葉亭の實驗によつて成功した事が知られる。
內田魯庵もいふ如く、速記術の進歩と印刷術の進歩が、圓朝等の筆記を出版した事も、時代の文章に關心する人々に必ずかうしたヒントを與へた事は想像出來る。
それ故に、岩城氏の言はれるやうに圓朝の筆記が、言文一致の源流ではないにせよ、逍遙が二葉亭に忠告した事から見てもいくらかさうした氣運を、釀成するものがあつたらうと思へる。言文一致の發達は寫實主義小說の發達と伴ふもので、描寫に完全さを求むる爲にはどうしても、細密な部分まで遺憾なく表現する文體をとり入れ用ひねばならない。
德田秋聲氏が言文一致運動を、小說の描寫といふ點から見て、それまでの小說が單に形骸的な才筆とか能文とかいふ點を見せてゐたのに對し、言文一致以後の小說は描寫と言ふ立場に立つてゐるので、決して文章を平易にしようなどといふのでなく、寧ろ反對に難解でもいいから氣分の微妙を寫し、再現の目的を達しようと說明した事は當を得てゐる。(註2)
樗牛はまた『文藝評論』の「明治の小說」に

古來の文體は粗笨に非ざれば緩漫、未だ縈紆九回の情理を曲盡し、寸錙分銖の精緻を描破して、其の眞に迫り實を盡すこと難し。果して然らば、吾等は如何にかして他の新しき、かかる目的に適應して遺憾なき文體を求めざるべからず。言文一致體は卽ち是の目的に對する一の試驗に外ならざりしなり。是の文體は年を追ふて圓熟に赴き、今日なほ小說の一文體として生存し、國文の範圍爲に一層の廣袤を加

へ得たり。

と「一の試驗」で「一文體として生存」する如く見てゐるが、リアリズムがすべての文學作品の基調をなすべきものと信じられる立場から、その爲にはその時代の社會の言語と小說作品の文體とは、一致と行かぬまでも一つの近似を保つてゆくものと思ふ。その事は一面文學と社會の接近、社會の內部への浸潤と見なされる。小說の表現が、かく接近してゐないといふ事は、作家の特別な意圖による物の外社會と小說文學が遊離してゐるためで、文學の價値が社會に認められず、社會の全てが小說文學を受入れるまで發達してゐないとか、小說文學があまりに藝術の爲の藝術に走りすぎたとか、とにかく小說文學の普遍化が行はれてゐない時起るものと思ふ。

さて問題をもとに戻して、明治の十年代の暮は、すでに歐洲文化を吸收した日本の社會も、文化程度を上昇させて、時代に適する文學、社會的な新文學を要求し、そのための新形式の試みは、時代に敏感な人々の試むべき事で、二葉亭や美妙がかかる方面の輝ける先驅者であり、つづいての硯友社の人々がその同伴者であり、より完成へと志した人々であつたのである。それ故に、言文一致の創成者が二葉亭であつたか、美妙であつたか爭ふ事は大した問題でないであらうが一應調べてみよう。

內田魯庵は『きのふけふ』の中で『浮雲』の第一篇の出たのが二十年七月で美妙の『夏木立』は二十一年八月で、その中の「武藏野」より尙以前に『浮雲』が早く出たと、時期の問題で二葉亭をあげてゐるが、しかし美妙はそれより以前十九年十一月に部分的に言文一致の傾向ある「嘲戒小說天狐」を發表してゐる。その

點から言ふと美妙が先驅するのであるが、魯庵は又文脈から云つて、美妙は韻文家で又戯文の才があり花やかにコツテリと、故とらしい厭味のある從來の文章の臭味が拔けられなかつたけれども、二葉亭は馬琴、近松を讀んでゐたが、大體漢學育ちで、文學的嗜好も亦漢文であり、その上何事も極端に走る性格であつたので、根本的に歐文的であつたといふ點からも、二葉亭により先驅的な名譽を與へてゐる。

しかし丸岡九華は『初蛙』の中で、石橋思案が美妙の晩年の病床を訪ふた際の言葉として、言文一致の談をしたについて

予は此創作は自分ではない。世間では自分であると言ふが實は當時二葉亭四迷氏から繼承したものであると言つたと其後思案子が自分に話された。當時二葉亭はどんな文章を書いて、それが所謂言文一致の創作體を爲したかそれは繼承したといふ山田自身でなければ何人も今は知らぬ。

と言文一致の創始を美妙自ら否認した事を記して、この事は博文館發行『美妙叢書』の卷頭にも「美妙君自身では、言文一致の創始者は二葉亭四迷君で、予ではない。どうか機會があつたら、此の世間の誤謬を正して置いてくれと、其晩年親しく僕に告げたが、」と思案も記してゐる。

『初蛙』では「嘲戒小說天狐」について語つた事になつてゐるから、さうすると『浮雲』發表以前の二葉亭から、何等かのヒントを得た事となる。魯庵の『きのふけふ』中の「二葉亭四迷の一生」中に美妙と二葉亭は親たちが役所で同僚で竹馬の友だつたが、中頃交際が絕えたので言文一致問題について、相談をしたのでないといふ事を記してあるが、「繼承」の意味を、かく直接談話や草稿による啓示と見ず『浮雲』による暗示

で、前記「嘲戒小說天狐」は美妙が苦心して言文一致を創らうとしてゐたのを、初めて「花の茨茨の花」に於いて、その二作の間に二葉亭の『浮雲』が出現した事により、はつきり方向を敎へられた事があつたのを、思案が聞きそこなつたか、或は別に魯庵の知らない面會の期があつたかとせねばならぬ。

とまれ、美妙本人が、最初の人として二葉亭四迷を推すならば、それが最も確實な事であらう。そこで結局は同じ事だが魯庵の時期による說を修正し、二葉亭を言文一致に於ける最初の人と推さねばならないのであらう。

然したとへ二葉亭からの暗示によつて「花の茨茨の花」を書いたにせよ、その以前から如何に、美妙はその事に苦心してゐたか、丸岡九華は次の如く記してゐる。

當時（註明治十九年頃）自分が駿河臺の子を訪問した時、月も日もいつであつたか忘れたが、子は頻に外國文の例を引いて、日本でも「言」と「文語」との調和の出來ない筈がない。何とか工夫したら出來さうなものだ。日本の文では會話にあらざる限り一句の語尾を「であつた」「日は沈んだ月が出た」「日は雲を出かかつて居る、月は今海に沈みつつある」などと動詞の過去、現在、未來のテンスを現はす時に、ぶつきらぼうに言切つてそれを文章として讀む時は、いかにもぞんざいに聞えるのが因る。されば と言つて「日は出て來ました」「月は今沈みかけて居ります」と言ふと、ぞんざいには聞えないが、だらしがなく長くなる。「でした」「でございました」を止めて、何とか文章の語尾に品位もあり、語勢も緩まず、莊重嚴肅優美輕快どんな場合にも適當するやうな書方はあるまいかそれを今考へて居ますと

話したので、自分はかねて新體詩の方で「言」と「文語」とを調和させて見やうといふ考を持つて居た時であるから、予が此議論に非常に興味をもつて、それは予の言ふ通り外國で「言」「文」差別なく詩にも文章にもなつて居るのであるから、日本でも出來ない筈はない。それは是非研究してごらんなさいと勤めた」

これによつて美妙がその頃獨自苦心してゐた樣がよく分る。かくては二葉亭と共に先驅者の名は輝くであらう。

誠に石橋思案の『美妙叢書』に記すやうに「斯くまでに言文一致を我が文壇に普及せしめ、現今では文章といふ文章は、殆ど言文一致に限るといつて可い程にしたのは、其の初め美妙君の手に依つて移植された萠芽が、今や、累々たる果實を結んだので、言文一致が我が文壇に貢献した効果があるとすれば、我我は美妙君の功勞を忘れる譯には行くまい。其の果實の愈々大いなるを見て、益々其培養者の勞苦を偲ぶのである。憶ふ、美妙君が世間嘲罵の矢表に立つて、言文一致の旌旆を高く揭げられた當時の武者振の勇ましさは、今でもまざ〳〵と目に睹えるやうだ。世の言文一致の文章を讀み、言文一致の文章を作るものは、美妙君の先見と文勳とを思はねばなるまい。此の一事だけは、美妙君に就いて何事を語らずとするも必ず記して後代に傳ふべきものと信ず」と言つた事は共に認めなければならぬ事實なのだ。

一方覇氣に燃えた美妙は新體詩の方面にも、その才を發揮してゐた。明治十九年八月紅葉、九華と合著した『新體詩選』第一版に載せた自序が雄辯にそれの意氣を示す、「――五六年來我國に現れたる物の内にて、

かの和讃か鞠歌か、さらずば西洋文學の直譯に非ずやと訝る迄に氣韵無く、而も文法謬りたる新體詩より優れる事、豈一等の比ならんや」といふその頼む所强き自信「俗曲改良の美事もやうやく初まるべき折からなるに、此頃は世に新體詩の勢力も稍熾なるものから、かのグリノスのペリクルス頻に歌曲を奬勵して、もて國民に美術の識を得さしめし其如き結果を得べき方法の一端すこしく現れたる嘉瑞なりと思ふうれしさに、早くまた鞠唄めきたる……和讃めきたる……直譯めきたる物ども全く跡を絕え眞美眞佳の新體詩のあらはれなんを願ふのあまり」との抱負。そこに言文一致への摸索と同樣の情熱を示してゐる。作品は「隅田川花見」即ち

來て見れば武藏の國の江戶からは
北と東の隅田川歌仙樓の埋れにし
其さへあるに大比叡の高峰に咲ける兒櫻
花盜人に盜まれて憂しや二八の春かとよ
彼岸櫻に行きたりしそれを思へば玆もまた
そぞろ昔の事どもを忍ぶ岡といふべけれ

に初つてそれより起る感傷を述べたもので、當時十五歲であつたといふ彼の才能の早發が見られる。それに行燈にたとへて世相を諷刺した「行燈」、今でも兒童が歌つてゐる有名な「戰景大和魂」烈火の中寶藏から御朱印をとり出す武士の事蹟をよんだ敍事詩「大川友右衞門」を發表してゐる。彼は九華によれば、尙詩作をつ

づけ第二、第三の集を出したい希望があつたらしく思へるけれど、言文一致への熱中から、自然詩作方面を離れて行つたのである。

かくて前に述べた『夏木立』による美妙の躍進はやうやく他の同人より離れてゆく傾向を示した。『我樂多文庫』第五號における「情詩人」の休載の反面に美妙は、より專心すべき方向へ進んでゐた。『以良都女』に『都の花』に彼は嬌兒の如き精進を示した。

『我樂多文庫』休載について卽ち公賣本の五號（二十一年八月十日發行）には、「劇性のリウマチスにかかり執筆致しかね」とあり、六號（八月二十五日）には「病氣の處愛讀の貴婦人令孃より本社へ宛續々御見舞被下候段本人に申聞候處朝鮮人參を戴き候程喜入り靑ざめたる顏にてニツト笑ひ申候其凄サ……併し同人事も逐日快方に趣き候得ば不日全快之上精々勉强仕り紙面にて御報恩可申と呻りながら申居候」とあり、七號（九月十日）には「美妙齋儀病氣快方に赴き候まま次號より執筆可仕と申居候」とあり、九號（九月二十五日）にも「美妙齋儀本號より執筆可仕前號に御披露申上置候處時候の不順にや病氣未だ全愉不仕此度迄は御不沙汰仕候――ぢやに依て次號には筆に換を掛けて……武士に二言はムらぬ…武士？―ト自身にいきみ居候…」と每號申譯の廣告を揭げてゐるが、遂に九號以後にはその廣告を揭げず、かくて遂に硯友社より第十二號以後社幹の名は削られてゐる。

この當時について、紅葉の追憶を三十四年一月の『新小說』より引きたい。

所が十三號の發刊に臨んで、硯友社の爲に永く忘るべからざる一大變事が起つた、其は社の元老たる山

田美妙が脱走したのです、いや、石橋と私との此時の憤慨と云ふ者は非常であつた。何故に山田が鼎足の盟を背いたかと云ふに、之より先山田は金港堂から夏木立と題する一冊を出版しました、是が大喝采で歡迎されたのです、此頃軟文學の好著と云ふ者は世間に地を拂つて無かつた、(書生氣質の有つた外に)其處へ山田の清新なる作物が金港堂の高尚な製本で出たのだから、讀書社會が震ひ付いたらうと云ふものです、因で、金港堂が始て此の年少詞人の俊才を識つて、重く用ゐやうと云ふ志を起したものと考へられる、此時金港堂の編輯は中根淑氏が居たので、則ち此人が山田の詞才を識つたのです、其と與に一方には小說雜誌の氣運が日増に熟して來たので、此際何か發行しやうと云ふ金港堂の計畫が有つたのですから、早速山田へ密使が向つたものと見える。

此方は暢氣なものだから那樣事とは些も知らない、山田も亦氣振にも見せなかつた、けれども前にも言ふ如く、中坂へ社を設けてからは、山田は全く社務に與らん姿であつたから、社の方でも山田の平生の消息を審にせんと云ふ具合で、此の隙が金港堂の計を用ゐる所で、山田も亦硯友社と疎であつた爲に金港堂へ心が動いたのです、當時は實に憤慨したけれど、考へて見れば無理の無い所で、而して此間の事は硯友社のヒストリイから云ふと大いに味ふ可き一節ですよ。

其內に金港堂に云々の計畫が有ると云ふ事が耳に入つた、其前から遲筆の山田が思ふやうに原稿を寄來さんと云ふ怪むべき事實が有つたので、這は捨置き難しと石橋と私とで山田に逢に行きました、すると金港堂一件の話があつて、硯友社との關係を絕ちたいやうな口吻、其は宜いけれど、文庫に連載してある

小說の續稿だけは送つてもらひたいと賴んだ、承諾した、然るに一向寄來さん、石橋が逢ひに行つても逢はん、私から手紙を出しても返事が無い、もう是迄と云ふので、私が筆を取つて猛烈な絕交狀を送つて、山田と硯友社との緣は都の花の發行と與に斷れて了つたのです、刮目して待つて居ると、都の花なる者が出た、本も立派なれば、手揃でもあつた、而して卷頭が山田の文章、憎むべき敵ながらも天晴書きをつた、彼の文章は確に二三段進んだと見た、さあ到る處都の花の評判で、然も全盛を極めたりし我樂多文庫も俄に月夜の提灯と成つた。

ここにわれわれは硯友社對美妙の交渉の凡その輪廓が見出されると思ふ。

脫退以後の美妙については、本論と離れる故、論ずる限りでないが、その門出の花々しさに似ず、忽ち流星の如く消えて行つた。その原因を內田魯庵は、『きのふけふ』の中に次の如く六條にまとめて擧げてゐる。

一　あまりに早く認められ事
二　表現のマンネリズムの飽かれた事
三　創作と評論を兼ねた事
四　諸方面に手を出しすぎた事
五　孤立的であつた事
六　戀愛的過失

九華によれば、彼は嚴格な家庭の祖母と母とに、小鳥の如き愛撫の中に養はれ、家庭の殼にとぢこもり、作

家としての最も必要な修業である現實社會へとびこみ、それに觸れる事がなく、概念によつての創作態度が、創作の泉を涸れしめた事も記してある。彼の作品の浪漫的な上昇もこの事を示すが、孤立的な態度も一面彼の地位を失はしめた事が、集團として硯友社を論ずる立場から見れば知られるが、これは彼の爲に惜むべきであつた。眞に天才的な偉大な作家は問題とせぬ。彼等硯友社作家群の場合、彼等と共に美妙も歩いてゐたら、後年の彼の悲慘を見なかつたであらう。彼よりも、作家としての素質をば少く持つた人が、硯友社同人として、集團の中に共にあつた爲に、永くその地位を失はなかつた事を氣附く時、自らその選んだ道といへ、美妙は不幸な道へ歩み入つた事とせねばならぬ。このあるグループに入り、その爲自然刺激を受け努力するといふ事は屢々見る例で、たとへば『白樺』の優れた作家志賀直哉さへも、後年ともすれば怠惰ならんとした彼を、武者小路實篤の激勵により、奮起した事を自ら認めてゐるのである。

紅葉と美妙と、その後何かの交渉のあつた事は、紅葉の『十千萬堂日錄』中に所々、美妙の名が表れるところでもうかがはれる。卽ち三十四年二月二十日の條に

やや雪催。午前十一時美妙子來訪の爲に起さる。自園飼養の相鴨一羽持參。明進軒に請じて會食後五時近く迄懷舊談と未來の望等を語る。同子の强記可驚。往事を語り出でて、予の詩など暗記す。又竹越三叉の仲裁して五千圓只取にせし魂膽阿部ジントウの美丈夫にして、國事探偵の大功を奏し黃海海戰に與りて有力たりしを、人の爲に毒殺せられし事など聞く。頗る技癢に耐へざる者あり。歡を罄す甚し。

とある。恐らく紅葉の病を聞いて見舞の鴨を携へて、曾つてのよき敵、よき友を訪問したのであらう。文

壇に占める地位の對象を離れ、出發の日の夢を省みて耽つた二人の感慨を、はつきり想像できるではないか。紅葉は翌日、美妙の見舞の品を料理して、食べて「寒の內とは味劣れり」と彼らしい批評を加へてゐる。三月十三日に「美妙子より浮世延期の狀來る」とある。それから季節は秋に入つて、十月八日、今度は美妙が病んだらしく、「山田美妙子へ問病の手紙を發す」とある。時間は靑春の日を懷しみ、すでにかつての悄しみの感情は消え握手した二人の姿を見る。しかし時既に遲きに過ぎたのである。

美妙の晚年につき九華は、

明治四十二年の暮に再度思案子を訪問し、同子に原稿の周旋など賴んだ事から、自分とも再度面會の機會を得た。此時は實に二十餘年振の面會で、見違へる程瘦衰へて、鬚など蓬々とし、全く昔日紅顏の美少年ではなかつた。其零落の姿は身に泌みて氣の毒であつた。

當時思案君が周旋された共作お伽話の原稿は頁數が足りなかつたので、幸に自分が起稿してあつた西藏お伽話の舊稿を贈與し、一冊に纒めて出版した事がある。此お伽話の一冊は、恐らく山田美妙として最後の出版物であつたらうと思ふ。又思へば、山田が明治十九年に最初の出版物として新體詩選を出した時は此と紅葉と自分との三人の合作であつた。然して氏が最後の出版物も、氏と自分二人の合作であつた事を考へれば不思議な因緣とも思へる。

と零落の日の美妙が、賣れざる原稿を懷にして、かつては驕慢に見下した、舊友と會ひ、舊友等も溫い心で之を迎へた樣を思はせる事を描いてゐる。（註3）

然しそれ等は後の事で、ただここに硯友社の作家が、結社中にあるか否かの結果が、作品の發表作品への精進に、どんなに影響したかの實例をまざまざと見せるのである。

前に戻つてとにかく美妙一人の進出、その脫退は、發芽期の社にとつて大打擊であつたに違ひない。『我樂多文庫』の廢刊に關して紅葉は三つの原因をあげ、「一は印刷費の負債二は編輯と會計との事務が煩雜に成つて來て、修學の片手業に餘るのと、三は金港堂の優勢に壓れたため」と言つてゐるが、この三は美妙の編輯する『都の花』に壓倒された事を意味する。美妙は今かへつて味方を嚙む白い牙であつたのである。とり殘された紅葉初め他の同人の美妙への憤激と羨望が、ますます結束をかため、自らも進出の野心に燃えたのは察するに餘りがある。我等の考察はかくて次期、彼等が如何に進出し、その作品に精進したか、その作品について考察し世評を考へるべきである。脫退以後の美妙については、その後の硯友社としては最早關係ない事だからこれを省略する事にする。

註1　樗牛全集第二卷文藝評論「明治の小說」三五一頁。

註2　德田秋聲述文學普及會講話叢書第一編「明治小說文章變遷史」四二頁。

註3　山田美妙の生涯について、その晩年の日記の紹介鹽田良平氏の「美妙齋日記について」（岩波日本文學講座附錄「文學」昭和七年一月新資料紹介特輯）及び同氏の「美妙齋・人・小說」（「國語と國文學」昭和六年六・七・八月號所載）に具體的に描かれてゐる。

第四章　硯友社の展開　その二

一　進出期　（二十三年――二十六年）

美妙を失つた硯友社に於て、他の同人達は尙ほとんど同一列にあつたが、作品、編輯事務等で最も努力してゐたのは紅葉であり、彼にとつて、同じやうな努力を續けてゐた美妙は誠に好敵手であつたらう。その美妙は鮮かに巢立つ鳥のやうに、社から飛去つた。とり殘された紅葉の心は淋いたであらう。

紅葉の記錄によれば、每號すでに三千を刷つてゐた程、社會的に勢力を擴大したとはいへ『我樂多文庫』は未だ半ば私的な機關雜誌としての存在である。更に普遍性を持つ社會的な發表機關で、積極的に進出して、作家としての地位を占めねばならない。

かうした時、吉岡書籍店の『新著百種』の計畫が、紅葉初め、同人の作品發表の機關となつた事は、彼等を如何に喜ばせた事であらう。主としてこの叢書が、紅葉を初め、他の同人達の作家としての地位を確固として社會に印象させたのである。

吉岡書籍店の主人は、吉岡哲太郎といふ理科大學の化學を專攻した理學士であつて、大學を出てから暫く出版業を經營してゐた間に、この叢書も刊行したのだ。

彼は The Student といふ英語雜誌を發行したといひ、それが又日本人の手に成つた外國語雜誌の最初で、

當時の英語の學生は凡て愛讀したといふが、かうした教養のある幾らか進歩的な出版家であつたらしい。『新著百種』も初め單に小説ばかりでなく、政治、工藝、美術等の色々な方面に著眼され、又たとへ小説の量を多くするといつても、硯友社專門とは限らぬ計畫であつたらしいが、その第一號として出た、紅葉の新作『二人比丘尼色懺悔』が、非常に評判となつたため、何時か硯友社の機關的な存在になつたといふ。

即ち公實の『我樂多文庫』十六號に、それについての廣告が揭げられてあるが、それによつて、その意向がうかがはれるから引用しよう。

新著百種は歐洲に行はるる「某氏文庫」の制に倣ひ雜誌の價を以て書籍を買得るの良方なり
新著百種は毎月五日に發刊す
新著百種は定價金十二錢郵稅三錢にして紙數は百頁以上とす
新著百種は小說政治美術工藝諸般の新著を廣く諸大家に乞ひ一冊讀切となして發刊す
新著百種は方今小說雜誌が一部に數種を揭げ加ふるに發兌の日を隔つるがゆへ讀者をして殘簡斷編を見るの遺憾あらしむる通弊を矯正するものなり
新著百種は東京神田乘物町三番地吉岡書籍店の發刊なり
新著百種は近來無比の製本美裝にして發刊す
新著百種は三月五日を期して第一號を發刊す

といふので、最後に紅葉の『二人比丘尼色懺悔』の廣告を記してゐる。

かうした雜誌の缺點を補ひ、しかも單行本より手輕に入手でき、書架に飾るにも、出來れば一揃ひを並べる讀者の心理をねらつたやうな方法は出版界も刺激したらしく、これと前後してかかる叢書風の出版方法が流行してゐる。たとへば次の如きものがある。

『文學世界』は、春陽堂から發行され全部で十二冊二十四年三月創刊であり、『小說聚芳十種』も同じ所から發行、創刊は同年二月である。

これ等に比し單行本的で體裁もよく、價も高いが、同店から二十三年四月より發行された『新作十二番』も叢書的傾向を持つ。

その後『聚芳十種』とか『小說百家選』とか『明治小說文庫』とかかうした形式の出版が多く出てゐる。『新著百種』は、かかるものに先行したが、その計畫が刺激を與へたことは想像できると思ふ。

いまこの中に見出される、同人の著作目錄を擧ぐれば次の樣である。

二人比丘尼色懺悔	第一號	紅葉	二十二年	一月
風雅娘	第三號	紅葉	二十二年	六月
乙女心	第三號	思案	二十二年	六月
妹背貝	第四號	小波	二十二年	八月
殘菊	第六號	柳浪	二十二年	十月
巴波川・新桃花扇	號外	紅葉	二十三年	三月

墨染櫻	第九號	眉山	二十三年　六月
露小袖	第十號	乙羽	二十三年　十月
妾薄命	第十一號	虚心亭	二十三年十一月
山吹塚	第十三號	九華	二十四年　二月
離れ鴛	第十七號	花瘦	二十四年　八月
ばアや		小波	二十四年　八月

かうした著書を次々に『新著百種』の中に持つた硯友社の同人は、既に以前に『國民之友』の批評に依つて述べたやうに、文學界に於いては、認められてゐた事が分るが、ここに當時の進歩的な文學者『小説神髓』『書生氣質』で名のあつた坪内逍遙の硯友社一般へ對した箇人評が、『新著百種』第一號の序として書かれてあつてそこに進出の直前の様が見られる。

近ごろ批評家なにがし君我樂多文庫を評して文壇の梁山泊と言はれき、げにや、及時雨は果して誰かには今はまだ知りがたけれど智多星の智、武行者の勇、其文章の上に炳焉たり。就中（人の已に廣く知れる美妙なる美妙君を除くとして）艶麗にして古雅なる紅葉君は龍田川の昔を偲ばしめ、縦横にして澁滯なき思案外史は眞に思案外の神託ありて常に其筆を導くかと思ふ、漣山人の輕くして精妙なる誰か春漣の如しと言ざらん、眉山人の得意の調格、也有か許六か、紫女か淸女か、澁きが如くして澁きに流れず、艶あるに似て艶にかたよらず、美人の眉か、遠山か、山か眉か眉か山か、おぼろげなるがなか〳〵

なり。扨又九華君の筆の跡、花は紅葉に似たりとは僻目なり、紅葉と花の相違あり、紅葉はひそみ花は膽太し、七重に八重に咲出る姿、勇まし、面白し、心地よし、香夢樓綠君の筆、おちついて長閑なり、濃かき香夢の心持は斯うか、此筆にて優なる筋をかかれんには、讀者新綠の蔭にたつて杜鵑をきくの思ひすべし、それに麻溪君の詩才、とりたてては言はすもあらなん「眞美人」をかいまみし人は知るなり、梁山泊といふ評はいつはらず、よくもかくは揃ひしものかな、此あひだ鶯村君の寮にて初めて諸君に見ゆる事を得つ、夫ゆゑに世辭を言ふにはあらねど嘗て或人のいひしと異なり、道樂に小說をかかる人とは、予は露ばかりも思ふ能はず、硯友社の人々は滿身都是小說たり、我文學の未來にとりて賴母しき人々のみ、其賴母しき人々を爪牙とし又他の諸名家をも二陣三陣に備へさせて、此たび「新著百種」を出すは元來何人かといふに是また走利の人にあらず我文學に忠實なる友人鶯村吉岡君なり、斯文の未來賴母しからずや。

これは序として書かれたものであるから、さうしたものに有勝ちな修飾的筆致も幾らか見出され、乘ねて友人吉岡氏の新しい計畫への祝ひの氣分からの感情も知る事が出來る。

然し、概して箇々の作品の印象短評も妥當性が認められ、逍遙も硯友社作家に關心を持つてゐた事が知られる。これに就て、丸岡九華は「兎も角も當時の北斗として、世人が瞻望仰敬の的となつて居る春の屋先生から此褒詞を辱くした吾々は、自身冷汗が出る程恐縮はしたが、又一方には世間に對し此上もない難有い紹介で、後進を誘導奬勵された御趣意をかたじけなく思ひ奮勵努力しなければならない大責任を感じた。」と『初

蛙』で、感謝の思ひ出を新にしてゐるが、是れはやがて、すべての同人の氣持でもあつたであらう。

逍遙が序文で、「道樂に小說をかかる人とは予は露ばかりも思ふ能はず、硯友社の人々は滿身都是小說なり、我文學の未來にとりて賴母しき人々のみ」と書いた事は、文字通りに逍遙の信念であつたと見る以外に、逆說的に、彼等の將來へ對する自重、精進への希望が含まつてゐたとも見らるべきではなからうか。それ故にこそ同人の中には背に冷汗を流し、改めて奮勵努力の決心をつけた者もあつたと思はれるのだ。

元來、硯友社同人中、石橋思案、川上眉山、丸岡九華は、坪內逍遙と師弟關係にあつた。明治十五、六年頃、三人が本鄕の進文學舍に通學してゐた頃、當時まだ大學生であつた逍遙が、英文の授業をやつて、マコレー著のワーレン・ヘスチング傳などの講義を行つたのであつた。

九華はそれについて「三人が此師弟の關係あるを先生も知つて居られるので、且は先生にかぶれて共黨染から小說に筆を執り、文學の道を辿るやうになつた事をしほらしく思つて、特に此好意を示された事とも考へられる。」と坪內逍遙との關係を明記してゐる。

『我樂多文庫』の成立等については、勿論ほぼ相前後して出た、坪內逍遙の『小說神髓』『書生氣質』とは何等の相關したものはないが、同人の中には、かうした明治文學の先驅者の血脈が、細い絲を以つてつながれてゐるのが認められる。

かくて、かかる有力な紹介を以て、公的な發表機關を得たと同時に、二十二年十二月、紅葉は高田早苗の紹介で、饗庭篁村の後を受けて、文壇的に勢力のある讀賣新聞の文藝欄を擔當することになつた。

新聞紙の社會的役割の重要さは言ふまでもない。そこに堅固は基礎を占めた紅葉を出した事は、紅葉のみならず、他の同人にとつても利する所多かつたは知るべきであらう。

紅葉のみについても、其後彼の『伽羅枕』『紅白毒饅頭』『三人妻』『心の闇』『むらさき』『多恨多恨』『青葡萄』『金色夜叉』等の重要作品を初め、その他過半の作品はこの紙上に發表された。卽ち彼の作品は、このジアナリズムと結合して、大衆的な讀者層を獲得して行つた。そのことは彼の作品理解の一つの鍵となる事で、重要な事實と云はねばならぬ。

坪内逍遙の『小羊漫言』中「明治廿二年文學上の出來事月表」の、三月の條に記錄して、

『我樂多文庫』改良して『文庫』となる文壇の梁山泊總出、西鶴の羽ばたきソロ〳〵世間にひびく。

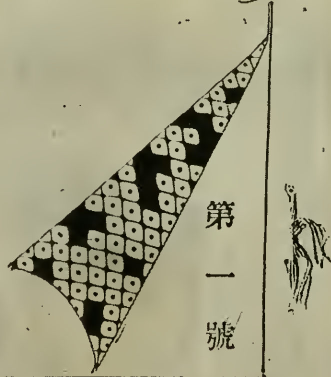
とある。

この簡單な記錄にも、進出の鮮かな動向と、一面內部的に彼等が在來の化政期の文學の摸索から飛躍して、この期專ら西鶴研究、それよりの影響圈內にあつた事が窺はれる。

硯友社にはこの他、尙機關誌の必要を認め、次節に揭ぐるやうな、雜誌を以て進出を扶けてゐる。

二　『小文學』『江戶むらさき』『千紫萬紅』の發行

硯友社は『新著百種』を、公的な進出の機關とした以外に、『我樂多文庫』『文庫』の延長の線に於いて、半ば私的な機關雜誌をこの期に持つた。紅葉の「硯友社の沿革」に示した、社の第七期、第八期、第九期が



硯友社の機關雜誌（II）小文學と江戸むらさき



之にあたり『小文學』『江戸むらさき』『千紫萬紅』の刊行がこの具體化である。

この刊行には、凡そ二つの目的があるやうに思はれる。卽ち、旣に習作の意義を超越して、一面『新著百種』で進出した彼等のより文壇に執した、實際的活動の土臺たらしむる事と共に、一方いくらか水準を異にする同人及び新人の爲に備へた發表機關の意味である。次に順次その內容形式について述べて行かう。

『小文學』は、明治廿二年十一月二十一日發兌、珍しく週間で二號（十一月二十八日）三號（十二月五日）四號（十二月十二日）五號（十二月十九日）六號（十二月二十六日）と發行されてゐるが、七號に至つて二月十三日になり調子が狂つて、八號（三月十三日）、九號（四月十日）で休刊となる。

菊版で表紙も本文同樣の印刷紙合せて十六頁の小冊子で武內桂舟の挿繪の加つてゐる分もある。發行兼編輯人名儀は星常平、發行所は下谷區初音町四丁目十二番地小文學發行所定價一冊二錢五厘となつてゐる。

編輯の體裁は聯珠（小說欄）寸錦（感想評論）餘香（古典文例）薰心（詩歌）鐵槌（批評）等の欄に分けてある。

この雜誌は社外よりも原稿を集めて、廣く文壇的交涉を持たうとしてゐるやうだ。例へば淡島寒月の愛鶴軒西跡と、幸田露伴の蝸牛露伴の合作「井原西鶴を弔ふ文」（一號二號）――それは內田魯庵が不知庵主人の名で以てして、一二號に續けた「日本小說の三大家」（京傳、三馬、西鶴を稱してゐる）と共に西鶴流行を反映するものであるが、さうした寄稿を受け、他に石橋忍月の「獨逸戲曲の種別」（一號より四號まで）宮崎湖處子の新體詩「洪水」（一號、三號）等があるが、結局は硯友社で固まつてしまつた。小說の主なるもの鬪

東五郎（紅葉）賽相如（柳浪）情囚（乙羽）等があり、珍しく淡島寒月の愛鶴軒が「けふあす」といふ「年に一度師走の大掃除塵にまじはる町内の繁昌、笑に春をまつ商人の煤拂」といふ前書からして西鶴風の小説の寄稿を第六號になしてゐる。

第一、二號の「鐵槌」で戀川綾町の名を以て、他誌に對して形式內容すべてにわたり、妄評して最後に、「新聲のは、又舊聲の舊にして、しがらみ草紙はひからび草紙なる事を妄評無罪」と云つてゐる。堂々たらざる態度で、より新しきものを目標とするものへ對し自らを擁護してゐることになる。

第四號、第五號に「小說家秘密文法猫の卷」といふ題で、戲文調で、當時流行と見らるべき、二葉亭、篁村、嵯峨の屋、紅葉、思軒、東海散史、露伴、南翠の文體批評をしてゐる。

この中紅葉については「紅葉山人の文を得んと欲せば風呂敷に天狗の面を包み懷中なし涎をたらしながら口をきく心持あるべし山葵と辛子を一時になめて口直しに澁柿を食ひ絕句してだまるべし此處が成田屋——引と掛聲されるなり」といつた風な調子である。

その內、露伴の條に「當世盲目千人西鶴々々と葱を食つて牛肉を賞る奴等の詮議やかましけれど西鶴は高價から文庫に出たる愛鶴軒を身代りにすべしそれを三拜しての字さへ使ひこなせば直と西鶴派の名人と云はるべし」といふ章句も、西鶴の文學界流行を如實に示してゐる。

以上『小文學』について、大體主要な內容をあげた次第である。

『江戶むらさき』は菊判の雜誌で第一號及び終刊の十二號の十四頁を除いて、每號十八頁の片々たる體裁で

ある。創刊は二十三年六月二十日で、毎月五日、二十日發兌となつてゐる。この月二回の發行日は嚴守されて、十二月に至つて初めて、五日發行がなく二十日一回發行され、第十三號の一月五日の「初ずり」の豫告を掲げたまま、終刊となつてゐる。（尙ほこの雜誌の發行期日には、かなり誤植があるやうに思へる。例へば第六號二十三年十月四日印刷同年同月五日出版とあるが、五號が八月十九日印刷二十日出版、七號が九月十九日印刷九月二十日出版だから當然六號は九月四日印刷五日出版でなければならず、八號も十月十四日印刷同五日出版と、出版が印刷より前になつて居り、九號が十月十九日印刷二十日出版だから十號は十一月四日印刷五日出版でなければならぬのが十月四日印刷、同五日出版と一月前に返つてしまつた誤植としか思へぬ誤りをしてゐる。）

編輯人は廣津直人、發行所は牛込區北町四十一番地の硯友社であり、定價は一部三錢である。

編輯の體裁は心織筆耕、飛花落葉、千紫萬紅、森羅萬象、街頭巷談など『我樂多文庫』に慣つた各欄を設けてゐる。

この雜誌で漣山人が小說「秋の蝶」を七號に休んだ外十一號まで連載して、最も力作を發表してゐる事になる。その他、創作欄ともいふべき、心織筆耕には、紅葉の「わかれ蚊帳」（一、七號）「文ながし」（十號）柳浪の「草餠賣」（五號）水蔭の脚本「澪標佐々木盛綱」（六・七・八・九・十一號）などが載せられてある。眉山は「下駄辭」（一號）「百味譜」（九號十號）などの戯文を掲げてゐる。

次に號を追うて、硯友社の成長に資するものを取つて、說明して行きたいと思ふ。

第一號に「當世文壇十傑」の投票を「爰に指名すべきなれど一己の私見は面白からねば寧投票を以て公論に決せんとす好文有志の士女願くば高見を示されよ」と、讀者大衆の批判によつて、當時の作家の地位を探らうと試みてゐるが、第三號にその結果の發表がなされてゐる。編輯部内での公平さは期待すべくもないが、凡その様子が知られ、以て硯友社作家の位置が知られるから擧げてみよう。

得點の順に並べると次の様になつてゐる。

八十點　美妙、露伴、紅葉
七十點　南翠、篁村
六十點　逍遙
五十點　柳浪
四十點　鷗外、嵯峨舍
三十點　三昧、學海、思軒、漣、二葉亭
二十點　忍月、眉山
十　點　香雪、得知、思案、愛鶴軒

以て、文學界に於ける紅葉、その他硯友社作家の位置を凡そ測定する事ができようと思ふ。また折々社員の新著を紹介し、之を江湖に告げ一方自らの進出の過程を示してゐる。まとまつたものを擧ると、第三號に

(1)　墨染櫻　　新著百種九號　　眉山人

(2) 劍客　新著百種十號　近刻　水蔭
(3) 媒介人　日本之文華十三號　漣山人
(4) 落椿　東京中新聞　柳浪
(5) 信夫摺　新著百種十一號　近刻　乙羽庵
(6) 伽羅枕　讀賣新聞　紅葉
(7) 此ぬし　新作十二番　近刻　紅葉
(8) 朝日川　都の花　水蔭
(9) 振分髮　中新聞　黛子
(10) 長恨歌　中新聞　山花子

第八號には次の如く揭げられてある。

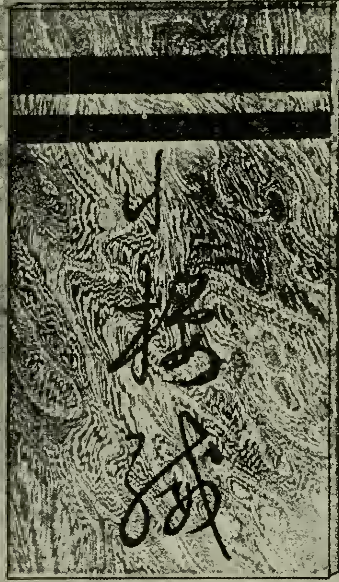
(1) 此ぬし　新作十二番　紅葉
(2) 禿菊　國光　虛心亭
(3) 風流狂言記　日本之文華　眉山人
(4) 破色紙　都の花　乙羽庵
(5) 檜木笠　都の花　水蔭
(6) 新學士　日本之文華　漁山人

(7)　繪姿　東京中新聞　柳浪
(8)　劍客　讀賣新聞　水蔭
(9)　露小袖　新著百種　近刻　乙羽庵
(10)　櫻月　金港堂小說叢書近刻　水蔭
(11)　紅鹿子　近刻　紅葉
(12)　白面鬼　近刊　漣山人
(13)　令夫人　近刊　思案
(14)　光淸寺　近刊　漁山人

かくして、この內部の宣傳は、これを客觀する時、文壇的には彼等の勢力、その作家的位置の進出を示すものであるが、一方彼等は外部勢力に對しても、所々に短い文章を以て、對抗的な氣勢を擧げてゐるがそれは主として街頭巷說の欄に於いて行はれてゐる。（註1）

第九號、第十號には、その頃初めた俳句研究の「むらさき吟社」の詠句が揭げられてあるが、それは別の『硯友社と俳句』の章に於て述ることにしたいと思ふ。

『千紫萬紅』は同じく菊判であるが『江戶むらさき』の本文同樣の紙をそのまま表紙としたに對し、これは別に表紙を設け、しかも表紙の一部に、英詩や、俳句、漢文の章句を赤刷にして、每號變へて揭げるなどの意匠をこらしてゐる。創刊は二十四年六月十日發行で、二十五年四月終刊してゐる。



硯友社の機關雜誌（Ⅲ）千紫萬紅と江見水蔭の小櫻緘

この雜誌は紅葉によれば、若い作家のためといふが、成春社といふ結社の名で出されてゐる。創刊號に規約があるので、左に掲げることにしよう。

成春社規約

第一條――目的　本社は毎月壹回（十日）文學專門の雜誌千紫萬紅を發刊し、左の諸項に分て文學を研究する者とす。

小說　臺帳　短篇（スケツチエス）　俳文　韻文　戲文　小品　漫錄　俳句　新著論評　古文

新刻　特に街談巷說の一欄を設けて文學界の景況を報導す。

第二條――入社　文學篤志者は何人を論ぜず入社することを得。

第三條――入社票　入社せんとするものは左の入社票に記入の上本社へ差送る可し。

第四條――社費　社員は入社の時貳ケ月分前金として金貳拾錢を納め、其後は毎月金拾錢を其月五日迄に前納するものとす。

第五條――頒布（千紫萬紅）は一切社員外に頒布せず。

第六條――寄稿　社員は隨意に寄稿することを得。

第七條――收納　社費は一切郵券代用を許さず、爲替は（東京市牛込郵便支局）宛にて送る可し。

第八條――格外　社員にて定規外の雜誌を望むものは一部金八錢の割にて仕拂ふ可し。

第九條――見本　見本に限り五厘郵券二十二枚にて送るものとす。

第十條――支社　本社は支社を適宜の地方に置く。
第十一條――本局　本社は假本局を東京市牛込區北町四十一番地　江見水蔭方に置く。
第十二條――役員　本社は左の役員を置く

主筆　石橋思案
編輯　巖谷漣
仝　江見水蔭
仝　川上眉山
補助　尾崎紅葉

これで知られる如く、組織的な意圖が見られる。創刊號には、思案の「わが戀」紅葉の「子細あつて業物も木刀の事」水蔭の「百八燈」眉山の「女八景」漣の「今辨慶贊」などを主として硯友社同人の作を掲げてゐるが別に作文課題として、「賈婦怨」「西鶴翁畫像贊」「にくきもの」等を社員に廣く募つて、雜誌との關係を密接ならしめようとしてゐる。

思案の「わが戀」は五號にわたつて連載されたもので、言文一致體で、一人稱の形式をかつて女學生との戀愛を描き、在來の遊戲的傾向の一倍强かつた彼としては、新しい傾向の作で、『江戸むらさき』に於ける漣山人の「秋の蝶」と等しくこの雜誌の生んだ力作と云ふべきである。

對文壇的の記事として三號の「街談巷說」に桐のや主人の名で、古今集の序を模したやうな「六家撰」な

る題のものが揭げられてゐる。それはその頃の文壇の一流作家を批評したものとして、戯文風ながら、興味があるので左へ揭げておかう。

竹のやの主人は詞かすかにして始終たしかならず、いはば秋の月を見るに曉の雲にあへらむがごとし。宇治山の僧喜撰にや似たらむ。

鷗外漁史は其心餘りて詞足らず、凋める花の色なくてにほひ殘れるがごとけむ。在原の業平にや。

南翠外史は詞工にて其さま身におはず、いはば商人のよき衣きたらむがごとし。文屋康秀といふべき。

露伴子は心は高くて其さまいやし、薪負へる山人の花の蔭にやすめるとや云ふべき。大友の黑主なるべし。

紅葉山人はあはれなるやうにて强からず、いはばよき女の惱める所あるに似たり。小野の小町にやあらむ。

美妙齋のあるじは其さまは得たれど實少し、たとへば繪に畫ける女を見て徒に心を動かさむがごとし。僧正遍照にこそ。

また、同じ號に大阪で山田芝廼園が雜誌『葦分船』を發行するについて卷首へ送つた紅葉の序言が揭げられてある。それは紅葉の聲望の擴がりゆく樣を明らかに語つてくれてゐる。（註2）

第四號には社員新著紹介がのせられてある。前に擧げたと同じ意味で記しておきたいと思ふ。

ばアや！　（新著百種第十七號）　漣山人

ぬれ浴衣　（讀賣新聞）　仝

當世少年氣質　（博文館近刻）　仝

寶の山　（少年文學第六篇）　眉山人
藤かつら　（都の花）　仝
野試合　（文學世界第七）　江見水蔭
片破月　（東洋新報）　思案外史
信夫摺　（仝上）　乙羽庵主人
離れ鴛　（新著百種第十七號）　中村花痩
谷間の雪　（都の花）　仝
二人女房　（仝上）　紅葉山人

かく同人の具體的な作品によつて、一種の示威を行ふと同時に第五號には內田不知庵へ對する反駁的な記事を掲げてゐる。「黑裝束」といふ題で、筆者は硯友社浪人となつてゐる。

「內田不知庵の批評は時流の戯謔罵詈を脫し老成着實の眞面目を以て聞えたるに近事屢匿名の黑裝束して皮肉的の罵詈を放つごとし」と『國民之友』で江見水蔭の「野試合」の評中に硯友社を目して豆腐といつた事を取上げ「豆腐とは或は氣骨(ほね)なしの意か、善哉君見て氣骨なしといふ可なり、血なしといふも、肉なしといふも皆可なり、然れども、一悟說破的、見立謎々的の評言は、批評の眞面目にあらずとは君の常に口にする所ならずや、戯謔冷笑熱罵は君の常に目して、批評の神聖を汚すといふ所にあらずや、硯友社は烏合の衆といへども、君が一言の「えらい」を忝うして得々たるものにあらず、また何ぞ「豆腐」の洒落を受けて戚

々焉たるものならむや、「豆腐」にして倘鬢かすむば「雪花菜」といふも亦甘受すべし、唯願ふは氣骨なき所以「豆腐」たる所以を丁寧親切に誨へられよ、」といひ、やがて「君よ黑裝束は刺客水破の服にして大將の料にあらず、家重代の緋威やあらむ、一子相傳の打物やあらむ、今日を一世の曠と着飾りて、高聲に名乘を揚げ、塹際近く乘出して、兎や角も一攻攻めて御覽あるべし、何なりとも御所望次第、征矢、蟇股、大鏑矢、或は石火矢、石榴彈近頃無事徒然の折から好き御慰みかとも存ぜられ候」と正々堂々の筆陣を望んでゐる。

かうした勢を持つたが、第六號はすでに、編輯にも倦怠を見せて五十頁、六十頁を數へてゐた紙數も半ばの二十八頁となつてゐる。その最後に主筆思案が尾濃震災地旅行中編輯擔任の紅葉が腦充血に罹つて發行延期したのを、社員の催促が烈しいので意にみたぬのに枉げて印刷した旨の廣告が出てゐる。かくて翌年四月休刊、後は硯友社系の武田櫻桃、山岸荷葉、山村水郭の『詞海』を代送してゐる。（註３）

これ等に於て、最も努力したのは、紅葉よりむしろ他の同人達であつた。この他江見水蔭の『小櫻縅』と未刊行の『今樣册子』があるが、それは他の章に於て述る事とする。

註1　例へば第二號に「一句浮城物語を評す」とて矢野龍溪の著作を「奥さまの田樂やくやさくら茶屋」と評し、又同じ所に「小說の種類」として、金箔小說、反吐少說、五月雨小說、三日月小說の名で、當時の小說の傾向――貫目なき小說、下手な飜譯小說、だらだらと冗長な小說、何等主眼なく思ひつきの小說を夫々言つたのであるが――それへ對して皮肉な指摘をしてゐる。

註2　「浪華の山田芝廼園夙に浪華文學再興の志を抱きたるに、時機始て熟して、こゝに「葦分船」發行の擧あり。不肖

迻に其後に附して、亦微力を致さることを約し、その壹號の卷首に一言す。」との前書で「一葉の葦分船浪華を出で渺々たる詞海に泛ばむとす。風に操り浪を淩ぐは芝迺園か水馴棹の力なり。紅葉は山人、溪流の淺きを知れど江海の深きにくらし。風日水神の噫に驚き、夜雨鱷魚に魂消、南無や讃岐の象頭山、金平の惡太郎とは疊水練のから威張、この所命は托して舟師にあり。沈まば諸共、いで〳〵行く所までつゝぱしれ。」との序を贈つてゐる。雜誌「葦分船」は二十四年七月創刊、十二月六號で終刊。更に二十五年再刊して二十六年二月迄に十號を出してゐる。大阪に於ける文學雜誌の初期時代の代表的なものである。

註3　「詞海」は二十五年三月創刊。成珠社發行。その六月十五日發行の五號に、「本社々務整理の爲「千紫萬紅」暫時休刊致候に付、社費既納の諸君は當「詞海」代送申上候間、不惡御了承被下度候、尙不日「千紫萬紅」の色香共に昔にかへつて一きはめでたき所を御目に相掛可申候也　成春社」といふ廣告が揭げられてある。

三　紅葉の作品

『新著百種』第一號の『二人比丘尼色懺悔』は紅葉の習作期の作品に比して、色々の點で飛躍を見せてゐる。彼はこれに就いて、同書中に「二人比丘尼色懺悔なる、例の九華、香夢樓、思案、漣、眉山等わが机をとりまき、言葉よりまづ大口をあいて笑ひ、爾紅葉、若氣のいたりからまた〳〵好色の書を著はすか。唱爾等鞘の塗で發光か竹光か。判斷がなるか。そも色懺悔を題にして妙齡の比丘尼二人が山中の庵室に奇遇し、古を語り今を慕なみあふといふ脚色。一字一涙の大著作即ち是と、薄汚き原稿をさし出せば手にだも觸れず腹を抱へ、扨も企圖のしほらしさよ。心根のふびんさよ。茶番狂言の飯炊場か、情なからうか悲しからうか。

尺八に似た火吹竹。いかなる音をやいだすらむ。爾性諸謔。爾口善罵。なぐり書の滑稽もの或は怪我の功名に、見らるるも出來るやも計られず、爾が悲哀小說――盲人が染小袖の是非。其器にあらずして是を言ふは間違へるなり……」云々といつて、身邊のからかひに對しても「淵を素通りしてその底に蚊龍の棲むを見るか。林を一目してその奥に栴檀のあるを知るか」と力んでゐるけれど作品發表に際して起る反響について、作家の内心に持つ杞憂は、戯文的な結果にも窺ふ事が出來よう。

「此小說は涙を主眼とす」と作者自ら記すが如く、草庵に偶然會つた二人の尼僧の語りあふ若き武士が、共にしたふ當の男であつたといふ義理と人情をからませた簡單な筋ではあるが、描かれた二人の純情が夢幻的に、浪漫的な哀愁を誘ふ。それと共にそれを描くにふさはしく、彼の試みた表現上の苦心が人目をひいたのである。序に曰ふやう、「文章は在來の雅俗折衷をかしからず、言文一致このもしからずで、色々氣を揉みぬいた末、鳳か鶏か――虎か猫か、我にも判斷のならぬかゝる一風異様の文體を創造せり。あまりお手柄な話にあらずといへど、これでも作者の苦勞はいかばかり、それをすこしは汲分けて、御評判を願ふ」とか「對話は淨瑠璃體に今時の俗話調を混じたるものなり。惟るに、これを以て時代小說の談話體にせんとの作者の野心」と、言はでもの事を記してあるのは、今ならきざな自己宣傳と見えて、變に見られるが、當時は時代のせゐとして、むしろ正直な彼の告白と見て、その苦心を買つていいと思ふ。

その世評を得た所以は、岩城氏等も言ふ如く、社會的には歐化主義より國粹主義への反動期で、文學的にも國文學への反省が古典研究となり、文體上より西鶴研究となり、世上一般に言文一致のマンネリズムより

倦みはてて、他のスタイルをのぞむ慾望が、この紅葉の古雅な表現に滿足したのであらう。

いまその文體を示すために『色懺悔』の書き出しの數行を引かう。

蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も凩の烈く。あるほどの木々の葉――峯の松のみ殘して――大方吹落しぬれば。山は面瘦せて哀に。森は骨立ちて凄し。茶の煙だに擧らば。山賤も知らぬ谷陰に誰がすむ庵ぞ。かくて倚捨難き浮世の面影のこす菱垣。疎に結ひ繞し。竹は蝕み。縄は朽ちたれど。枯蔦の名殘惜しく縋れるまゝに倒れもやらず。二本の黑木を入口の標に茅葺の屋根は歲に黑み。落懸る檐風に傷はしく。風情は月にばかりの破壁。强くは蹈れぬ竹椽。切株の履脫より左に三尺。其處に筧の。水ほどにもなく絕えせぬ雫。閼伽桶に滴る音の。やう〳〵幽に疎に成りゆくは樋の口凍るにやあらん。夕暮の風寒し。

實際かうした文體への腐心は、ひとり紅葉に於いて見られるばかりでなく、坪內逍遙の『小羊漫言』の「明治廿二年文學界の風潮」に記錄されるごとく、一つにはその頃の文學界の風潮ではあつた。

それには、やうやく雜誌向の短篇が書かれ、文章に推敲を全篇的に及ぼすことの困難な長篇より、精力が全體的に及ぼせられる短篇に作家が力を入れたことや、單にストオリイを讀む以外、世人が文章について關心を持つたことが、作家自身の自重と相俟つて文章の彫琢に注意を促したことが原因すると文章そのものの範圍內で言はれることは、いささか狹義な解釋ではあるが、一應その點でうなづかれる。

すでに前にも述べたやうに『小說神髓』下卷の文體論にも、逍遙は雅文體、俗文體、雅俗折衷文體の得失

をあげ、作家の文體への關心を促してゐるが、二十二年に出た高田早苗の『美辭學』今村長善の『文章哲學』などの著書も、かうした方面への關心を更に作家へ持たせたことは知られるであらう。

この頃の文章確立の關心、その摸索は、その專門の雜誌さへ出してゐる。二十三年十月十五日に東京文章專修會から出た、講義錄風な雜誌『文則』はその一例で、二十九日に第二版、十一月十七日に第三版を出してゐるのでも文章へ對する世間の强い關心が知られる。

その發行の主旨を見るに、文章は各國共、國民性によつて、たとへば歐米人は分析力に長じてゐるために、文が精密で、支那は想像力に富んでゐるから、形容が巧みで、日本は名山勝水の間に包まれてゐるから、文が優美閑雅である。それであるから、今ここに優美閑雅の文體で形容し難い狀態を最も巧みに形容し、天地の微妙を最も精微に寫生したら文章の能事が畢るであらう、ここにこの會を設け『文則』を發行するのはかうした目的であつて、今日の日本の「文體の紛雜せるのみならず、體格の不安全なるは、癈病人の如く、用字の不適當なるは圓鑿方柄も啻ならず、今日にして之れを救正せざれば、文學の災厄遂に底止する所なからむ而してそのこれを救正するは、文學者その人の責任にあらずして何ぞや」といつてゐる。

しかし「和漢洋三文の美を折衷して將來の國文を創定するは、固より容易の業にあらず、唯その方法としては、三文固有の性質を發揮し、その中に就き美處長處を取りて之れを融化せしめ、加ふるに歲月の力と同志の贊成とを以てせば、漢文にあらず、歐文にあらず、完全なる一種の文則を發見し、純乎たる國文を一定し、以て彼の造化の秘を發揮し、造化の文章とその優劣を爭ふに至らんも或は期し難きにはあらざるなむ。」

と結んでゐるのであるが、かうした目的から、日本、支那の古典の解釋、漢文和譯、和文漢譯、歐文和譯、文法修辭學、文話批評、文範など揭げられ、落合直文、三島中洲、森鷗外、內田周平などが執筆してゐる。かうした一般の風潮の中に於いて『我樂多文庫』時代の化政期と現在との交錯より、上昇し行つた紅葉は、元祿文學へ一先吸收すべき養分を見出したのだ。箇人的な感情問題でも、言文一致を美妙に先んじられた彼の進路は、新なる道を開かねばならない氣持が働いたと思はれる。

紅葉のこの苦悶を九華は『初蛙』にこんなに描いてゐる。

自分は此色懺悔起稿中に幾度となしに遊びに行つた、當時其苦心の狀況を見て、友達ながら身に沁みて氣の毒に思つて、あれまでせずともと思つた事も度々で、今もまざ〲と其容姿が目に殘つて居る。色懺悔第一回の山里の寂しい草庵の有樣を寫した條下など、僅に半頁ばかりであるがあれまでに書上るに、幾多の參考書を讀み幾多の實地を調べに廻つた事か。目黑國分寺邊の郊外の廢寺なども訪ね、其他武器甲冑の調べなども圖書館遊就館にも行き、書いては書直し〲、其原稿など幾度書改めた事か想像も出來ぬ。或る時自分が朝十時頃訪問した時に、机に向つて居た子は兩方の目の端を眞黑にして居る。どうしたのだと聞くと昨夜から徹夜して書いて居た。目の端の眞黑なのは「怨言の卷」を書直して、餘り悲しくなつたので涙が出たのを掌で擦つたからだ。手に墨の付いて居るのに氣が付かなかつたのだと話した。

それは、いやしくも藝術的良心のある作家なら、常に誰でも經驗する、又せねばならぬ苦心といへば苦心

だが戯作者氣分をやうやくぬけた彼の時代にあつては、倘珍奇な事に見えたのであらう。

凝り性の彼の性質と加へて、新文體の實驗、新しき出發、美妙と競爭心など交錯して彼はいよいよ苦心に苦心を重ねたに違ひない。藝術上で――他の仕事もさうであるが、よき忠告者のあると同時に、よき競爭者のあるといふ事も當人にとつて、その生長の上に利する所が多い。紅葉はその意味で惠まれてゐた。その進出には美妙により、大きな刺激を與へられた事は、彼の戰意を强烈にしたに違ひない。

紅葉のこの期の作品の傾向を概觀して見ると表現――文章のスタイルの上の苦心と、プロットの構成の工夫を、創作上最も重要視してゐる樣に思へる。筋の興味、それに相應しい文章のスタイルで、讀者を魅しようといふ事が、彼の作品への態度に第一の心構であつたやうに思へる。

われわれは、それを具體的に一々の作品に通して見て行かう。

先、かうした意義ある『色懺悔』に次ぐ作品『やまと昭君』（二十二年三月起稿、七月脱稿、文庫自十九號至二十三號所載）は、アラビアン・ナイツの「商人と鸚鵡の話」の飜案といふ。

紅葉が如何に巧みにこれを飜案したかを示す爲、さまで長くないから、そのストオリイを知るため、アラビアン・ナイツの譯文を次に引用して、相互比較しようと思ふ。

アラビアン・ナイツは既に、永峯秀樹の『暴夜物語』（明治八年五月刊）に初つて、初期で最も完成したと云はるる井上勤の『全世界一大奇書』（明治十六年刊）等が出てゐたので、紅葉も之に親しんでゐたと思はれる。紅葉が、これ等の譯本に據つたか、英譯によつたか不明であるか、今は唯ストオリイを知るために、手

近な中央公論社版『千夜一夜』（昭和四年十二月刊）を利用することにする。

商人と鸚鵡の話

ある商人が美しい妻を娶つた。眼鼻だちのととのつた可愛らしい、一點非のうちどころのない女であつたので、男は妻に對して一方ならず嫉妬をやき、いろ〳〵に工夫しては決して家をあけないやうにしてゐた。が、ある時、どうしても旅に出なければならぬことになつたので、鳥市場に行つて金百枚で雌の鸚鵡を一匹買求め、それをお目附役として殘しておいて、留守中の出來事を歸つてから聞き出さうとした。といふのは、この鳥はなか〳〵怜悧で、見たり聞いたりしたことなんでもよく憶えてゐて決して忘れることがないからだ。ところがこの美しい細君はある若いトルコ人と戀に陷つてゐて、それが毎日々々訪ねて來る。細君は細君で晝はいろ〳〵な御馳走を出してもてなし、夜は一緒に寢床にはいるといふ風であつた。

さて商人は長い間の旅行を終つて、やうやくのことで歸つて來たが、歸つて來る早々鸚鵡をつれて來させて留守中の妻の素行について問ひ質した。鸚鵡が答へるには、「あなたの奧樣には男のお友だちがあつて、お留守の間中、毎晩一緒にお過しになりました。」そこで夫は恐ろしく腹を立てて胸のすくまで妻を打擲した。女は、これはきつと女奴隷の誰かが告口をしたのに違ひないと疑つて、皆の者を呼び集め一々誓を立てさせてきびしく詮議した。すると一同は、誓つて秘密を守つたけれども、鸚鵡だけは守らなかつたといひ「現にこの耳であの鸚鵡が告口をしてゐるのを聞きました。」といふのであつた。そこで

女は、その夜女奴隷の一人に命じて、鳥籠の下に小臼をすゑて、ごろ〳〵挽き廻らさせ、又一人には鳥籠の屋根の上から水をかけさせ、次の一人には磨いた鋼鐵の鏡をぴか〳〵光らせながら鳥籠の前を右に左に駈けまはらせた。翌る朝、友だちの宴會から歸つた夫は、早速鸚鵡を呼び寄せて、留守中にどんなことがあつたかと訊ねた。「おゆるし下さい、旦那様、昨夜はどうも一晩中ひどく眞暗で、雷鳴が鳴る、電光はするといふ騷ぎで、何一つ見えもしなければ聞えもしませんでした。」と鸚鵡が答へた。しかし、丁度夏のことだつたので、主人は不思議に思ひ、「おい、だが今は眞夏だぞ、雨が降つたり雷鳴が鳴つたりする時ぢやないぢやないか。」「でも、ほんとうにお話申上げた通り、この眼で見たのでございます。」主人は蔭に仕掛があらうとは知らないで、非常に腹を立て、では妻のことも出鱈目をいつたのかと、いきなり鸚鵡を籠から掴み出し、力任せに地面に叩きつけて、一思ひに殺してしまつた。それから數日過ぎて、女奴隷の一人がすつかりほんとうのことを白狀したが、男はどうしてもそれを信じようとはしなかつた。けれどもとう〳〵妻の寢室から若いトルコ人の情夫が出て來るところを見つけたので、はじめてそれとさとり、矢庭に劍を引き拔いて頸筋を斬りつけ、その場で殺してしまつた。それから不貞の妻も返す刀で成敗した。かうして二人の男女は不倫の罪を負ふて、「永劫の焰」（地獄）へ墮ちて行つた。鸚鵡は實際に見たままを正直に話してくれたのだといふことを知つて、今更殺したことを非常に悔いたが追つかなかつた。

アラビアン・ナイツでは、商人である主人公が、『やまと昭君』では老ひたる家老卯木兵馬となつてゐる。

そしてその筋も卯木兵馬が、留守中の若き妻一葉の動靜を、その言葉を覺えてゐて、主人が歸つて來てからも留守中に愛人と交したと信じられる妻の甘い會話の眞似をしてゐる鸚鵡の言葉で探りあて、遂に嫉妬の餘り女を殺害するのだが、實はその會話は、疑惑の當人である彼女の情人の話した言葉でなくして、主人の實子雪之助の母と語る他愛もない言葉を鸚鵡が覺えてゐたのである。

かうした筋に巧みに代置して、そこには別に飜案臭味もなく、それを『色懺悔』の手法で描いてあるが、共にこの情景の描寫に相應しいものである。

明治二十二年十二月十日出版「小說群芳」第一の『初時雨』は、『文庫』を初め其他へ、この頃發表した短篇其他を集めてゐるので興味があるから、見ておきたい。

初めの「駿馬骨」は婚期を失つて、二十六にもなつた老孃の心境を描いたもので、西鶴風の文脈を持つが、將來を夢みては「枕につけば架空の世界に身はうろつき、妄想の現象に眼は迷ひ、初契月(ホネイムウン)の伊香保の谷の音、歌舞伎座の電氣燈、鹿鳴館の舞踏室、風月堂の新婚菓、夜會の鳳梨、兩親安堵の顏、悋氣のいさかひ、巴里の公園、二頭立の相乘馬車、それから共へと思ひ移り、夜具跳のけ、眞夜中に鏡をとり出し、また寢白粉をしなほし」といふ風に新しい時代への感覺を光らしてゐる。自分より才劣り、容貌醜き友達がよき人に嫁ぎ、今やうやく定つた人は、七年前刻緣の紅箋に、情の言葉を佛蘭西文で書いたかつての愛人より劣つてゐる。然るに今考ふれば、あのよき人を斷り、あの人に劣つた人に嫁ぐのだ——さう云つた筋で短いながら、ままならぬ人生の一齣を描いてゐる。

「江戸水」は『文庫』二十四、五號へ掲げられたものだが、「いづれも樣ごぞんじ、江戸の水は本丁庵三馬家傳の賣藥、外には類と眞似のない代物。それと知りつつ不量見にも、かうもあらうかとその筆意に倣ひしが、似ても似つかぬまつかいなにせ物。誠や式亭の筆勢は一流江戸前、古今獨歩の文中虎、はて及びもねェ事だス。」といふ前書で、郊外散策の間の二人の男の洒落とばす會話を描いたものに過ぎぬ。

「口惜きもの」には、春の一日、散策の折過ぎ行つた俥上の麗人、その人はかつて寺小屋の折同席して學んだ、幼馴染であり、今は人妻である、そこでしばし耽る感傷を描いてゐる。

「文盲手引草」は『文庫』二十六號にも見えるものであるが、歐文より輸入して、當時の文章に用ひられた樣々の符號　………………！？〟〟——＊＊＊＊等の說明、用法を解說したものである。

「變山賤」は『文庫』二十七號所載であつたもの、筋は都より山里に、蕨とりに來た令孃が、ふと山路に迷ひこみ、物音に驚いて走らうとして、足をとられて倒れたのを、樹から下りて來た山男が抱き起すうち誘惑にかられる。「苦痛の齒がみする顏を……苦しからむとも思ひやらず、つく〴〵とながめて、にやりと笑ひ、顏の色、緻密なる肌理、すべて珍らしく、これ一生の思ひ出又とはあるまじと、爪長く、筋くれ立、木脂に染し指にて、臆しながら、すべ〳〵とせし顏をついて見、なほ深入して朱唇をひねり、指頭につく紅を、嬉しさうに見て——背て、四邊を見まはす」といふ風なかなりにつきつめた描寫をして、やがて重い肉體を背に山を下るのであるが、途中でも誘惑にかられるのを、彼女のお伴の爺や下女達が必死にさがしてゐるのに出會つて、やうやく自らの心を責めては、念佛を唱へて自らの邪道に墮ちなかつた事を喜んだといふのであ

つて、山男の誘惑にひかゝる邊、かなり巧みに描かれ、初期の好短篇で、最後に載せられた幸田露伴の評も大變に持上げてゐて、最後に「特に此篇に感服するは、此篇のごときは、日々夜々行はれ居る大普通の事にして、評者のごときも此山賤たるを免れず、否或は評者に山賤の名を負はせたる乎を疑ふほどなり。そもそも亦著者は那邊より此山賤をとり出し來りしか、思ふて此處に到れば、此篇は道德觀念の一助たるべし、噫名文なる哉。自ら山賤たらざるを自白し能ふ勇氣ある人にあらざれば、此篇を嫌ふあたはず、噫奇文なる哉」と推賞してゐる。

次に、その前半を『百花園』に發表したが、後半共にまとめて一冊とした、二十三年一月一日出版の紅葉叢書『南無阿彌陀佛』一篇がある。

初に「著者の書翰」として

拜呈。先日御物語の顚末、少々愚意を加へ、(南無阿彌陀佛)と題し四回に綴り候、事實相違の廉も有之候へども、小說なればと御見ゆるし被下度候。起稿中われながら幾度か暗涙に咽び申候。他人すらかくの通りに候へば、貴兄が當時の御胸中、嘸かしと御推察申上候。山之助君の身の上いかゞ御處置被成候や、お梅樣臨終まで氣に懸けられ、くれぐれの御依囑を御引請なされ候御一言、行末かはらず御盡力被成候はむこと、千僧の供養にもまさり、成佛被成候はむと存候。別封一冊入御覽候。餘は拜顏の上萬縷

尾　崎　紅　葉

上　野　兼　次　郎　樣

といふ書簡の序があり、以てモデルあつて制作された如き形式になつてゐる。

お梅といふ少女、繼母のため苦しめられ、親族さへ繼母の側につき彼女には唯一人、乳母のよしが味方である。そこは大阪の話であつて、やがて乳母は永年親んだお梅と別れ東京へ歸らねばならない。東西所を異にして、折々病床にあるお梅に便りをよこす。その代筆がお梅の甥の兼次郎——序の書簡の宛てられた——で、いつか手紙の後書に兼次郎が、乳母が色々世話になつて、と書き、彼の親切な心情を示したことが、病床のお梅に響いて、見ぬ人同志に戀愛が起る。

お梅には由之助といふ弟がゐる。お梅の病が篤くなつて、丁度その前寫眞欲しといつてやつた返事を、危篤の間に待つてゐる。寫眞と藥がとどいて「一口含ませ、さしだす手に寫眞を握らすれば、ふつと目をあき、ほほえみて、口を動かし、寫眞を抱しめ、その儘寂滅、花は散りけり。」とある。

墓地を歩いてゐて、ふと新しい墓に、泣くづれてゐる女がある。仔細あり氣で、その理由を尋ねると、それがその乳母のよしでこの物語を作者に語つてくれたと書出しにある。

乳母とその仕へる女との忠義な關係、それは封建時代からよく取扱はれた題材であるが、前半のこの古い題材を、後半遠い距離をおいて、見ぬ人への愛情などに、幾らかの新味を見せてゐる。

此等の初期の作品に於てかつて過去に題材を求むる浪漫的な物語に相應しい筆致も、現實社會に下つて、その題材をとる時、華麗さを消した、落著いた方向にその表現も轉向する。以前身邊の學生生活等より拔けきらなかつたが、年と共に題材上の現實社會も擴大されてくる。かくて二十三年一月發表『拈華微笑』は、

皮肉な人生の一齣を描いたまとまつた短篇である。

一人の平凡な下級官吏を主人公とし、毎朝通勤の路上に會ふ俥上の令嬢への顏見知りから、次第に戀愛におちゆく心理の變遷を描き、或日彼が母と妹とを連立つて墓參に行くと、偶然その墓地に彼女も、老母と夫らしい男と從女と連立つて來てゐた。すでに結婚の身とあきらめ、翌朝から路上で知らぬ顏に行きすぎた。後日役所の噂に課長の娘が、見染めた男がゐたが、先日墓地で妻と同伴だつたのに失望し、丸山といふ醫師へ緣づいたといふ事であつた。何心なくきき流してゐたが或日、退廳の折、かつての令孃の俥の紋と同じ紋の約臺が、七つも續いてゆくのに會ひ、氣がかりで尾行すると一軒の家に入つた、標札を見ると羅馬字で、MARUYAMA と記してあつた。といふのであるが、まとまつたもので、筋の興味をねらつた紅葉の態度が分る。かく筋を記せば作爲の跡があまりに著しく見えるけれど、彼はそれを氣づかせぬ樣に努力して双方の交渉を巧く書いてゐる。

この他現實の世相に題材をとつた短篇に、二十三年二月發表の『猿枕』があり、それは「すさまじきもの」「あさましきもの」二篇よりなるが、共に色慾に裏づけられて前者は質屋通ひする女學生、後者は美貌の妹を囮として私塾を開いてゐる靑年の事を書いてゐるが、同じ學生生活といつても、前期の作品の表面的に學生生活を書いたものより裏面へまで、深められた觀察に氣附く。以前のものは表面的なスケッチにとどまるのだ。一方それと共に「すさまじきもの」の書出しの

勇者も大晦日は恐しといへり。三百六十四日が間、天にも地にも繕ひし襤褸、今日只一日に出て、此

夜の十二時は尋常の薄暮ほどにも思はれず、商人の店には洋燈の數を增し、高張に景氣を添へて、丁稚も居眠らず、買手もまた夜深を厭はずして、黑豆、昭五萬米、調へに今頃行く女房の家の有樣。さこそと思はれて氣の毒なり。

といふのは、西鶴の『世間胸算用』の歲晚風景の描寫などを思はせて、彼が表現上の摸索が必然內容へまで影響を受けて來た如く思はれる。

その他、維新の時流に押流された武士が、腕に覺えあるままに警官となつたが、夏蚊帳もない程、彼は貧苦に困じてゐた。しかし西南の役に出かけるに際し、時は春であつたが念願の蚊帳を求めて、妻に與へ出兵するが、遂それがかたみとなつたといふ貧苦の生活を描いた二十三年六月發表の『わかれ蚊帳』や、栃木の山里の溫泉宿の美しい娘に一夜の契を結んだ旅人に對して、その娘は男に觸れると業病の出る身體であつたので、愛しながら許すにしのびずその理由の書置を殘して、どこかへ姿を隱したといふ二十三年十二月發表の『巴波川』など、小さいながら定石的な構成を持つた短篇小說である。

然し長篇風ものになると、筋の興味をもつて、誘つてゆくうちに、いつか歷然たる作爲の跡を露出するものが多い。明治の年號より一つづつ年上の紅葉の若さによつては、構成力の缺乏、それに又化政期以後の單に筋の展開にのみ重きをおき、性格描寫、心理の解剖、或は人生へ對する態度、批判精神といつたものに別に心をとめなかつた讀者を相手に、作者もかかるものに明確な自覺もなく、しかも發表するものが新聞紙で、それは翌日の紙面を期待させる販賣政策に依つて、作者も自然翌日へ通じての讀者の興味をよび起すことを

意識させるものであつた事から、かうした小說のすきが自然あらはれでるものでもあつたらう。

かかる長篇の例は、華族の娘ではあるが、淫蕩な又奔放な性格の娘ゆかりが、その家のしとやかな小間使美代の嫁いだ、もともとその家に出入してゐた男と、自分から進んで積極的に關係して子までなすのであるが、美代の計ひで溫泉地で子供を產み、その子を美代は犧牲的に自らの子としてひきとる筋を書いた、二十三年五月發表の『夏瘦』に於いても示されてゐるが、この作は筋に大した破綻を見せないけれど、そこに人情本的なエロチツクな展開を主眼としてゐる。『二人女』の一篇「おぼろ舟」は二十三年三月發表のものであるが、その筋は母と自己と二人の窮境を救ふため、年若い女が、妾となつたが、間もなく男の消息が不明となつた。その情愛が、いつか戀愛的に變つてゐた爲に、彼女は思ひ惱んで死んでしまふ徑路を描き、他の一篇「むき玉子」は『きのふけふ』によればフランスの自然主義の主唱者エミール・ゾラの『彼の傑作』の飜案といふが自己の藝術に苦心する畫家と、彼のために肉體を賣ると同樣な觀念で貧しい家のために、衣を脫いで、モデルの役に行つた少女が、次第に双方愛情を感じて、遂に最後に至つて結婚する徑路を描いたものであるが、この一篇で興味のあるのは、畫家の狂氣的な苦心の樣が、生動的に描寫されて、一面文筆の机に、同じ樣な苦心を以てよつてゐる紅葉の姿を髣髴させることと、モデル商賣に對する古い時代觀念の反映を示すことであらう。（註1）

裸體になるをはづかしがり、容易に衣を脫しない、畫家のうちへ行つても、實家へ逃げ歸つたりする少女が、いよいよ衣を脫ぐ邊りの描寫は又巧みである。

女一人部屋において畫家は裸體になつた知らせのベルの鳴るのを待つて外に立つ。長湯の女三人ほども待つたと覺しき頃鈴の音が微に響いた。畫家はさてこそと胸は躍るが、わざと落着き貌に、悠々と戸を開くと、白い裸像が立つてゐる。紅葉はそれを「時ならぬ雪一團―埋れぬ紅梅の蕾と見しは、わずかに色づける乳房なり。」と描いてゐる。

『二人女』の主人公は共に、貧しい家に生れた、しとやかに美しい女で、初め不本意ながら、家への犧牲的な精神から、一人は妾に、一人は妾同樣な思ひをしてモデル女になるが、しまひには對手の男に、純情を示す徑路を描いたもので、肉體的な世界からやがてに浮き上る清淨な香がしてゐる。

また二十三年七月發表の『戀の蛻』には幼馴染の少年少女がゐるが、少年は遠國に奉公せねばならず、たまたま國許へ呼び歸されてみれば父の死のためで、遂出家をさせられる。僧となつても、愛戀の情絶ちがたく、二人が會つてゐるのを發見されては、師の僧に叱られ、少女と別れて遠國の山寺へ修業に行かねばならなくなつたといふ可憐な悲劇を描いてゐる。

春陽堂の「新作十二番」で二十三年九月發表した『此ぬし』――それは貧しい自炊生活の大學生を見染めた隣家の娘が、大學生の弟を傳手とし、その兄大學生に意を通じるが男は一向肯ぜぬ。大學生がたまたま弟と戲れに吹矢をやつて、その飛んだ矢のため隣の女を怪我させて、その詫に娘の意をくんでは、結婚するやうになつたといふ筋である。この他新婚の旅先において、昔の戀人であつた女に思ひがけなく會ひ、その誘ふままにひかれた男が、ひそかに女と會つてゐる所を、その昔の戀人の主人である、獨逸人に發見され、ピス

トルで射殺されようとして男は危く逃げかへり、何事も知らず心配してゐた新妻に、詫をいふといふ突飛な『花ぐもり』も、共にあまりにストオリイの興味をねらつた感がする。（註2）

二十五年五月『紙きぬた』の中で、發表された、『紅白毒饅頭』は物質慾と性慾との惡臭にみちた邪宗門玉蓮敎會の内部を描き、その暴露的な作品である。

敎會の主旨は幽玄高妙の理窟を離れて、俗談平話の間に、善を爲よ、惡を爲なと誨ふるにあつて、利益といへば、家内繁昌、息災延命、其外一切の諸願成就とあつて、神體は審かでなく、古びた軸に煤けた文字が、光明玉蓮と書かれ、古金襴の袋に斂めて、說敎日にはこれを持出し禮拜せしむるものだといふ。

かうした、時代の信敎の自由と共に輩出したであらう邪敎の一つをとり卷いて、その社殿を利用して、そこをあくどい男女交歡の場としてゐる樣を、具體的に描いてゐるが、かく社會の一面への紅葉の視野のやうやくひろがりゆく樣を見せてゐる點注意すべき作品と思ふ。

つづいて二十五年十二月發表の『三人妻』はかなりの長篇である。

維新以後、機を見ては千金を掴み、擡頭し來つて今は日本でもその名を知らない人はないといふ資本家、葛城餘五郎を、『三人妻』の主人公とするのであるが、榮耀の果に、情痴の世界へ入つて、先、當時柳橋で評判の高かつた藝者才藏に會つて執心するが彼女はなかなか應じない。それには他に男があるので、これを知つた葛城は、他の藝者をトリツクにつかつて、その仲をさかせて、自分のものとしてしまひ、女を向嶋に住はせる。

葛城と同様に、維新のどさくさまぎれに、富を作り、惡辣な方法で紳商と呼ばれる身分となつた、雪村素六は、やはり隅田川ほとりの別荘に、十二人もの美女をおき來客をもてなす。そこでお角といふ女を知り、この女に執心した葛城はこの女も亦自分のものとして紅梅といふ名で愛する。お才の職業的に洗煉されたところ、紅梅の素人的の初々しさ、二つながら好もしく葛城は心を滿たしてゐた。

かうしてゐるうちに彼は郷里へ亡母の十三年忌故に歸つた折、若い頃したつてゐた女の娘お艶を見出し、無理に東京へつれて歸つて、その女も妾としてしまつた。

かくて春になつて花見の會に妻にも三人の顏を會せてみた。葛城の妻も三人の性質を見拔いて「紅梅は溫乎として內慧く、閨中に手ありて情も相應に深かるべし。お才は俠にして張強く、男に我儘なる所弄ぶに面白かるべし。お艶は無垢なる生娘、唯優しくして實あるを取柄とす。銘々の役割といへば、お才は酒の酌、紅梅は床の口說、お艶は茶漬の給仕」と批評してゐる。かくしてゐても、紅梅がもつとも愛され、お才は本心から、葛城を愛してゐるのでないが、それを聞くとさすがに心滿たざるものがある。たまたま歌舞伎座で以前の愛人に出會ひ、ふたたび交りを續けてゐるのを、周圍から警戒されてゐる。

お艶は妬つた。愛されてゐる紅梅は、その事を羨むがお才にはさうした根性もない。

お艶は男子を產んだ。お才は他の家におしこめられた。紅梅はお才のかくなつたのを、表では驚き、裏では喜んでゐる。そして奧方にとり入つて、今はお艶のみを邪魔者としてゐる。そして、お艶と奧方との間をさかうと試みてゐる。

葛城が病んでもお艶には會はせない。死後やうやく葛城の妻の怒がとけて、紅梅は暇をつかはされお才は前の男と一緒になり、お艶は本家へひきとられた——といふストオリイであるが、二十六歳の紅葉としては、三人の女の性格もある程度まで描きわけ、富豪の家庭生活の內部も、時代相を見せて描いてゐる。

紅葉にとつて、初めての力作で、金錢の欲望と、情痴の欲望と交錯し、不本意ながら男に從つた女のその相手へ、何時か服從して行く徑路、そこから滿たない心を他へ寄せる心——それがめいめいの女のかつての生活から、必然的に生れるやうに描かれてゐる。

續いての『男ごころ』は鼬屋瀨兵衞一家の三代に亙る物語で、後で述るが紅葉の「金錢」「戀愛」「結婚」「敎育」といつたものへの見識をみせ、三代に亙る各時代時代の進步性をも作中の人物にみせ、構成の複雜をかなり手際よく處理してゐるのに、彼の構成力の進展が窺はれる。

卽ち、强慾な高利貸の鼬屋瀨兵衞に、信助とお類といふ子供がある。信助は、凡庸ではあるが、お類は親に似ず誠に美しい。お類も早、嫁入の頃で、日頃强慾から、世間より輕蔑されてゐる父親も、今度こそ、いい婿を迎へて、世間をあつといはせてやらうと考へてゐるところへ、彼の片腕となつてゐる手代の野川によつて、公卿華族東山公恒を知つた。東山は、相場などに手を出し、破產同樣の身の上で、しかも妻を死別したところであつた。

門閥に喜び、費用一切こちらもちで瀨兵衞は東山に娘を嫁にやつた。瀨兵衞はやがて、お京といふ孫を持つた喜びもいくばくもなく息子の信助を失ひ、さきには妻も失つた身で、氣力失せてゐるのに名醫を進むる

が「無き命は藥の及ぶことにあらず。今更高金出して醫者を呼ぶは、盜人に追錢も同じ事。構へて、無駄に錢をつかひて、病人の氣を傷むるな。我はかくまで大事に思ふ金錢を、いかに我物になりたればとて、滅多には費すまじきぞ、兎角は二代目にて潰る身上」と注意し、葬禮も質素に行へと遺言して死んだ。

第一代はかくて過ぎた。公恒は遺産を、お類の持參金の五千圓と共に銀行に預け、昔とちがつた儉約第一に暮してゐるうち、かりそめの病でお類も死んだ。公恒は片瀨の幽靈が出るといふため安い賣家を求めて、お京と乳母を相手に暮すのであるが、月日は流れお京も十五となると、儉約第一の公恒はもはや要らぬ費と乳母にも暇をやり、陰氣な家に、二人寂しい生活を送つてゐた。

お京の十七の日、公恒は突然死んで行つた。遺書に資產六萬圓の明細書と、東京に春山多賀といふ自分の從妹がゐて、それに一子ある故これに賴れと書いてあつた。第二代はかくて過ぎる。多賀とその息子千之助もやつて來た。お京は千之助に好意を持つが、千之助は鄙びたお京を何とも思はない。しかしお京を都へ伴つた多賀は色々敎育してやるので彼女も日々に都會風に染つて行つた。

公恒の三年忌も過ぎ母親は千之助に、お京との結婚問題を話すが、承知しない。そしては遺產に目のくれてゐる母を失望させる。

千之助は、彼の勤めてゐる銀行の、副頭取の娘妙子と相愛してゐるからだ。しかしそれも、千之助の母と副頭取夫婦に反對され、結局母の希望通りになるやうになつた。

かくて、いよいよ結婚の日となつた所、突然お京は恐しく色蒼ざめ果て、不快らしくしてゐた。それでも

箱根へ新婚旅行の旅に出發したが、汽車中で行方不明になつた。そこに居るに違ひないと、あてにした乳母の家にもゐなかつた。

かうした三代に亙るストオリイであるが、最後のお京の心境の變化について、あまりに突然で、何らの理由もあげてなく、それまでの徑路に、伏線的なものもなく、千之助と妙子との問題を知つたためとも考へられず、實に突發的で、三代に亙る重層的な構成をこはしてゐる樣に思はれる。それまで積み上げた、三代に亙る構成をもてあました感があるが、大陸文學風の大きい構想は認めねばならぬ。

これ等の作品で見られる、物質欲が、或は性欲と交錯し、或は並行して作品の中を流れて、その中に當時の社會に、多かつたであらう物質欲一偏の人々を示した所、紅葉の作品の一つの特徴をなしてゐるやうに思はれる。

しかし『三人妻』の葛城餘五郎、雪村素六、『男ごころ』の䟽屋瀨兵衞など、一つの作中人物のタイプで、同型の中に入つてしまふ人物である。

ただ『男ごころ』一篇中には、三代にわたるうち、時代の流れと共に、三代目の千之助のやうに、物質欲のみにあこがれぬ、そしていくらか精神的な戀愛を、そこからはなれて求めようとする者などあらはれ、時代の流れに伴ふ新しい展開が示されてゐる。そして年齢による金錢への執著なども、いくらか概念的ではあるが、バルザックの小說に表はれる人物を思はせるものがあつて、紅葉の若さでよく書けたと考へられる。

上に列擧した諸作品は、元祿と化政期の作品の影響と、明治に生きてその空氣を吸ふ彼との交錯とも言ふ

べく、落ちついた彼一箇の藝術の境致、それより生れ出る作品といはれえぬ混沌たるものがある。

『三人妻』の主人公が男であり、明治の生んだ肉欲一偏の單純な人間であるに對し、それ以上精神的な、江戸の所謂「粹」と「義理」をもつて貫いた作品がこの期にある。卽ちそれは二十五年の『伽羅物語』であるが、それには分限者廣惣が、遊女初梅を無理に請出したが、女には淺といふ馴染の客があつた、それで後々もその男をこがれては病んだ。廣惣もたうとう女の願望にほだされて、女と淺と會はせる事にする。所が當の淺は竹紫浦に鹽木の小屋がけで住む現在の有様だといふ。彼は女が「黄な物の思ふままある內は情の水は上ずまし、味淡くておもしろからねど、親持なれば勘當、家持ならねば分散の後からが、眞情の見所見せ所」といふ時、身を隱したのである。女が金を手紙に添へて贈つても「我もむかしは大盡のはしくれ腐りてもさるものは貰ひがたしなほ又契りし遊女にもあれ川竹の勤間は其日その夜の客こそ夫なれ」と受取らぬ。廣惣もわけしりの男、女を淺の所へつかはす事にした。

さうして、二年も立たぬ間に廣惣も落ぶれの身となつた。生きるためには、五月の菖蒲賣をする事もあつた。その或る日落ちかかる軒に、蚊柱立ててゐる惣のもとに一人の比丘尼が訪ねて來た。それはかつての初梅であり、聞けば淺もたうとう亡き身となつたといふ。尼となつたかの女が庵室に居ても、うるさく言ひよる男がゐる。しかるに風の便りに今惣の落ぶれた身の上の事をきき、昔日の義理に、言ひよる男にその身を賣らう事を約して、金をもらひ來つたのであつた。しかし惣はこばんで「明日は亡母の命日にもあれば、また尋ねて來てそちの讀經を聞せよ」と言ふと、尼となつた初梅は微笑して「落魄ても粹は粹め、情深い事言

ふてこの比丘尼を地獄へ墮さんとの惡洒落か」と隱した吸筒をひねつて、別離の杯を差した。それはかつて惣の贈物で、金蒔繪の小杯であつた――といふ氣持のいい江戸ツ子好みの作品である。作品の調和、その渾然としたまとまりは、彼においては、短篇か、かかる浪漫的な過去の世界に自らをおいて、過去の世界を描いたものに多く見出されるのだ。

同じ傾向を汲むものでその前に、二十四年發表の『伽羅枕』一篇がある。それは佐太夫といふ花魁を主人公として、西鶴の『一代女』に髣髴とした情生活の繪卷物を展開させたものであつて、それは、西鶴摸倣の香の高い一篇であるけれど、さすがに近代的な個人性を多分に含ませ、時代的に前述の『伽羅物語』より以前の作品であるが、作中の時代がより若い爲でなく、西鶴を中心として考ふる時は、その理解の淺さの故に、かへつて彼紅葉の住む時代の空氣が混じたものであらう。『伽羅枕』の主人公は、幼名をお仙といひ父は旗本で、お仙はその京在勤の折、祇園の女との間に生れた子であつたが、養家先の衰運を救ふ爲、十二の時島原へ賣られる。純潔であつた彼女も、環境になじんでは次第に「淺ましくも太夫を帝王ほどに思ひ込みて、漆のごとき泥水で眞逆倒落ちて歡び」十四の霜月七日「この日が一代の大邪淫、大妄語、大殺生、大貪婪、世間にあらゆる惡業仕盡しの發端」で、かねての大願が成就して、里花大夫と名乘り、大阪一の分限者鳥水の隱居の揚詰にされたのであつた。十六で遂その老人に身請けされたが、老人が死んだので家へ歸され、又間もなく江戸の侍の妾となる。しかしその侍が、紫水晶の製造に失敗した揚句、死んだので遂に彼女が、永年會ひたかつた實父を訪ふと、彼も亦死んで居る。彼女の腹代りの姉がさる大名に嫁いでゐると聞き、色々手

段を作つて、義姉と路上で會ふ機會を與へられたが、それも人事の樣に、單にしらじらしくも籠の中より日禮されたのみであつた。姉の權勢と己が現在を比較して、「我も石見守の娘ならずや、姉樣も石見守の娘ならずや」の氣が、恨となり、反抗的な氣持となり「これまでの萬事末凶ならざるはなく、末々の辻占惡ければ、正路の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間に生れながら、良かれ惡かれ其名を唱はれずして土に返るは蠅の夏に生れて秋果つる如し。芳名を傳へずばあられぬ名にてもあれ世に知られ、共にて姉にも栖つかむも面白かるべし」との彼女の人生觀から、「不治の不具となれるからは、大不具となりて世間を氣味惡からすべきぞ」と惡魔的な傾向を帶び、吉原に身を沈めて、佐太夫と名乘つた譯である。

それからの彼女の步く道は、自己に則した只一筋であつた。彼女は强い自我に生きた。「俠」をもつて貫いた。疣大盡といふ全身疣の男もその氣持故に抱いた。それと知りつつ盜賊をも抱いた。然し「力づくならば鉛の熱湯、切身に鹽、何にもあれ此意地を挫ぐに足らねど、義理と情には脆くして人一倍の泣蟲」といふ彼女だつた。

かくて波瀾の多い半生を二十八まで送り、最後にべらべらと顏の崩れた癩病人の召使となり、かつて自己のなした惡業の消滅の爲、その病人へ手篤い看病をして、黑髮を切り、今は六十二歲、二錢三錢を仇費せず回向する身といふのである。

『一代女』と共に、一人の女性の沈みゆく運命を描いたものであり、素性も西鶴のは「母は筋こそなけれ、父は後花園院の御時、殿上人の交り近き人の末々」と似た血をひく者である。然しその沈みゆく原因が『一

代女』では境遇と共に、本人の盲目的な「性」の本能が強いのに對し『伽羅枕』の主人公は周圍への反逆心からの一つの人生觀ともいつたもの、そして、自我意識の鮮明さに、近代的な影を見るが、結末は結局徹底し得ず、懺悔の生活に安住してゐるのに、彼女の弱さ――そして作者の弱さを結局意味するとも思へるが――それを示してゐる。

この外二十四年八月發表の『二人女房』では、役人に嫁いだ美貌の姉と、職工に嫁いだ美しからぬ妹とを、對照させかへつてその生活が前者が不幸で、後者が幸であつた事を、テーマとしてゐるが、『二人女房』で興味のあるのは、その時代の、作のテーマが、大抵富豪に金錢によつて、ひきつけられて行く女性の運命を、情痴の世界に浮ばせながら書いたものが多かつたが、これでは富豪といふほどではないが、社會的地位が、上層的に見られたものへ對して、下層的なものとの對照を示して、精神的な幸福を後者においた點であると共に、表現形式の實驗においてである。

この前後の作品は、大抵西鶴の影響を受けたスタイルが多いのであつて、たとへば、その代表的のものとして『伽羅枕』の冒頭を引けば次の如くである。

またしても女物語。京は女藹の名所、とりわけ祇園島原は其粹を萃め、二十四番の風吹絕えずして、千紫萬紅の亂唉には、東夷もおのづから共色に浮かれの一節、骨太の手に扇拍子を習ひ、魂忽然(いつか)とろとろと鴨川の水には双金の鈍ること奇妙なり、延鏡借りて見よ、小鬢に愧かしき年齡してしげしげなる揚屋がよひ、これも交際と、名はいかにとも附けらるるものなり、と同役の陰言も聞流して浮世はとかく

醉醒の水野石見守と云は、江戸麴町半藏門外に人の知る旗本なりけるが、此地に在勤中祇園町東井筒抱への藝子小鶴を我物にして、淺からぬ馴染に綺情は更に盡きねど、役目の年果て近々の別離といふに、杯の數はおのづと減りて、歌へど彈ど樂まざれば、小鶴いぶかしみて仔細を問ど語ず。

いま西鶴の文章の特徴の一つは、てにをは拔き、卽ち助詞の省略で、そこから語と語との間の冗長な感じが失せ、生彩と彈力の氣が溢るること、例へば次の如きものがある。

難波橋より西見渡しの百種、數千軒の問丸甍を並べ、白土雪の曙を奪ふ。杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付けて送れば大道轟き地雷の如し。（日本永代藏）

お夏清十郎に思ひつき、それより明暮心をつくし魂身の中に離れ。　五人女）

この「西見渡しの百種」とか、「白土雪の曙を奪ふ」とか、「お夏清十郎に思ひつき」といつた助詞拔きの表現が、「二十四番の風吹絶えずして」や、「魂忽然ととろとろと」といつた表現をよんだ。

また西鶴には、ぽつ切れの斷敍法や、名詞止の句法があつて、著しく短句法が特徴をなしてゐる。長短の章句の交錯、照應リズムあり、光と影を作つて、妙章をなしてゐるのである。

我れ化して死し、また化して生じ、母は今の都の若後家、西洞院の一つ前と、浮世の立つ名隱れ無し。父は一代男とて、子の初聲を聞かず、取揚婆の手より直ぐに、襁褓に卷きながら六角堂の門前に捨てられ、慶安四年の憂き秋、夜の霜、朝の風に傷み、限りの知る命を、不思議に喰ひ殘して有りける。（好色二代男）

萬賣帳、難波の浦は、日本第一の大湊にして諸國の商人爰に集まりぬ。上問屋、下問屋數を知らず、客

馳走の爲め蓮葉女と云ふ者を拵へ置きぬ。（好色一代女）

これらの短章のスタイルを前に掲げた『伽羅枕』に比するとき、その文體の近似を容易に見出すであらう。また紅葉によく見る、作中人物の外貌、顔や着衣についての綿密な說明的描寫、をりをり文章中に挿入してある處生訓的短章――警句といふに、少々間のびのしてゐるものであるが――それ等は、西鶴から得た餘り功果の乏しい影響であると思ふ。

さて『二人女房』においては、部分的には尙雅俗折衷文の名殘りをとどめてゐるが、所々に言文一致への接近を保つて、變化のあるものがある。例へば冒頭の（一）の

芝露月町の藤の湯とある長暖簾を推分けて。（淺くとも淸き流の杜若（かきつばた））と。出端のありさうに顯れたる女子二人。いづれも長湯に磨ける顔色（かほ）は瑩々（てかてか）と赤く。對の高島口に髮飾（かざり）も同じ好み。年長けたる方は。容貌優れて麗しく。十九ばかりなり。他（ひとり）は二歳も年少（した）と見えたるが。女子（をんな）には厚肉過ぎて。色さへ白からず。額の左に寄りて。薄けれども三日月狀の創痕あり。

との表現を（六）の

子を見ること親に如かずといへど、子を見損ずるも親に如かず、女親はお銀の容色（きりやう）をば。たしかに實價の五倍も買冠つてゐて。お銀ほど美しいものは。世間に二人とは無いもののやうに想つてゐる。これまでに數度の緣談も。母親が主唱（きききぼう）に立つて毛嫌ひをして。彼（あ）でもない此（かう）でもないと皆壞した。といふのも。畢竟お銀を寶にし過ぎて。慾を乾かしたからではあるが。また一概に慾ばかりとも謂はれぬ。

といふスタイルに移動して行き、又會話を、

「あの帶でよければ貸事にしようか。」

「貸してくれれば私の方は可いけれど。お前が窮るぢやないか。」

「私や構やしない。」

「構はない！そんなら後生だから然しておくれな。其代お禮をするよ。そら彼の海鼠絞の半掛を。」

「屹度？」

「屹度さ！」

といふ風に、日常語を用ひて、別行にしてゐるのも、『伽羅枕』など、すべて從來、文章の中に、次のやうに混入させてゐたものと異つてゐる。

小鶴は別て親しく、姉と賴みし右龍を見るより幼子を突付け、これ見て下さんせ、水野樣に生寫。どれどれと抱取りて、なるほど爭はれぬもの、口頭から頤のあたりはお前を其儘。今も、床間の人形抱へて、世話燒けぬかはりに、樂みなき此身こそ恨めしけれといへば、わが胸の中はそれならで、勤の中の赤子は荷物と今も今とて共を案じて氣の結ぼるる折から。……何にしても苦勞の絕えぬが浮世。姉さん重樣から音信がありましたか。されば、今月で八月餘りといふに、わづか二通の手紙、いろいろ家にも用事溜りたれば我ながらうるさきほど狀を出せど、いつもいつも片音信。

かかる點から新しい轉向の意義を『二人女房』に見出す次第である。

紅葉が西鶴の文章を學んだ機緣は、淡島寒月によつて之を示されたに發する。寒月の人となりに就ては、幸田露伴の「淡島寒月氏」(早稻田文學明治文學號第五號大正十五年四月一日發行)に大體を傳へてゐるが、それによれば若き頃は文明開化主義者で、やがて日本趣味へ歸つた。美術、文學、隨筆、雜書に廣く通じ、文學は德川期、美術は奈良朝まで通曉した。繪も巧み、檀林風の句作もし、自己流の禪をやり、原人土器採集にも興味を持ち、一生を通じて「氏は餘り有るの聰明を有しながら、それを濫用せず、おとなしく身を保つて、そして人の事にも立入らぬ代りに、人にも厄介を掛けず、人をも煩はさず、來れば拒まず、去れば追はずといふ調子で、至極穩かに、名利を求めず、ただ趣味に生きて、樂しく長命した人であつた。」そして大正十五年二月廿三日七十歲で永逝したといふ。

露伴と共に紅葉が西鶴を學んだのは、この風流趣味の人の書棚より、めいめいの立場で攝取したのだ。この事情を內田魯庵の「綠蔭茗話」に引用しよう。

西鶴が正しく明治の文學史に影響を與へたるは爭ふべからず。紅露以下の文學は畢竟元祿復興の紀元を開きしなり。而して其復興の起源を尋ぬるに、本と愛鶴軒書棚の故紙堆裏より來る。愛鶴軒は淡島氏、名は寶受郎、今は向島弘福寺の境內に住す。初め淺草森川町に在りし頃中西梅花、尾崎紅葉、幸田露伴諸子屢々其廬を叩きて文詩を談ぜしが、之より先き明治八九年頃淡島氏は小川町の古本店某方にて古書一とからげを購ひし中に偶然西鶴の置手紙を發見したり。豫て京傳、種彥、馬琴等の隨筆にて其の名を記憶せしかば日夕繰返し繰返し飜讀して終に自づと其妙趣を理解し其の後胸算用一代男と讀むに從ひて

愈々獨得の趣味あるを喜び花晨月夕暫らくも離さず之と親みしが此時西鶴あるを知るものは極めて少かりき。

勿論饗庭篁村氏等は既に渉獵しつつありしが唯元祿の珍書として愛翫せしに過ぎず。之を文學上の價値あるものと認めしは卽ち愛鶴軒なり。愛鶴軒は實に明治に於ける元祿復興の祖なり。（註3）

この淡島寒月より告げられた西鶴の文體を、言文一致の風韻なく雅趣乏しく、ともすれば卑近になり勝ちな時代に、樗牛の「明治の小說」中に言ふ如く「婉曲暢達にして而も遒勁に、文字淺近にして而も餘韻あるは、尤も社會的、はた平民的の事物を直寫するに適する」ものとして、明かに自覺してか、或は文體摸索の上さうした自覺もなくしてか、取り上げたのであつた。

露伴に於ては、その箇性から、主觀の强い燃燒によつて、圭角ある文章の上に消化されて行つたが、紅葉に於ては、文體より自然內容にまで入つて、文體はおろか作品傾向、その題材のとり方まで、强く西鶴の影響を受け、彼のこの期の主なる作品傾向を形成するに至つたのである。

以上、この期紅葉についての傾向を具體的に、その主要なる作品について素描したものであるが、これをまとめて、大體の展開、傾向の上から見ると、その描く世界は、都會の一面であり、そこにもつれ合ふ情痴の問題であり、すでに述るやうに構想と表現に最も力を入れたが、それにまた極めて微溫的な社會批評――常識的な戀愛觀、人生論的ロ吻をまぢへて、有力なジアナリズムを通し、小市民階級の愛顧するところとなつたものと考へられる。

しかし又紅葉を愛する者、ひとりさうした讀者ばかりでなかつた。文學への憧憬を持つ若い人達にも、彼の文名と才能をしたつて、近づいてくる者があつた。泉鏡花はその優れた一人であつた。彼の「初めて紅葉先生に見えし時」の一文は「此の記は其の當時故鄕なる友のもとに送りしものの一節なり。今ことさらに修正せず、見ん人、言のをさなきをわらふなかれ。」と後書してあつて、明治四十三年二月に發表されたものであるが、當時の氣持が生々しく見られ、一面紅葉の姿がうかがはれるものがある。

東京牛込橫寺町――尾崎――冠木門なる御名札をあふぎて、先づお住居は知られたり。實に此門に參らん事、積年の望みなりければ、其儘心なく容易くは入りかねて、我にもあらず小戾りして、用も無き小路に折れ、とある杉垣の袖に彳みしが、何時まで㤓してあらんとて、衣服の襟を繕ひつゝ、兎角して、門の內を二三十步、又格子戶の潜りあり、靜に開けて立向ひ、慮外ながら、御免下さいまし、と申ししに、返事は無しに、奧の方より跫音して、年老いたる女性出で給ふ。先生は、と伺へば居りますが、と申さるゝ。少々お目にかかりたう存じます。然らば待たれよ、とて引つ返されつ。やがてこれへ通らるべし、と玄關の次の室なる八疊へ通されぬ。予は其の端に畏りて、一六氏筆、雅俗折中とある額面を仰ぎける時、以前のお年寄、煙草盆を出されつゝ、一服して待たるべし、まだ寢て居ます、と微笑まれぬ。此時此日、空晴れて、小春日の朝うららかに、庭樹の梢に雲もなく風爽に天澄みぬ。明治二十四年十月十九日午前八時三十分。

南向の緣側に、楊子使ひたまふ音せしが、しばらくしこ、隣の茶の室の襖を半ば、半身を差し出されし

美しき御方あり、後に知りぬ、令閨よ。しとやかに御會釋ありしが、立ちて、お縁の障子を開けて、此方へ、と導き給ふ。謹みて從へば、梯子段を指して二階へ、とお敎あり。其のまま茶の間へ引返さる。金澤の公園なる榮螺山の如き螺旋の段を、おづ／＼と上りしが、貴き机を前にして、意氣な火鉢を膝許に、紅葉先生、お年は二十三四と拜しぬ。五分刈にして絣の羽織のゆきり〻しくも見え給へり。予は威に打たれ頭を低れて、此御方に、あの媚しき色懺悔あるに驚きぬ。然りながら威厳たゞ威厳の可恐しからず。申しやうなく敬愛すべき御口許ぞ懷しき。さて怪む、予は年十九歳の今日の今、初めて溫容に接せるなり。勿論日に日に、都大路も境遇により蜀道の嶮を走る時も、モシヤそれかと仇人をさへあこがれつること幾度かありたれど、見えしは初めてなるに、何となく御面顏、心のうちにあり／＼と初見參とは思はれず。憚り多き事ながら、夢にと見しに變らせ給はず。憶起す、故鄕にて色懺悔を讀みし時より、我日本の東には尾崎紅葉先生とて、文豪のおはするぞ。と崇敬日に夜に止む能はず。また風雅娘に接しては、相見ん思ひの切なさに、玉の緖もゆるぎつ〻、夜半仄暗き雪の灯に、愁然として遠き其の百里の彼方を仰ぎにき。三たび紅子戲語に接せる時、覺えず、爪立つて衝と起ちし、魂はそぞろに飛んで、硯友社の空にやありけん。さて上京せし其の夜一夜、神田山本町の知合の二階へ宿りて、明けなば東雲の雲を衝きて、横寺町にと思ひしが、事は心に違ふかな。かゞなふれば其よりこ〻に約一年、其間の經歷は、わが友よ。君の想像恐らくは、其の實際を誤らじ。然りと雖も、冬の月、花の雨、僅ばかりも浮世の態を見覺えしは、麻布の霜の味噌漉なり、上野の涙の袖なりけり。

また明神坂の詫住居にも、五軒町の落魄にも、或は由比ケ濱のさすらひにも、片時と雖も忘れざりしは、先生にておはします。奇なる哉、心凝つて幻に描きしを、今のあたりに見えしぞや。そぞろに涙さしぐみぬ。（註4）

かくて鏡花は、紅葉の門に入つた譯であるが、この頃田山花袋も又、一人の文學の道に惱んで紅葉を訪れたことを『東京の三十年』に「紅葉山人を訪ふ」といふ題で書いてゐる。「かれについての最初の印象は、好い感じであつた。いかにも江戸兒らしい快活な城府を設けない話し振、若い文學書生をも別に侮りもしない態度、尠くとも私の動搖する心を靜めるに十分であつた。かれは西鶴を話し、近松を談じ、つづいて今Ｙ新聞紙上に書いてゐる作の話をした。」といひ、話は外國文學に飛んだりして、終りに花袋は「かれの贅澤な生活、何不足ない生活、いかにも大家らしい鷹揚な生活、ことに美しい菊子夫人が私の眼と心とを強く刺戟した。」との感想を述べ、自らの暗い生活と對比して、奮勵の念に燃えて、歸つて行つた事を記してゐる。

紅葉はかくてすでに、硯友社內部に於てのみならず、より廣い文學界にその勢力を占めてゐたのである。

註1 「渠の傑作」とは、ゾラの長篇 "Oeuvre" を指すものの如く思はれる。

註2 「花ぐもり」は全集には彼の作となつてゐるが、初は『千紫萬紅』の六號二十四年十二月十日に、上、中二章が出て居り、これは紅葉と河島桐葉の合作となつてゐる。

註3 內田魯庵『文藝小品』中の「綠蔭茗話」（自明治二十三年十一月至明治二十四年六月間に執筆し多く「國民之友」に載せしもの）。

註4　鏡花全集卷十五所載。この他同卷には「紅葉先生の追憶」（三十六年十一月）「紅葉先生の玄關番」（四十二年九月）等あり、鏡花自らを語ると共に、必然紅葉の一面を語つてゐる。

四　その他の同人の作品

前に述る如く、山田美妙に次いで、紅葉が最も華々しく進出したのであつた。『文庫』は、吉岡書籍店の手に移つては、『我樂多文庫』の延長といふ以外に、半ば公的な性質を帶びて、社同人以外へ對しても、折々寄稿を依賴するやうになつて、『我樂多文庫』時代のやうに、全部を私有することは許されない。『小文學』『江戸むらさき』『千紫萬紅』等の發行も、曾ての『我樂多文庫』ほど、既にかうした私的な發表機關を、彼自身としては、必要とせぬ紅葉の、それへ對する專心的な熱中を見ぬことは當然で、かかる機關雜誌へ、專ら努力したのは、一歩遲れた眉山、水蔭、思案等の方が度が强かつた。

他の同人も、先に美妙、今は紅葉の進出を見ては、焦燥の氣があつたに違ひない。それを具體的に示すものに、石橋思案を中心に、漣山人、川上眉山、丸岡九華を中心とし、既に先驅した紅葉を顧問として、明治二十二年に『今樣冊子』といふ雜誌を發行しようとして、編輯まですましたが、印刷する運びに至らなかつたといふ事實が、九華によつて示され、それにつき『初蛙』に轉寫されたものによつて見れば、その卷頭に紅葉の一文が載せられてある。

文中、既に先輩的な彼の態度と、併せて同人の作品一般への批評が窺へるから、主要な部分を左へ引いて

見よう。

——此の主筆は思案外史。まづ御身から參らうず。我今此處に面々の癖をあげて、一々筆罵せんとす。これ至極の閒事なり。外史の文を屬する、遊戲半分の癖あり。いはゆる小說をおもちやにするもの、もと遊戲半分の小說なれば、文章に氣がのらず、見るものはお鳥目をとられて、小馬鹿にまはされるの思ひあり。そのまた文の氣韵を見るに、山東庵京傳が狂訓亭爲永のドテラを引かけたるが如し……如何。漣山人は其文嬌痴にして十二三の小娘が人形をねだる姿あり。此人折々遊戲半分主義ありて、看官をお相手に飯事をするかと疑はる。人によりて此あどけなき處が感吟だと喜べど、人によりてはもどかしかるもあらむ。是薪翁種彥が本卦還りをしたら、こんなものかとは如何。春亭九華は、其文堅きに偏し理窟めくが多し。異見小說とは一言以つて之を掩ふ可し。何ぞ和らがざる。何ぞ碎けざる。亂舞奉酒のむしろに水晶の念數を爪ぐる大德といふ形なり。烏亭焉馬蓑笠翁の直德をきてヘエンツヘエンツとは如何。眉山人は文章の艷麗をのみ主として、生息子の聲靑黛を懷にするが如し。濃かなる心情はどこへお忘れなされたぞ。脂粉ばかりで美人が出來るならこの黿頭のお鍋、なんで三年わが家の薪烟にくすぶらん。式亭三馬が橫井也有の文臺に倚るに似たり如何。してして和殿自らのは……。止みなんかな止みなんかな。素人の一中節當人ばかりがしぶくて、何をいふやら呻るやら俗士の知る事にあらず。

この思案、漣、眉山、九華の四詞宗、われはかく惡口いふものの銘々人氣あり贔負ありて、二十世紀の文壇に立はだかり、金采をとつて進め進めをやる株なり。されば今より千軍萬馬の間を往來して、身を

金鐵に固むるには文庫一つのみにては父の兵書を見るのたぐひ、あつぱれ一匹の剛者、緋威龍頭とならむこと心元なし。いでや――いでやとて、いつの間にか密々の評議を遂げ、紅葉が高帋を伺ひ逸早くも馬物具の用意して、川を渡し山を越え、數百萬の大敵を、彼こそは鳥合の勢よ、一揉に揉つぶせと、大法螺を吹ならし、えいえい聲をあげて責かけたり。

紅葉の、この批評的な序文は、一面穿つたものであるが、前に擧げた『新著百種』第一號に掲げられた、坪內逍遙の硯友社同人一同へ寄せた厚意ある序と關連して考へる時、これにはあまり冷たいものがある。

ここには親しい友人間の、無遠慮さがあつたのであらうか。それにしても、世間的な發表機關に、かく露骨に書くのも、思ひやりがないやうに考へられる。或は華々しく進出した紅葉自らの嬌慢な心境に基く故であつたらうか。それも紅葉の日頃の人格からさうとも思へない。

恐らく『文庫』一つのみでは物足りぬと、紅葉には初めこつそりと「いつの間にか密々の評議を遂げ、紅葉が高帋を伺ひ」結成されたこの計畫へ、それまで常に自ら最も主要な一人として、集團結社を結んで來て心から硯友社の發展のことを思つてゐた紅葉が、だしぬかれた事を不滿を感じた感情が、この序の內に籠つてゐると見るのが至當と思ふ。『今樣册子』は發刊されなかつたため、九華の記錄がなければ、忘却されたであらう。事實在來の明治文學史に社關係のものとしてこの名は見出されてゐない故、新しき事實として特に記錄しておきたい。『今樣册子』が遂に發刊の運びに至らなかつたのは、これを計畫した同人達にも、紅葉の氣持が分つたのと、又一方吉岡書籍店の『新著百種』の計畫が、彼等にも割りあてられ、溢れる野心の放水路

となつて、彼等を滿足させた理由もあつたと思ふ。

この意味でも、一つの硯友社の危機を救つたものとして『新著百種』の發行は意義を持つたものと思ふ。かくて、他の同人もこれを踏臺として、次々に文壇へ進出して行つたのであるが、次に順次これに掲げられたのを主として、各人の傾向を見ようと思ふ。

まづ、第三號の石橋思案の作『乙女心』を見るに、序として、「此小説は「ナンダ」を主眼とす（ナンダは何乎なり疑問の詞一讀してすこしも譯が分らずそこで作者に向つてナンダと尋ぬる處が主眼）」などとふざけた言葉で、紅葉の「涙を主眼とす」を、茶化してゐるのだがかかる戲作者の風が一番彼につきまとつてゐる。

さてその筋は、東京で醫學修業中の青年の周圍の『書生氣質』風な生活を最初描き、一方郷里では實母と、後にはその青年に嫁ぐべき義妹が待つてゐるのであるが、母が重病といふ報知に接して、青年が周章と郷里へ歸省した。村の道でたまたま一人の田舍臭い娘に會つて、よく見ると彼の許嫁の女であつたといふので、深い反省もない、表面を輕く書流したもので、彼は從來の境致に安住して、勉强を怠つてゐる如く思はれる。

漣山人の『妹背貝』は第四號として出たが春、夏、秋、冬の四章に分れ、自序にも文章中に樣々の歐文に見出される符號をとり入れ、文の妙味を助けたと記してゐる。かかる形式上の工夫の新鮮さと、作品にまで、彼自らの藝術への憧憬が、霧のやうに吹きつけられてゐる所興味を惹く。

卽ち「春」の條では、少年少女の日に於て、少年の繪畫製作への執着を語り、二人が成長した六年後の「夏」の海で、少年の兄が、弟の愛人である彼女へ愛着する事を描き「秋」には、醫學校入學を家中よりすすめら

れながら、繪畫への執着から入學試驗に失敗して、それ等の結果から、兄の奸計に乘つて、主人公は鎌倉へ逃避する事を述べ、「冬」には、その女は兄と結婚する事を强ひられ、その事を新聞で知つた主人公は、失意の結果、更に放浪をつづけるのであるが、結婚を嫌つて一足おそく、彼の後を追つて鎌倉へ來た女は、彼の居ないのに失望して、一人鎌倉の海へ投身するといふ一篇の趣向である。

作中の人物も、かなり描き分けられ、また初めの幼き人達の描寫も、後に小波が少年少女に興味を持ち、彼等のための文學制作に入つて行つた事を、思ひ合はされ興味がある。

彼は自らこの作品について、『我が五十年』中に次の如く記してゐる。

私が『妹背貝』を出版する頃までは、未だ父も長兄も私の希望を許してゐなかつた。そこで私はその不平を訴ふべく『妹背貝』に托して、主人公は共の戀の遂げられぬ爲に、遂に自殺するといふことにした。勿論この『妹背貝』は戀愛物語であつた。主人公が戀を遂げずして自殺すると言ふのは、取りも直さず若し私の希望が容れられないならば、私は死をも猶ほ辭するものでないと言ふ、意氣込を寓したものである。

『妹背貝』に感ずる、若々しい情熱の霧は、この結果であつたのだ。しかし、その後の漣山人は、小說作家としてより、寧ろお伽作家としてへの轉向をとり、よりその方面で名をなした。

彼がそれに興味を持つに至つた動機を、自ら述る所に依れば、小學を卒へ訓蒙學舍の怠惰なる學生であつた頃、獨逸へゐた彼の兄より、オツトーのメエルヘン集が送つて來た。彼がその後お伽噺に興味を持つて、

遂に之を以て立たうとするに至つたのも、全くこの本の賜物であつたこと、彼は實にこの本から、世界お伽噺の幾篇かを得たこと、それ等の事から、「此本を見る度に、地下の兄に感謝せざるを得ない。」と『我が五十年』中に追想してゐる。

思ふに彼以前、眞に兒童のために、純粹な氣持で書かれた文學が、我が文學史上にあつたであらうか。明治に入つて、海外文學の輸入につれて、イソツプや、ガリバル回島記や、アラビヤン・ナイツ等が飜譯されたが、兒童といふよりむしろ、靑年の讀者を對象としてゐたと思ふ。

かくて二十四年『少年文學』第一篇として出た、漣山人の『こがね丸』は、明治時代に、純粹に兒童のための文學の創作として、最初の光榮を持つものである。

今日の正しい兒童文學の方向は、懷しい童心のリアリズムへの道であると思ふ。空想的な天女や妖精の世界もさることながら、魅力はより科學的な現實世界が強いらしい。もはや兒童たちは、餘りに空想的な世界へといふより、むしろ現實の不思議な解決を、理智的な又科學的な物語を通して知りたがるか、彼等と同じ年頃の、他の兒童たちの經驗を知りたがるらしく作品のモチイブもそこに中心をおかれる。

さうした眼から『こがね丸』を見れば、筋も複雜で、單純な少年少女の頭には難しく、文章も亦難澁であつて、題材の取扱ひ方も、動物の人格化的な方法で、黃金丸といふ犬が、鷲郎といふ犬と共に、父の仇である金眸といふ虎と、聽水といふ狐を復讐する、殺伐な仇討物語であつて、陳腐な又强すぎる刺戟が、兒童へ惡影響を與ふる惧れのある作品であるが、かかる作品に渴してゐた當時には、喜び迎へられたのであらう。

これは當時、『しがらみ草紙』による評壇の雄、森鷗外の序を掲げてゐる。

奇獄小說に讀む人の胸のみ傷めんとする世に、一卷の穉物語を著す。これも人眞似せぬ一流のこころなるべし。歐羅巴の穉物語も、多くは波斯の鸚鵡册子などより傳はり、その本源は印度の古文にありと云へば、東洋は實にこの可愛らしき詩形の家元なり。あはれここに染出す新暖簾、本家再興の望を遂して、子子孫孫までも卷をかさねて榮えよかしと云ふものは、鷗外漁史森高湛なり。（註1）

かうした鷗外の序も、この叢書の社會的普遍へ幾らか、當時としては功果は持つたものであらう。

その他の硯友社作家も、紅葉は『二人椋助』、水蔭は『今辨慶』、眉山は『寶の山』など書いてゐるが、その後專ら、開拓者として精進したのは小波で、遂にその第一人者となつた譯である。

『二人椋助』はアンデルセンの童話「大クラウスと小クラウス」の飜案であるが、原作の美しい浪漫的な夢幻性が洗ひおとされ、殘酷性が目についてこれまた、兒童のための物語としては、失敗の作で、篇中三、四箇所も殘酷な殺しの場面など餘りに極端であり、作の動機、目的が兒童の純眞さを、痛く傷つけてゐる事『こがね丸』以上である。

善人ではあるが、愚鈍な大椋助が、常に惡人ながら惡賢しい小椋助にあざむかれ、利慾に迷つて四疋の馬を殺し、實母を殺し、遂に自らを殺す、荒唐無稽な物語であるが、幼童の物語としては害になるやうな書き方をしてある。

かく初期の作品は、餘り幼童へ與ふる感化など考へず、筋の奇怪さ、それより惹く變態的な興味一方をね

らつた感があり、本當に幼童そのものの氣持を考へ、純眞さへの關心を持つたのは後々の事である。

しかし小波も最初は、はつきりした熱情をもつて、少年のための文學の開拓者となつた譯ではない事を『我が五十年』に自ら次の様に記してゐる。

有體に自狀すると、何時か情熱が消耗してしまつて、人情本位の物を書くのが、何だか馬鹿馬鹿しい様になつたのであつた。之に反して少年文學は漸く世間の注目を惹き、果は筆の上許りでなく口でも之を話すべく、所望される様になつて來た。

彼の時と共に變化して行つた態度が見える。彼はこの期の終り、二十五年の暮、京都へ行つてその地の京都日出新聞に入社した。そして、そこの新聞に『あゝ京都』『男の心』『血』などの小說を連載するかたはら、博文館の『幼年雜誌』への少年物の寄稿や『日本昔噺』の執筆を續けてゐた。そしてお伽噺作家の小波の道へ一步一步進んでゐたのであつた。

少年のための文學は、かかる作家の出現と、社會的に見ては、教育制度の整頓によつて、少年の智識の向上、開發、これに對する少年雜誌の發行と相俟つて、進步して行つたと見るべきである。

次に廣津柳浪について見よう。『新著百種』の彼の『殘菊』は、肺を病む若い女の、自らの病苦と子供へ對する惱みを述懷するのを、一人稱の形式で書いたものであるが、すでに心裡の暗い陰影を持つ風景に、彼の後年に見られる、暗い傾向の作品へ通ずる一脈の流れを汲む事ができやうと思ふ。

彼の其後の作品にも、暗い宿命を主題とし、またならぬ浮世を描いた『五枚姿繪』や「美人には善報あり

惡人には惡報あり」との定律が破られて、理義には晦き母を持ち、一點の惡意も持たぬのに、夫に死別し、娘に生別し、母よりは虐待され、さうした結果强迫觀念に襲はれて、狂人となつたお秋といふ女性を主人公とする『狂美人』にも、その一脈に觸れるものがある。

大橋乙羽の作品は、前期よりいくらか進展を見せてゐる。『新著百種』の『露小袖』は、旗本篠崎主人一家の沒落と、そこに出入する、實直な小間物屋の番頭五平が、篠崎の死後、その妻と娘を自らひきとつて世話し、後その娘と結婚したが、事業に失敗しては、放蕩三昧に耽るやうになる。しかしながらお花といふ可憐な子供があつたため、一家の風波も收まつた。お花は生長の後、紫屋といふ金持の家の娘の遊び相手に貰はれる事になつた。五平はやがて亡くなり、その妻――かつては旗本の一人娘も、淺草の本願寺境內の珠數賣となつたといふストオリイで、卽ち維新以後の沒落して行く武士階級、それに交り町人階級の姿態、時代の空氣を自然に作者は描いてゐる。

その後の作には、戀愛の三角關係を題材としたものが多い。『京屋娘』では、古風な淸元や、踊の遊藝に馴れてゐた京屋の娘のお香が、相弟子の男と愛しあつて、彼女の許婚の男を嫌はしく思ふやうになる。許婚の男の妹に久米といふ少女がゐるが、彼女は新時代の敎育を受けてゐるので、何時かお香も彼女の感化によつて、キリスト敎を信じたり、新しい敎育を受けたりして、新しい少女に生れ變つたやうになると、ここにも新舊過渡期の社會を背景とした、少女たちの横顏が見られる。

『小夜衣』は、新內流しの女の懺悔話として、書かれた物で、矢張り少女の頃は、自分の通つてゐる針の師

匠の家の息子と戀仲であつたが、家では他家へ結婚させようとする。その愛してゐる男は肺を病んで女の名を呼びながら死んだ。彼女は遂に家を飛び出したが、汽車中で一緒になつた、藝人の群の中に入りその生活に馴れて、しらずしらず墮落して行つたといふのである。

三角關係といへ、自然主義以後の作品に多く見る、一人を二人で爭ふ際の、爭ふ者同志の苦悶、或は爭はれる者の苦悶といふ、箇人箇人の立場としては描かれず、多くは家庭の强權、その束縛による苦悶であつて、箇人意識の弱い、封建時代の傳統の强い時代相が、彼の作品を通じて眺められる。

『霜夜の蟲』には、割にかかる束縛に關せぬ山間の樵夫の家に、養子となつた下男が、その主人の娘で、今は自らの妻である女よりも、峠の茶屋の娘に心惹かれて、山を越えて會ひに行かうとして、雪崩に壓しつぶされて、死ぬ事を描いてゐるが、ここに示される作者の意圖は、三角關係の惱みでもなく、それより起る爭鬪でもなく、自然の威力でもなく、單に下男から養子となる頃のいきさつや、死後殘された娘への同情などが主眼であるらしく、それ故この作を深めてゐないのである。『貧の病』には、病母を養ふ若い姉弟がある。姉にはかつて戀人があつた。その男には曾つて、亡き父が恩をかけておいたが、今は音信不通になつてゐた。姉弟の母が亡くなつたため、殘された二人に同情して、ある邸から引とられる事になつて、そこへ行つて見ると、行方不明であつた姉の戀人が、偶然その邸の聟となつてゐたのだ。失望の悲みに、姉弟はその邸からさまよひ出てゆく事を筋としてゐる。三角關係といふべき程でもないが、富の支配に戀愛も、恩義も捨て去られて、そのため苦しめられる弱者を描出してゐる。

かく概して、乙羽の作品には、時代の横顔を描出して、一種の理想主義的な氣品を、仄かに感ずるのであるが、彼はその後二十七年博文館に入り在來の渡邊姓を改め大橋の姓となり、次第に文筆を離れ、寫眞技術と出版事務の方面に活動するやうになつたので、その專心的な小說はこの期にのみ見られ、その後彼にとつては第二義的のものとなつて、生長を見なかつた次第である。

乙羽は後年小說を離れても、紀行文の巧みさを稱せられてゐるが、既にこの頃から、その萠芽が窺はれる。その一例として、二十三年四月二十二日、同人石橋思案と共に、東北地方を旅して書いた芭蕉の『奥の細道』風な「奥州旅日記」の一節を左に引用しよう。

二十三日　同飯坂に泊る、朝より小雨降りて午後にいたりて霽る、此處福島市の停車場より三里あまり、奥の山の端に沿ひし市街なり、人家四五百ばかり、溫泉あればいと賑はし宿所を細井といふ、崖により建てたる三層の高殿にて、山に對ひ、水に臨み、景色尤もよし、此家の前を流るるを剃髮川といふ、谷川なれば水の勢ひいと激しく、川を隔てて彼方の山の麓は、隣村よりの通路とおぼしく、未だ晴れやらぬ樹間樹間の煙の中より、小荷駄馬の鈴の音響きて、聞慣れぬ奥州訛りの馬子唄、興あり、見る見る前峰の雲消えて、濁りし流れ漸うに澄み行けば、水靑う砂よく見えて、剃髮川は實に年若き尼法師の、月代伸びしとて、剃刀あてしばかりなる腦天の、いと翠々したるやうなり、下の方に鐵の釣橋ありこを國內有名の奇觀なりと稱ふ、川を挾みて兩の岸に高樓建連ねあるは、いづれも溫泉宿なり、夕陽西の山の端に落ち、炊煙水に沿ふてたなびくさまなんど、えも云はれぬ景色なれば、散步すべしとて、晩餐の

仕度促がし立てて湯に浴るに、温度低けれど、衣着し上にむくむくと暖かになりぬ、はや食事の膳部調へしとて、持て來しを見れば、尺にも餘る香魚の鹽燒に種々の取合せ物なり、此魚は前の川にて捕しものにやと問へば、左なりと答ふ、その味ひことに美なれば、予いたく賞稱へて、食べをはるに、石橋もまた額を撫でつつ、江戸の人は小判嚙む初松魚に誇れどもしかも、奥州の石高道に草鞋喰の痛さを知らぬものには、この味判るまじと云ふ……

川上眉山は、この期に、作品はともあれ誠に意氣軒昂たるものがあり、二十四年十月十九日附、江見水蔭宛の書簡に之を見れば、

半夜、鷄鳴を聞いて立つて舞ふ。東晉の英雄の境遇果して誰の邊ぞ。見られよ明治文壇の淺猿しき事、群小八方に割據して、取止めなき讝語をいふ。其讝語一として取るものなし。世を擧げて群雀噪々、維新に近き天地とはいへ又悲しからずや。されど此時なり、天晴矛を横へて、戰場に躍り出で、陣笠首の雜兵ばらを蹴散らして、宇内を呑むものあらはるべきなり。大詩家の出るは今。大文傑の出るも今。やるべし。やるべし、乘取るべし。大勇筆！ 大野心！ 扶桑の野を席捲して、天下に覇たるべき勢を以て、墨は瀧の如く、筆は稻妻の如くやらなければ嘘だぞ嘘だぞ。

君山河に枕して、果していかなる感慨ぞ。天杳々たり、雲悠々たり、明月兩心を照らせども未だ其心を知らず。

そこには、婦女子向きの、なよやかな筆を走らせてゐた初期の態度より飛躍して、溢るる創作欲、藝術的

野心が焰のやうに燃え上つてゐるのが見られる。

『新著百種』で發表した『罌染櫻』は、お房といふ可憐な少女が、尼になるまでのいきさつ——即ち彼女は吉川といふ醫學生に馴れあつてゐたが、火事に會つて彼女が逃げてゐる所を、星野といふ男に救はれる。星野は最近失つた妻の面影を、お房に見出して、彼女へ烈しい愛情を注いだが、お房にとつては恩人とはいへ、曾ての吉川への愛情を忘れる事が出來ず、その意向に應じない。星野はそのため發狂して、吉川を刺した刄で自らを殺すことを、流麗な筆で描いてゐる。

この筋でも知らるる樣に、同じ三角關係を主題としたとは云へ、乙羽に見られぬ氣性の烈しさは、結局作者眉山の心の裡に內攻する氣性の烈しさを、反映せしめてゐると思はれる。

この作は、二十三年四月の發表であるが、その年の秋、恐らく失戀であらうが、煩悶してゐる漣山人を慰める手紙に『罌染櫻』の星野に反映した、彼の積極性が見られるので、次に揭げることにする。

——こぼす事勿れ。歎く事なかれ、此時誠に虎穴なり龍腮なり、今一ト握にして虎子を得べし。珠玉を得べし。ただただ心氣をして膀輪、氣海、丹田、腰脚の間に充たしめ、巨鼻を眞向に振かざして、勇進突戰するに於ては、本望成就、得度成佛疑ひあるべからず。

當時の眉山は、なほ人生苦、生活苦にも馴れず、華やかな前途を夢みては、藝術至上主義を奉じ、この世の春風に、愛用の黃八丈の袂長き羽織をも輕やかに、見果てぬ夢を追うて、市街を濶步してゐたのだ。（註2）

彼が次第に世間を知り、その苦澁の味をなめてゆくにつれ、彼の朗かな哄笑も、內心の憂鬱を消す反射的

な行爲として、苦惱の中に藝術にのみ生きようと、もがいたのは、この期の終り、二十六年の父の死、それから捲き起された家庭の紛糾などが、感受性の强い彼の心を强く搖つた頃に初まるのである。

その前、二十五年十一月『蔦紅葉』一卷を出してゐるから、一應それを見たいと思ふ。これはかなりの長篇で、先人魚師匠と仇名された、茶の湯師匠を看板に女をとりもつ中宿を營む、森山かつといふ女がある。大坂生れの藝者上り、幾人かの男と男の間を渡つて今の商賣である。そこにお愛といふ娘がゐるが、親に似合ぬ優しい純な女である。この中宿に、出入りの久藏を案内に、鷲尾泰一が來た。泰一は高官の息で、世間に通じた當世男、それでもお愛の純情に强く心を惹かれる。お愛も泰一をしたつて遂に二人は、上州の溫泉へ行つた。十日も樂しい日を送つてゐるうち、泰一が病氣になつた。道具屋の常八といふ男は、鷲尾家に出入してゐるのであるが、偶然上州の宿で泰一等を發見し、之を歸京の上鷲尾家へ告げたので、泰一の母政子は驚いて上州へかけつけた。病床の息子を見て驚き、お愛のおとなしいのを表面ばかりと信じ二人の間を割いて、泰一を連れ歸つた。

お愛の母かつは、それを利用して手切金をとつた。お愛は泰一を忘れ兼ね、手紙に悶々の情を託したが、途中で政子の手に渡り、お愛母子の共謀で誘惑してゐる事と信じた。政子はこれ等のいざこざを避るには、轉地に若くはなしと、京都まで泰一と出かける事にした。

京都には親類先の陶器商吉田新六がゐて、三人の子供がゐる。長女は幾代、昨年女學校を出た、才ある當世女、その下に妹と弟がゐる。幾代と泰一は幼い頃會つた事はあるが、隨分と昔の事だ。政子の京都行には

幾代と泰一の結婚について、內心考へてゐる事がある。二人も京都の滯在中に仲よくなつて、婚約は成立した。たまたま、泰一が櫻井といふ舊友を尋ね、その近隣の花輪といふ東京人の別莊にこの頃美人が來てゐるといふ噂話で、雙眼鏡で見ると、驚いた事には、その女がお愛であつた。花輪とは東京で泰一も二度ほど會つた事もある。お愛は花輪のものとなつたと泰一は思ひこむ。

東京へ歸つた泰一はお愛から、恨みと執着の意をこめた手紙を受とる。花輪のものになつたくせにと思つてゐると、たまたま、植木職人の仙太から、變つた話があると出入先の花輪家に起つた話を聞く。

それは花輪の當主時雄についてで、彼はさる藩の國家老花輪靭負の養子となつたのだが、もともと靭負には姉妹の娘あり、姉の君江と結婚すべきであるのに、時雄は妹菊江を愛し、遂に娘の子を生ませた。君江は病死し、時雄も許されて菊江と結婚し、官を辭して美術商となつたが、その後子供が生れない。

かつて許されぬ間に生んだ子供の現在の事を思ふてゐるうち、人より菊江の生寫しの娘のゐる事、母は茶の湯の師匠でしかも大阪者と聞いて、十八年ぶりに會つてみると果して、自分の娘であつた。

この話を泰一は仙太に聞いて色蒼ざめ後悔の心がしきりに湧く。

一日花輪の家で觀菊の宴があり、泰一の家にも招待狀が來た。所用の父に代つて泰一が出席せねばならない。彼はそこでお愛に心苦しい對面をした。お愛も泰一がわざと、彼女から去つてゐたのでない事を知り、幾代との結婚をすすめ、情絕ちがたきも別れようと云つた。

その後政子は京都より送り來つた新聞で、幾代の案に相違した不品行を知つた。敎師と關係して姙つたこ

とさへあるといふ記事である。

かくて一年すぎ、鷲尾家と吉田家の結婚問題は破談となり、十月十五日紅葉館に鷲尾參事官夫婦萬歳の聲が唱へられ、初契月(ハネームン)の車窓に、泰一とお愛の二人が見られたといふ筋で、西鶴風な筆致でストオリイを追つては、流麗な筆を走らせてゐる。

眉山の長篇構成の力量を知ると共に人生の苦しみを味はぬ麗しき日の作たるとの意味で、初期のものとして注意するに足る作品であらう。

やがて二十六年四月發表の『白藤』には、一家を支ふる主人を失つた妻子二人が、父の生前親しかつた、すべての人々から背かれて、家は賣られて落ぶれ行き、長屋にその日暮しをする、そしては髮の毛まで賣るやうな、困窮な目にあつてゐた。たまたま夫の命日に、墓參に行けば、そこへ一人の紳士が同じ墓に參詣に來る。その人はかつて亡夫の厚意で、まさに破滅しようとする身を救はれて、外國へ渡り、成功して歸つて來た人であつた。

しかるに恩人は既に死んでゐるので、彼は遺族であるこの妻子を、再び以前の邸宅を買つて住ませることにする。すると蟻の甘きにつくやうに、一度妻子を見捨てた人々が、馴々しく近づいて來るといふ、利に集り、不利に去る人情の輕薄さを描いてゐる。

それにはたどたどしい中に、切々人に迫る實感があるが、恐らく彼自ら眼のあたり、かうした世間を眺めて、そこに次期に連る社會觀とも云ふべきものを、抱かずにはゐられなかつたものと思はれる。

その前、眉山は、學生の頃、横井也有の『鶉衣』や、森川許六の『風流文選』などを耽讀したといふが、石橋思案編の『眉山美文集』に收められたものに、『鶉衣』との聯想を直ちに導くものがある。その一、二の例を擧げておかう。

春は櫻鯛、秋は紅葉鮒とや。浮世の箸のいそがしくて、口には孝を忘れぬ人心、此ひもじがりいつの世にか止むべき。

新川に酒の流絶えず、宇治に茶の煙消えず、餅は宮城野よりぞさる人の浮名を流しける。山の手に玄雪といへる男が、ひと日俳諧を論じて、茶は其姿なり、餅は其情なり、酒は其興なり、茶を皮とし、餅を肉とし、酒を骨として、風雅は一口の中にありといひしが、彼は鼻のもとの宗匠にや。

茄子の鴫燒鮒の雀燒はあれど、雀の蛤鍋はなし、山の芋の蒲燒もなし。

松江の鱸はいかなる味のしぬるや。これに仕を巾返へせし人もありとか。鰹の初聲に布子を飛ばすとはいかに。

河豚汁に命を落す人多し、されど其人の喰ふ前に遺言はなかりき。

これは眉山の「百味譜」の一節ではあるが、也有の「百魚譜」を見れば、

人は武士柱は檜の木魚は鯛とよみ置ける、世の人の口にをける、をのがさまざまなる物ずきはあれど、此魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。絲かけて臺に居たる、男ぶりさへ外に似るべくもなし。しかるをもろこしには、いかにしてかことに賞翫の沙汰も聞へず、是に乘りける仙人もなし。されば夷

三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、ただ是にこそ釣もたれ給へ、木龍を鱗の司といふは、食味なれたる理屈にして、さは是を料理せんと學びたる人は、むかし愚なる名をもこそとどめたる。

とあつて、強い影響を示し、また眉山の「擂古木辭」は、やはり也有の「摺鉢傳」との相關を思はせる。

擂古木辭

尾上の松といへば千代のためしにも引かるべきに、野山の杉といへば神さびたる姿とも見らるべきに、山椒と名乘れば田樂の香を飽かるべきに、何とて身をあらぬものになして、臺所に下主奉公の擂古木とは生れ出でけん。されば歌人には捨てられ、詩人には疎まれ、胼胝の手にかかりて騷がしく一生を送り、何ひとつ譽められたる仕草も無くして、さがなき口の端に擂古木野郞の引事もわりなし。そもそも歳の市にははかなき價を待つ身となりてより、主を擇ぶほどの能もなければかんぽやつしたる內儀にも遣はるることを願ひ、穢くるしき水仕女にも身を任かすことを厭はず、擂鉢のよしあしを問ふにも及ばで其夜よりぞ、くすぶり勝の臺所の隅に、俎庖丁と流元の佗住居を定めぬる。それより引窓の朝ぼらけに身を起して、萬雷の響に鍋の耳を驚かす、折に唐辛子の花を散らしては、談林の錦を今に傳へけん。其しほらしさは心にしめながら、よしなき女夫いさかひの得物となり、さては茶番狂言の物笑となる身の程のいかにつたなき果報ぞ、更行く夜半の棚の下まかりて、婢女が居眠の傍につくねんと靜かなる時、蟋蟀ばかりぞ一しほの鳴音を絞りける。

といふのは、まさに、

備前のくにひとりの少女あり。あまざかるひなの生れながら姿は名高き富士の俤にかよひて、片山里に朽はてん身をうきものにや思ひそみけん。馬舟の便につけて、遠く都の市中に出でて、しるよしある店先にしばしたづきをもとめけるに、師走の空いそがしく、木の葉をさそひ盡す比は世を煤掃のふるきをすて、物みな新器を求むるにつれて、ある臺所によき口ありて、宮仕の極がてら、摺木と聞へしもとに、うち合せの夫婦とはなりける。

云々の摺鉢の傳記と照應してゐる。

かくて眉山の俳文に得た洒脫艶麗の文脈は、ひとりかかる文章に於てのみならず、彼の小說表現をも浸してゐることが知られると思ふ。

その他中村花瘦は、『新著百種』に『離れ鴦』を發表してゐるが、特異な箇性を示さず、つづいて『春夏秋冬』に、「馬士」といふ、飼馬と離れる馬子の氣持を描いたものがあつて、愛といへば男女の間のみが取材された中に、變つた題材ではあるが、それほどの深刻さもない。

その後、次の期に屬するが、便宜上ここに述れば、二十七年二月の『明治文庫』に收められた短篇で見ても、等しく思案の作品に見らるる古さがある。

「餓長者」では、貧しき左官が或日老僧に賴まれて、山寺の床下を掘つて、瓶を埋めた。彼は目隱しされて、連れられて行つたので、その位置を知らなかつた。相變らず貧乏暮しをしてゐると、誰もゐない山寺があり、そこには此頃まで强欲な坊主が住んでゐて、氣味の惡い噂さへあるといふ話で獨りうなづく所あり、左官は

進んで住むことにしたところが忽ち金持になつたといふ單純な興味一遍のものである。

その他、幼友達の娘を戀してゐた男がゐたが、その女が遠い長崎の男へ無理に嫁がねばならないのを苦にして、男が古風な戀患ひをやるのを、友人が可哀さうに思つて、仲を圓くおさめて、その女をもらつてくるといふ「狂蝴蝶」にせよ、出來のよかつた學生が戀人を持つたばかりに、怠けだし身なりを構ふことに汲々としてゐるのを、彼の愛人が、普通りになさうと、わざとつれなくすると、男は發憤して勉强しだす。そして卒業ののち、戀人の家へ行くと、ひどく愛想がよくて、お互の氣持が分つて、再び戀愛が成立するといふ「合歡花」にせよ、また貧しい母子の生活を描き、そこへひよつこり外國へ行つてゐた主人が歸つて來て、一家は幸福になるといふ筋の「片時雨」にせよ、夫に背かれた妻が、家を出ては女繪師となり、その後一度夫に會つて恨を言ふが、なほ彼女は操を守つて、生涯獨身で暮すことを告げるといふ他愛もない筋の「破鏡」にせよ、すべて表現にも、內容にも古い殼を脫しないで、ちぢこまつた印象しか與へない。

その後通俗な新聞小說など書いてゐるが、平凡な作家として、この頃の硯友社同人に、その名を連ねてゐたに過ぎぬ。

內田魯庵は『きのふけふ』中に、花瘦について次のやうに記してゐる。

花瘦も亦硯友社の一人であつた。一生不自由をして名を成す遑が無い中に、夫妻相續いて不慮の急患に犯され、一と月經たぬ間に夫婦とも易簀した極めて不幸な作者であつた。が、本來が三馬鯉丈系統の戲作者肌に出來てゐた男であつたから、如何なる苦痛も心配も此男には少しも煩悶を與へないで、いつも

月夜に米の飯で暢氣に暮し、貧乏にも借金にも一向怯げずに、執達吏の應接などは手に入つたもんで、借金取も鶯の聲と濟ましてゐた。夫故、眉山が債權者と折衝するに方つて誰よりも相談對手としたは此男で、世帶を疊んだ時に身の廻りのものを預けたのも此男の家なら、放浪から歸ると直ぐ賴つたのも此男の家であつた。（紅葉が『金色夜叉』を書く時高利貸の知識を得たのも亦花瘦からであつた。）

これから察すれば、作品より性格の面白い、戲作者風の作家であつたらしい。尙俳諧に通じ社中から宗匠と仇名されてゐた。そしてユーモラスな存在を硯友社同人の中に占めてゐるやうに思はれる。（註3）

江見水蔭は『新著百種』にその著書を出さなかつた。しかし讀賣新聞に、次々に短篇を發表してゐたが、その後自ら『小櫻緘』といふ箇人雜誌を發行し、自己の作品をもここに發表した。

創刊の二十五年十一月三日の號の卷頭の發行大意を見ると、

天地の間に潜む處の美を面白く唄はむとす。これ第一の目的なりと雖も、次ぐに吾聲の餘響をして江湖の風潮を震動せしめむとする野心もあり斯の如く希望大なり、只恐る微力其實踐を過まらむを。

とある。かかる目的から彼の詩味のある短篇の發表、及びより世間の進出を意圖し、それと共に彼の周圍の人々、殊に若い田山花袋はここに、その處女作時代の作品を揭げてゐる。（註4）

水蔭は既に、その題材の觸手を八方へ擴げ、脚本の創作をも試み、後年の多作への傾向を示したが、特に目立つて、藝術家の惱みを描くことを好んだ如くに思考される。

二十二年六月『文庫』の『旅畫師』に初るこの傾向は、『雪折竹』に於ては、勞働者となつた落魄の小說家

と、その妻の陋巷に於けるつゝましい生活を描き、『畫師の妻』には、怠ける主人を勵まして、繪筆を握らせようと努力する彼の妻の苦心を描き、『盃燈籠』には、詩人が彼に託されてゐる亡友の子供が、將來詩人となる希望を持つてゐるのに對して、詩人は詩人たるの辛さを說き、寧ろ時代に適した軍人になさうとしても、その子供はなほ詩人たらんとの希望を捨てず、それ故詩人も遂に之を許すといふ筋を描き、『病畫師』には、藝術の道と、戀愛の道との交錯から涌く、苦悶の中にある畫家を主人公として描いてゐる。

我等はかかる短篇を通じて、水蔭の若やかな藝術への憧憬、危惧、執着、さうした青年作家の持つナイーブな氣持がうかがへて興味がある。この頃は彼は未だ通俗性の塵埃にも塗れず、純粹な意欲の內にあつた事が知られる。

最後に『新體詞選』『我樂多文庫』に、浪漫的な詩を見せ、詩人として名のあつた丸岡九華は、前に記すやうに方向を轉換して、斷然と詩作を絕つたことは他の幾人が一篇一作、或はその姓名のみを『我樂多文庫』にとどめて、消え去つた人々を籠めて、この數人の目覺しい進出と對比して、一種の感慨をもたらさざるを得ない。人の世の優勝劣敗の相、まして作家のそれこそあわただしい限りではあるが、硯友社は、その生誕後六、七年にして既に、その足並は或は速かに、或は鈍く亂れ初めて、多くの落伍者さへ出して來た。

此の期において、硯友社の結社の第一目的であつた、文章の習練娛樂より變遷し、文壇登場の目的に置き換へられたその目的を、完全に爲し終へてしまつたのであつた。而して作品の傾向としては、表現形式の摸索から、題材內容方面にも進展を來したと言へるのである。

ここに彼等の進出を、實證する資料の一つがある。二十五年三月三十日發行の『東京現在著作家案內』といふ小冊子で、その頃活躍した六十五名の著作家の、雅號、本名、住所、著作を擧げてゐるが、硯友社作家を探せば、次の如く擧げられてある。

○乙羽庵主人　　渡邊又太郎
　○住所　京橋區新富町壹丁目壹番地　野村方寓
　○著作　露小袖（新著百種）○京尾娘（讀賣新聞）○霜夜の蟲（小說叢書）○小夜衣現出（都の花）

○虛心亭主人　　岡田朝太郎
　○住所　小石川區原町百參拾番地
　○著作　妾薄命（新著百種）○雛鶴姬（國光）

○花瘦　　中村壯
　○住所　神田區表神保町壹番地
　○著作　谷間の雪（都の花）腐儒者（おどけ草紙）

○紅葉山人　　尾崎德太郎
　○住所　牛込區橫寺町四拾七番地
　○著作　新色懺悔（聚芳百種）○戀の山賤（文庫）○夏瘦（春陽堂）○此ぬし（新作十二番）○戀のぬけがら（都の花）○二人女房現出（同上）

○漣山人　巖谷小波
○住所　麹町區平川町五丁目貳拾六番地
○著作　妹背貝（新著百種）○かた糸（文學世界）○黃金丸（少年文學）○ぬれ浴衣（讀賣新聞）
○思案外史　石橋助三郎
○住所　小石川區金富町五拾番地
○著作　乙女心（新著百種）○京鹿子（小說群芳）
○水蔭　江見忠功
○住所　牛込區北町四拾壹番地
○著作　櫻月（小說叢書）○花守（都の花）別爲卷册○石橋山脚本（讀賣新聞）○野試合（文學世界）○蛙ぎらひ（おどけ草紙）
○眉山人　川上亮
○住所　本鄕區春木町貳丁目四番地
○著作　墨染櫻（新著百種）○黃菊白菊（文庫）○寶の山（少年文學）○藤かづら現出（都の花）
○柳浪子　廣津直人
○住所　牛込區矢來町參番地字中ノ丸五拾貳號
○著作　殘菊（新著百種）○いとのみだれ（聚芳十種）○紫斑々現出（都の花）

尙『新著百種』を機緣として、畫家武內桂舟が硯友社に近づいて、その同人格となつた。紅葉は「硯友社の沿革」中に「武內と識つたのは、新著百種の挿繪を賴みに行つたのが緣で、酷く懇意に成つて了つたが、其始は畫より人物に惚れたので、其頃武內は富士見町の薄闇い長屋の鼠の巢を見たやうな中に燻つて居ながら太平樂を抒べる元氣が凡でなかつた。」と記してゐる。桂舟は其後挿繪方面から、同人の作品を扶けて共に硯友社の一員として步いた。

註1　『こがね丸』の序を鷗外にもらつたについて、小波は當時の樣子を『我が五十年』中に「この『黃金丸』を出版するに就いても、その序文を依賴する爲に、私は特に森鷗外君を訪問した。但しその前に、私は生意氣にも鷗外君の向ふにまはつて『しがらみ草紙』で公にした同君の飜譯を、下手だの、間ちがつてるのと、喧嘩を賣つて怒らせて居たのだから、今更自分勝手な序文を依賴に行くなぞは、大いに氣が咎めてならなかつた。併し森君は案外心にも掛けず、快く其書齋に通して、丁度來合せた賀古鶴所君と一緒に、壽司やビールの馳走をしてくれたが、「ハヽア君が漣山人かい！隨分乃公に惡まれ口も利いたが……會つて見ると憎くもないねェ。宜しい、少年文學は面白いから、序文は私が書いてあげよう。」と云ふやうな事で、材料に付ても何かと注意をしてくれたが、其所へ又毋堂も出られて「貴方が漣さんかい？何歲だ。二十二？篤次(三木竹二君)と一つ違ひだねェ」などゝ、まるで親類の靑書生の樣にあつかはれたが、其時の溫情は今だに嬉しく思つて居る。」と書いてゐる。

註2　內田魯庵著『きのふけふ』中の「硯友社のむかしの憶出」中の「川上眉山」の條。

註3　紅葉は「硯友社の沿革」中に花痩について、「此人は我樂多文庫の第二期の頃既に入社して居たのであるが、文庫

には書いた物を出さなかつた。俳諧は社中の先輩であつたから、戯に宗匠と呼んでゐた。神田の五十稲荷の裏に住んで、庭に古池が在つて、其畔に大きな秋田蕗が茂つて居たので、皆が無理に蕗の本宗匠にして了つたのです、前名は柳園と云つて中央新聞が創立の頃に處女作を出した事が有る。其に繼いでは新著百種の末頃に離鴛鴦といふのを書いたが、那が名を成す端緒であつたかと思ふ。」と云つてゐる。

註4 『小櫻縅』第一號には江見水蔭は「流水」と巴波山彦の名で「篝火」の二篇の小說、田山花袋は「秋祉」を發表してゐる。每號、水蔭と共に花袋は小說を發表してゐる。(雨中山(二、三、四)特に五號の「小詩人」は第五號をほとんどこの一篇でうづめてゐる。) 眉山に思想的影響を與へた、黑川文淵が評論を二號三號四號に書いてゐる。この發行事情は江見水蔭著「自己中心明治文壇史」一六九頁「初陣の小櫻縅」に詳しい。

五 硯友社と俳句

一 むらさき吟社

紅葉を初めとして、硯友社の同人が、俳句の結社むらさき吟社を作つたのは、明治二十三年のことで、紅葉が堀紫山と共に、自宅を出て本鄕森川町に二人の共同生活を營んだ頃であつた。

紅葉が俳句を初め、同人達にもそれをすすめた動機については、江見水蔭が『自己中心明治文壇史』に紅葉の說として「俳諧は實に觀察が銳く、寸句で非常に力の强い云ひ廻しをする。之は小說家としても學ぶべしで、移して以て文章を練るに適す」といつたやうな目的におかれた。

即ち文章修業の方便としての、句作であつた事が知られ、談林の風を學んだ彼等の傾向は、舊派の沈滯の殼の中に、一箇の新鮮な風を起したが、別に正岡子規の如く、當時の月並宗匠等——春秋庵幹雄、老鼠堂永機、雪中庵雀志、夜雪庵金羅、佳峰園等栽等で代表される人々への反逆の刄をさしむける意志もなかつた。

彼等が談林の風を學んだことは、西鶴の小說研究が、當時の彼等の動向であつたから、西鶴が師としてその風に親んだ、そして最初その句作から彼が出發した西山宗因の句作態度に、同じく心惹かれて行つたのであらう。

江見水蔭の『自己中心明治文壇史』に、むらさき吟社第一回の課題「櫻」と「田螺」の同人の句が、掲げられてあるから、それから引用する事にする。

挨拶に何と云はうぞ初櫻　　漣
鄙歌や或る山寺の初櫻　　水蔭
ゆるせ〳〵寡婦の家に初櫻　　眉山
物言はば一枝をきらむ櫻花　　柳浪
末社にもこぼれ錢ある櫻哉　　九華
腰のして老も若やぐ櫻哉　　虛心
劍拔いて風きりまくれ家櫻　　紅葉
叔齊が手を出して見る田螺哉　　眉山

なきものを泥中の珠田螺哉　紅葉
籠に入れて飼へるものなら啼田螺　漣
打つて出て同じ枕の田螺哉　柳浪
繪の中に聲ありと見れば田螺哉　眉山

いま公賣された『我樂多文庫』を飜してみるに、狂句、都々逸、狂歌の類は見出されるが俳句は掲げてない。『小文學』にもない。むらさき吟社の發會に於て、初めて俳句を作つた人が多かつたのであらう。然し互選の際は、議論百出、夜の更けるのも知らぬほどであつたと、水蔭は書いてゐる。さうした情熱は紅葉に於て最も明かに見らるる如く、句境の進展を見せた。

むらさき吟社の記錄は『江戸むらさき』にも掲げられてある。卽ち第九號（二十三年十月二十日發行）に「むらさき吟社月次集」として、

○十　印

初秋の聲や夜すがら背戸の竹　金淸
初秋や市も淋しき寺の鐘　泰美
初秋やふりむく顏の風あたり　羅白
初秋に捨てたる戀を思ひたり　波南

○十　印

男とや裸百貫の角力取　愛鼈

傾城に名の似てつよし角力取　行清

山黒く海白くして角力取　桑弓

草と露風に相撲を取たりけり　雪軒

〇龍眼寺萩の菓子箸を人に贈るとて

紅葉焚くは上戸なりけり萩の箸　梧井

〇失題

楓とも花ともつかず葉鷄頭　跛鼈

晝顏に露もよしなき夕かな　岸柳

〇知人の誰彼殘りなく風邪をひきけるに麹町の若殿ばかりはさる氣もなければ

花の山風のすき間もなかりけり　洲美

〇骨法師といへる男が戀に亂れて命も危ければ

水の面に蝶々あぶなし花の影　松葉

同じく十號（十一月五日發行）掲載の分を擧る。

〇十　印

いなつまや大海原を眞二つ　　共笠
稲妻や破戸きり裂く九寸五分　　啾々
稲妻や闇をたちわる一ト刀　　花瘦
稲妻にけつまづいたる梟かな　　其因
稲妻や刀根のなかれを一文字　　洲美
稲妻の松にぶつかる尾上かな　　其因

〇十五印

稲妻は十方世界に切火哉　　小籔

〇十　印

其色や手にはちぎれど蕃椒　　延春

〇十五印

蕃椒空家の庭に殘りけり　　燕飛

『江戸むらさき』には、この二回の例會の句の外、所々の「飛花落葉」欄に句あり、又獅子庵支考の「俳諧道」など掲げて、同人の俳句への關心を、如實に示すものがある。同じく『江戸むらさき』十號に、花瘦の俳號で、紅葉の「新居吟」が掲げられてある。初期の彼の傾向を示すものとして左に示したい。（註1）

無儲

うら枯や庭はともあれ臺所

鹿食

初熊は噂に聞きて豆腐かな

野興

朝炊や睡氣覺しの雁の聲

寡居

戀なくてさびしく立てる案山子かな

樂事（紫山人同居）

下戸同士團粉はどうぢや后の月

憶家

母の文寢冷氣遣ふ夜寒かな

僻境

歌もなし森川町の秋の暮

二　秋聲會と紅葉、小波

やがてこの關心は積極的となり、ひとり文章のための目的から飛躍して、俳句そのものの研究となつて明

治二十八年十月、秋聲會の創立となつたのである。主なる會員としては、角田竹冷、岡野知十、伊藤松宇、森無黄、川村黄雨それに硯友社側から紅葉、小波が參加して活動してゐる。

この時に至つて、既に他の佐々醒雪、大野洒竹、笹川臨風等の筑波會、正岡子規を主とする日本派と共に、月並宗匠等の舊派へ對抗する新興俳壇の輝かしい存在とさへなつたのである。

秋聲會は二十九年十一月三日『俳諧秋の聲』を創刊し、これを機關誌として活動をつづけた。以下毎月五日發行、第六號(三十年四月)より十日發行となつてゐる。そして第十號は九號の(七月十日)より飛んで十月五日發行で終刊となつてゐるが四六版和紙綴ぢの感じのいい小冊子である。創刊號の紅葉の「發刊之文」を見れば

俳諧久しく衰へたりと雖も、人間は戀無常の古の哀を盡し、地は山水生植の姿を改めず、天象は二句より萬世に續きて、月は定座を長へに、春は長閑に霞み、秋は寂しう雨降る夕、斯ノ道の好キ人ども聽雨窓の燈下に會して、亂吟の假初に戯れしも、彼は風調のをかしきに遊び、此は姿情の新しきを搜るなど、いづれか一ト癖無きはあらざりけるを、すねものどもの迭に棄てかたくや、其夜の奈良茶一升に百年風雅の義を結びて、秋聲會とは折から庭前の興を感ずるままの名にして、微衷は道の滅亡を前途に憂ひ、私に志す所は明治の俳諧を興さむとなり、されば月並の會席には各吟才の自在を振ひ工夫を宿題に費しては、偏に虚實の妙用を明むべく、さしも連衆の俳腸を敲いて凡そ萬餘章を得るに及びて、歳玆に順せり、時や到れる哉、世上の俳風漸く變じて、古池の濁れるも知新の波を揚ぐるに似たり、抑も秋聲會の此擧あるは、今にして始めて說くべきは說き、學ぶべきは固より學ばむと、心を向上の一路に行脚の門

每月五日發行

俳諧

秋聲



第一號

秋聲會機關雜誌・俳諧秋の聲

を出づるなりけり。我治道の風士幸に此志を納れて、道の爲に一宿一飯の助力を吝みたまはざれと云爾

明治二十九年十一月　　　　十千萬堂　紅葉

紅葉の文に成立と目的が明かに描かれてゐる。『俳諧秋の聲』十號（三十年十月五日）で第一期の運動を打切つて、機關雜誌型態より博文館の『太陽』紙上に進出するため「改刊の辭」が載つてゐる。即ち「わが「秋の聲」の世に鳴出でしは去年の霜月にして、茲に十月を經たり、抑も此會は去々年の秋をもて興り、始めは纔に吟徒五六のすさびに過ぎざりしを、遠近傳へて句を寄せ、交を求むるより、同人于野の志は動きて、此月刊の集は成りけり、爾の後俳諧益興りて、面目維に新に、蕉風終に競はずして新派の流轉た急なり、秋聲會は此時に遇ひて更に第三の進境あるべしと、一小冊子の狹きを出でて、普く世間に大踏歩し、凡そ歌はむとする者は鶯語蛙聲も十七字ならしめ、苟も十七字の調は盡く秋の聲たらしめむとて、此號以後我俳壇を「太陽紙上に高く築きて、ますます淸長を振ふべき便りとすと云爾」と記してゐるのだ。

俳句以外紅葉の文章をこの各號中求むるに「發刊之辭」（一號）と「ひよ男」（第四號）とがある。後者は腓男といふ語を使つた俳人をせめて、これに似た卑俗な造語を咏んだ三十餘句の例を示したものだ。

次に小波は次のやうなものを書いてゐる。

「靜屋川記」（第二號）俳文「題神易堂」（第三號）「俳諧をさな心」（第四號）幼童に自らを託して幼き句をよめるもの。「俳諧むかし噺」（第六・七號）お伽作家らしく、自ら昔噺をよみ入れた句を解說したもの。

次にこの十冊を通じて、咏まれたこの二人の句を拾ひ、凡その傾向を知りたいと思ふ。（番號は號數）

秋雨　秋雨の庭に灯ともして眺めけり　紅葉（1）

葱　貧厨に葱噛む晝の鼠かな（2）

足袋　姥捨の闇に足袋賣る灯影かな（2）

若菜　狼の人食ひし野も若菜かな（3）

炭　炭取の底貧しくも朽葉かな（3）

雀子　子雀や遠く遊ばぬ庭の隅（4）

悼梅逸子　人の名の梅ほのかなり夕月夜（4）

雉子　雉子の尾に良狗の額飾らはや（5）

萱　萱の葉に醋を乞ふと書き送りけり（5）

春寒　餘寒をば叱りにござる隠居哉（5）

雛　龍脳を貽る雛の別かな（5）

鳥囀　囀りの下に小さき祠かな（6）

蹴鞠　新築の庭にこけたる蹴鞠哉（6）

彼岸　新しき杖参らする彼岸哉（6）

握飯　握飯十もさげたる日永かな（6）

牡丹　牡丹さけてけやけう人の通行く（7）

蠅　睡足りてしはらく蠅と相對す　（7）
洗鯉　晝中の盃取りぬあらひ鯉　（8）
時鳥　時鳥あつらへ向の寢覺かな　（8）
納涼　門すゝみ人に來られてしまひけり　（9）
柘榴　柘榴古りて一斗の花を落しけり　（9）
炎天　炎天や誰か子はたしの放飼　（9）
蚤　戀衣起きては蚤を振ひけり　（9）

これが『秋の聲』に載せられた彼のすべてであるが、從來に比し著しく本質的な進境が見られる。「葱」「蠅」「洗鯉」は秀句である。特に眼立つのは季題の故もあるが、動物をよみ込んで生動の氣を見せてゐる事だ。（葱、若菜、雀子、雉子、蠅、時鳥、炎天、蚤の句中に見られる）然し談林風な滑稽さを持つ「春寒」「握飯」の句は彼の出發をうかがはせる。

其後を通じて紅葉の句の缺點を、滑稽をねらつて理窟つぽい（例　間違うてよい風のくる大暑哉）川柳狂歌趣味（例　買初の細君吝きめでたさよ）古人の句の換骨奪胎の失敗（其角の「鶯の身を倒まに初音かな」を「鶯の身を林中にさかさかな」）書卷の氣を衒ふ（例　鯉釣や呂尙が妻の行々子）變調の失敗（例　泡盛の瓶を皺して涼床に人呼ぶ頻也）等擧げて、中村樂天はその著『明治の俳風』の「尾崎紅葉」中で、小說に比し俳句の上の彼を全然否定してゐるが、少々それは酷評過ぎるかに思はれる。（註2）

紅葉は後年句作以外編著として、『俳諧名家選』『俳諧類題句集』『俳諧新潮』等あり、文學活動の一部を構成してゐる。

次に小波の俳句を拾はう。

露　沃野千里露萬斛の朝かな　(1)
蔦紅葉　蔦紅葉小猿の尻のまきれけり　(1)
木兎　木兎法師鐘撞く人に親めり　(2)
冬雨　犬の子の厨に寢たり冬の雨　(2)
書初　眞楷は武士の兒ならん筆初　(3)
氷　薄氷の晝まで殘る轍かな　(3)
暮遲　鷄の庇に鳴いて暮遲し　(4)
悼梅逸子　散にけり共時梅の薫りけり　(4)
蕨　山はへの字蕨はのゝ字〳〵哉　(5)
春寒　春寒の市に何人か火を失す　(5)
鞦韆　ふらこゝや鸚鵡もやがて眞似をする　(6)
行雁　行雁の腹を見上る廣野哉　(6)
春雨　春雨や居るかといへば居るといふ　(6)

握飯　握飯蟹に振舞ふ汐干かな　（6）
牡丹　紅は富み白はたうとき牡丹かな　（7）
靑簾　糊賣を呼ふや小窓のあを簾　（7）
蝙蝠　泣く兒にあれのゝ樣よ蝙蝠よ　（8）
競馬　武士のつれ〴〵なる儘に競馬かな　（8）
夏瘦　夏瘦のじつは胃を病む男かな　（9）
汗　地謠の何れも汗をぬぐひあへず　（9）
蕉實　芭蕉の實共葉の陰にひさくかな　（9）
秋の句　糸萩の頻りにこんぐらかるや風　（10）
居眠の顏へ線香花火かな　（10）

彼は『明治の俳風』の著者が「素直で無理をしない」のが彼の特徴だといつてゐるやう、穩かな俳風である。然し彼にも矢張り、「蔦紅葉」「握飯」「蝙蝠」「線香花火」の句のやうに、滑稽味への關心がある。

その他硯友社中眉山の句には、艶麗な印象的なものがあつて巧みだと思ふ。試みに『眉山美文集』中のものから、秀句を拔いて示しておきたい。

春　陽炎や鞍に着せたる笠の上
城跡を指ざす方や揚雲雀

夏　夢をのせて睫毛に蝶の狂ひ哉
　　牡丹花白くして月のなき夜かな
　　蛇の殺されてあり夏木立

秋　ふりかへる野路よ一村花薄
　　大原や蚯蚓鳴く夜の星の數
　　柿の實のころがりて子の寢にけり
　　塵塚に扇の骨や秋の暮

冬　骨柴の炭にもならぬ寒さ哉
　　埋火や隣は寺の鐘の聲

以上概說する如く、紅葉を主としてであるが、硯友社の明治の俳句の展開に占める地位も、彼等の小說がさうであつたやうに、舊きものと、新しきものとの間に介在して、過渡期の橋梁を築いてゐるやうに思へる。明治の俳句が、正岡子規によつて、全く革命された事は、人々の認めるところであるが、子規以前の明治前期の俳壇を支配した、天保風な墮落した、低調な、形骸的なそして、生命のない、理窟ばつた月並宗匠の俳句を、あたかも貞門の法式拘泥を、自由圓滑な談林派が破つて、そこになほ遊戲的な氣持は殘つてゐたにせよ、芭蕉の眞の俳諧の道への橋梁をなしたと等しく、同じく談林風な俳諧から出發した紅葉等の俳句運動――それは初め單に文章道の琢磨といふ目的から取上げられたものであつたが、そこより出でて、遂に子規

の眞に生命ある俳句の道へつながる、橋梁をなしてゐると言へよう。この意味で、硯友社の俳句運動は期せずして、明治の俳句史の展開に再批判さるべき重要な地位を示してゐると言はねばならない。

註1　この俳號について、江見水蔭氏の直接著者に語らるる所により、分明せるものを擧れば、紫弓、愛亀、行清、は小波。梧井、洲美、松葉、波南、花痩は紅葉、羅白は眉山といふ。

註2　中村樂天著「明治の俳風」明治三十八年九月より翌年十月まで東京二六新聞に「俳汝南」と題し書いたものを四十年九月一巻とし籾山書店より刊行。紅葉以下主なる俳人二十氏についての評論集。

第五章　硯友社の展開　その三

一　活　躍　期　（二十七年――三十年）

硯友社の作家は、その表面に表はれた、進出の爲の運動としての華々しさは、寧ろ前期に見られたであつたらうが、作品の文學的價値あるものを出さうとの努力、その結果の作品の質の上から見ると、この期に於いてより活躍し、奮闘してゐる。

進出期の活躍は、血氣旺んな青年の行動の如く表面的であつたが、此の期はそれが沈潜して堅實なるものとなつたのである。たとへ紅葉は前期の飛躍を見せぬどころか、沈滯の觀が事實あつたのであるが、彼以外の同人中には、それぞれ獨自的な存在を示した者もある。それ故硯友社全體として眺むれば、この期に活躍を示してゐる。また紅葉とても、決して自ら自己の境致に安んじてゐるのでなく、より眞實に、内面的に自己凝視をつづけ、やがて沈滯の域より更生しようと試みてゐたのだ。

さてこの期を論ずるには、國家的に、社會的に波瀾を起した二十七、八年の戰役の文學界へ與へた、直接間接の影響を述べない譯にはゆかない。

戰爭以前の文學界へ對して、二十六年五月三日第百八十九號の『國民之友』の論説は『文學社會の現狀』と題して

舞姫細君の時代は夢の如く去り、探偵小説鐵道小説の時代は來れり。四五年來、時ならぬ春を粧ふたる文界は、寂々然として枯枝に鳥の留るを見るのみ。萬物皆な發生期と閉塞期とあり、知らず今日は是れ閉塞期なる乎。眠るは起きんが爲めなり、休息するは勞作せんが爲めなり。吾人は今日の閉塞期に在りて將に來る可き發生期あるを疑はず。堂々たる文壇の二三君子、如何なる消息を世間に漏らさんとしつゝある乎、人は傳ふ所謂る文界の先輩諸氏、汲々として修養を事とすと、吾人は其の然らんことを望む。――

と抽象的に、新文學の發生を期待してゐるが、之を當時の鋭き批評家内田不知庵は『今日の小説及び小説家』と題して、同じく『國民之友』(二十六年七月三日第百九十五號)に、

今の小説家が小説を著すや、もと確信せる大主旨あつて之を表現せんと欲するにあらず。たゞ多少の文才を弄ばんとするより日常耳目に觸るゝ事實を述作するに過ぎざれば、若し冷酷に評せば引札の發達したるものにして或は叙事詩と呼び或は抒情詩と稱するは少しく誇大に失するの感あり。是等の所謂小說家は胸中抱藏する思想あるにあらず、況んや自然界の眞理を具象的に說明せんが爲に人事を唱ふの理に於ては更に悟る處なく、些々たる文才――引札を書くに熟達する手腕を以て新聞雜報の小說を綴れば小說の能事終れりと爲す。渠等は文章の道樂者なり、此故に渠等は小說を目するに遊戯文字を以てす。此故に渠等は輕浮なる文字を陳ねて漫りに奇巧を衒ひ俗眼一時の喝采を博すれば以て審美上の價値ありと爲す。何ぞ謬れるの甚だしき、詩囊の迷惑此上なかるべし。

と沈滯の根源を、作者の深奥な思想の缺乏に歸せしめてゐる。彼の評論が主として、硯友社の作家にあてられた事は、重ねて彼が『再び今日の小說家を論ず』中に

吾人は今の小說家が相應の伎倆と相應の學識を具ふるを信ず、其手腕も其識見も亦決して文化文政の作者以下にあらざるを信ず、然れども同時に今の小說家が餘りに冷靜を缺き質實を缺き自重を缺き精勵を缺けるやを疑ふ。若し夫れ "The style is the man" の語をして眞ならしめば、今の小說家が餘りに其人を暴露し過ぎたるほど文を作るに細心縝密ならざるを惜む。

といひまた

心意の修練即ち思想の涵養は文學の原動力なり、之れなくんば文學は死物なり。戲作者の心をもつて文學者の名目を冐すは是れ沐猴の冠着けたるに同じ。『人氣』の前に稽首禮拜し『世俗』の幇間となり『風流』三昧に耽り『通』と『粹』とに隨喜渴仰し而して西歐大家と雁行せんと欲するも豈得べけんや。

と、『國民之友』（二十六年九月二十三日第二百三號）に言つてゐるので察しがつく。彼の評論は、硯友社作家の弱點のみを誇大に見て、歐洲文學の天才的作家の事蹟を讀んで、直ちに當時新文學も萠芽期であつた日本へその考案をもどして、不滿をもらした點を見出すが、たしかに一面を貫く銳い刄であつた。

硯友社の作家は、前期より此の期の轉機に於て全く、行きつまつてゐた。そのねらふ文學の素材の世界は狹く、然し深くは進み得ぬ故に、作品の變化をあらしむるため、文章のスタイルの上に於てのみの苦心が多かつた。紅葉は彼の文學に持つ世界――情痴を中心とした世界をそこに現れる人物とシーンの上に、能ふか

ぎり廣く採つて描きつくした樣に思へる。だが描く態度は、いつか技術的に習練した地に固定しかけたのであつた。彼のみならず、他の作家もその儘では全く行づまりさうであつた。

かかる折、彼等を離れた動く現實社會では、國をあげての戰は起り、そして、苦しみながら日本は勝つたのであつた。

戰爭――そして戰勝の國民精神の上に及ぼす影響は、記す必要もなからう。勝利の感激、利益は暫くの疲れが恢復するや、やがて國家のあらゆる文化現象を豊富に飾る。直接間接に文學もその影響の色を何等かの彩りにおいて、塗られない譯には行かない。

さてこの戰爭以後の文學に就て述る前に、他方このうつり變りの前後、卽ち二十五年頃より戰爭前後までに發生し、硯友社作家を壓迫したといはれる大衆的な傾向文學――卽ち村上浪六の所謂撥鬢小說、黑岩涙香の探偵小說、續いて讀賣新聞で募集したので、一般の氣運も知らるる歷史小說について少しく考察し、硯友社作家との關係等も考へてみよう。

これ等の文學の發生の原因は、ロマンチツクな精神を基調とする社會思想と、在來の小市民の戀愛些事を主な題材とする小說への、反撥心理の合流したものではなからうか。

卽ち、讀者心理として、その讀む作品に平常の自己の生活に似た面影を見出す事によつて身につまされて、共鳴する場合も、反對に現在憧れながらも、求め得ぬ世界や人物を作者により、まざまざと見せられての同感もある。

坪内逍遙が、小說の主眼は專ら世態人情を描くこととし、寫實主義の立場から、ノベルを尊重し、これに對比すべき例として、ロマンス的傾向のある馬琴の作品を、勸善懲惡のモラルを含むものとして、高く評價しなかつたことが、その作の目標としての道德性の强調を否定することに於て、ロマンスといふ文學形態をさへ含めて、否定されたやうな結果になり、これが雜誌といふ發表機關の狹さと結びつき――このため『新著百種』や『文學世界』『新作十二番』などといふ、雜誌と叢書的な單行本の中間形態のものが發行され、幾分このみたざるものの補ひの役割を果したけれど――尙スケールの壯大な、視野の廣い、作家の奔放な空想力の豊かな、構成力の逞しい、ロマンスの形態の發展を阻害し、その後の文學を狹路に導いた點は、かうしたロマンス的作品を要求する讀者階級に、不滿をもたらしたことも考へらるべき事實であらうと思ふ。

かうした氣分が、一面彼等の心理に現世に求め得ぬ夢を、束縛された現世を絕つて、卽ち規帳面な型にはまつた世間から、定軌を逸した奔放な生活へのあこがれが、やうやく明治の新政下の泰平に馴れた人々のうちにあつたと思ふ。

かくてその心理は、或は浪六の描く三日月次郎吉流の力を唯一の武器として馳驅する、自由生活者の憧憬を生み、或は單調な日常より特異な生活への期待は、涙香の飜案する怪奇な情景となり、また現世の煩しさより、寛かに華麗な過去の世紀への漂流が、『瀧口入道』風の歴史小說への愛著を生んだのであらうと、考へられる。

高山樗牛は『明治の小說』で、從來の小說の反動に加へて、浪六の描く人物が、國民性に調和した人物で

あつたといふ事を指摘してゐる。俠客の持つ浪漫的な性格を指したのである。

この事は今日の文學界の例でも明らかにされる。今日の所謂大衆小說が、文學史的には自然主義以後の箇人主義的作品――作家の心境小說、私小說への反動とも見られ、又思想的には、現在の束縛せられた生活より劍なる武器が唯一の權力となり、その前には一切他の權力、富も、位階も破る事の出來た時代への追慕が、世紀末的な刺戟を欲する心理と交り、現代人の興味をそそるので、樗牛がかつて浪六物、歷史小說を評した、現世にみたぬ心より懷古的となつた一方に、單に過去への憧憬は、それを通じて消極的に、未來への自由をのぞむ心を反射すると思ふ。

次に浪六等の作品が、一時硯友社作家を壓倒したといふ事は、とりもなほさず多くの讀者を硯友社作家より奪ひとつたといふ事に、讀者を中心にして考ふれば言へると思ふ。今日でも大衆文學が現代の讀者層に壓倒的勢力を占めてゐるとはいへ、今日では中里介山や大佛次郎、直木三十五の作品を讀む人々と、菊池寬や三上於莵吉の毎日の連載小說を待ちわびてゐる人々と、是等を輕蔑し『新潮』や『改造』『中央公論』へ載る純文學作品、その人達の單行本を讀む人などあつて、讀者の範圍は廣く、且各々別々の讀者の層を形成してゐるのであるが、明治二十年代の中頃は、讀者の程度や範圍がかなり一樣に制限されて、それほどの區域もなかつたので、讀者の興味の推移も、鮮明に分つたのであつたらう。

然し、それにしてもその評の如く、あまりに誇大に考へてはならぬと思ふ。何故なら『三日月次郎吉』の讀者には、紅葉が多く持つたであらう婦人の讀者はむかぬものであり、また發表される新聞が、浪六は多く

『朝日』涙香は『萬朝報』で紅葉等は主として『讀賣』であつたので、單行本は別として、新聞の購讀者を中心とした立場からもかく言へるのである。

しかしながら、とにかくにも時代の要求にみたされぬ或るものを缺陷として、硯友社作家の作品に見られ、その爲かかる傾向的な文學が一時勢を得たのは事實であつた。かかる折しも日淸戰爭は起つたのだ。

この戰爭そのものは、文學者へ如何なる影響を與へたか。

國民の興亡の危機をはらんだこの大事件に、當時の文學者は何等の批判をも加へなかつた。文學の發生當時の人生、社會生活との深い交渉も、時代と共に、それ等とかけ離れた場所への逃避を能事とし、象牙の塔にこもり神秘な心靈の世界や、自然の中にさまよひ、官能の世界に耽溺し、日々に動く社會や人生の事件に直接關係する事をさけ、動く現實社會より超越するを、藝術家の誇とした事實は、かかる國家的大事件の根本に觸れる事をさけたのである。

しばらく、ふりかへつて戰爭を題材とした作品を思ふに、過去の日本文學に現れた軍記物は、盛者必滅のことわりを示す美しくも哀しい繪卷物をくりひろげて、そこに充つる哀歡の餘滴が、讀者を魅了したのであらうけれど、現在においては、表現描寫の技術はしばらくおいて、多くその背後にひそむ作家の社會觀や批判の立場が批評家の問題にされる。戰爭肯定か、戰爭否定か。すなはち前者は國家主義、帝國主義の立場からであり、さうした愛國心の發露であり、日露戰爭のうんだ『肉彈』の如き作品を言ふ。後者は人道主義、國際主義、社會主義的作家の發表する反戰的イデヱをもつ作品である。然し、かかる立場よりの作品は極近代

的のもので、かかる意識的なものを、日清戰爭當時望むべくもないが、第一戰爭に關心をさへもたなかつたその時代の作家を、

王師海を越えて西に動き、一國を擧げて國家的精神の大運動を見るに至りし時も、二流以下の作家に成れる淺近なる戰爭談の少數を省きて、一人の愛國義勇を唱ふるものあらざりき。啻に是の如き詩人なかりしのみならず、戰爭に關する著作を出すものを貶して、際物師と言ふに至つては、吾等は殆んど言ふべき所を知らざるなり。是の千載一遇の時機に臨みて、一人のアルント無くキョルネル無し、恨事ならずとせむや。

と樗牛は「明治の小說」中で非難してゐる。樗牛の「淺近なる戰爭談」といふ評を受けながら、この間、一人硯友社の江見水蔭は戰爭を題材とした作品を書いたのである。それは主に『中央新聞』に發表された極めて短いもので、七八十篇にも達し、後『水雷艇』『速射砲』の二卷にまとめられてゐる。氏は創作態度について『自己中心明治文壇史』中に

自分はキワ物の軍事短篇小說を『電光石火』の總名題の下に『中央』へ連載し出した。一日一編讀切が原則で、長いものでも四五回であつた。實際自分は筆をもつて劍に代へ、國難に殉ずるだけの意氣は持つてゐた。(從軍記者として行きたかつたが、この電光石火が當つた爲めに、大岡社長は自分を動かさなかつた。)素より戰爭のキワ物小說ではあるが、併し文藝品として取扱へる事を心掛けずにはゐなかつた。

といふ。戰場の一シーン、出征兵士の家庭等を、新聞の雜報にやや文學的な香氣を添へて書いた是等の短篇に、作品としての藝術價値は見出される筈はないが、文學の社會的効用の方面から見ると、當時の支配者のために多くの役割をとげたのであらう。水蔭のこれ等の作品は、されば文學の社會への積極的な働きかけ、社會との握手の角度から幾分の價値はおけるものであらう。

かかる性向の作家の常として、水蔭はやうやく凡ての作品に、イイジイ・ゴオイングな筆をかり、諸方面の通俗的作品に入つてしまつたのであるが、ともすれば懷手して、動く社會現實へ、その本源への探求に積極性のない、東洋的文人臭味を、作家の居心地よき安住所として、大きい掌の把握力、生々しい生活力を缺く作家の中で、かうした文人臭味をいさぎよく清算したところの意義は認めらるべきであらう。

日清戰爭の勝利は、更に日本の存在を、世界的舞臺に明かな脚光で浮き出した。地球の國々との交渉が、國際資本主義組織の圏内に入り、在來の水準を引あげてなされた。

外國との連絡――海運業の發展は、この戰役を段階として非常な發展を見た。卽ち日清戰役には三十萬の大軍を大陸へ輸送したため、國内の船舶では不足な程で、日本郵船會社は外國船を購入してこの急需に應じ、軍事輸送に盡し併せて內地近海の海運のため社外船舶も著しく增加した。(註1)

それ故に二十五年に四十五隻、六萬四千一百五十七噸であつた郵船會社の船舶が、二十七年には五十二隻、八萬六千一百八十二噸、是に政府の購入拂下船三萬噸を併せて、十萬噸を越え、二十九年に於ては俄然汽船は八百九十九隻、三十七萬三千五百八十八噸に及んでゐる。

これ等の船舶は、平和克復の曉、海外航路の用にあてられた。卽ち二十九年三月、日本郵船會社は當時の優秀船土佐丸を歐洲航路第一航海に送つて、爾後毎月一回の發航とした。

第九議會の航海奬勵法、造船奬勵法の可決二十九年三月その發布は、この氣運をいよいよ高め、日本郵船は是年五月、資本金八百八十萬圓を二千二百萬圓に增資し、歐洲航路を毎月二回とし、新に大船十二隻を造り、別に米濠二航路のため六隻を新造しようとし、同月東洋汽船會社も米國航路を目的として資本金一千萬圓を以て起つた。海運業の發展を具體的に示す事は、一に日本の國際的地位の上昇してゆくバロメーターを示すに外ならぬ。かくて又物貨同様あらゆる文化現象の、各國相互の輸出輸入によつての交流を示すに外ならぬ。ひいては新しい海外文學のより旺盛な輸入が、この國の文壇を刺戟したことを示すに外ならぬ。事實二十七年十一月發會式を擧げた「帝國文學」の海外騷壇や、二十九年創刊の『めざまし草』等にこれを反映してゐる。國際的なものが、傳統的なものの上を更に濃い色で掠めて行つた。さうした空氣が硯友社作家を包んできた。

註1　『開國五十年史』中近藤廉平述「海運業」に據る。

二 觀念小說・深刻小說の考察

日清戰爭の後の社會の新氣運は、前にも述る如く文學の上にも波及する。此の期に於ては、硯友社以外にも、ますますその箇性を輝かす作家、露伴、一葉等を主として新しい作家が存在し、新しい芽生、たとへば『文學界』の群などの生長の過程が見られた。

その反面、二十六年古河默阿彌逝き、二十七年假名書魯文逝き、二十九年末廣鐵腸逝いて、古き時代の人物は生命的にも消えゆきつつあつた。

かくして、主として硯友社の作家等を中心とし、着々築き來つた文學の價値が、いよいよはつきりとなり、又社會の發展が、文學要求の聲を益々旺んならしめてゐたのである。一方出版事業への投資は、二十八年には『帝國文學』『太陽』『文藝倶樂部』『文庫』等の創刊となり、その後續いて『めさまし草』『世界の日本』『新小說』『新著月刊』『靑年文』『ほとゝぎす』『日本主義』『中央公論』『江湖文學』『新聲』など刊行され、文學界の新氣運と呼應し、これを扶けた。

かかる汪洋たる新氣運の背後に、前述の如き、狹き情痴の世界にのみ題材を求め、深く根本的現實への探求を缺き、單に表面的ストオリイの興味と、文飾の變化のみへの關心に對し、最早次第に上昇しゆく讀者階級の飽食と不滿の狀態にあつたこと、これ等に對する專門的批評家の指摘等より、心ある作家等は反省をなしつつあつた。そして戰後間もなくして新しい展開を示した。

それは從來の小說より、より人生派的であつた。從つて華やかさより暗さへの傾向があつた。明白にして、時にあまりに作爲的な作のアイデアがあつた。從つてそれを語るに急で、長篇より短篇形式が多くあつた。しかし從來の外形模寫的寫實主義が、內面的となり心理的となり、性格描寫も巧みとなり、本質的なリアリズムへの道へ通じてゐた。

然して是等の作品を描いた人達が、期せずして硯友社の門より出でた。川上眉山、廣津柳浪、そして紅葉門下の泉鏡花である。

眉山、鏡花のそれ等の作品は、作の持つ觀念より、それが作のモチイフとなつた爲、文學史家は觀念小說といふ名稱で呼び、柳浪の作品は、人生社會の悲慘、深刻なる一面に題材を求めて、別にアイデアあつて描くにあらず、題材的關心によつて書かれたので、悲慘小說、深刻小說と呼ばれてゐる。

さて思ふに、箇々の作家はその生きてゐる當時の、外部的な環境、指導的理論をこめてジアナリズムの波に作用さるる所が、幾らかあるとはいへ、その作品の展開を單に外部的な事情、「社會の聲に應じて」など一言で、作品の出現を說明し盡さるるものでは勿論ないのだ。

作家が同じ時代の他の作家の試みない、他の作家と異色のある傾向へ進んだ事は、必然にその作家の箇人的特異性——それまでの境遇、先天的或は後天的に作られた性格が、重大に關係してゐる事を知らねばならぬ。それ等の事情で、他の作家より一層時代へ敏感である事もあり、他の作家と異つた傾向へ轉向する。

作家として出發した當時、それほど目立つた差異のない硯友社から、かかる異色の者の出た事は、その箇

性に歸せないわけにはゆくまいと思ふ。

眉山において、柳浪において、又鏡花においてこの理由を容易に見出し得ると思ふ。

川上眉山は、その頃前期の浪漫的な華やかな夢が破れて、傷ましい社會の嵐に吹きさらされてゐた。前に言ふ如く、二十六年の父の死後、家庭の紛糾は過敏な性格の彼の感情を搖さぶり、精神は暗くなつて行つた。『きのふけふ』の著者は記してゐる。

其頃眉山君と余とは家が近かつたので、月に一度や二度は互に往來したが、文學の話よりは債權債務の法律問題に熱心であつて、伝ういふ負債は辨償の義務があるだらう乎とか、伝ういふ督促は怎うして切拔けたら宜からう乎とか言ふやうな咄が多かつた。今では其事情は忘れて了つたが、道德上には何等の責任も義務もない夢にも知らない債務を俄に脊負はされて、眉山は其辨償方法に苦んでゐた。

かかる生活苦、社會苦を嘗ての、生ぬるい甘美な生活から一變して味はされた眉山の心を惹きつけた人々は、もはや同じ道程を十年步いて來て、たとへ作品の實驗に於ては樣々に苦んだとはいへ、人生の軌道は餘りに滑らかに辷りすぎた硯友社の人々でなく、その若い熱情と奔放な行動に、いくらかの華やかなものを漂はしてはゐたが、人生と藝術に眞摯な態度で苦んでゐた、それは島崎藤村の『春』に具體化されてゐるやうな、『文學界』の群であつた。

眉山はその同人馬場孤蝶に、二十八年十二月二日附、次の様な一節を含む手紙を送つてゐる。

此頃は神經もあやしく過敏になり候て物狂はしきやうなる折も候、百囘ばかり續くべき長篇書出し候

へど氣に入らず候てたゞ筆を投ずるのみに候、興も乘らず、情も涌かずたゞいやで〳〵〳〵〳〵實にしやうが無く候。自信はいよ〳〵薄くなり希望はます〳〵消えかゝるのみに候、或時は子供のやうな肝癪を起してぢれて〳〵八方八ツ當りにだゝをこねきつて手もつけられぬやうに周圍のものを困らせぬき候……想海の一怪光は何とて予にかくの如き煩悶を與ふるか、今は大靈そのものを敵視するやうに相成候、いつそダイナマイトでも頭へぶつつけてこな〳〵になつてしまひたく候。（註１）

と、彼の弱い精神にのしかかる重壓、それから起る焦燥と苦悶を書き、あくる年二月二十三日には、尙次のやうな章句が書き送られてゐる。

あゝ目下僕の一身については風雲轉た急であるに、筆下にこんな閑日月があるとは、僕も隨分明間の多い人間ではないか、本年一月の初めからこつちへかけて僕の計畫した種々の事業は過半壞れてしまつて、今は何處へどうして何うなるのだか、自分にも殆んど分からぬのであるけれども、安心してくれ給へ。僕は何處までも世俗の外に超然たる事を決して失はぬつもりである。

僕はね、此五十日ばかりの間浮世の中を驅けづり廻つて種々雜多な人々に會つた、世間にろくな奴等は居らぬ。燕尾服の狼、大禮服の貂、目鏡をかけた豚、シルク帽の猿、鞄持つ鼬、紫衣まとふ狸、宛然動物園の中へ立つたやうな感をした、そして最後につまらぬ下らぬ淺猿い世の中であるといふ意をいよいよ强めた。今更ではあるが世は僞善僞德僞誠のかたまりである、彼等は何故にみえをするか、何故につくらふか、何故に面を拭ふか、不思議な程である。

と自らの内部の憂鬱は一變して、外部社會の虚僞を憎みつつ、自らは超然たる地位へ立たうと欲し、僅か三、四年以前までは、ただ藝術の麗しい花園へのみ憧憬した彼は、かくては

あゝ、これにつけても君を思ふ世間君の如きよく幾人かある。僕は君を得た事を若し神といふものがあるならば實に神に謝さねばならぬ。相別れてより早く既に月を隔つ、再會またいつを期すべきや。

と友情への懐しみを寄せてゐる。

かくて箇人的に見てからした、周圍の社會――それはそこを構成する大きなギャップを持つ機構の根本へまでは、認識の眼は及ばなかつたが――それへ對して、自らの不幸を釀しだし、壓迫するものとして、自然發生的な一つの觀念を抱いたに違ひない。ここに我々は、彼の所謂觀念小説を、單にジアナリズムの傾向に引かれてとばかり見る事を許容し得ない、本質的な動機を見るのだ。

眉山は『文學界』の人達と近づいて、より文學への眞摯さに觸れたが、その頃『文學界』の人達の親しかつた、女流作家として名のあつた、樋口一葉とも知己になつた。一葉は眉山の最初の印象を、明治二十八年五月二十六日、日記「水の上」に次のやうに記してゐる。一葉の筆に描かれた眉山の姿として、興味があるから、記しておきたい。眉山は馬場孤蝶、平田禿木によつて、初めて一葉に紹介された譯である。

馬場君、平田ぬしつれ立て川上眉山君を伴ひ來る、君にははじめて逢へる也、としは二十七とか、丈たかく色白く、女子の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし、物いひて打笑む時頬のほどさと赤うなるも、男には似合しからねど、すべて優形にのどやかなる人なり、かねて高名なる作家とも

おぼえず心安げにおさなびたるさま誠に親しみ安し、孤蝶子のうるはしきを秋の月にたとへば、眉山君は春の花なるべし、つよき所なく艶なるさま京の舞姫を見るやうにて、こゝなる柳橋あたりのうたひめにもたとへつべき孤蝶子のさまとはうらうへなり、君の名を聞初しはもはや四年かほど〳〵五年にも成るべし、參りよる折を得がたくて御近けれどもかくうとくは過ぬ萬に心隔ず物語をたび給へとて打とけてかたる、來月あたり合綴のもの春陽堂より出さんはいかになどいふ、小説中の人物のこと、世間の事、我どちが業のくるしき事、朝寢なる事、自だ落なる事、正直なる事、損なることなど語り出るに極みなしと記して、淡々たるその日の記録を止めてゐるが、それより半歳を過した、翌年の一月には、

　この頃世にあやしき沙汰聞え初ぬ、そは川上眉山と我れとの間に結婚の約なりたりといふうわさ成り、岡やきといふものおびたゞしき世なれば傳へ〳〵て文界の士の知らぬもなしといふ、あるものは傳へて尾崎紅葉仲立なりとさへいふめる、あるもの紅葉にかたりたるに高笑ひしてもしさる事さだまらば我れ媒しやくにはかならず立つべしといひしとか、よみうり新聞新年宴會の席にて高田早苗君は眉山が肩をうちてこの仲立は我れ承らんとたはぶれしとか、こゝにかしこに此沙汰かしましければいつしか我れにも聞えぬるを、あやしきは川上ぬし知らずがほを作り給ふ事なり、この人の有さまあやしとおもひしは過ぎし八日の夜われに寫眞給はれとてこばむをおして持行し事ありき、母君も國子もひとしういなみしを、さらばしばしかし給へ、男の口よりいひ出づる事つぶされんは心わるしとしひていふに、さらば五日がほどをとてかしつる其寫眞をばさながら返さず、人結婚の事をいひて君は一葉君と共やく有るよし

誠にやとゝへば、そは迷わくの事いひふらすものかなとて打笑ひ居るよし、八日の夜のさまはほとんど物くるはしきやうに眼をいからし面を赤めて、なに故我れにはゆるし給はぬにや、我れをばさまで仇なるものとおぼし召か、此しやしん博文館より貰はゞ事はあるまじけれどあやしう立つ名の苦しければここに參りてかくいふを猶、君にはうとみ給ふにや、男子一たびいひ出たる事このまゝにしてえやはやむべきとて、つく息のすさまじかりし事、母君かげに聞て胸をば冷し給ひしよし、我れに妻の中立して給へや、此十五日を限りにして其返事聞度しいかで〳〵などせまられたる事ありしが、それこそ思ひ合せてあやしき事一つならず、文界の表面にこの頃あやしき雲氣のみゆるは何ものゝ下にひそめるならん、眉山排斥の聲やう〳〵高う成りぬ。

この日記によつて見れば、眉山が一葉に寄せた友情以上の積極的な愛情がうかがはれる。かつて前期に述べた女性へ對する遊戯的な關心から離れて、理智的なる女性への關心も彼のその頃の心境を示すものと考へられる。然し理智的な一葉は情熱にも溺れえず、冷靜に自らをまもつてゐるのだ。

次に廣津柳浪の場合も、彼はもともと暗い性格を持つてゐた。三十一年に書いた『をさなきほど』に幼時長崎に生れてより、筑後の小村の親戚に託されてゐた頃の、剛情な性格を持つた自己の思ひ出を見られるが、その頃から他の硯友社同人の多くは都會に生れて、苦勞を知らずのびのびと生長したのに比して、流轉の生活を多く經ては、そこに人生の苦しい半面も十分味つたに違ひない。

即ち、文化元年六月八日、長崎に生れた彼は、十歲にみたずして、兩親の膝下を離れ、漢學修業のために、

他鄕に赴いたのを初めとし、しばしば住地を變へて、明治七年上京、或は軍人たらんとしては期を逸し、醫師たらんとしては自ら病み、遂に商人たらんとして、大阪に赴いたが、それも斷念して明治十三年再び上京した。

かくて農商務省の官吏となつて、窮屈な官吏生活に、裏面においては放縱な五年の生活を送りつつあつたが、明治十八年二十五歲にして、それさへ辭して、放浪二年の日を送つた。

すでに十六年五月に父を失ひ、一月おいて母を失つた彼は、人生無情と觀じていつかニヒリズム的な氣持もしのびよつたに違ひない。

彼が、處女作ともいふべき『女子參政蜃中樓』を發表する前、既にかかる流轉の世を眺めて來た事は記憶さるべきであらう。

その子息廣津和郞は『柳浪傑作集』（大正四年版）に父について序して曰く「彼は青年のやうに人生問題に惱んでゐる。彼は所謂おとなになれない。彼はあきらめといふ事を知らない。彼は世間と妥協する事をまるで知らない。彼の眼、彼の頭、彼の神經に觸れるものはすべて彼に堪へられない。嫌惡すべきもののやうに思はれる。――彼は障子に靑いカーテンを掛けて日光を遮つた暗い部屋の中で孤獨な六年を送つた。」と文筆を抛つた後の生活を書いてゐる。彼の晚年の生活であるが、もつて生涯的な性格の一面が見られるとも思ふ。

かくて柳浪とても、田山花袋の『東京の三十年』中で評する如く「一方『深酷』といふ世間の評語に拘れて、わざと心にもない誇張をやるやうな」傾向が、後年はいくらかあつたであらうが、その初めからジアナ

リズムの波に乘つて、かかる傾向の作品を發表したとは言はれない。既に『新著百種』の『殘菊』に萠芽してゐる暗い現實觀は、眉山と等しく彼の性格、環境より培はれ、これ等と當時の社會思想・文學思想と結合して、その作品の底流を暗くしたと見るべきであると信ずる。

鏡花の場合は、本書の中心と離れるが、彼とても年少にして文學に憧れ、色々の苦澁をなめて上京し、紅葉門に入ることを許されてその狹き玄關番として、彼とさまで年も違はぬ硯友社の同人達の下にあつて、尙彼の作品を發表するよすがもなくひたすらに修業しつつあつた眞劍な文學態度が、生國の北方的な精神と結びついて、現實を見る眼の深さを得たに違ひないのだ。これ等の作家の性格、箇性をこれ等の小說分析の一つの鍵とする事を忘れたくない。

註1 眉山のこれ等の書簡はすべて石橋思案編の『眉山美文集』による。

三 眉山の作品の發展

眉山が次第に社會の壓迫に責められて、現實に對する見直した態度に出で、從つて『白藤』の如きはその動搖の影が見られる事は、前述の通りであるが、つづいて二十六年五月讀賣新聞に發表した『賤機』には、素朴な別莊守の靑年の、一本氣な戀愛に對して、對手の貴婦人は、幾年かの後に、靑年が彼女と社會的地位に於て、對等に出世したら、弟として愛さうと言ふが、靑年は現在の愛によつて、凡てを得ようとする、かかる靑年の戀に、浪漫的な中にも夢と現實の相剋をみるが、次の二十六年十月發表の『雪折竹』には、お露

といふ少女が、貧しい父との二人暮しを助けるため、料理屋奉公をすると、その店へ來た客の紳士が、お露の亡兄の友人であつて、彼によりお露は引きとられたが、そのうち二人は相愛の仲となり、その妻となる筋が描かれてゐる。『賤機』では社會的地位の差に破れた戀愛が、ここでは一寸した機緣で勝利をえてゐる。

更に二十八年一月發表の『靑葉』では、彼の前期に異る浪漫的な女性觀が、作中に見られて興味がある。『靑葉』の主人公は雄次といふ、作者の面影を示す靑年詩人であるが、彼に愛情を注ぐ女性へ對して、自らも彼女を愛しつつも、反省しては

あはれ世に天の福音を傳へ、遍く人間を慰撫せんとの志を抱く我ならずや。兎にも角にも脫俗の詩人として、高く飛ばざるべからず、大に歌はざるべからず。我身は飽くまで自由なるべし。我は寧ろ係累のなからん事を願ふ。一生百年の血は旣に美の神に捧げたる我、微塵も私欲なきこそ身につけてのこの本懷なれ。我はいつまでも妻なくてあるべし。

といひ、また

空を仰ぎたる目の中には、あゝ美の御神よ。おん身の爲に我思を斬捨てたる此あはれなる我を見たまへ。

と『靑葉』の主人公の詩人雄次が言葉をかつて、藝術の奉仕の爲、溫順な女性を詩人の狂人の樣な生活にまきこんで起る犧牲をさけた。浪漫主義的な態度は、女性と戲れつつ小說を書いたやうな、前期の生ぬるさでもなく、その後の自然主義作家等の如く藝術の爲には、女性を實驗臺へ橫たへ、鋭いメスで冷酷に解剖したのとも異り、また阿片や、酒と共に陶醉の具に女性を供した、世紀末の文學の徒の態度にもあらず、それ

は、浪漫的な麗しき藝術のみへのあこがれで、眞劍ななかに倚夢がある。それはすでに二十五年北村透谷によつて

嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辯となりて其嘲罵する所となり其冷遇する所となり、終世涙を飮んで寢ねての夢覺めての夢に郎を思ひ郎を恨んで遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ。戀人の破綻して相別れたるは雙方に永久の冬夜を賦與したるが如しとバイロンは自白せり。

と結んだ論文『厭世詩家と女性』に見ゆる思想と通ずるものがあり、彼が『文學界』の人々と親んだ理由も見られるであらう。

天上に向けられた浪漫主義の眼が、身邊の現實の社會に觸れる時、そこはあまりに冷かに醜きものである。前に記した燕尾服の狼、大禮服の貂、目鏡をかけた豚、シルク帽の猿、鞄持つ鼬、紫衣まとふ狸のさまよふ人間獸の世界に見えたこの現實よりの逃避の思ひと、一方現實への嘲罵とがその時生ずる。半身を藝術の塔にこもらせた眉山は、やがて半身の手でこの冷酷な社會、人と人との交渉を描く樣になつて行つた。

二十七年五月發表の『有明』には、夫の死後、愛欲の爲には、その妻が、後見人たる夫の弟と通じて、當主の青年を虐待して、青年の籠絡を、夫の弟の妾を下女に化けさせて、行はせたがこれ等のいざこざに堪へかねて、青年は家出するといふやうな筋で、最後に「其後いかなる身となりけん。彼は跡形もなく長く消失せぬ。天地聲なし。日はたゞ上を照らせり。進行く世はます〳〵進みて、よき衣着たる人はいよ〳〵巧みに

物言へり。」と人の世の相に憎惡の思をひそめ、その後二十八年一月に發表した『大盃』には父のため、女のため亞米利加三界まで出稼してきた、梅吉といふ男が歸國してみると、父は死んで居り、女には裏切られてゐる。男は女に會つて恨をいひ殺さうとまでしたが、思ひかへした。しかし一方、女は自責の念にかられて自ら投身した。男は自暴自棄となり、酒をもつてその身を溺らし、大盃を枕に死んだといふ、人生の悲慘な一片を描いてゐる。

『有明』にも、『大盃』にも、まだ物語の主人公としては、現實性に乏しい、淡いベールで被はれた人物の氣がして、物足りなかつたが、二十八年二月發表の『書記官』には、かなりリアルな人物が點出させてある。筋は三好善平なる實業家が、その娘光代を、綱雄といふ若い哲學者にやる筈だつたのを、溫泉場で知已になつた奥村辰彌なる書記官に、利欲のためやる事を題材として書いたものである。あまりに最初からその職業といふ概念を、頭から人物の上へ押しかぶせた窮屈さは、かかる傾向の作品へ當然落ちる非難であらうが、精神的なるものより、物質的なるものに惹かれる世人へ對する眉山の輕蔑が示されてゐる。彼の當時の觸れあふ現實社會が、必然かかる觀念を生ましたのである。同年八月の『うらおもて』——觀念小說の代表作といはるる作品であるが、これもその一つのあらはれである。

深夜、我が家に侵入した盜人をよくみれば、思ひがけない自分の戀人の父であつた。——しかも當人は慈善家として德行家として、人に知られてゐる境遇なのである。驚いて翌朝、その人の家を訪ふて、昨夜のことを責むれば、最初は端然として動じなかつた彼が、遂に懺悔していふに、我も初めよりして斯かりしにはあ

らず。初め我は最も正直なりき。世の人はこれに對して何とか言ひたる。人は我を目して欺きよしとせり。初め我は最も善良なりき。人は我を目して愚かなりとせり。初め我は最も溫厚なりき。人は我を目して意久地なしとせり。我は人に交るに德を以てしぬ。人は其德を利用してただ自巳が利を計れり。我は人に交はるに義を以てしぬ。人は其義を奪取つて遠く逃去れり。我は人に輕んぜられたり。卑しめられたり。嘲けられたり。踏付けられたり。そは何等の故にもあらず、唯我が善人たるが故なりき。」といふ冒頭で、世の僞善、殘酷、無情一切への復讐をとげたまでであつた事を述べたが、この上生きる必要もなく「あはれなる贄の子に目を掛けたまへ」とただ娘の將來を託する書を殘し、短銃で死ぬといふ筋で作者は、そこに個人の弱さより、むしろ社會の壓迫を憎んで、それに相應しい、烈しい急速な調子で描いてゐるのである。作品の構成に作爲の跡はあるが、內容性において深められた厚味を發見する次第である。

かかる嘲罵を飽くまで續け、深く食ひこんでゆく事をせず、一種の倦怠の眼を以て、人生の出來事を見る態度を示した作品をも、つづいて發表してゐる。二十九年三月の『鹿子絞』は、なごやかな從兄妹間の愛にからませるに、從妹へ思をよせた、他の一人の少年のことを書いた小品であるが、その結果に

それつきりだ。それつきりでは話にもならぬと言つたつて、それを僕が知るものか。今盛代の忝なさには、此樣な事を言つて時をつぶしても、先々絞罪にもならないのだ。我々は日に、誰某が女の爲に出刄庖丁を振廻したとか、何處其處の娘が馬の足の家へ驅込んだとか、何某の大臣が待合へ入つて女將を賴んだとか、何處の方丈が什物をこかして普賢さんを受けたとか、奧樣が忍んだとか、後家さんがおろし

たとか、警八風だとか、七つ下りの雨だとかいふ事を聞く。それが何であるか。

我々は又、華臍魚鍋の前に胡座を組いて、片手に箸を持て片手に猪口を出す三尺帶だの、妓を携へて海濱へ行て、高が酒を飲んで戯けて寢るばかりの男だの、今日は全盛を誇つてだゞら遊びをして、明日は尻尾を捲いて駈落する相場師だの、全く人を盛潰すほど正義公道を振廻して、其實自分が可愛いゝ志士だの、可笑しくもない事に笑狂つて、踊つて跳て、洒落のめして、家へ歸れば惡く氣むづかしい太鼓持だのを日毎に見る。それが何であるか。裸にしなければ雌雄が分らないのか。血が出れば紅いのか。骨が出れば白いのか。痛くなければ正宗か。何が何だかめちやくちやだ。それでいゝのさ。

と記してゐるのは、世の中の下らぬ事實に對する嘲罵にも、倦怠した眉山のしらじらしい空虚な心と、それが彼の弱い性格による事を思はせられる。

嘲罵と倦怠との間で、消極的な皮肉な眼つきで人生を見てゐる彼は、三十年五月發表の『島田くづし』には、贋造紙幣を行使する男に、一人の女が自分の現在の男を裏切つて、なびいてゆき、その男が捕へられた頃には、その子を腹に宿した皮肉な人生を描き、同年六月『奥樣』には、さんざん選んだ末に嫁入らせた相手の男は、仕樣のない放蕩兒であつた事を書いてゐる。皮肉とはいへ、無智な女性に對する彼の同情の心がその作品に淡くにじんでゐる。

氣弱な半面に、まつしぐらに、氣短かな性格であつた眉山を思はせる作品に、三十年十月發表の『絃聲』なる一篇がある。この筋は、紅葉の『多情多恨』に類似して、妻を失つた主人公が、亡妻をしきりにしたふ。

思ひつめた餘り、つひ發狂して、夜半家を飛びだして妻の墓を、發く事すらあり、また深夜、人無き室に妻の愛琴が、自然鳴り出すのを聞く事などを描いて、全篇は暗い色で塗られてゐる。

ひとしく亡き愛妻を憶ふ主人の氣持を描くに、細かい心理描寫においては、到底紅葉にかなはなかつたといへ、その烈しい情熱、深酷さには紅葉は及ぶべくもない。ここに紅葉と眉山の性格の差を思はせ、いらいらとした眉山の當時を如實に作品に反映してゐる。

以上は、眉山のこの期における內容の展開の跡の素描であるが、之を最初、同傾向の作品を發表した、泉鏡花の其後と比較する時、興味ある對照をなしてゐる。

鏡花は、北國人として、またその後の環境によつて、暗い現實觀より、より強く藝術家の持つ正義觀を持ちながら、現實を見て、そこに現實主義的傾向より、理想主義的方向への上昇となつて行つた。彼は一面現實の粗雜醜惡な面に眉をひそめてゐるが、それは藝術家としての正義派的性向によるものであるから、自らの氣品ある趣味性質よりやがて興ざめて、精神內部に神秘的現實を構成しつつ、その世界へ上昇して行つた事は眉山と異つてゐる。

眉山は、その間の社會の現實より逃がれ、神秘的な精神の內部現實の上昇する藝術へ進むか、生々しい社會の動く現實に直面し觸れあつてゆくかのデレンマに焦燥したのである。そこに盡きない彼の苦悶があつたのであらうと思はれる。

眉山の精神的摸索は、前に述べた如く『文學界』の人達に近づいて行つたが、尙外に彼が思想的感化を受

けた人に黑川文淵がゐる。

黑川文淵については、江見水蔭は彼の『都の花』に掲げた「花守」を激賞して吳れた一人として、武內桂舟から紹介されたと言ひ、その人物に就て、『硯友社と紅葉』中の「硯友社と自分」の中に、「前には薰梅月とも名乘つて、矢張『都の花』に小說を書いたので有つた。この人は後に『若葉』といふ單行小說を春陽堂から出して、當時一寸注目された一人で有つたが、鷗外對逍遙の理想沒理想論を野次つたり、文學評論を試みたりして、其方でも一旗幟を樹てたので有つた。房州の人で、漁業（潜水夫を使つて鮑を採る）に失敗やら、失戀やらで、妙に世の中からスネて、放浪生活を續け、最近まで講談社の仕事などしてゐたが、酒に隱れて遂に失意に終つたのは惜しむべしだ。」といひ「この文淵は併し自分に取つて、益友で有つた。駄々ツ子の守をするやうにして、僕のヘンチキな文學論を修正をして吳れた。花袋も僕の紹介で交際して、兄事してゐた。それで當然文淵も『小櫻縅』に、評論を書いてゐた。」それから眉山と文淵の關係について「一方眉山は、同じく硯友社にあきたらなかつた。それは全然思想の上で有つた。然うして『文學界』の諸子と多く交際するやうに成つた。――決して硯友社と絶交したのでは無かつた。然うして一面に文淵とも親しくした。眉山―文淵―花袋―水蔭―社中は詩人派だと云つて笑つてゐた。」と記してゐる。

內田魯庵も『きのふけふ』に眉山が家庭的、物質的に困窮してゐた頃の事を描いて「硯友社よりは寧ろ『文學界』同人と親んで、生に悶ゆる詩人の顰みに共鳴し、一方には、今は隱れて聞えないが、黑川文淵といふ一種異色ある思想家が同居して朝夕互に偏哲學を戰はしてゐた。」といひ、田山花袋も『東京の三十年』中の

「上野の圖書館」中に、彼より深い影響を受けた事を記し「歸りにはいつも二人で揃つて其處を出かけた。哲學に深い國學に深い氏の話は、私に常に種々な深い研究心を起させた。氏はドストイフスキイの『罪と罰』を愛讀し、二葉亭の『浮雲』を愛讀した。何方かと言へば、硯友社より外國文學派に屬した人で、批評では忍月、綠雨などよりぐつとすぐれた眼と學識とを持つてゐた。汚い下宿住ひをしてゐたが、丁度『罪と罰』のラスコニコオフのやうな生活をしてゐたが、それでゐて、私が行くと、縱横自在にその時分の文壇の形勢を批評した。『紅葉なんか駄目だ』から云つてかれは歎息いた。」それから放浪の生活を送つて「非常に大きな天才」であるやうに思はれまた「ロシアの小說の中に出て來る書生」のやうな彼の姿が、突然後年眉山の通夜の席に現はれたが、その後の消息を知らないと書いてゐる。水蔭、花袋ばかりでなく、この謎のやうな人物が、眉山にかなり影響した事は知られるであらう。かく文淵のおよその人物は、上記の印象で幾らか捕へられるであらう。

この文淵の思想を具體的に示すものとして、二三彼の書いたものを讀んでみるに、『小櫻縅』の二號に「現代作家の本領」なる評論を掲げてゐる。

それによれば、一時文學の盛んな觀があつたのも、唯文學者中に靑年の少數が雷同したのみで、社會の多數は何等の影響を受けた次第ではない。現在に於て文學への著眼高きものは心を天外に飛し、見地卑きものは、地上に墮落して、今は暫く將來を期待して人々は沈默してゐる時機である。自分が今日の作家に切望する事は、作家が社會の公衆を抱擁する、大度量を持たねばならない事だ。公衆の趣味は低く、未だ十分に文

學を理解する力がないから一先彼等と共にあらねばならぬとし、日本文學史を回顧して、王朝の頃公家社會の十分な發達は、千幾年を要したとて、第一期は播種期で、神武東征以後の事であり、第二期は生長期で三韓來朝の後であり、第三期の開花期奈良・平安朝に及んで、やうやく藝術が起つたのである。また封建時代も、鎌倉時代は武家社會の僅かに萠芽期で、藝術はすべて公家の遺物で、室町時代とて明よりの傳來物多く、將に成長期に過ぎず、元祿時代に至つて、やうやく開花期となり、この間七百年の月日を要した。明治は公民一統の社會で、現代はやうやくその萠芽期に過ぎず、これが開花期に達するには、幾百年未來の事であらう。それ故現在藝術への關心のその餘暇がない。

之はあたかも鎌倉期に似て、現在の小資本家の多きは、鎌倉の小大名に似てゐる。彼等に幾百金の油繪を買ふ餘力なく、購ふに易しと雖も文學作品の趣味教育を得るには、尙幾年の歲月と資金が必要で、現在の作家が、幾らその「燦爛たる純美感」を我邦の古文辭や、佶屈解しがたい支那文學の句調で寫しても理解できないだらう。それ故になるたけ卑近の言語でこの低級な公衆の趣味を啓蒙するやうにして、暫く流俗と共にある事を、堪ふるべからざる氣持を投げすて、社會一般の爲に盡して欲しい、王朝の六朝騈儷文より女流の手の源氏物語、枕の草子が千歲に輝き、封建の昔雅文・漢文を能くする者より、西鶴等の元祿體の文章が殘るのは、社會と相渉つた故である――と大體かうした意見であるが、この史觀より考察された評論は、その頃の文學界へ正鵠を得たものと云はねばならない。

かうした立場から三號にも四號にも、文藝時論を書いてゐるが、彼が自ら積極的に活動したのは、二十九

年一月創刊の『新文壇』に於てであつた。彼は一號に「超絶自然論」二號に「脫却理想論」六號に「天飈一陣」等の卷頭論文を掲げて、正々堂々の筆陣を張る一方、無署名ではあるが、その文脈、内容から察して疑はない彼の筆で、「時文」欄で時の文壇時評を試みてゐる。

「超絶自然論」は結局「美を現象の世界に求め、自然を以て創作の模範と思ふ者」を大なる謬見として、現象の本質（彼の言葉によれば意象）を文學の對象として、肉迫して行くべきを高唱したもので、現象世界といふのはこの本質的なものが、有形の物質的なもので、假に現はれたものに過ぎず、感覺でこれに觸れても、結局本質的なものまで突入できない、自然といふのも、僅にこの本質的な意象の核を蔽つてゐる「空しき殼子」であるといふやうな事を論じてゐる。

この評論中に「現代文學の傾向」として、硯友社の一部を批評したやうな節がある。既往七八年間の盛んに行はれた小說は西歐文學の顰に倣つた寫實的なものであつたが、その戀愛小說を主とした一派は「時として稍幾分の天才を具へて、人間戀愛の至情を指摘し、其纖麗婉約なる文姿と想像とは、讀者をして只管渴仰に堪へざらしむる文士なきにしもあらざりしかど、其製作は風韻乏しく、又其作者には高尙なる或目的と志望を懷て筆を執りつゝある者は、多からざりしもの丶如し。彼等は戀愛の描寫を勉めき。彼等の目的は、愛慕の情より最も面白き興味を描き出し、以て脚色を按排して人生行路の奇變を示し、讀む者をして應接に暇なからしむれば乃ち足れり。嗚呼奚ぞ亦風韻氣格に意を留むるの必要あらむや」と二十年前後よりそれまでの寫實主義の弊をあげ、この反動として、新しく起つた、社會の裏面に隱れた事情を觀察して、人世といふ

ものを解釋しようとするものがあるが、これは裏面のみの觀察で僅に前者と表裏の相違があるが、後者には幾分理想主義の影響があつて、ともすれば抽象的になる惧れがあると、正しい批評をなしてゐる。

彼は「理想」についても『早稻田文學』の唱ふる「小說家の平素の經驗知識に據り、宇宙に就て思議し得た極致」といふ定義を結局箇人が懷く學問上の所見と紛らはしとて、彼の求むる作家の極致として、「平生唱ふる所の脫實も又皮想も作家をして入神の境遇に進ましむる準備となすに過ぎずして、自然を超越し理想を脫却し、現象意象の兩境を絕して、宇宙本體の靈能を直觀せしむ」とする事を「脫却理想論」では高唱してゐる。

彼が、硯友社の作家中水蔭、眉山と親しんでゐた事は『新文壇』に水蔭の「潮來曲」が揭げられ、實行はされなかつたが、一號の次號豫告に眉山の新作「古墳」が揭載されるやうになつてゐる。

尙時文欄の諸所に兩人へ對し厚意ある批評を揭げてゐる。

例へば一號中に特に「江見水蔭と眉山人」の見出しで、

斯く一方には小說家として大に發達の途に就きたる新舊の作家多きが上に、日淸戰爭中一騎掛にて戰爭小說を持切りたる、江見水蔭は、『女房殺し』に成功したるに拘はらず、詩的方面より益々奮ふて短篇小說を書くべしといひ、彼れは進んで、短篇百種、短篇十種を出ださざれば已まざるべしと奮發し、『大盃』に名を得たる同じ硯友社の川上眉山は昨年末より『暗潮』に世間の耳目を幻惑せしめて尙引續き『明星』に彼れが凄絕婉麗なる奇想を驅らむと待構へたり。

と記してゐる。その他具體的な作品評でも二號では、水蔭の「海獵船」「炭焼の烟」眉山の「松風」等をそれぞれ賞めてゐる。

黑川文淵はほとんど在來の文學史に、その姿を現はさぬ忘れられたる批評家である。然し硯友社の作家中の水蔭、眉山に働きかけた以外、田山花袋へも思想的影響を與へた人として、表面的活動は華々しくはなかつたが、忘れてはならない批評家と云はねばならない。（註1）

註1　黑川文淵は、江見水蔭氏より直接聞いた話によれば一昨年かに偶然江見氏を訪問され、何十年ぶりかの事でその健在なるに驚かれたとのこと。現在は國光社とかいふ敎化團體内部で働いてゐるとのことである。

四　柳浪の作品の發展

前に述る如く柳浪のこの期の作品は、悲慘小說とか、深刻小說と稱せられる。悲慘なる運命悲劇とか、深刻なる社會、人生の事件とか探るといふ、題材のモテーフによつて呼ばれたのである。中には彼の作品から缺陷をのみ集め「好んで悲慘のために悲慘を描く傾きを示した。わるく言ふと、柳浪は時流に阿るために悲慘を弄んだ。」などと評する者もある。（註1）

然し柳浪は、さほど世間を眺める眼が淺かつたとは思へない。彼の見た社會の明暗は、きはだつて二分され、彼の藝術はその暗黑面を、蜥蜴の樣に這ひ廻つた。彼等眉山、鏡花も柳浪とひとしく、社會の暗黑面をみつめたけれど、眉山はあまりに弱い性格の故に、そして長い間、現實の苛酷な一面から遊離して生活して

きた故に、それらに對して、眞正面から眺める事に堪へられず、ひとり焦燥した。鏡花は、眼をとざし、自己一人の妖麗な神秘的現實を、新しく創造した。ひとり柳浪は、勇敢に、その眼を見開きつくづくと凝視してゐたのだ。

そこには、絹衣なよやかに、髮黒く、色白い細面の女人ばかりが行き過ぎはしなかつた。女蕩しの遊冶郎のみが練り歩かなかつた。甘い戀愛の嘆息のみがもれなかつた。明い白光のみ射す人生の表通りではなかつた。

そこは、太陽も射さぬ陰鬱な世界だつた。現れる人物には或はちよこちよこ走りゆく侏儒があつた。頰の肉は落ちるばかりに、脂ぎつた强慾な老婆がゐた。殺したり、殺されたり、あさましい人間獸のうごめきがあつた。そこは暗い陰鬱な人生の裏街であつた。この世の一角――いな過半の地域には、かかる生物が生き、かかる營みが、絕へずいくつも行はれてゐるのだ。彼の關心はそこに結ばれた。

その後、近代の世紀末的詩人の「惡の華」の美の妖光までには、柳浪の持つ世界は人生に汚れて、達しえなかつたけれど、この暗黒より何かを摑み出さうと試みてゐたのが柳浪であつた。

彼の作品は、この期かく社會の一面の核心に觸れようとする、所謂深刻小說の流れと、一方やや表面的な時事問題に則した作品がある。

前者は『黑蜥蜴』『變目傳』『龜さん』『畜生腹』『重づま』『淺瀨の波』『骨ぬすみ』等の一列の作品であり、後者は『非國民』『七騎落』などである。前者について高須芳次郎氏は『日本現代文學十二講』で

柳浪は高いところから、大きい慈悲の眼を以て、生の悲慘や不幸な虐げられた人々を暖く眺めると云ふやうなことは丸で思ひ到らなかつた、彼は好んで悲慘のために悲慘を描く傾きを示した。

と言はれるが、果してさうであらうか。否、むしろ彼は社會に壓迫せられた、悲慘な人々を、殘酷な社會に對立させては、暖く眺めてゐるのではないか。たとへば變目傳を描くについて「身材いと低くして、且つ肢體を小さく生れ付たり。ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸、其にても尚ほ踵を掩すばかりなる着服は、羽織にも好みて赤出の唐棧縞を用ゐ、常に手を懐にし、駒下駄突掛て、ちよこ〳〵と小走りに歩める樣、往來の人目を惹けば、口惡善なき童等は、蜘蛛男又は侏儒と綽號し、彼を見るごとに興ある事にして打はやす、顏は丸顏にして、鼻は形よく口元に愛嬌あれども、左の後眦より頰へ掛け、湯傷の痕ひつつりになりて、後眦を竪に斜に釣寄せ、右の半面に比ぶれば、別人なるが如く見ゆ。此にぞ變目傳の綽號は附られける。態とらしく笑を含めば厭ふべき目付いとど氣味惡く、女童など親しまむ樣なし」といふ醜惡な容貌であつたけれど、「口に毒を含まず、氣輕に而も人と爭はねば、何方たても憎きものにされず、物淋しき折なぞ、遊ものとして待たるる事もありけり。」とその一面に持つ愛嬌を書いてゐるのは、柳浪の溫い心を察せらるるではないか。『軀さん』とても同樣である。「年は廿三歳であるが、身材は漸と十三四の少年位しかない。頭が大きく、猪首で、體は豊に肥えて居るが筋に緊がなく、歩む時の肉の動きが、衣服をも波立たせる程に見受けらるる。首を少し前へ屈めて据ゑて、兩手をだらりと垂げて打振り、足の土踏まずが腫れて歩き惡いかの樣な歩形の、而も內股であつて、いかにも切なさうに、一歩〳〵に肩を左右に振つて行く樣子は、宛然不斷の脚氣患者である。坊主

頭を、靑道心の樣に奇麗に剃つて居る事もあれば、又願仁坊主の如く汚く髮を伸して居る事もある。顏は大面で、眉毛は濃いが、鋭くない。鼻は小鼻が低く、頭が丸くて且つ太い。口は大きく、厚い唇が外に反つて、締がない。紫色を爲た齒齦が露見れて居る。眼も大きく、外眦が下り、眼睛が鈍く、上を仰ぐ時に見ゆる下瞼の裏は朱を流した樣で、まことに氣味が惡い。」といふ樣な氣味の惡い奇怪な男にもなほ「けれども笑ふ時は不思議に愛嬌が出て、邪氣の無い心の底までも見え透き何人も能く渠を憎み得る者はあるまい。」と後から環境がしからしめなかつたら、愛すべき自然兒であつたらう男を描いてゐるのである。

彼に溫かき心なく、涙なしと言ふか。その構想の結末は悲慘といへ、その故に、反つてかかる結末へ導くやうにした原因へ、讀者の憎しみを招きよせ、それは轉じてこの暗い淵へ投じた不幸な人々に對する同情となるのだ。即ち『變目傳』では、決してその主人公を憎み得ず、彼をかく誘惑した定二郎で代表さるる周圍を憎ませ、『畜生腹』では双生兒を生んで惱み、それを雇姿のおちかの殺すのを默視する、年若きおもよを憎み得ずして、その雇姿のおちかを憎ませ、『重づま』では、善良な夫を毒殺する事をすすめられながらも、決行するにしのびず、己と、その毒殺の決行をすすむる、情人との杯に毒を入れて死ぬお妻よりむしろ前の行爲をすすめた、情人精三郎を憎ませ、『黑蜥蜴』では、夫の養父より情交を强ひらるるのを拒み、その迫害にたえかねて、養父に黑蜥蜴を食はせ、毒殺して自らも死ぬお都賀よりも、その鐘馗と仇名とつた養父吉五郎を憎ませ、『龜さん』では、龜さんよりも、彼に人生の春の眼覺めの手引をし、その故に龜さんをして、樣々の惡事をさせる樣にした、お辰を憎ませる結果となつてゐる。——何れもこの作品の主人公をして、かく殘忍な行

爲をなさしめた後者を、性格弱き主人公を壓迫して、惡事をなさしめた環境を、その惡行の當事者とて强調してゐるのである。

主人公をかく至らしめた間接者まで、作者の同情が行き渡つてゐないからとて、作者の心の溫さを否定するものは、これら一列の作品の構成その効果について、理解能力を缺いだ者といはねばならぬ。この副人物は冷酷な社會の代表者であり、彼等が作品の主人公に惡事を强ひるもので、副人物が殘酷なればなる程、弱き主人公の行動は、生々とし作品の効果があがるのである。であるから、柳浪は直接そのインクに涙を交へなかつたといへ、より高い立脚地において、効果の上から彼の作品に、その溫い情愛が見だされるのである。

次に、後者の動く現實世相として擧げた『非國民』『七騎落』は、何れも日清戰爭の影響を受けて生れたもので、水蔭の作品の新聞記事的な戰爭文學とは又異つた態度のものであつて、いくらか批判的立場も見えて、當時としての近代性も見られる作である。

『非國民』は、二十九年十一月に發表されたものであるが、興味のある事には、すでに、主人公に、トルストイズムを奉じた男を持つて來てゐることだ。卽ち箱崎兼吉なる青年牧師がそれで、彼は當時宮城縣下に起つた海嘯に、敎會から義捐金を送る事に反對し、海嘯は義戰を名として、他國を掠奪した日本に與へられた神罰だ、それに義捐金など送るのは僞善だといつて、その許嫁である女の信者に「唯神様をお信じなさい。可いですよ。忠君愛國說は今後の世界には成立なくなつて來るです。どうも、操さんの觀念は低い、觀察は狹い、達人は大觀すです。どうも困るですな。偏狹な眼孔で以て世界を觀て、共で論ずる人があるですから

な。宇宙を大觀して居る者が日本に幾人あるでせうな。他に一人も無い。日本には一人も無いですな。露西亞に唯一のトルストイ伯があるですな。天下まだ一の人傑なしです。」などと言ふやうな言葉をはく。彼の結婚の日の演說にも、トルストイズムの立場から戰爭反對の事や、天國の地上に來らん事をのぞむ事やを述るが、花嫁の兄のトルストイズムへの反對で、結婚式は駄目となることを筋としてゐる。

箱崎のトルストイズムへの淺い理解は、作者自身のそれを思はせ、また武者小路實篤の作品のごとく、この主義によつて、讀者にうつたへやうとするのでもなく、むしろさうした牧師を戲畫化してゐるので、作品も熱情のたりない、ばらばらとしたまとまりのないものに過ぎないのであるが、かかる主義を奉じて、そのために進む青年を主人公にもたらした事は、本能や自分の感情で動いてゐる主人公を多く描いたその頃の作品の中に於て、それだけで興味をひくのである。(註2)

三十年八月發表の『七騎落』は、日清戰爭中に何萬といふ敵兵の中を僅か七騎で通り拔けたといふので、その功名が村中の噂になつた男が、いよいよ凱旋の後、村中からちやほやもてはやされて、かくて年金のつく勳章をもらつたら村長の娘さへも、もらへる樣になつてゐたが、あてにした行賞に外れてみなの期待が水泡にきしたといふ筋で、戰後の田舍の空氣へ對する皮肉が投げつけられてゐるが、作者は、村民の一寸した事件に對して、風向の變りの烈しさを皮肉るより、この主人公を操る事に興味をもつてゐるらしい。作者はこれ等の作品で、批判といつても、別に高い場所から見おろし批判してゐるのでなく、尙戲畫的な興味で側面から寫してゐるの點が多いのである。

かくて柳浪は『明治小說內容發達史』の內で、田山花袋の言ふ如く、廿八年「『黑蜥蜴』を以て一躍文壇の雄となり、翌年一葉が出て、露伴が復活するまで文壇は殆んど彼の獨壇場であつた」ので、彼の時代を作り、次の時期への展開に精進してゐた。それまでの寫實主義が、多く描かれる對象の模寫的な點に止まつてゐたのを、彼に於て、更に對象的に深めた點は、方法的に尙、自然主義作家への、一步手前に止まつてはゐたが、深いリアリズムへの過渡に、先、作品の對象から出發し、かなり人間を描きわけることにも成功して、史的展開の上から、重要な價値ある存在であつたことは記憶さるべきであらう。

註1　高須芳次郎著「日本現代文學十二講」二四八頁。

註2　トルストイについて盛に紹介したのは、德富蘆花で、二十三年、四年の「國民之友」に揭げてゐる。二十六年、七八、九年も盛んで、「六合雜誌」には宗教思想に就て小西增太郎の論文が揭げられてある。トルストイの日本へ入つた歷史は內田魯庵の「トルストイの思想の移入及び傳播」(春秋社內トルストイ全集刊行會刊　普及版トルストイ全集六〇卷所載)及びそれを基礎としトルストイ自身の年表と對照した同卷中の百島操編「トルストイに關する三つの年表」に詳しい。

五　紅葉及びその他の同人

硯友社の統率者であつた紅葉は、この頃如何にしてゐたか。二十八年八月十三日附の柳浪への書信によれば、

諸種の雜誌近來柳浪の名を唱ふこと頻なり、此期を外さず奮勵一番して潛龍の淵を出でたまへかし君待てる風雲は既に晦きなり。小生は此頃文氣沮喪して唯諸君の飛躍活動の極めて壯なるを望見するのみ、やがてぞ目に物見せむとをさ〳〵心構は致居候へども。（註1）

とその一節にある。それまでの紅葉の進出の花々しさは、多くの作品生產への過勞となり、その精力の疲れを見せると共に、藝術上の行きづまりを經驗してゐたために、更に伸びる爲の修養を、この期に於て、なさねばならなかつた。

それまでにも、彼は努力して自らを掘り下げつつはあつた。卽ち『心の闇』は二十六年の作品であるが、それまでと異つた方向を示してゐる。筋は佐の市といふ若い盲人が、その出入先の千束屋の娘、久米に親切にされるのを嬉しく思ひ、次第に戀するやうになつた。久米は良緣あつて、土地の議員の息子に嫁いでも、尙佐の市は執念ふかく想ふといふのであるが、その暗いいきさつや、現れる人物に、柳浪等の深刻小說への類似を見ると共に、紅葉自身も次第にたどつてゐた轉向の徑路をしのばせてくれる。が一面これには、また德川傳統の怪談的な雰圍氣も所々に感ずるのである。例へば、この作品のクライマックスとも言ふべき情景の描寫に、お久米の夢に見る佐の市であるが、「夢に佐の市は、寢間の窻より覗きこみて、お久米樣おめでたうございます。へへへと三聲の笑聲肝頭に徹へて凄じく、聲立てむとすれば吭塞り、夜具引被がむとすれば釘附のごとく、顏に袖して俯けば、佐の市は窻より入らむとして、下駄の齒に𦨞を踏鳴らす音、がりがりと響くと思へば、參りましたよといふ聲耳を貫きて、はや枕上に坐りたり。お久米は在るにも在られず身を竦

むれば、佐の市は請寄せて、貴孃はいよいよ簗居様へお出でなさるのでございますか。もし、それではお久米様、此起請が反故になりませう、と懐中より取出せしは、此夏やりし籃目の浴衣に血染の夫婦約束。これが反故にと眼前に突着けられ、今にも執殺されむかと、可怖きこと限無し」またつづけて「貴孃に見捨てられては生効の無い、佐の市、長らへてゐれば、言替はした女の他へ適くに、祝の表も持て來ねばなるまい。いつそ死なう。死ぬと覺悟した。其代り此恨は忘れぬと、留るを振放して、飛鳥の如く窗より躍出づる追蒐むとする後より、お久米と呼ばれて振向けば、意氣なる洋服扮裝は簗居喜一郞、慚しやと思ひながら挨拶すれば、男も山高の帽子を脫るに剃立の坊主頭！それはと見るに顏は佐の市。餘りの事に仰天して、僵るる拍子に夢は覺めけり」と記してゐる。これについて作者もはつきり「夢とは謂ひながら、さりとは痕跡も無き夫婦約束。血起請といふこそなほ愚かしく、否味らしき心は露無き佐の市が、あんな事を、と合點ゆかぬ首尾をさまざま考ふれど、固より夢、夢、實在には思の合はさるる事もなし」といふ樣な事を夢みさせる。このシーンには德川の怪談物、圓朝の語り物に聯想を導くものがある。

かかる作品を書きつつも紅葉は轉換を計つてゐたのだ。それについて『近代の小說』にかう花袋は記してゐる。

紅葉はその時分は『紫』だの『冷熱』だのを書いてゐた。かれは尠くとも『三人妻』に行つて一變した。とても、こんなものを書いてゐては駄目だ……といふやうにかれは考へたらしかつた。次第に時代は移りつゝあつた。新しい芽はそこにも此處にも萠え出した。聰明なかれは、逸早く新機軸を出さうと心懸

けた。

かれはこの時分、ゾラやモウパツサンのものなどを讀んでゐたらしかつた。それは無論、何の點まで深く讀み入つてゐたかは知れなかつたけれども、よく『ピエル・エ・ジヤン』の話をしたことなどを覺えてゐる。また次のやうなことも言つた。

『あゝいふライト、タツチで書くやうになれば、それはもう大したもんだけれども、そこまで行くのが中々大變だからね――。ちよつと眞似は出來ないよ。』

紅葉の苦悶が見られるが、彼はすでに自國文學の研究から、海外の文學へ飛躍してゐたのであつた。しかし、自然主義以後の作家が、より重視した思想、內容よりも、紅葉は表現、技巧、筋、といつたものに注意を注いだ。

卽ちこの結果は、彼獨特の見解を通つて、幾篇かの飜案、飜譯となつてあらはれた。フランス古典劇のモリエールの作品も茶番狂言的な『夏小袖』や『戀の病』となつてあらはれた。前者は『守錢奴』(L'Avare)後者は『いやいや醫者』(Le Médecin malgré Lui)の飜案である。原作の輕快な中に深味のある對話が江戶風な茶番式に變つてゐる。こみ入つた筋の最後の巧みなしめくくりや、饒舌な登場人物が彼の氣に入つたのであらう。モウパツサンやゾラも、前者の男女愛慾の葛籐、短篇の巧みなまとまりの故に、後者の構成力の非凡さの故に愛讀せられたのであらう。『冷熱』や『鷹料理』や『三箇條』や『手引の絲』のとられたイタリーの古典『デカメロン』も筋の興味を見出した故に讀まれたのであらう。小西增太郞の譯に加

筆して、二十九年二月「第六國民小說」に發表した『名曲クレーツエロワ』も深刻なトルストイの女性觀、結婚觀への共鳴よりも、車内の紳士の語る三角關係の爭鬪の筋の興味にひきつけられたのであらう。(註2)

『冷熱』は飜案の中途、病のため中止したとして、後半にその原作の梗概を記してあるが、その斷り書きによれば、第八日に方つて述べるパムピニアの物語を飜案したものといふ。對比してみるとかつて『やまと昭君』に見た飜案のすぐれた技術を露はに示してゐて、これが完成されたもので斷り書がなかつたら、人々は飜案と氣づかないであらう。『鷹料理』『三箇條』共に、流麗な格調をなす飜譯である。(註3)

彼にはこの外、自己を十分燃燒させない、低調なものとして、場所を蘇格蘭にとつた『心中船』や、友人の口述を書いたものだと斷り書きした、『西洋娘氣質』などがある。

これ等の飜譯や飜案風のもの、すべて彼のスランプ狀態を如實に語るものであるが、この外とりあげらるべき作品として、二十七年六月の『隣の女』がある。

粕壁讓は二十八になるが、平凡な郵便局員である。容貌もみにくく、平凡な生活を慰めるものは尺八一管である。たまたま隣家へ仇つぽい女が移轉して來た。妾らしい。讓は興味を持つ。或日巡査がその家へ入つて行く。そしてその男が和服で訪れてゐるのも見た。情夫だと信じて失望してゐる。この邊の心理はかなり細かく描かれてある。所がある日、簪に結んだ手紙で、尺八と三味と合せたいから來てくれとの女の言葉で、讓は喜んで行くと、女からやがてダイアの指輪を渡し結婚の申込を受ける。喜んで夜を過すと、女が色蒼ざめて、讓の助力をたのむ。そこに巡査の死骸があつた。巡査は女の兄であつたが、よく金の無心に來て、爭

ふうち二階から墜死したのだ。譲は女の命のまま、死骸を始末せねばならなかつた。それから二日目の朝廐橋の河岸に書生風の屍體が浮んだ。屍體の小指にはダイヤの指輪をはめてゐた。女は築地邊に妾宅を移して、今も麗しい――といふ筋で言文一致で書いてある。前半の細密さに比し、後は荒い。

この作について、江見水蔭の『硯友社と紅葉』の「紅葉と代作」の條に、ゾラの飜案で、筋は松居松翁から廻した旨が記してあるので、著者はこの事實を松居松翁氏へ問合せたところ、「貴問紅葉先生「隣の女」は愚老が學生時代耽讀せしゾラ先生作 "For a Night Love" (ジョージ・コックス先生英譯) の飜案に候。かつてその梗概を物語りし所その英譯をかしてくれとの事にて半年程貸出候間に讀賣新聞紙上へ掲載されしものに候」旨の通知を得た。もつてこの作の成立の事情を知る事ができよう。

この他にこの期の特色ある作として『隣の女』以前二十七年一月に起稿された言文一致體の『むらさき』があり、又沈滞期の長篇として『不言不語』がある。

『むらさき』は、靜馬といふ開業醫試驗を受けてゐる男を主人公とする。彼は幾度か失敗してゐるのであるが、彼が下宿して勉強してゐる家、その近所の女房、それから彼が代診をして師事してゐる醫師一家の激勵で、努力して最後に及第し紫刷の通知をもらふまでの、別に筋本位の小說でなく、舊制度の開業試驗の時代相と、受驗生及びその周圍の空氣を、言文一致體で描いてゐる。

構成上最後の田舍の許婚の夢の場が氣になるが、世態人情の風景を、仰山らしくなく、しかも言文一致で書いてゐる事を、注目すべきである。

二十八年一月發表になつた『不言不語』は、二十六、七、八年の彼の沈滯期に書かれた長篇の一つであるが、それは父母を失つた若い娘の一人稱の形式で書かれた小說である。

先、その娘は宏莊な邸へ奉公するのであるが、そこでは不思議にも主人夫婦は、育ちが上品な人物にも係らず、仇敵の樣に憎みあつてゐる。正月となつても、門松も立てず暗い家である。雨の降る宵など夫人は何かにおびゆるものの如くである。その內神戶より主人の弟民之助が訪ねて來ると、一家は晴れやかで、主人夫婦も、日頃の憎しみを表はさず、何にも變つた事なくお互ひ語り合つたりしてゐる。

その後、民之助より娘は求愛される。民之助は近所の畫家遠山霞叟と知己になつた。霞叟は自分の弟の子力夫といふのを育ててゐた。娘は又力夫とも仲よしになつた。ところが、ある時、力夫が疱瘡になつたのを、夫人が我事のやうに看病に赴くことで、一家にごたごたが起る。そのうち夫人も病んで重くなつてつひ逝つた。その枕元で主人が、夫人の秘密――一家の財産を主人に嗣がせんため、その亡き夫人が、かつて長兄の遺子を毒殺したため、かへつて夫人と主人と仲違ひになつたと、一同に物語つたのであつた。

一篇は、彼の手に入つた表現で、割に淡々とかうした筋を性急に書きつづけてゐる。所謂深刻小說風な影がさしてゐるのは、その頃の文壇傾向の影響があつたものではなからうかと思はれる。

この期の作品として、純創作の方面は、かかる物の外、お伽草子にある樣な童話風の讀物『浮木丸』、表を通りかかる醫師を、彼が好男子の故に待合から、女等がよび出すといふ卽興的な『安知歇貌林』や、姉夫婦の家に世話になつてゐる辯に妹が、姉の夫と仲よいのを、姉が嫉妬する事を題材にした『千箱の玉章』、銀を

中心として、それに對する時代の、好尙の變遷を記した『銀』、隨筆風な「弗箱」「誰乎彼女」「親の枳」をおさめた『油柄杓』同樣に世間話を記した『新油柄杓』などあるけれど、すべて眞劍に全力をうちこんで書いたものはなかつた。創作欲の減退を示す實證となるだらう。

二十九年九月の『靑葡萄』はその門弟の病氣へ對する、師の思ひの涙ぐましい程の氣づかひがかかれ、人として、師としての紅葉がよくうかがはれて、人間紅葉の說明によく引用せらるるものであるが、作品の展開上にもまた價値をもつ。彼のその以前の作は、ほとんど凡て、作者と關係しない事件をとりあげて、これを構成し客觀した所謂本格小說であつたが、ここに初めて作者自身を露骨に示した、所謂私小說を書いてゐるのである。それは、一面彼の作品の、新方面の開拓を暗示するものでもあるが、一面彼の從來の行きつまり、極言すれば、想の缺乏を語るものではなからうか。

さて前揭柳浪への書信の一節「文氣沮喪し唯諸君の飛躍活動の極めて壯なるを望見するのみ」といふ中に、すでに彼が一步先んじて、同人だつたとはいへ、進出の上からは、後輩だつた柳浪、眉山が、時代の流行作家となり、小波はお伽作家として一家をなし、水蔭は色々の方面に向つて、羨しき程旺盛に書き上ぐる才能をもち、門下からはすでに鏡花さへ出で、彼等凡て一樣に活躍するに對し、自らはスランプに陷り一方外面からも紅葉攻擊の筆陣をはられて、彼のこの雌伏は、いらだたしい限りであつたらう。

紅葉はかくして、自國傳統の文學としては化政期の文學、元祿文學の硏究に、やがて海外の文學にも自らの滋養を吸收してゐたが、つづいてさかのぼつて王朝文學の硏究に手をつけ、源氏物語を讀んだ。それにつ

いて、村岡典嗣氏の手に入れられたといふ、紅葉の自筆の書込のある博文館日本文學全書本『源氏物語』よりの研究「紅葉山人と源氏物語」は、これを具體的に示して興味ある論文である。（註4）

書き込みの日附によれば、讀初めは明治二十八年二月初旬で、讀了が四月十九日となつてゐる。その讀み方も、彼のすべての讀書態度と等しく「修辭的趣向的の美所妙所こそ彼が心を惹かれたところで、これに反して思想や文化史方面から面白いといふ箇所は、むしろ看過されたといふことになります。」と、紅葉の注意を惹いたことを、明らかに示す彼の記した朱線、傍點の所在から、村岡氏は言はれてゐる。例へば、「玉蔓」の巻で、源氏が紫上に相談して、新しく得た玉蔓を初め、秋好中宮、花散る里、明石の上などの婦人に衣配りをするところ「上も見たまひて、いづれ劣り勝る差別も見えぬものどもなんめるを、着たまはん人人の御容貌に思ひよそへつつ、奉れ給へかし。着たるもの、人の樣に似ぬは、ひがひがしくもありかしとの給へば、大臣打笑ひて、つれなくて人の容貌推量らむの御心なりめりな——」に、ここのみ他にない評語を記して「奇想殆神助之筆也矣」とあるといふ。

また景情一致といふことに注意したのは、「桐壺」の「野分たちて俄にはだ寒き夕暮のほど」や「蓬生」の「昔の御ありき思ひ出られて艶なる程の夕月夜に」や「野分」の「氣高くきよらにさと打にほふ心地して」などの圏點がこれを明らかにしてゐるといふ。

紅葉の『源氏物語』研究が、この後の力作『多情多恨』や『金色夜叉』に與へた影響について村岡氏は述べられてゐるが、それはやがてその作品を述べる場合に記すことにしよう。

かくて二十九年、彼が眠れる獅子の眼ざめの如く立上つたのである。「目に物見せむとをさをさ心構は致居候へども」と、柳浪へ書送つた腹案がなつて、『多情多恨』は二月二十六日の紙面から『讀賣新聞』を賑はせたのである。その前の廣告に、

是俳諧にあらず、雜報にあらず、飜案にあらず、合作にあらず、實に快腕一揮筆飛墨飛の大創作と爲す。若夫明治二十九年の佳篇を知らんと欲せば須らく之を精讀すべし。噫二十六日以後の紙上！大旱の雨は枯燥の文學界を霑さむか。（註5）

といふ大抱負で連載されたのが『多情多恨』であつた。この作品では、彼の永い間の作品の根本條件をなしてゐた、筋の發展を第二の問題とし、心理の解剖、性格描寫に努力して、細いニユアンスまで傳へようとした。筋としては單に愛妻を失つた男が、親友の妻君を初め嫌ひだつたのが、次第に好きになるといふ過程にすぎないけれど、その綿々たる情緒の、あまりに微細な丹念な描寫は、急速なテンポに生きる現代人には、まどろしい感がするといへ、これに費された彼の精力を思ふ時頭が下る。本間久雄氏も『尾崎紅葉』中に言ふ如く『多情多恨』は當時の彼れの「力一杯の作」で澎湃たる新しい思想の波の中で、それに對抗してゐる巨人の姿をしのばせる。この作品は彼の力作を長く待ち受けた讀者を、その期待と、作の新展開の故にひきつけたであらう。

この作について村岡典嗣氏は、紅葉の『源氏物語』研究が、この作品へ與へた影響として、先、作品の形態的に大作であること、內容的に多情多恨は、もののあはれと通じて、『源氏物語』の本質であること。類子

を先きだたしての、鷺尾の追憶、思慕の情緒は、『源氏物語』「桐壺」巻における、帝の亡き女御へ對する心情を偲ばせる。いな、「桐壺」だけを新しく現代へもつて來て、思ひきつて長く書いてみようとしたと思はれると言はれてゐる。

省れば紅葉は、その出發に、化政期の作家より影響をうけ、つづいて西鶴研究が、また彼の作品にその香をしませた。

年齒若くして、しかも時代的に新文學の處女地であつた時代に、彼の摸索の對象から、自らの立地をうちゆるがせて、その影響の波動にたじろぎつつ筆を執つたであらう彼が、これ等の初期の作品に、その香を濃くしませたことは無理もなかつたであらう。

然しながら、時代と共に、そして次第に年を經ると共に、やうやく動搖する自分の足許を固くふみしめ、自らの眼で見据ゑ、採るべきは採り、捨つべきは捨てる作家道の修練を經て來たに違ひない。

彼は自國傳統の文學を省察すると共に、海外の新しい文學へも接して行つた。たとへ『源氏物語』を讀んだにしても、全く全部的にこの影響に動かされてしまつたと、決論してしまふはそれ故にあまりに早計ではあるまいか。

その影響を、紅葉が讀み、自ら書き込みをした原本によつて、分析される方法は、部分的には肯定さるべき所もあるが、全部をその色彩で塗りつぶす事は、少しく感傷的であり過ぎる氣がするのだ。

なる程『多情多恨』は大作であつた。博文館本の全集によつても、五百四十九頁を占むる。然し、彼は、

たとへこれに及ばないと言へ、すでに二十四年に、同じ全集本で二百十三頁を占むる『二人女房』また二百六十六頁を占むる『伽羅枕』を書き、翌二十五年は『多情多恨』の三分の二以上の大作、三百八十二頁を占むる『三人妻』を書いてゐる。

かうした、以前より長い新聞小説を書き馴れてゐた紅葉には、更に作家として生長を見た五年の距離を於いては『多情多恨』の構成も、殊更らに『源氏物語』の影響によつての長篇の構成力の大きさへの發展とも言ひ難いと思ふ。

また村岡氏は「修辭的趣向的の美所妙所こそ彼が心を惹かれたところで――」と本質へ沒入した讀書態度を否定し、外核の表現技術のみに關心を持つた事を記されてゐるにかかはらず、突然『多情多恨』は『源氏物語』の本質として、本質的影響に立つて書いたと言はれるのも、全く前言に矛盾する。

かくて、やはりすでに『心の闇』に於いて、心理の世界へ深まつて行つた、彼の徑路から見て、必然至るべき境致であり、幾分かは『源氏物語』等に暗示を得たとしても、全部をその下におき得ない理由である。

かうした紅葉の努力であつたが結局この期を背負ふものは、柳浪、眉山であつた。かく紅葉は停滯し、水蔭はリリシズムのある短篇に、純性を示しながらも、すでにデアナリストとして走り、小波は御伽噺作家としてより努力し、思案は更に飛躍もなく、硯友社同人としての惰力を持つのみで、花瘦も同樣であつた。

とはいへ硯友社はこの期において、その中心の目的であつた、文壇に壓倒的にまで進出した事で、完全に目的を達したといはねばならない。それと共に『明治評論』や『青年文』に於ける田岡嶺雲、『國民之友』に

於ける八面樓主人の鋭い攻撃の聲に何時か背後に、新興の勢力がせまつて來るのを感じつつ、次期へ展開して行つたのである。

尙、此期二十八年十月俳句について秋聲會を組織して、同人の一部はこの方面へも活躍した事は別項の通りである。

この期の一般的な展望を『きのふけふ』の著者の筆をかつて、描いておから。

硯友社の最全盛期は明治二十六七年頃から三十年頃までであつたらう。紅葉は堀紫山を從へて讀賣新聞社に據り、三面及び文藝欄は殆んど紅葉の欲するままとなつた。春陽堂には前田曙山が座し、博文館には大橋乙羽が控へ、『新小說』も『文藝倶樂部』も硯友社の管轄に委ねられた。剩つさへ後藤宙外は早稻田を出ると紅葉幕下に馳せ參じ、硯友社の客將として其の『新著月刊』を硯友社の新版圖に献じた。當時の紅葉は四方の書肆文人來貢すといふ勢ひであつて、隨つて紅葉傘下の硯友社員は各々共の據る處を得て勢力を張つた。

精疲れ、想枯れたりと雖も紅葉の文壇的勢力、硯友社の支配はかくの如きものがあつたのである。

註1　「紅葉書簡抄」一〇四頁

註2　内田魯庵は「小西增太郞氏の露國から歸朝されたはタシカ明治二十七八年であつたと思ふ。同氏は在露中トルストイと親交があつて老子を共譯したといふので、同氏が持ち歸つた謄寫版刷（露國では發行即時禁止された爲一部讀者間に謄寫版で頒布されたのである）の『クロイツエロ・ソナタ』の同人の飜譯は非常なる興味を以て邀へられた。

此飜譯は尾崎紅葉の加筆があつた爲、譯文は流麗であつてもトルストイの深酷を削ぐ感があつたが、原本が禁止された謄寫版刷である事と、譯者がトルストイと親交があるといふ事とが少からざる興味を呼んで當時の讀書界を騷がした。」(「トルストイの思想の移入及び傳播」)といつてゐる。

註3 『デカメロン』は既に明治十五年六月大久保勘三郎の『歐洲情譜群芳綺話』に初まつて、紅葉の以前に三、四種の飜譯飜案がある。伊太利文學のこの國の文學へ作用したのは、先これ等の興味性からであつた。

註4 村岡典嗣著『日本思想史研究』所載。

註5 明治二十九年二月二十五日發行讀賣新聞所載。

第六章　硯友社の展開　その四

一　解消期と紅葉　（三十年以後）

硯友社の作家の文壇進出は、前々期、前期で十分に果されてゐる。その結社の中心的目的は、既に完成された譯である。その目的を達した後は、一人一人の力に依つて、佳き作品を書いて、時代に生きねばならない。時代へ生きるとは、結局作品への精進、一作より一作への進展を計ることに過ぎない。それによつてのみ、作家としての生命は保たれる。彼等は既に同じ巣立ちをした鳥の如く、各々が思ふままに飛んで、その翼の強いもののみが、永く飛びゆける譯である。かくて今はただ同じ巣に育つたといふ機縁で、お互ひに接近は保つたではあらうが、積極的な結社性は次第に失はれて行つたのである。

明治三十三年十二月十九日附、當時獨逸にゐた巖谷小波宛の紅葉の書簡には、次のやうな章句がある。

扨御出發後は文壇例の如く不振にて本年もあと二十日にて暮れ申候。世間の不景氣譚ふばかりなく吾社の新聞の如きは近來無比の不繁昌にて、影響われ等の頭にも及び候次第に有之候來年は文壇の景氣少しは宜しかるべき乎。

とひとり彼のみならず、時代の一時戰爭以後の空景氣によつて、影響を受けた文學界も、それが鎭靜に歸るとまたやうやく固定した素描をなし、次いで硯友社の作家の近況を次の如く報じてゐる。



明治三十一年の尾崎紅葉

桂舟も其後勇氣衰へず居り候段は可賀事に存候。思案は團珍入社以來は非常の元氣にて近寄るべからず、是亦結構に御座候。眉山にも其後寺町の往來にて一度邂逅致候のみ。江見にも久しく掛違ひて會はず候。岡田にも一度會飲せし後逢はず。

硯友社も今日の狀態では誠に有名無實にて甚だ佗しく存候。さりとて小生も錖繁多の身となり舊の如く糾合すべき斡旋も心に任せず、成行のままに捨てては置けど、何とか爲ずばなるまいと常住考へ居り候。

文壇登場が、目的の中心におかれ、それが達せられた時、積極的な集團性が失はれる危機であるが、その後狹少であつた當時の文學界、發表機關をお互に利用し合ひ、一種ギルドにも似た關係をそこに發生せしむる事も出來て、それ等が同人達を結合させてゐた。

然し戰後の、社會や文化等の發展は、發表機關や讀者の增加を見、ここに尙進步的な新作家の出現を待つものがあつた。またそれ等の聲に應ずるやうに、帝國大學、早稻田大學等の文科出身の新しい文學者が、或はそれ程の進步的な讀者と逆な大衆のためには、硯友社よりレベルの低い大衆的な作家さへ出現して、彼等同人達をおびやかす形勢もあつた。

かくては紅葉も、同じく小波に宛てた、三十四年二月八日附の手紙に於けるやうに、

望鄉の念はさる事ながら又僕の身の上からいはば兄の如きはノンキ可羨、日に新しき物を看耳に新しき事を聞き、一學生としてステツキをふり廻して飛んであるかれるなどは、僕等の夢想だもする能はざる處、志を抱きながら酢醬油の事にせめられ、又は小天地の親分と立てられ、其が爲につまらぬ責任等を

負ひて身動きもならぬ苦しさは、僕自身よりも獨逸なる君が目に能く映却つて能く洞察さるゝ處なるべく、今頃は君がみづからの幸福を感じ居たまふなるべし。些々たる虚名の爲に心を役せられ居候境界なかなかつらく悲しく候。（註1）

といふ獨りの心境に、しみじみと思ひ耽つた夜もあつたのである。

前に記した紅葉の書翰に見ゆる「糾合」の文字は、如何なる意味で用ひられたであらうか。在來の同人を更に密接に結合させる方法といふ以外に、作家志望者を彼の門に、養成する意味をも含ませてゐたと思ふ。然して前者の意味での糾合は、當時にあつては、殆んど無意義で、後者とても、眞に新しい文學に生きたいと思ふ青年たちは、既に硯友社作家の文學には物足らず、その外の道を歩き出してゐた者が多かつたらう。例へ彼の門をたたく者とても、眞實彼を尊敬し、その指導に依つて精進しようといふ決心の者は少く、彼の作『靑葡萄』の（四）に書かれたやうに、

凡そ天下に小癪に障るものは、近來後進とか稱へる修業中の小說家である。渠等の禮を心得ぬことは山猿よりも甚しい。一面識も無いのに卒然と刺を通じて、懷中から何か書いたものを出して御覽を願ひたい、と言つて其日は歸る、後から直に手紙を寄來して、早く添削を願ひたい、添削が出來たら、何處へでも御世話を願ひたい！驚かざるを得ぬ、呆れざるを得ぬ。

又は一面識も無いに、原稿に狀を添へて、（方今の文壇其人多しと雖も、不肖の仰ぎて師と恃むべきもの、先生を措いて、其誰か有らむと。）先嬉しがらせて、これほどに思ふものを、添削して下すつたとて、萬

更罰も中りますまい、と云つたやうな口說を書いた末が、可成早く手を入れて返送を願ふとしてある。それで中に二錢の郵便切手が一枚入れてない。いやもう、實に大詩人ほど凄いものはない。此等は未だ可い。二度でも三度でも斧正を辱うして、何か恁か世間に紹介までしてもらつて、覺束無くも獨步が出來るやうになると、さあその御無沙汰！近火があらうが、それから十日經たうが顏を出すでもない。嚴いのは、年始狀をさへ寄來さぬのがある。渠も自ら言ふ如き詩人であるなら、一時一日に三度も潜つた十千萬堂の格子、此雨には如何に朽ちつらむ。此月には門の梅香如何に匂はむぐらひは、思に浮べさうなものであるに。然し是も未だ可い。現在立派に門下生と稱して、草稿も持つて來れば、亘い御世話にもなつてゐながら、陰へ廻ると、先生を同輩に遇つて、其名を呼捨にしたり（あれ）がなどと云ふ代名詞を用ゐたりして、其人物を貶し、其文章を罵るのがある。

といふ風に、彼を單に踏臺にし、利用にあてようと思つた人もあつたのであらう。かうした有樣では、尙更新しい結合で進む氣持も起らないのだ。

三十四年九月三日、在獨の小波に紅葉は次のやうに書いた。

病氣前より虛心に不逢候。桂舟は後園を廣く借り、秋草澤山に栽込み、市隱氣取にて每日なまけ居候樣子、眉山は一度も會ひ申さず候。柳浪にも同斷、江見には絕々、小生も四子の親と相成り大いに凹みの氣味、大飛躍を企てんと心ばかりは逸り候へども、意の如くには不參、加ふるに近來の病身と物を書くのが馬鹿馬鹿しいやうな氣も少しは出て大頓挫中に有之候間、目下卽身卽佛に參禪いたし一新思想を悶

めんと煩悶いたし居候。

かく他へ對するよりも、自己への省察を獨り行ひゐる事もあつた。紅葉はかくして、硯友社の同人とも、滅多に會ふ機會もなく、自らの創作欲も缺乏し、加ふるに、彼の肉體の胃の腑も何時か蝕まれて來た。

彼は三十二年七月病氣保養の爲、佐渡へ旅した折の紀行文『煙霞療養』の冒頭に

筆だに投ずれば必ず癒ると云ふのが、已の持病であつた。例に因つて其の筆を投じたが、驗がない。服藥したが、それでも驗の無いのは、此の四月以來の鬱々樂まざる病。神經衰弱との診斷で、之を治するは、煙霞に如く無しとの診斷であつたのを、出億劫に牽されて、等閑にするではなかつたが、差當つて心地死ぬべく覺ゆるのでもない所から、風待をして居るやうに、今日明日と五十日約も過した。或日入湯中に、其の痩せたことは、馬車馬の胴を見るやうに、肋骨が一枚々々露れてゐるのを發見したので、凭では苦い藥の箇略を捨てゝ、熱い旅の億劫をも取らねばならぬと、實は即夜に決心したのである。

と記してゐる。

『煙霞療養』によれば、七月一日早朝上野發、信越の高原地帯の風光を賞しつつ、

夏ころも碓氷の雨の灑く哉

いそのかみ古き碓日の雲の袖

夏山の雪見る雪の絕間かな

等の句を得、赤倉鑛泉に二泊、人氣少き山莊に病骨を洗ひ、三日朝出發、直江津を經て日本海づたひに新

潟の町に入つた。佐渡への便船を得たのは七月八日の朝であつた。新潟でも佐渡でも、療養のくつろぎの旅人とも思へぬ、小說家らしい觀察をもつて、土地の人情、風俗、風景、歷史、食物などを丹念に調べて記錄してゐる。

『煙霞療養』は、かくして十二日佐渡の金山、相川鑛山見物までで筆を止めてゐるが、佐渡に止ること約一ケ月、立秋の氣立初めて、この旅から歸つたのであつた。

この紀行には、自然の外光が、人事と交錯して、輝いてゐるが、歸京しても尙、病患に苦しめられたらしい。それはこの旅で世話になつた人々への書簡に依つて知られるので、齋藤氏、中川月桂氏に宛てた書簡に、歸京早々腸カタルを病んだ旨が記されてあるのだ。

この旅は、いくらか彼の英氣を養ふ足しになつたといへ、それも一時的のもので、かく歸京早々病み、翌年も病患は、彼のみならず、尾崎一家を襲うて彼を憂鬱にした。卽ち三十三年十二月十九日附の在伯林の小波宛の書翰がこれを語つてゐる。

本年如き小生家內に取りての厄年は無之、二女彌生腸カタルにて三月も惱み候に、十月末より長女チブスに似たる熱いで未だ收摮に至らざるに、三女又々百日咳の氣味にて、小生は例の漫性胃病尾崎家の紛擾本年に極れりと可申――。

かかる樣々の原因――時流、肉體の病患、精力の消耗等、硯友社のリイダア紅葉は、彼一人が中心となつて、最早一面から言へば、結社の存在理由が、目的の達成と共に消失しかけてはゐたが、その硯友社の勢力

を支ふるに堪へなかつた。その結社の衰運は、ここに更にその傾斜の角度を擴げるのである。

かかる境致に於て、紅葉は一には自己の沒落の恢復のため、二にはそれに依つて、硯友社作家の意氣を奮起せしむるため、じりじりと病に苛まれながら、『金色夜叉』の遲々たる筆を運ばせてゐたのである。

紅葉のこの晩年については、『紅葉書翰抄』に收められたこの時代の書簡、三十四年元旦より十月十日までの日記と三十六年四月二十三日の「銚子紀行」を併せた『十千萬堂日錄』、三十五年五月六日より十六日まで修善寺に病苦を養つた折の手記「修善寺行」と、三十六年二月五日より二月八日まで及び二月十一日、六月四日の日記「病間記」が收められた『紅葉遺稿』及び「病骨錄」「生死論」「覩月」を收めた『病骨錄』等に、明らさまな病苦、生活、心境が窺はれ、親しまるべき人間性が流れてゐる。ここに先、雜然と書簡抄に收められたものをとつて、晩年のこの目的に添ふものを、部分的に年代順に配列して、『金色夜叉』の裏にひそむ彼の精進の姿を描き出したいと思ふ。

★

三十五年二月二十一日　杉野喜精宛

金色夜叉續々の續は四月一日より紙上に掲載の事に相成候が本年は大いに筆を揮ひ候覺悟にて、文界も大分色めき候模様有之候へば此際一奮發致し候心底にて（中略）小生も變りたる事は無けれど風丰老ひたりと人々に申され候は、兩三年の胃患の故にやと存候。いかにも筆取るが懶く候て困入候へども、前陳の如く本年は勇を鼓して机に臨み、一面には養生法を講じ可申用意致居候へども夜を更し候と食事の

不規則運動の不足等は、一朝にして改善難致一身上の都合とも可申か、思ふて此に致れば捨つべきものは弓矢なりけりの感なくんばあらず候。然し本年は何か見るべき物一作致すべく候間御覽被下度候。

★

三十五年四月二十五日　上田敏宛

夜叉叉頗る祟を作し候と覺しく年來の稿を續けんと致候へば必ず病勝に相成候事鏡の物を照すが如くわれながら少々おそろしきやうに感じ候。

本月細絲蟲をわかし、これを退治候へ共胃を傷め候處叉數日前よりは右眼の瞼にものもらひの大なるを發し、昨日あたりより輕快に相成候とおもへば、引つゞき猛烈なる腸カタルに罹り、例の休養致し行く春を詩人病めりとはハイカラ鬪のよろしき境遇には候へ共、本人の身にとり候ては例のうまものぐひも出來ず、茫々然として寢つ起つ致居候。（中略）本日は終日の陰雨大いに人意を不快に致し候。加ふるに寒氣襲ひ候て病軀尤も堪へざる事に御座候。明日あたり試に筆着け可申かなどおもひ居候へども、あてにはならずこのやうに體はわろし社にては文句をいはるし捨つべきものは弓矢に御座候。

★

三十五年六月二十五日　瀨沼恪三郎宛

まづ〳〵日增に薄紙へぎ候やうに快方に向ひ候やうにも相覺え候へども、未だ油斷はなり不申食後やはり腹張り申候。然れども幸ひ疼痛を感じ候事は頗る減じ申候故、一しきりよりは餘程凌ぎよく相成申候。

★三十五年十二月十七日　鵜澤四丁宛

去る五月以來の胃病今に全癒と申處に參らず候て二六社に入り候て多忙の方と相成候て、養生とゝかずくるしき中に仕事致候て、年末に際し一層亂痲の如く紛々たる用事の夤り候。快方の手腕を缺き息もつきあへぬ有樣に御座候。

★三十六年三月十一日　尾崎夫人宛

小生も入院後は百事をなげうち候て、養生一方に心をかたむけばかのやうになりて心を樂に持ち此の病氣とあくまでたゝかひ候てかならず〳〵この胃のしこりを打滅し可申決心に有之候。はや今度にこり候故いかなる場合にても不養生はいたさず候間、これのみは御安心被成度、この二三日養生を專一に心かけ候結果のよろしきにつけて大いにさとり申候。

されば此病手重のものなりと醫者よりいはるゝ事ありとも、少しも神經などを起す事なく自身養生の力にてかならず退治いたしくれ候へば御心づよく持たれ度候。

十分に此の覺悟を持ち候以來元氣よろしく相成消化もいたし候事なれば、氣をくされ候が大毒也。今後とも大元氣にて此病に打勝ち可申事鏡に掛けて見るが如しと心獨りをどり居申候。

★

三十六年三月十四日　福田和五郎宛

扨本日午前十時卅分退院仕り候。之より一時間前、入澤博士より在院十日間の斷症試驗に就て、始て結果の報告を受け候處、運拙くも彼の腹内の腫瘤は、セントヘレナの古英雄をも殪せし不治の胃癌と相極り申候。來山が「花咲いて死にとむないが病かな」の今更如何にとも爲んやう無之、但强ひて申さば、不幸中の幸は、良性との事に候へども、早晩之が爲に殪るべき天命と覺悟せざるべからず、

鶯の鳴く音悲しと夢に見し

而して病處に一刀を下すべきや否やは、唯今胸中の大問題に有之候。從而一日も攝生を忽にすべからざるわれ物用心の身に候へば、當分百事の累を抛ち、來客の煩を絕ち靜養第一に心掛け可申と存候。委細は又々可申上、其内病骨錄と題し候て、はかなき日記なりとも入御覽可申候、入院中僅に一句致候。

何はさて命大事の春寒し

★

三十六年四月十六日　齋藤松洲宛

其後賤恙別狀無之然しよろしき方に趣くといふ景氣には無御座、專ら流動物を用ゐ居候故、神身共に勞れ候て困入申候。讀書は出來申候へども、執筆も出來不申、手紙書くも億劫にていづ方へも無沙汰致居候。平常好きな客さへ接待のあとつかれ候てよろしからず、始終氣倦み體萎えぐた〳〵と致し何といふ事もなく閉居して消花致居候が何よりつらき事に御座候。

例年花咲く頃は頭重く氣鬱し候に、この病中の事なれば、それが一層甚しく一身を持あつかひ居申候。人を訪ふも慵く、人に訪はるゝも懲く、内に居るのも氣がはれず、外に出る元氣も無く、食慾絶え名利の心去り、恰も枯木の水に漬り死灰の雨にたゝかれたるやうの有様にて一日々々と送り居申候。

★

三十六年六月四日　水落露石宛

五六の親友相集りて此身を樂じくれ候事一方ならず、小生は世にも希なる仕合ものと心中喜び居申候、小波子ある人に向ひ尾崎も以て瞑すべしだと申候由、この一言にて小生が如何に死花を咲かせつゝあるか、御察し被下度候。齢四十に滿たずこれからが仕事をする所にて、摧け候は如何にも残念に候へども、天命は誰も遁れ難く候へば、かやうに人々におもはれ候て往生候は、小生の面目不過之含笑入地の大安心を得候も、畢竟此邊の力與りて大なる事と存じ本望の事に御座候。

半生を文章に費しその成らざるに先ちて死に候事は返す〲無念に御座候。

この五六年來はは〲〲しき筆も取らず、新聞も休勝にて豎子をして跋扈せしめ候も、此大患を發し候下地の爲に暗々裏に惱され居候事と存候。

子が此病を得候を人は惡食又は暴食の因果のやうにわらひ候が、小生は何より口惜う御座候。文章の爲にかく身を危く致候外ならず候。今死に候はゞ七生までも世に出でゝおもふ通りの文章を書き申さずては已まずと執着致居候。

★

三十六年八月六日　齋藤松洲宛

一昨日醫師參り病勢頗る增進の模樣なれば打明けた處御覺悟有るべきとやうに申候へども、拙生胸裏にはまだその消息は御座なくこれから庭に水打ちアイスクリーム啜るを樂みにいたし居候（中略）今日も生延び申候明日の事は測り難し。

★

三十六年八月二十三日　石橋思案宛

貴諭のごとく凉氣相催し候へども、難病の身は一向凌ぎよくも候はず、この六七日來日々の疼痛にて煩悶罷在いとせめて苦しき時はモルヒネを服し候て一時を寛う致居次第に御座候。昨夕も一服やり候故今朝少しく樂にてこの筆も取り得候事に御座候、まことにかゝる苦痛にては長く難堪く一思ひに死なばやと考へ候事も御座候胸中御察し被下度候。

この飛び飛びに配列した、死の前年より死の年に至る書簡に、如何に病床にあつて、文學を思ひ、死を豫想しつゝあつたか、逞しい生への期待の背後に、死の襲來を退けて弱い心を勵してゐた紅葉に、同情の淚を注がざるを得ない。この書簡に於て、三十六年三月十一日の夫人宛、三月十四日の福田和五郎宛の直前三月十日の日記は『病骨錄』に含まれてゐるが、それは日記といふより精神の混亂を整理して透徹した心境小說の體をなしてゐる。即ち病院で長澤學士より、紅葉自身病氣について如何に考ふるか、手術について覺悟あ

りやと問はれて決心に迷ふあたり、催眠の料にと薄月の夜を葡萄酒を求めに、本郷通りに出ようとすれば、警戒した看護婦が呼びとめる場面、十二時、一時、二時、夢となく現となく走る空想の床にゐる心理、さうした宵から三日經て、十四日入澤博士自ら來つて斷症試驗の結果を告げ、去るに臨んで「私の誤診であることを希望するのです。」といはれた言葉で終つてゐる。死の月十月一日の日記も亦、冷かな氣が字面から立ちこめてゐる。モルヒネの功用を說き、將來に傑作を書きたい希望を愛撫して「最早今生では其望も慨はぬ事であるか？凡ての妄念を一洗して、唯予は臨終の際に於て、七度人間に生れて予が思ふ程の文章を書かうと爲るのである」との野心ある諦觀を述べ、同じ病であつたといふ上杉謙信の逸話に懷しみ、無遠慮な客に神經質な怒りを發してゐる。

「觀月」と題した十月五日の日記は、その月の末日に永眠した、彼の發表された最後の日記として心惹かれる。この宵、親しき門生等を集めて、觀月の句會を催して、「樓に上りて八時開莚。月色明に、風無く。氣靜に、昨の如く寒冷ならず。遇難きの良夜なり。」と誌してゐる。然しまた「同八時半、胃痛息まざる故に、またヘロインを服す。斯日睡起より懵騰として氣力薄く、人々集りて後、快談爲さんとするに、困憊と疼痛と交も迫めて、意の如く爲る能はず。」と言ひ、やや快くなつて、「病中不把盃。我をして月前獨り憂ひしむる勿れ」とて

莫　留　非　涅　の　量　增　せ　月　の　今　宵　也

の句を咏んでゐる。

彼はその前七月九日「生死論」なる感想を記して、迫り來る死につき、生に比して述べてゐる。それは結局「吾人始に既に生く。故に生きてあるべきの務を爲せりと雖も、要するに樂まんが爲に生くるにあらずして、生くるが爲に樂める也。生の終るを待つが爲に、假に其間を樂める者ならずや。生既に盡きて死來る、宜しく從容として迎ふべし。生の樂しきが如きは、生を得たるに就て之を處する一の方便なるのみ、其生終らんとせば、潔く之に就いて可也。死は決して此生の樂を奪はんが爲に來れるにあらざる也。死は始より生者の樂と苦とを知らず、唯生の終を告るが爲に來れるをや、吾人何ぞ之を憎むことを得む。之を憎むは死の何物たるを知らざる故のみ。死の何物たるを知らざる、則ち又其生の何物たるを辭せざるのみ。智者何ぞ如此くならん。」といつた風な考へ方で、「生の容たるや花の如く美也。死の狀たるや雲の如く幽也。」との言葉でも分るやう、兩者を共において、情趣的な見方をして、彼が思考の淡々たる世界に安住してゐたことが、現實死に當面して生死の考察にも、洒脫な諦觀に落着いてゐるのが見られる。

彼には畢竟死は死、藝術は藝術であつたに違ひない。彼の晩年の病苦と平行する『金色夜叉』に、彼の日記書簡を通じてうかがはれる苦悶は、作の進行の上には影響したであらうが、內容の中にはしみこんでゐない。勿論題材が題材であるから、彼の生死への苦悶が入りこみ、冷い影を投影するには困難ではあらうが、之がしみこんでゐない事は、彼の文學の特徵と思へる。大抵の作家のかうした場合、その靑白い吐息は、何等かの形を假つて作品の中途からでも雜り入つてゐるであらうと思ふ。

ただ紅葉は、ここに美しい歌を唱ふ努力のみした。池に浮ぶ白鳥が、そのいまはの最後に、生涯で最も美

しい歌を歌ふといふ物語のやうに。

彼は「白鳥の歌」の半ばに倒れたのであるが、『金色夜叉』の大衆的浸潤は驚くべきもので、その梗概は如何なる山村の士女も之を知り、「貫一」と「お宮」は今尙まざまざと、社會に呼吸づいてゐるかの如くである。それは德富蘆花の『不如歸』と並んで、最も大衆の愛讀を得た、明治の小說の一つであらう。それは作品以外に、演劇や映畫や、流行歌による傳播がストオリイを一般化じたもののやうにも思へる。

この作品について、多くの批評はその藝術的價値を、紅葉の作品中『心の闇』や『多情多恨』に高く呈し、『金色夜叉』は、その名の有名なるに比し、より評價は低いものの如くである。その理由として正宗白鳥も言はれる如く、蕪雜な新派劇や、映畫などによつて流布され、その聯想が作品自體も、幾らか汚がされた印象を與ふるのでないか。直接これ等の先入主を排して讀む時、餘りに通俗的に見られてゐるこの水準を、更に上げねばならぬのでないかと思はれる。ここには彼の生涯の作品傾向の總決算的な要素がみなぎつてゐる爲に、その長所短所は共に見られるであらう。

この作についても、やはり村岡典嗣氏は『日本思想史硏究』中の「紅葉山人と源氏物語」に『源氏物語』の影響の下に書かれたものとしてゐられる。

それは主として、與へられた文章上の影響であつて、景情一致の筆、婦人描寫、文章のリズム、「ぬべく」「なりけり」「いといたう」などの語法の攝取を記してゐられる。そこには『多情多恨』の場合に比して、理論的で肯定されるものがある。表現の技術方面から硏究されたものが、さうした方面に反映するのは合理的

であるからだ。

しかしそれは尨大な全篇から見れば、まことに局部的な見方にしか過ぎない。ここには全部にわたつて、紅葉の素質、吸收した樣々の要素、それ等が複雜に、時に整理され、時に錯雜し、全篇到る所に埋められて、この作品の大きな構成をなしてゐると言はねばならない。

正宗白鳥の言ふ

私はかねて、『心の闇』と『多情多恨』とを紅葉全作中での最も傑れたものとしてゐた。『金色夜叉』の如きは『不如歸』『颶風戀風』などと同列に論ぜらるべき通俗小說であると思つてゐた。ところが今度全部を通讀して見て、さうとばかりは言へないことを知つた。文學者としての紅葉、人としての紅葉を研究するためには、『金色夜叉』をこそ選ぶべきである。馬琴を研究するには『弓張月』や『美少年錄』や『俠客傳』よりも、『八犬傳』を選ぶのが當然であるが、『金色夜叉』は紅葉山人の『八犬傳』と云つていゝのである。……　私は今度この未完の長篇を讀んで、たゞに紅葉の文學的技倆を十分に窺ひ得られたのみならず、世上の小說愛好者の心理をも察する事が出來た。（中略）紅葉が自己の天分と蘊蓄とを傾注した小說は『金色夜叉』である。『三人妻』や『多情多恨』のやうに完備したものではなくつて、どんな批評家からも非難されさうな缺點を有つてゐるのであるが、彼としては最も面倒な題材にぶつつかつて藝術的奮鬪を試みたので、腦漿を絞り盡して、倒れて止むといつた悲壯な感じがされる。それで彼れは自己の有つてゐるあらゆる物を投出してゐる。繼ぎはぎであるが、それ等の繼ぎ切れのあるものには、一

代の才人の織つた錦繍の美を表してゐるのだ。(註1)

とこの未完成ながら、集大成の作品への評言は傾聽すべき多くの眞實がある。手に入つた習練の筆をもつて、自らの肉體の近距離への作品の小さき完成を計る事は、それまでたどつて來た作家にとつて容易なことである。然し新しき大きな文學上の實體へ、新しき方法の實驗を以て、距離のへだたりをおいて、身をもつてぶつつかつて行くところ、その作の完璧の如何を問はず、眞に作家の道がある。紅葉はこれを、前に掲げるやうな、最惡の條件の內に於て、勇敢に果して行つた。

白鳥の云ふ「世上の小說愛好者の心理」とは何であらうか。傳へ聞く如く、この作品が、紅葉の病患の一進一退と執筆の苦悶を如實に示して斷續しつつ、讀賣新聞に現れ、每朝の配達を讀者をして千秋の思ひあらしめた理由は何であつたらうか。泉鏡花の表現をかれば、老若婦女、桃割の娘も、鼈甲緣の目鏡かけた隱居も、それを耽讀、愛誦したのは、章句調律自ら微妙なる音樂と成つて、風は蕭々として紙上に鳴り、水は潺々として筆意に濯いで、直ちに讀者の心胸に響いたからでもあつたであらう。(註2)

村岡典嗣氏も同樣に「金色夜叉の後半が讀賣新聞紙上にとだえ勝ちに出るのを待兼ねて讀んで、心に惹かれた箇所を暗誦して樂んだことは今も記憶に新たであります。實際一語一字を苟もしない苦心の結晶を示す美辭麗句は、讀む人に暗誦を要求する力をもつてゐたのであります。」といはれてゐる。

かかる文章、外面的な行文の格調、美しさも讀者への魅力を持つたことは事實であらう。然しながら、さうしたものにまして、筋の興味や、人物の明日の運命に氣を奪はるるが、多數讀者の常である。章句調律に

氣を奪はれた鏡花自身も、亦かう書いてゐる――。

先生が或時、某處の園遊會に出席された。園に、淑女才媛が夥しかつた。大塚楠緒子、上田柳村夫人など、十幾人か、ばら〳〵と初對面の先生を取卷いた。

「先生。」

「先生。」

「――抑も鹽原の地形たるとは何事でせう。」

「鹽谷郡の南より群峰の間を分けて……どころぢやありませんわ。宮さんを何うして下さるんです。」（註3）

といふやうな、作の人物の運命に、身もつまされて讀み耽つた讀者が多かつたと思ふ。しからば如何なるものが、かかる讀者を捕へたか。之を社會の事情に結びつけて考ふるに、女主人公お宮の虛榮的な心理は、當時の理智に曇つた女性一般の第二の本能とまで云ひたい共通性であつて、富山の持つ三百圓のダイヤを見ては、「あはれ一度は此紳士と組みて、世に愛たき寶石に咫尺するの榮を得ばや、と彼等の心心に冀はざるは希なりき」といつた彼女達であつた。「世間の女の誰か自ら其の色好を知らざるべき。憂ふる所は自ら知るに過ぐるなり。謂ふべくんば宮は己が美しさの幾何値するかを當然知れるなり。彼の美しさを以てして纔に箇程の資産を嗣ぎ、類多き學士風情を夫に有たんは、決して彼が所望の絕頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤より出でし例寡からざるを見たり。又は富人の醜き妻を厭ひて、美しき妾に親むを見たり。才だにあらば男立身は思のままなる如く、女は色をもて富貴を得べしと信じたり。」とそのお宮の自誇は、當然經濟的

條件で、男性の從屬的地位にある女性の、唯一の男性へ對抗する武器であるが、明治の社會組織やうやく歴然たる區別の線を見せ、經濟的に不安定なる階級の生活者の貫一へ賴るより、より優越安定的な階級の富山に心は移つて行くであらう。

しかしお宮は全然貫一を思ひ切つたのではない。金錢の迷妄の中にあつたのだ。さうした心理は、紅葉、及び彼の讀者層の小市民のイデオロギイの反映であるが、その一方封建的な精神生活の傳承をひく知識階級の潔癖性で、資本家階級のあまりに經濟的條件で、精神的なるものさへ購はんとするものへの、漠然的な反抗を示しては、その意圖を具體化さしてゐる。

かうした岐路の中に、お宮は如何になり、貫一はどうなるか。その他の副人物達はこれ等を取卷いて、如何に進展さするか。當時の女性の讀者達はその愛讀する心理の片隅に、お宮に託して等しく自己の運命の骰子を、振つてゐた事實もあつたと思ふ。またある讀者は、精神的なるものの敗北へ對する義憤から主人公への同情、又荒尾讓介の剛毅な性格に心惹かれてゐたに違ひない。正宗白鳥が、この作品に反映した時代の空氣、不徹底でもどうかしなければならぬ時代のせつぱつまつた空氣、生活難や、金錢欲の鋭敏な感じが、在來の小說と違つて、ここに光つてゐると言つたのは、紅葉の時代社會の截斷面を、くつきりと觸れて描いたことの指摘で、それはその頃として讀者に受けた大きな理由であらう。勿論幾らか、一代の紅葉山人が病患を冒して、書き綴けてゐるといふ事の、ジアナリズムのあふりも極めて部分的にはあつたであらうが。

我々はここに彼が情痴の世界のみより見た、人生や社會より、ずつと擴大された視野の下に、緻密な計算

を經た大陸文學風の大きな構成を發見する。それはともすれば東洋風な自照的方向の狹い心境の中に籠らうとする、日本の小說への一つの盾の作用をなす。彼は大きな掌をここに見せた。この盾の故に、この作は評價の水準を高めねばならぬ。この本格的構成は認められねばならぬ。かうした中に、在來彼の特技であつた、筋の興味、それを通俗に墮させぬため、又今日の如く活字を默讀するより、まだ朗讀の慣しに添ふための文章の彫琢、そして時代に相應した批判など縱橫に用ひて、この長篇を織りなしてゐるのである。

彼は三十一年一月より實際筆の上では著手した本篇を、遂に脫稿の喜びを見ず、中途にして三十六年十月三十日、三十七歲をもつて長逝してしまつたのだ。

紅葉病床にあるや、巖谷小波、石橋思案等を主として、十千萬堂設立の事を議し、そこより紅葉全集發行のことを定め、紅葉に計つたところ、彼も大いに喜び、病床にありながら、校訂に從事したのであるが、遂にその生存中に第一卷を出す運びに至らなかつた。また彼の藻社門下、泉鏡花、小栗風葉、德田秋聲、中山白峰新井雨泉、鈴木苔花、篠山吟葉、篠原嶺葉、田村西男、山里水葉、瀨沼夏葉、星野麥人、北嶋春石等十三人及び後藤宙外をも加へて、師の病愁を慰めんために、『換菓篇』一卷を編んで、平素の恩愛に報ひようとした。この序詞には、十千萬堂門下一列として「生等相胥りて師紅葉先生の病鬱を解かんが爲。玆に各謹み草する所を輯めて。換菓篇と題する一篇を得たり。則ち枕上に奉貽して。鄙忱の十が一を表す。滿卷の蕪辭叱正を愧づる者例の如く。今に及びて反りて靜養の累たらざらむを冀ふのみ。」とあり他に依田百川、野口寧齋の序をも掲げてゐる。

紅葉はその晩年『金色夜叉』に傾注した精力の殘りを、更に他にもふりむけてゐる。『寒牡丹』は三十三年一月一日起稿讀賣新聞發表といふが、三十四年二月六日發行の春陽堂版によれば、長田秋濤との合著である。原作者は知らぬが、露西亞の小說の飜譯らしく、秋濤の下譯を紅葉が加筆したものに違ひない。『東西短慮之刄』は三十三年一月二十三日起稿、同じく讀賣に發表したといふが、三十五年一月一日發行の春陽堂版に據れば、第一頁に標題の上に「武藏の名香阿刺比亞の林檎」とあり、紅葉山人講演と記す。

この頃作家の演壇進出が流行して、紅葉も之に出演したのである。新聞に講談が盛んで、小說壓迫の感があつたので、それへ對抗する意味と、下品なその改良の意味があつたらしい。紅葉のこれは、アラビアン・ナイツの「三つの林檎」と錦文流の『本朝諸士百家記』中「武藏野花房丞之丞短慮之事」との筋の類似を、交互比較して述べて行つたものである。この書には附錄に The Japanese "Desdemona" なる題で、「短慮の刄」の英譯が揭げられてある。

この『文學口演會』は讀賣新聞社の主催であつたが、硯友社も『新小說』第五年第六巻臨時增刊「春鶯囀」を編輯する目的で三十三年四月、牛込二十騎町の川上眉山宅で講演會を催してゐる。

「茶碗割」――北條團水「晝夜用心記」の一章―(紅葉)「湯女の魂」(鏡花)「薔薇緣」(小波)「血髑髏」(秋濤)「五十年」(眉山)「別子銅山」(水蔭)といふプログラムであつたが、眉山は出場せず、水蔭は速記不能で、「獨眼龍將軍」を草して雜誌には入れた。

この催しはかつての文士劇と等しく、作家の街頭進出の社會的功果はあつたと思ふ。(註5)

彼は自らの病患にかかはらず、門下への仕事の鞭韃も怠らなかつた。瀬沼夏葉の露西亞文學の飜譯の添削などこの一例である。

自らの仕事も、死に近く臨んでも絶たさなかつた。三十六年六月四日水落露石宛の書簡に「目下日々氣分のよろしきを見計ひ全集の編纂又はノオトルダムの譯述一寸氣を易へては換菓篇の編纂句集の草稿短文の反古しらべなど致し病人のわりには用事多く時々凝りてはしくじり申候」と書いてゐる。『俳諧類題句集』『西鶴文粹』などの編著の他に、ヴイクトオル・ユウゴオの『ノオトルダム・ド・パリ』の譯『鐘樓守』二卷が、彼の死後三十六年十二月十八日早稻田大學出版部より出版されてゐる。その譯の動機として、下卷の長田秋濤の序の一節に「憶ふに客歳夏季、余が函嶺塔の澤に在るの日、君余を訪ひ詩酒献酬の間卒然余に語て曰、現今文界の形勢索寞として甚だ稱するに足るべきもの莫し、今泰西文豪著す所の一大雄篇を飜譯して之を社會に紹介せんとす、敢て兄の說を聽かん。余其の甚だ我意を得たるものあるを悅び、倶に力を此事に致さんことを約す」とある事によつて、理由を知られよう。行文は言文一致、譯文臭のない文體である。

紅葉はこれについて、病床で絕えず懸念してゐたらしく、苦患の間々にも譯稿を重ねてゐたのだ。この上卷に坪內逍遙が序を贈つてゐるのであるが、かつて紅葉の文壇への出發に、『新著百種』の序をもつて、その華々しき行を送つた事は記憶に殘つてゐる。今ここに遺著を與へたこの序と、對比をなして、因緣的な感慨をもたらす。これは一面大體論ながら逍遙の紅葉論がうかがはれるので、左に引用しようと思ふ。

鐘樓守上下二卷七百餘ページは西洋近世文壇の巨人ユウゴウが傑作の佳譯たり、かくばかりにても此の

一篇は永く世に傳はらんの價格あるべし、然るを況んや時樣小說の泰斗、一代の才人、故紅葉山人が絕筆なるをや。「我れはいまはまでも筆とりぬれば思ひ遺すこと無し」といへる其の經營の跡しるき此の譯筆こそは、あはれ名將軍が其の最後までも着馴れにし古金襴の戰袍などにも比へつべし、詢に是れ居然たる一大不壞の紀念碑たり。

聞く山人が文を作るに忠なるや、身重痾の褥に在るも删潤校訂皆之れをみづからし、雕心鏤肝の細巧殆ど一日だも缺くことなかりきとか、然るに病革るにおよびては流石に剛健なる意氣も稍や萎え撓みけるにや、讀みて上卷より下卷に移るときは、故人が水莖の匂ひ次第〳〵にかすけく、隱然として一種の病床日誌につきて日々病勢の進みゆく樣を讀むが如き心地する、いと痛はし。

併しながら山人の如きは眞に其の天職と始終したるものなり、文學に全力を傾注し得たること山人の如きを得ば遺憾なきに近し。まことに其の夭折は悼みても尙餘りありと雖も「名を成さずば」と古人の謂へる齡四十にも遠かるうちに、盛名旣に海內にあまねく、親しく贄を執れる弟子幾十人、堂に上れる者も旣に五指に餘り、病みては良劑を東西千里の外にあさり、臨終にさきだちては全集の刻成らんとするを知り、死しては都鄙幾萬人の知音、交遊、崇拜者、追隨者、士女、老若に痛惜せらる。嗚呼、性の適する所に直往し、向上し、職に斃れて止み、世人また其の功と勞とを認めたり、かくの如きの一生、是れ豈に大に慶羨するに堪へたらずや。

只いさゝか怪しむは、かくまでに殊遇せられたる一代の名家にして、などて其のいまはの一ふしは彼の

鶯が梢に啼きやむが如くなる能はざりしぞ。などて其の任意の文、所好の自作に其の絶筆をえとゞめずしてかゝる長篇の譯筆にはとゞめけるぞや。予は此の血痕斑々たる金襴袍が尋常一様の遺品にはあらずして苦鬪難戰の紀念たるが如きを哀しむ。

紅葉が佛蘭西浪漫派の巨匠――これを現代の才人ジアン・コクトオに言はしむれば、「ヴイクトオル・ユウゴオは、自らヴイクトオル・ユウゴオだと信じた狂人だつた」さういつたタイプの「神々しい怪物」の巨大な作品に關心を持つた事は興味がある。そのメロドラマ風な作品、豊かな語彙、手腕、『金色夜叉』に至つて、果し得なかつた構想の夢を、この譯著に殘して、彼は死んでしまつたと言へないであらうか。

紅葉の生の最後の情景を、彼の門弟鏡花の優れた描筆にかりて示しておきたい。

紅葉先生逝去前十五分間

明治三十六年十月三十日十一時……、形勢不穩なり、予は二階に行きて、謹みて鄰室に畏まれり。

此處には、石橋、丸岡、久我の三氏あり。

人々は耳より耳に、耳より耳に、鈍き、弱き、稲妻の如き囁を傳へ居れり。

病室は唯寂として些のもの音もなし。

時々時の軋る聲とゝもに、すゝり泣の聞ゆるあるのみ。

室と室とを隔てたる四枚の襖、其の一端、北の方のみ細目に開けたる間より、五分措き、三分措きに、白衣、色新しき少看護婦、悄然として出でゝ、靜に、しかれども、ふら〳〵と、水の如き燈の中を過ぎ

りては、廊下に彳める醫師と相見て私語す。

雨頻なり。

正に十分、醫師は衝と入りて、眉に憂苦を湛へつゝ、もはや、カンフルの注射無用なる由を說き聞かせり。

風又た一層を加ふ。

雨はたゞ波の漾ふが如き氣勢して降りしきる。

これよりさき、病室に幽なるしはぶきの聲あるだに、其の都度、皆慄然として魂を消したるが、今や、偏に吐息といへども聞えずなりぬ。

時に看護婦は襖より半身を顯して、ソト醫師に目くばせ爲り、同時に相携へて病室に入りて見えずなれり。

石橋氏は椅子に凭りて、身を堪へ支ふること能はざるものゝ如く、且つ仰ぎ、且つ俯し、左を見、右を見て、心地死なんとするものゝ如くなりき。（角田氏入る。）

人々の囁きは漸く繁く濃かに成り來れり、月の入、引汐、といふ聲、閃き聞えつ。

十一時十五分、予は病室の事を語る能はず。（註6）

十一月二日秋色深き青山齋場は、この明治の生んだ大きな作家の葬儀で混雜した。

二十年の歲月、共に步き來つた硯友社の同人は、その頭首の死に、同人を代表して川上眉山が草した追悼

の文を、石橋思案が讀んだ。『眉山美文集』にそれが收まつてゐる。

紅葉山人弔詞

深からん秋をだに、名にしおはゞ地に驕る花なるべきを、何事ぞ、一夜の雨をあなたにして、其魂を結びもあへず、殘光雲を打つて遠く世を隔て去んぬ。旻天無情、此絶代の才人を奪へる、行年三十有七、命を假せる壽に於て幾何ぞや。人の齡ひの限りあれば、歩して彭祖に等しかるべからざらんも、せめては、生ける常ならんには、ありし世のそれに加へて、更に又貢献する所の窮りなからんを。七生文章を作らんと言へる、道に忠なる比すべきものもなき、此恨いつの世にか盡くべきや。遺言耳にあり、溫容前に映ず、然も幽明早く境を異にして、こゝに長しへの別れに立てる、我等同人、哀悼の感極りて殆んど言ふ所を知らず。雲やそれ、水やそれ、石にさへしみ入る許り、折からの秋の姿よ。哀哉。嗚呼。

明治三十六年十一月二日　　硯友社同人

かくて硯友社は、それを支持し來つた最も巨大な柱を失つた。その後の社は、紅葉祭の集ひに集る位の存在にしかならなかつたと云へようと思ふ。

紅葉の明治の文學に殘した功績については、やがて後章に他の同人へ對するものと共に、之を述べることにしたい。

註1　小波が獨逸から紅葉へ送つた手紙の一部「小波洋行土産」中の「伯林片信」に三通入つてゐる。其一（三十四年十二月）には演劇、オペラの興行の樣子を知らせ、小説ではゾラ、トルストイ、ズウダアマンが店頭を飾つてゐると

書き、其二（十月十四日）には在留邦人會「白人會」の樣子、演劇、オペラの見物記を書いてゐる。ファウスト（ゲエテ）ワルレンシユタイン（シルラア）僞る者は禍なり（グリルパルツエル）新聞記者（フライタハ）フライシユツツ（キンド夫人）ロオエングリン（ワグナア）等についてである。其三（三十五年三月六日）には、主として交際社會の模樣を知らせてゐる。何れも病床の紅葉に新鮮なエスプリを傳へたに違ひない。

註2　正宗白鳥著『文藝評論』中の「尾崎紅葉について」。

註3　註4　春陽堂版明治大正文學全集「紅葉篇」小傳。

註5　文士口演については、『自己中心明治文壇史』中「文士講談」及び『我が五十年』中「登壇の二十五年」に詳しい。

註6　鏡花全集卷十五。一四一頁所載。三十六年十二月執筆にかかはるもの也。

二　その他の同人の動靜

硯友社の存在を、期間的にはつきり定める事は出來ない。しかし文學史的に意義のあつたのは、成立より明治三十年以前——更に延長しても紅葉の死の前後までを、區域とされるであらう。

その集團性、結社性といふものは、時が立つにつれて、稀薄になつてゆく性質のものであつた。この期は、そしてこの以後は、集團として硯友社を論ずる場合は、あまりその價値を認められない時期なのである。彼等を結びつけるものは、古い緣のみであつた。前に記したことではあるが、重ねて繰返しておくのだ。

然しその展開の結末として、その作家が一人一人どんな道を經て行つたか、凡その見通しをつけておかね

ばならない。

大橋乙羽は、既に紅葉の死に先だつて、三十四年六月に亡くなつたのであるが、その死ぬ二年前に「積年の貯金を投じて五部三千頁の自著を刊す」(花鳥集　紅葉の序の一節)故に、貯金文學と稱せられた、小說、史傳、逸話、風俗、紀行文集の『花鳥集』、紀行文集『千山萬水』、小說　雜筆、新體詩、紀行、俳諧集の『若菜籠』政治小說『累卵の東洋』談話集の『名流談海』の五卷、他に小說、雜筆、紀行、新體詩、漢詩、俳句集の『風月集』を殘して行つた。

彼について『樗牛全集』卷二の、樗牛の「大橋乙羽を悼む」といふ文中に

小說家としての子は、素より紅葉、露伴の諸先輩に及ぶべくもあらず、詩歌を能くし、俳諧に巧みなりしが、是によりて名を後世に留めむには、尙ほ多大の修養を要したりき。唯々夫れ紀行文の文學者としてぞ、子が獨壇の事業なりける。

といつてゐるのに、盡きてゐるであらう。既に明治二十三年春の、石橋思案と共に旅した、「奥州旅日記」にもその一端が見られる通り、彼の紀行文は、同じく紀行文作家としての田山花袋の詩味は乏しいが、生活や歷史へ深く入つて眺められてゐる。

然してまた、樗牛の言ふ如く、「其の力の許す限に於て、文藝の士を庇保せむと力めたるにあり」といふ、博文館に入つては、出版業者として、明治の文學の出版事業に努力して、間接に明治文學の發展への貢献の功大なりしことも認めざるを得ぬ。

彼は死の前年三十三年三月より九月まで、歐米を巡歷して、出版へ對する見識を深めて來たのであるが、その收穫を、新しく生かす日を得ずして逝つたのであつた。

通俗的な新聞小說以外、とりたてて評すべき作品もなく中村花瘦もすでに、それより前三十二年に死んでゐる。かく硯友社は、次々に地上を去る人々さへ出でて、寂寞の感ひとしほなるものがあつた。

その他小波は、三十三年九月、伯林大學附屬東洋語學校教師として、獨逸に留ること二年にして、三十五年九月歸國した。彼はその前博文館に入つて、『少年世界』の編輯などやつてゐたが、たまたま伯林大學附屬の東洋語學校に、日本人敎師を欲してゐることを、歸朝した友人によつて聞き、運動して渡歐したのであつた。

二年の滯獨中に、『世界お伽噺』の資料など蒐集し、『小波洋行土產』の著を紀念として、歸朝の翌年上梓した。

『小波洋行土產』は上下二卷よりなり、兩卷共、獨逸より日本の新聞雜誌へ送られた原稿を土臺として、編輯され、上卷は『少年世界』へ送つた少年向の「さゞ波日記」「伯林當座日記」「伯林百談」「歸朝日記」が主として揭げられ、下卷は京都日出新聞に送られたものが主で、「船中ゆれ〳〵草」「大陸がた栗毛」「伯林までつき毛」「伯林見物記」「居た伯林物語」「見た伯林」等の世態風俗の見聞記が主で、文學關係としては、紅葉に宛てた伯林片信、また伯林文藝談、「アンダーセンの半面」などが僅かにかの地の新しい文學を紹介してゐるに過ぎない。

歸朝後ますますお伽噺の創作に進み、獨自の存在を示しては、彼の『日本お伽噺』の如きは、樗牛によつて、「近時の最も成功したる著作を數ふれば、『日本お伽噺』は必ず其一に居らざるべからず。吾人敎育上の見地より觀て特に是の事を言ふ。」と、やうやく正しきモラルの上に動機をおき、兒童心理の關心からこの制作がなされたことを示してゐる。

江見水蔭は、三十一年より二年間、神戸新聞へ入社するため首都の文壇から離れてゐた。そして尙日々多くの原稿を書きつづけてゐた。彼の箇人の步道はその『自己中心明治文壇史』に明瞭にされてある。田山花袋の『近代の小說』『東京の三十年』また內田魯庵の『きのふけふ』が、文學的生彩のある表現をかつた、表面的ながら一種の文學史の形態を持つ時、また巖谷小波の『我が五十年』が、爐邊の懷舊談である時、水蔭のこの著は、現實的な著述業者の、虛飾を去つた眞實の姿が示されてある。文學と生活との二者の關係が具體的に示されてある。

いま『水蔭叢書』の彼の代表的作品といふ幾篇かを讀むに、ここに收められた作品は、水鄕の情話を描いた『新潮來曲』にせよ、沒落しゆく旅役者の、しかもその運命の中にあつて、示してゐる見榮を描いた『旅役者』にせよ、彼のもつリリシズムの、楚々たるものを、根本に漂はして、筋もまとまり殊に『旅役者』には哀愁胸を打つものがある。

この外に、二十八年十月の作品であるが、『女房殺し』は內田魯庵によつて發表當時、

水蔭は慥に自然を描くと共に人間を寫すの十分なる技倆を有する者也。『女房殺し』は獨り水蔭の諸作に

冠たるのみならず眉山の『大盃』と共に硯友社諸才子の近業の双璧といふべし。且つ夫れ立案の警抜なる描寫の細密なる意匠の自然なる文字の明快なるは近日稀に見るの佳作にして、他の雷同に依て遽に聲名を博せし鏡花一流のものに勝るといふべし。(註1)

と推賞されたものであるが、そのクライマックスの女房を殺す場面は――主人公が、己れを裏切つた女を、一月餘り諸所の溫泉地など引連れて、その擧句殺すのであるが、その主人公に、いかにも深刻がつた言葉を言はせて、深刻性を示さうと試みてゐるらしい意圖が、餘りにはつきりし過ぎて、それに同じ『林間の高塔』と等しく、ストオリイを語るに一本筋に急いだ憾みがある。

要するに彼は常に時代に卽してゐた。言はばジヤアナリスト的作家であつた。前にも言ふ如く、彼の生動する社會を描かうとする態度は、自らをさへその中へ捲きこまれてしまつた。彼が古風な文人臭味を淸算し、職業的作家として、どんどん書いて行つた元氣は、一應認めらるべきであらうと共に、他の一面、流動變化する社會に、一致してゆくことは、搖がざる立場から、より添つて行かぬと、觀察の對象に深くしみ入る事が出來ず、表面的なままに止まる惧れなしとしない。

彼は屢々その通俗小說を書く態度について、辯解して言ふには、他の作家には敎師とか實業とかの生活の保障となる職業があつて、作品を書く人もある。自己の通俗小說は、その意味での副業である。純粹な藝術的作品は、別にこれと離れて書く意志を持つてゐたと。

この辯解は正直な氣持であらうが、藝術的な良心をもつて書いてゐたと見らるべき作品まで、何時かかう

した慣しは混濁的なのものを落しこむのではないであらうか。かうして筆が荒んで行くとすれば、惜しむべき方法と言はねばならない。

次に川上眉山について述ることにしよう。柳浪と共に、三十年前後の一時に、彼等の黄金時代を作つた彼は、その後いかに進んだであらうか。

紅葉が文學上、肉體上に苦んでゐた頃、眉山の精神的な苦悶も甚だしかつた。

明治三十年一月彼が逗子より三浦半島の放浪記『ふところ日記』の一卷は、當時の心境を窺ふべき記錄であらう。

彼の放浪は、もとよりかつてのこの國の芭蕉や、西行ほど徹底したものではなかつた。醉餘ともいふべき甘い浪漫的な點が見出される。頭を剃つて旅に出た、島崎藤村の『春』の主人公と、共通した浪漫性が多分に見出される。そこには涙も湧き得ない人の世の寂しさもなく、その眼には、ともすればうるほひ勝ちな感傷の涙があつた。

浪漫的とはいへ、海彼岸の詩人等の如く、倦怠の常識界を嫌つて、奇怪な異國の風物、生活をしたひ、命を賭してのアバンチユールの路についたそれもなく、暫くの哀歡を、人は酒に醉ふ新春に背いて、都近くの海岸づたひ、風寒い峠路越えに、さまよひ歩いた、せめてもの自慰的行爲に過ぎなかつたらうが、そこには他の硯友社作家に見られぬ、眞摯なるものを確かに持つてゐたと見られる。

紅葉の苦悶は、藝術に執した苦悶で、人生と切りはなして居り、また病んでもその病の苦痛に打勝つ文學

の世界、卽ち病それ自身から彼の作品を、育てた正岡子規の如く、病の中に一つの藝術境を掘下げたのでもなかつた。

眉山に於ては、人生と藝術がからみつき、人生の哀しさが、淡いニヒリズムとなつて、藝術への憧憬との葛籐があるのだ。

> 一盃一城に代へ、三盃一國に代へ、百盃命に代へて餘りの安さの五十年、それまで能く生存ふべきやなど、不圖思起す時却つて打笑ふ若氣の至り思ふほど口惜しく、野心なきにしもあらず、抱負なきにしもあらねど、それを言はゞ裏店の態樣だにとのみ事は變れど詰る處は同じやうなる輪を廻りて、死なんが爲に生きん事を力むる米や魚鳥や牛乳や肝油や、不朽尊きか無限有難きか。古來英雄すべて寂寞、盛名論もなく馬前の塵、枯骨鍬先に掘出されたる幾百年の後、世話燒なる古實家に騷がれて、俄かに石を立てられると、もしくは刑場の露と消えて、生理學者の御參考とやらむ室の一隅に吊下がれる骨骸と、其間徑庭あるが如くに思召す事全く汁粉の御祟りなど、私かに嘲笑ひける醉語我ながら面憎く……

と記した彼は、無論虛無にも徹底し得ない人間ではあつたらう。

しかし彼のこの心境は、ますます箇人的につきつめて行く。大町桂月は『ふところ日記』について

> 「ふところ日記」一篇は、我國有數の美文也。徹頭徹尾鏤心彫骨の文字にして、才華煥發し、詩想横逸す。青年文を好むの士、之を讀まば、必ず美酒に醉ひたらむ心地すべし。筆は若く言ふ所も若く、華に過ぎたりとは云へ、一個可憐なる詩人の面目、全篇に躍動するを覺ゆ、思ふに眉山の人となりもこの文の如

く美しかるべし。（註２）

と評してゐるが、眉山の美しさは、四圍の壓迫に、冷酷な翳を帶びては、箇人に對立する他のものを漠然と意識し先に概念化された社會も、この現れを示すものであつた。彼はかくしてますます箇人を壓迫する社會や國家などの强權に眼を注いだ。そこからやがて被壓迫者たる箇人への同情となつた。

三十四年九月發表の『其の日』と題する作品には、其の日、國務大臣の一人は勳功によつて、特に子爵の位を授けられ、某國には他日の皇帝となるべき孩兒が産聲をあげたといふ花の一日——夫より捨てられ、繼母のゐる實家へ戾つた一人の女が、遂に一人死を選んで、出される際、夫の家へ殘してきた幼子に、一目會ひに行くといふ華かなるものと、ささやかに慘めなるものとの對比を描いて、あはれな女性への同情を示し、三十五年九月發表の『野人』に於ては、北淸事件を背景として、その戰地に戰死したる子供を持つ父親の、徵兵制度へ對する疑惑、それから子を失つた悲歎の餘りの發狂、つづいて家出をしてたうとう死んでしまう徑路を描いてゐる。そこには以前なら、國家へ殉じた英雄の父親として、取扱はれたらう材料から、明に移行して箇人と强權との對立が記されてある。三十六年四月發表の『一軒百姓』には、北越の片田舍において、村の金持より嫌はれ、また一村中から交際を斷たれた一軒の百姓家について、そして同年八月發表の『鶴澤橋』には鬼と仇名された地主と、對抗する小作人の群とを、作中にもたらし、同じ傾向として死に近い頃の長篇『觀音岩』には、より深刻に「村刎ね」の事實を、作の骨子として描いてゐる。

かうした題材における、社會事象への擴大、しかもやうやくその內に分裂と對比とを描きだした眉山は、

自己の受けた社會よりの壓迫から、時代に敏感だつたに違ひない。

眉山は明治四十一年六月十五日突然自らを殺してしまつた。彼の死は、かなりなセンセエションを持つたらしく、その翌朝の新聞は競つてそのニユースを掲げた。ここに『毎日電報』のニユースを、その一例として引いて之を具體的に示してみたい。それは「川上眉山の自殺」と題され「慘憺たる其最後數奇なる其生涯」と傍題されて、

文壇一方の覇とし硯友社の耆宿として作物また見る可きもの多かりける彼の川上眉山氏は近來兎角失意勝ちにて快々たるものありしが昨曉突然牛込區天神町の自宅にて自殺を遂げたりといふ惜むべきかな悼むべきかな。厭世の極自ら死を早めたる者中西梅花北村透谷近くは琥珀堂の如き何れか天下の同情を惹かざる今川上眉山氏の死狀を聞く凄慘是れを詳しく語るに堪へざる處あり。明日は淺草へ轉居す可しと家內は準備に忙しく例よりは早く寢靜りし一昨夜は眉山氏は如何に過しけん一昨曉二時頃氏が用便の爲に起出でしを覺えたりし夫人鶯子(三七)は五時眼覺めて眉山氏の姿見えざるに驚き書齋なる三疊の間を覗ひしに、此は如何に三疊の間は血汐一面に漂ひ寢衣を紺飛白の單衣に着換へ白縮緬の兵兒帶を締め金縁眼鏡を掛けたる儘右胸を下に倒れ居たるより夫人は直に驚きを抑へて馳せ寄り抱き起して見たるに右手は堅く研ぎ澄める剃刀を握り詰め咽喉部には長さ二寸頸動脈に達する傷ありて體は氷の如く其魂は呼べども歸る可くもあらざりしと。其如何にして自ら其命を斷ちしやは知るに由なく轗軻不遇漂浪の生活を續け遂に此事ありしとするも家には夫人の外晴彥(五つ)國夫(三つ)の愛兒あり溫き家庭は氏の不平失

意を慰めて餘りある可きにも拘らず漂然として白玉樓中の人たりしは興趣を以つて生れたりし詩人の今興盡きて卽ち去れるものか。

彼の死の原因について人は樣々の憶測をしてゐる。或は生活に行きつまつたせゐだといひ、或は藝術に行きつまつたためだといひ、又過度の神經衰弱が昂じ果てた結果だともする。

もとより自殺の原因は、憶測以外に明確に摑むことはできさうにない。しかし之を社會的に生きた一人として客觀する時、かく彼を病的症狀までに行きつまらせた主因はやはり人生とか社會とか、それらが彼の藝術の方向と交錯して、彼の生活力を壓迫した果てとしか見えない。

われわれはこの場合、直ちに芥川龍之介を聯想する。芥川龍之介の自殺の當時、彼の幻視に現れたといふ近代的な機械文明のシンボルのやうな黑い齒車と、眉山の死の頃幻視されたといふ、白い蜘蛛の網と、その間の二十年の時間をおいて、一人は鐵の齒車に嚙まれて、一人はしつこくねばつこい蜘蛛の網に捲かれて死んで行つたこの二人の作家を、社會環境の事情とそれに堪へ切れなかつた箇人とに關係しないでは、考へる事はできない。

齒車といひ、蜘蛛の網といひ彼等を襲ふ重壓力のシンボルではなからうか。

眉山は六月十七日駒込吉祥寺に葬られた。この不幸なる僚友のため、硯友社を代表して石橋思案は次のやうな弔詞を讀んだ。(註3)

嗚呼夢幻又夢幻、夢幻に出でて夢幻に入る君の生涯はすべて現實の境を超脱したりき、君が身を此世に置くの間は他皆云ふ作家卽ち作中の人、常住悉く詩的なりと、今や魂幽冥に歸して文學史上の人となる、世恐らくは云ふあらむ、君は遂に悲劇の主人公なりと、

纔に皮相を觀すれば或はさにもあらむか假に君の心裡を極めば君は樂觀の間にや死を急ぎけらしさはれ君より遺る者の嘆き悲しみは如何ばかりなるか、蘇生りて想ふ能はざるか君には若き妻の有るあり、稚き子の有るあり、親しき友の有るあり、而して尙他に大なる責任の有るありしを。他の認めたりといふ自然にあきたらず君の捨てたりと云ふ技巧だに、猶且あこがるゝ生等は大自然を捕へ來つて大文章を成す者當に君なるべきを信じて疑はざりしに、さるを君はすべて捨てにき誰か惜み悲まざらんや

而かも思はざる可からず文士誰か自らを殺さざる者ぞ筆の命毛より滴り落す心血は白紙を染めて常に紅に、嗚呼斯くして其人いつしか亡びざるを得ざるなり君此永かるべき犧牲の煩はしきを避け渾身の血を一時に迸らして美神の前に捧げ玆に現實の境を超脱し了んぬ夢幻猶盡きぬ四十年夢幻の人は遂に夢幻の人なる哉　嗚呼

明治四十一年六月十七日　硯友社同人

彼の不幸な死を惜んだのは、ひとり硯友社同人ばかりではなかつた。大町桂月の追悼の記は又その行文哀愁あつて、讀む者の胸をうつものがある。我々はその一節を記錄しておかうと思ふ。

明治四十一年は、世にも珍しく、怪しき年なる哉。六月に入りて、直徑一寸に餘れる大雹降りぬ。四月、

櫻花爛漫たるに、積雪高さ一尺に及びぬ。嗚呼、この年を以て、優雅清亮の詩人、川上眉山の芳魂、一夜劍光を追ふて飛びぬ。

朝駒込の寺に、在りし世の形見の柩を送り、夕君と曾て相飲みし舊酒樓に、君の「ふところ日記」を左手にし、杯を右手にし、且つ讀み且つ飮む。君が墓前に花を手向くるは其人あるべし。われは、君の遺著に對し、斗酒を痛飮して、君をしのばむ哉。

三年この方、物狂はしくも哲學を疑ひ、宗教を疑ひ、世を疑ひ、我を疑ひし果は、此肉と骨とを粉韲せむ事を思ひ、遂には了々の眞を見出し得ざる疳癪まぎれ、目に障るべきに凡ての物を無法無徹に打破し盡して、强ひて快を呼ばむとしたるに。

嗚呼、十年前の空言、遂に今日の實行となるか、かかる思想は、眉山のみならず、今の世の多くの學生にひろがれる也。投瀑の俑を作りたる藤村操の如きその代表者也。之を眉山に比するに、ただ妻子の有無の差あるのみ。世の金錢以外の趣味を解せざるもの眉山の死因を、一生活難に歸す。これ己を知つて未だ眉山を知らざる也。更に之を今の自然派の連中に比するに、骨肉粉碎の有無あるのみ。なほ少し立ち入れば、自然派の連中は、あらゆるものを疑へども我を疑ふことはなきやう也。別に抽象の言を用ゐれば淸濁の差あるのみ。濁れるものは、自然派の作物となり淸きものは、こゝに眉山の死となりぬ。（註4）

紅葉の死についで、眉山の悲劇的な死は、殘された硯友社の人々にとつて、轉た感慨深きものであつたら

うと思ふ。我等は次に柳浪の場合に移つて行かう。

かつて述べた如く、彼の好んで描いた暗い社會や、人生の半面も、そこに咲く「惡の華」の美の妖光への摸索ではなかつた。飽くまでリアリストとして正視しようとして、對象の側面を寫しながら、作家の正義派的心情は、暗き土地にうごめくあはれな人間への涙を持つてゐたのだ。

この立場として、彼は三十年頃に、その後の小説を遠望豫測して、次のやうな意見をもらしてゐる。

恐らく今後出る作家のも、形の方は寫實で、文章は言文一致でも、今までのものとは違つて唯の寫實でなしに、或一種の生命を吹き込むやうにならうと思ふ。所謂一種の理想小説といふやうな物になるだらうと思ふ、勿論理想と言つても、科語をつかつて六かしく物をかく譯でもなく、新體詩家が歌ふやうな一家の狹い理想を抒すものでもなく、又作中に聖人とか、學者とか、坊主とか云ふえらさうな人物を必ずしも出すといふ必要もありますまいが、作全體の上に作家の理想が冥々の裏に動くものが、勢力を占めやうと思ふ、又爾でなくては困ると思ふ、例へば社會問題に觸れても、此の趣でゆくだらうと思ふ、矢場や銘酒屋をかくにしたところで、其について作家が一箇の理想を以て觀察して、高い考へさへあつてかけば不都合はない。（註5）

これは單に質問に應じた、作家としての感想であるが、彼が新文學への洞察を見ねばならない。彼の作品の暗さにうごめく人間に、彼が注いでゐる愛情から、いつか光を求めて、理想主義的な作品へ展開したい意圖を持つた事が知られるであらう。これについてまた、同じ所で

社會小説をかくことにすれば、勞働者なら勞働者を寫すと共に、當時の時勢も見えるやうにかかなくてはなるまいと思ふ、例へば、人力挽は憫れな境遇だとか、又時には幸運な地位に立つこともあるが、爾なるのには色々な周圍の事情があつてなるのだから、勿論その因縁を何も議論するやうにかけと言ふのではないが、自然にその影の見えるやうに描きたいものです。約めて言へば、一箇人を中心にして、勞働社會の大勢を窺ひ得るやうにかかなくては面白くないと信じてゐるのです。

と、社會、環境と密接な箇人、箇人を通して彼と關係ある四圍の大きな構成機構も知られるやうな狀態に於ての、題材、執筆態度を說いてゐるところ、今日尙傾聽すべき意見をもらしてゐるのであるが、しかし彼自らの作品の生長は、遂に十分にその意見に添ふまでには上向到達しなかつた。

ただこの意見を具體化したやうな、二三の作品の例をここに擧れば、好色な事務員の、毒牙にかかる可憐な女工達の生活を描いた『隅田の夜路』が三十五年に發表されてゐる。

そこには近代的資本主義工場制度の一面が、ささやかなこの事件を通じて見られるであらう。また同年作の『雨』は、暗い長雨に、じめじめした貧民窟に、金を得る手段に苦しんでゐる若い夫婦者や、そこに又金をせびりに來るその女の母親など、暗い雨の風景の中に交錯して陰鬱な文字をなしてゐるが、それ以前の所謂深刻小説の畸型的な題材をやうやく脫却して、心理描寫も深く手に入つて彼の進步を見せてゐる作品である。

その以前、彼は『紫被布』『二人やもめ』に於いて、世間に平然としてゐて、自己の本性のままに、淡々と男を代へて行く中年の女性を主人公とする二部作を發表してゐるが、彼はこの作品のモティフに於て、眉山

のやうに、箇人と社會との對立を取扱つたものでなく、女性の純情を求むる心――それまでに幾人かの男にあざむかれ、その擧句見出した少年に對する純情を主題としたものである。

かくして彼は、描くべき素材に深刻性をねらつてゐた態度を改め、そこから移り行つて、心理解剖、感情のほのかな搖れ動くさま、といつた方面へ筆を練つてゐた。

だがその制作の過程に於て、作者の描かうとする人物の、ある場合作者自身の豫めなる意圖よりも、往々にして飛躍して、一人で作品の世界に生き動かうとするものがある。

柳浪の場合は、なほ作者の豫めなる意圖の殼中に、窮屈に身をすぼめた人物もゐた。それは作者の制作中の情熱の燃燒不足を示すものでなければならない。

三十七年三月發表の『そまる絲』には、この作の主人公の妹の友達である女が、藝者に賣られて行つた。その女に同情して主人公は、その女を一夜茶屋に呼んだけれど、餘りに藝者じみた態度に幻滅を感じて、早々にそこを引きあげるといふストオリイであるが、かかる作品の生きる根本條件の心理描寫は、柳浪の構想を生かすに不成功であつた。

『今戶心中』の構成は興味あるもので、卽ち日頃よりの馴染客の平田がその鄉里へ去つてから、小萬といふ遊女は、かつて平田のゐる頃から彼女に想ひをかけてゐた善吉といふ、痘痕があつて、口つき鼻つきは尋常ではあるが、左の眼蓋に、眼張のやうな疵があつて、まことに醜い四十男に、心を移して行き、遂にはその男と心中を遂げるといふのであるが、この突然の心の變化が興味を持たせるにも係らず、餘りに容易に手早

郵便往復はがき
（返信）

東京市外雜司ヶ谷金山三三九

文藝春秋社御中

執筆を辭する柳浪の手蹟

く片づけられてあるので、讀者は不滿を感ずるのである。彼も、ともすれば筋を追ふに性急すぎるのである。

三十七年一月發表の『兄の煩悶』に於ては、腹ちがひの妹が、淫蕩で不良青年に關係する、つづいて牧師に關係する。さうした行狀に對する兄の煩悶をいろいろ描いて一篇をなしてゐるのであるが、ここに妹に對する「一度操を破つた上は一生獨身せよ」といふ兄の意見――それはまたあまりに常識な、作者の貞操觀を、性急にさらけだしたに過ぎないのである。

自然主義勃興以後の彼は、ただ世間から沒落しない程度の努力を續けてゐたが、やがて新しい時代に自らが確固とした地位を占めて行くことを、何時までも續け得ないと知つてか、一方それが從來の孤立的冥想的思索に深められて、執筆の勞を嫌ふ傾向と倂せて、彼は間もなく勇敢にその筆を折つてしまつた。かくして一人の部屋内にあつて、文學のうつろひ、文壇の流轉興亡――幾人かの作家が活躍し、或は退き、また新しきイズムが起り、やがて衰へては、又次のイズムが盛り上るといふ風な――その慌しい樣を靜かに眺めてゐたが、昭和三年十月十五日、六十八歲で長逝した。十六日の國民新聞の片隅に小さいニュースが告げてゐる。

柳浪廣津直人氏は十五日午後四時八分府下荏原郡入新井町の自宅で老衰病の爲め死去した。享年六十八枕頭には一週間前より詰切りの令息和郞氏が侍してゐたのみで往年の文壇の巨將としては淋しい最後であつた。

石橋思案も、初め硯友社の主幹たりしに係らず、優れた作品も殘さず、作家としてよりジヤアナリストとして後年を過した。卽ち名古屋中京新聞、中央新聞、讀賣新聞に勤め、後三十六年博文館に入り、大正年間ま

で『文藝倶樂部』編輯をなし昭和二年一月二十八日歿した。

かくて今は、その野心に滿ちた明治二十年前後より、共に歩いて來た硯友社の同人で、現在に於て文筆をもつて、殘つてゐる人は江見水蔭、巖谷小波の二氏のみとなつた次第である。

硯友社の集團運動の性質、その展開の過程を論じ來つて、その作品の進展、箇々の作家の動靜にまで及んだこの稿の目的は、もはや燃燒の果の餘焔と見らるべきこの解消期に就いて、更に述る必要もないであらう。

硯友社の結社性の分解は、事實は既にその第一歩を、彼等の文壇登場の目的を達成して、一人一人の作品行動に移つた時に初り、第二歩を紅葉の死によつて強く打ち搖がされ、やがてその時代より萠した新しい立場に立つ批評、或は作品の續出と次の時代を風靡した自然主義によつて、その作家の地位、從つて硯友社作家の、活潑なる作家活動を營む力を沒落させた次第である。

ここに二十年にわたつた彼等の歩み、その描いたコースを見て來た我等は、次に全體として、まとめて彼等の態度と、その殘した文學史上に占めるべき功績の價値づけを論評しておきたいと考へる。

註1　「國民之友」明治二十八年十一月八日第二百六十八號所載。

註2　「文藝倶樂部」明治四十一年八月號「川上眉山を弔ふ」。

註3　「やまと新聞」明治四十一年六月十七日夕刊所載。

註4　「文藝倶樂部」明治四十一年八月號。

註5　伊原青々園、後藤宙外編「唾玉集」。

第七章　硯友社作家の態度

一　文學に對する態度

これまでの章々で、大體叙述の折々にその事にふれて、論じた事であるが、ここに改めて簡單にまとめておく。硯友社が成立して、沒落解消してゆくまでの二十年の展開に、その作品の時代的な變化によつて、同人の文學に對する態度、文學觀の變遷を辿る事が出來る。

卽ち成立の初は、文學を一の手なぐさみ、消閑の具として發表し、お互の作品を、あだかも、子供がめいめいのこしらへた人形を見せ合ふやうな氣持で批評し合つた。その頃の同人は、皆化政期の戲作を讀んでゐたので、その影響が、文章にも生活にも影響した。硯友社同人がその後永く、或は今日でも一部の人々に、戲作者流にみなされるのは、彼等が未だ世に認められない極めて短いこの頃の文學態度からであつた。當然その香は、幾分か後年までつきまとつてゐたが、戲作者らしい態度を發揮したのは、主としてこの期なのである。この事について小波が『我が五十年』に

私共硯友社員の當年を評して、今日も猶ほ戲作者流と罵倒するものがあるが、かう言ふやうにけ、な、さ、れ、る、も、實は時代のせゐであつたかも知れない。未だ學生の身分でありながら、『江戸時代の通人』を氣取り、まさか紅絹裏の衣服は着なかつたが、萠黄博多の帶を締めたり、市樂の前埀をかけたりした者はあつた。

私なぞも博多の帶を喜んで締めた事もある位で、今から考へれば、實に嘔吐をも催すやうな風俗をしたものだ。

と言つてゐるが、たしかにそれは一面「時代のせゐ」でもあつた。

人々の生活態度は、その人の職業とか、思想とかを必然に反映して表現するものである。思想が多く讀書により、主な要素を作る事は言ふまでもない。王朝の文學に耽る者は長閑な大宮人の寛濶なる樣をあこがるる事、谷崎潤一郎の戲曲『鶯姫』の女學校の國語教師大伴先生の如く、歐米の文學に親む者はまたそれぞれの作家の影響によつて、その俗に親しんで今日も尙、街頭を歩いてゐる。『我樂多文庫』時代の同人は馬琴、一九、三馬、種彥の時代の影響をうけて、その服裝や生活にまで、その世界が反映したのだ。その書いたものが受けるそれ等の影響は當然である。公賣の『我樂多文庫』第一號の硯友社々則に掲げられた、「本社は廣く本朝文學の發達を計るの存意に有之候得ば」といふ遠大な抱負も、眞實の抱負といふには、すぐその事を自ら茶化したやうに「戀の心を種として艶なる言の葉とぞなれる都々一見る物聞くものにつけて言出せる狂句の下品を嫌はず天地をゆさぶり鬼神を涙ぐまするなどの不風雅は不致ともせめては猛き無骨もののかどをまろめ男女の中をも和らぐ事を主意と仕候」といつた言葉を附記してゐる。

彼等には、整理された文藝理論家がなかつた。進んだ道は一筋の作家道であつた。さうした立場から、自らの文學を建設しつつ、自分の文學へ對する態度を深めて行つた。

この期――習作期の化政期のルネツサンスを經て、彼等は元祿のルネツサンスへ入つた。西鶴を彼等の主

觀によつて生かしたのである。文壇進出期であるが、尙文學を一種讀者の娯樂の用に供する目的で書く態度は失はれず、情痴の世界、筋の興味を華麗な表現で化粧した。浪漫的な甘い涙が主眼とされて、それ等の作品が多く書かれた。

日淸戰爭の深刻な經驗と、新しい批評の指導は、作家の箇性に感應して、作家の視野を擴大して行つた。人生は單に狂はしく又甘き情痴の世界のみではない。そして箇人對箇人の相關するによつて起る問題ばかりでない。社會と個人との關係、前者の後者へ對する壓迫、題材の擴大と深さと共に、作者は、單に文學を讀者に面白く讀ませる爲ばかりに書く態度を捨てて、讀者に何かを示さうとした。敎へようとした。社會批評的な態度をその文學に示した作家もあつた。また藝術と人生の間に苦悶する作家もあつた。

この頃の彼等は決して戲作者の生ぬるい、上調子な態度ではない。その藝術の行づまりを、病床に瘦せながら、尙病苦以上に思ひひそめてゐた同人もあり、或は社會、人生、藝術の調和に安住し得ず、自らを殺した同人もあつた。その曾つての名聲でも、その後年を支ふるに十分であつたらうけれど、自ら書けば書く程、晩年を汚すを知つた爲か、斷然とペンをすてた同人もあつた。

思ふに硯友社の作家は、その後に起つた自然主義文學に對し、如何なる態度をとるべきであつたらうか。一には自己獨自の立場を、輕々しく搖りうごかさるゝ事のない樣に、精進してゆくべきであつた。硯友社門より出た鏡花の態度である。自ら特異な現實を構成して、之を描いた氏の神秘主義的傾向はこの事實を示してゐる。

二には自然主義の主張を同化して、自己の文學への態度を、修正すべきであつた。眉山はそこに苦悶を持つた。硯友社門より等しく出でた小栗風葉、德田秋聲はこれに成功した。

かかる態度に轉向しなかつた人々は、遂に自然主義の作家等に、押しのけられてしまつた。眉山は死し、柳浪はペンを投じ、水蔭は通俗小說へ走つた。

とはいへ、二十年間硯友社の作家はよく新しき社會の流れに適應して存在した。その間彼等は常にそのための精進を怠らなかつた。

彼等は單に化政期、元祿期、平安朝の日本傳統の文學を研究して、自らの文學の養分としたのばかりではなかつた。自國文學以外に海彼岸にその生長の養分を求めた。あらゆる明治の文化は、外國文化の輸入によつて、風貌を新しく彩られ、新興日本の國際的存在に進展して行く事實から、文學とても同じ經過を經ねばならない事を知つてゐた。

優れた近代文學のある海外諸國——彼等は彼等の背後に、坪內逍遙、森鷗外、二葉亭四迷、內田魯庵、森田思軒等の外國文學に專門的知識のある文學者のゐる前で、ひそかに自己流の外國文學に、辭書を賴りに觸れてゐた。明治二十二年『國民之友』四十八號、四十九號に寄せた、愛讀書に、太平記、枕草紙、風俗文選、娘節用人情本、一代女、京傳作小紋雅話、唐宋詩醇、五人女、平家物語、俳風柳樽と傳統的な日本文學の書目ばかりあげた尾崎紅葉であつたが、『硯友社と紅葉』の水蔭の言葉をかれば、

世間で騷ぐ程實際我等は遊惰では無いので有つた。それは理窟ばかり並べたり、無闇に西洋文學を口に

したり、然うした淺猿しい昡氣に充ちた或る一派の人を、我等は非常に憎んで、反動的に其前では、齒の浮く事も云つたので有つた。殊に江戸ッ子の紅葉としては、土臭い書生上りの空論が、癪に觸つて成らなかつたのだ。

然うしてゐる間に、紅葉、眉山、小波の三人は、コッソリ外國文學を研究してゐた。殊更にコッソリ隱れて讀んだのではなく、讀んだといふ事を一々吹聽して歩くやうな事をしなかつたのだ。

この言葉によつても、あくまで江戸ッ子らしい趣味の人紅葉等の一面が見られ、外國文學への關心が見られるのである。

出發の初め硯友社の有力なる同人として、紅葉と共にあつた山田美妙が、同じ愛讀の「書目十種」の答へに、源氏物語、貫之集、神皇正統記、史記、賈島佛詩と共に、みるとん集、どんきほうて、しエれい詩、ぶあにてい、ふエいあ、る、みざれぶるす、しるれる詩集を擧げ、「哲學に付いては多少つねに好む處もありますが」と前書きしてゐる。

美妙の當時『夏木立』の新鮮な形式は、これ等からの收穫であつたらうが、若し彼の答への中にいくらか改まつてとられたポーズを見出したとするなら、彼以外の硯友社同人が、とる事をいさぎよしとしなかつたポーズである。かうした點にも、美妙が、硯友社と離れ去つた點を發見できるであらう。

前に述る樣に、紅葉には外國文學へ接した結果として、いくつかの飜案、飜譯の仕事が殘されてゐる。眉山にもデュマの三銃士の譯があり、親しく獨逸へ渡つた小波には、お伽噺に各國の材料を集めて歸つた。

花袋は『東京の三十年』中に「眉山君は常に新しい外國の小説を讀んでゐた。バルザック、ドオデエ、ゾラ進んでダヌンチオあたりまで行つた。」と記してゐる。

自己の文學へ對する態度は、又必然他人の文學へ對する態度、殊に彼に師事する子弟の作品へ對する態度に反映する。

紅葉門下小栗風葉の「紅葉先生の門下教授法」は、明治三十九年十月十五日の『文章世界』に掲げられてあるが、この意味で興味があるから、それによつてうかがふ事にする。

紅葉は門下の單に作品のみならず、その一身上についても嚴格であつたが、作品は箇性を生かす方針を採つた。原稿執筆にも丁寧に書くやう、亂暴なものは讀まず、丁寧に書いたものは折を見て取出して讀み、細い注意を與へ、氣に向けば五枚も六枚も朱で眞赤になるほど書き直した。

彼はストオリイを重んじた。子弟の執筆の前、豫めそれを聞き、ストオリイの修正にも心掛けた。

彼は先短篇について、精一杯書くことをすすめた。題材も平凡なものより新奇なものへの關心を持つやうに敎へた。文章について、自己は、前述る樣に凝つてゐたが、子弟には、平淡に、飾らず、氣取らず、作りすぎず、書くやうにすすめた。そこには彼自ら自己の殼を脫したい意圖も見られよう。

彼は讀書をすすめた。文章を次々に書くより、讀書をするやう、特に外國語の讀める者が、日本文を書いても上達が早いといつて、文章の習練と、思想內容を得る方便に飜譯をする事も勸めた。ここには、紅葉の子弟へ對する自分の長い作家道からの體驗がうかがはれると思ふ。

二　自然に對する態度

小說家は、多く世間の人間を描くことに主として關心を持つものであつて、同じ文學者でも、詩人や、歌人俳人ほど直接、自然そのものに沒入してゆく事が少いものと思はれる。自然は、小說では多く物語の背景として用ひられる。

即ち、近代の小說では、環境が、箇人を支配する事を、前提として多く描かれるので、自然も事件を産む環境の要素としてあるが、小說の主をなすものは、尙人生の樣々たる相に、その要點をおくものの如く考へられる。風土的に自然との爭鬪や、深刻なその影響を受ける事のなかつた日本文學では、自然は優しき慈母であつて、歌枕とか、季題となつて和歌俳句の領分の一要素となつてゐた。

小說は、多くその作家が、市井の間をさまよひ、題材をそこから拾ひあげる事が多かつた故でもあらう、自然が、小說文學の上に、有機的に姿をあらはして來たのは極最近の事である。

硯友社の作家は多く都市にそだち、自然の最も逞しい表現である山嶽や、最も雄大な海洋や、その他邊土の風物に觸れる機會が少かつた。彼等は山膚の、或は海面のうつりゆく色彩より、人々の風貌や衣服の模樣や色彩に、より興味をひかれ注視したのであつた。

紅葉などに見られる、かうした傾向は、新しい衣服の流行を造る事に苦心してゐる現在の百貨店三越の前身、三井呉服店から、營業政策に利用されたやうな結果になつてゐる。

例へば三十六年一月發行『芝肴』に收められた「令夫人」といふ短篇は、「三井呉服店案内花ころも」に所載されたといふが、特に眼だつて作中に表れる人物の服裝の說明がある。四十歳ばかりの紳士には、「素鼠縮緬の無想なる襦袢の袖の、裏をば變へて友禪染の畧繪なるが見えて、大島紬の鍛子の繪胴裏の長羽織に、上着は紺地利休鼠萬筋の繋一樂、鼠地凮通小紋の下着を揃へて、茶縞の帶は綴織なるべし」といひ、連れの婦人には「紺の斜綾の吾妻コオトの前を披き居れば、樺色絞羽二重の京極絞の帶揚を銜める白茶地七絲に金絲入の螺鈿模樣の帶は四邊を掃ひて氣爽に、襦袢の半襟は梅鼠に三夕の景色を白上りにして、下着は白茶縮緬に葡萄色の細なる六彌太格子、上には紺地に赤の三筋の御召縮緬、上下共に鼠縮緬の裾を附けて、長襦袢は繪端友禪の六玉川模樣、黒縮緬の羽織の裏は男と對なるを用ひたり。」と記してゐる。

短い小說であるが、他に五六ケ所、これと同じやうな衣類の說明を、現れる人物の年や身分に應じて書いてゐる。

かねがねの作品に、かうした關心を示してゐた紅葉であつたが、殊に、流行の本源である三越の宣傳雜誌で彼の持つ多くの讀者層に、所謂「紅葉好み」の衣服を、作中の人物に裝はしめてこれを示し、もつて新しい流行の暗示を與へた事が知られる。

これについて、昭和四年十一月三十日三越ホールで行はれた、硯友社同人主催の紅葉山人二十七年忌記念講演會に江見水蔭、市嶋春城、巖谷小波三氏の講演の開會の辭を述べた、三越の常務取締役は『紅葉山人廿七年忌記念展覽會誌』によつて窺へばその中に「三越と此尾崎先生、之には深い因緣を持つて居りますので

其ことを一言申上げさせて戴きたいと存じます、」といふので、三十三年に、「デパートメントストアの形を執つて、營業を進めて行きたいと云ふ案を立てました。さうして唯々單に物を賣ると云ふばかりでなく、吾々が何等か、此國家社會の文化の上にも一面貢献したいと云ふ信條を持ちまして其一端として、當時もう既に文豪として知られて居りました尾崎紅葉先生の御後援を求めた次第でございます。當時の三越——越後屋三井呉服店と申して居りましたが、先づ初めに「花ごろも」と申しまする雜誌を發行致しました。其三十三年の一月に發行されました「花ごろも」に先生は「無双裏」と云ふ小說を特にお書き下さつて居るのでありますす」

と述べてゐるが、結局「國家社會の文化の上に貢献する信條」の理由の下に紅葉は、新流行を作る衣服について書かされ、それを承知してゐる譯になつてゐる。

これは紅葉にとつて、名譽な事ではないが、彼の名聲と彼の人間の外面的な衣服などへの關心が、かうした方面に、利用された事を記したまでだ。

かうした紅葉は、都會出の作家が、自然に直接觸れる機會である、唯一の旅すらあまりに好まなかつた。近畿や佐渡へも好んで出掛けた譯ではない。

抑も己の出億劫と言ふは、不精の故であるのか、繁用の故か、閉戸讀書の癖ある故か、臆病の故か、父母在すが故か、妻子の可愛き故か、杖頭に掛くる物無き故か、山水を樂まざる故か、と謂ふに皆非なりで、己の最も好まぬのが、汽車に乘るので、其の甚しい事は、既に停車場に入るさへ不快を感ずるくらゐ、三

十分間以上車内に据らるゝのは、一種の苦痛なのである。然ればと謂つて、此便を假らずに百里の道を行くほどの醉興も無い。

と『煙霞療養』の中でいひ汽車にその罪をきせてゐるが、事實は彼は自然へ對して、あまり興味を持たなかつたのだ。彼は靑々園、宙外編の『唾玉集』に見られる如くそれを正直に告白してゐる。

私は自然に對しては餘り深い同情は無い方で、旅行などしても、人の風俗とか家屋の造り方などには隨分氣もつき、注意もしますが、山とか川とか言ふものには餘り趣味をもつてゐない故か、又不斷鋭い眼をもつて觀察をして置かないからか、書く時になつても古くならないやうにと思ふと、精密にかくには困難を感じる。詰りはつきりした景色の印象を心に浮べることは出來ない。是れから、奮發して段々景色をかくつもりです。が今までは餘り精細に景色をかいたことはありません。

それに比して、人情の世界に、如何に興味を持つてゐたことよ。佐渡への紀行『煙霞療養』にも、たまたま合宿の若い男女の泊客を見て、「恐く之が爲に費した空想の量は優に二百頁を占むべきものであつた。」と言つてゐる。

さて、さうした紅葉の自然を書く態度をみるに、自然そのものを作品と切りはなし、たとへば着物の模様とか色とかを書く樣に表面だけをながめて、作品の適當な場面にはめこんでゐるのである。卽ち『金色夜叉』の鹽原の風景描寫の如きは、文章そのものとしては、實に巧みなものであるが、作の構成とは、全然切りはなしてもみられるもので、これを取去つても筋の進展の上にはそれ程の差支はない。その爲戀愛小說ともいふべき作

品のこの一節が、中學教科書に載せられてある皮肉な現象をみるのである。

現代の作家は、かかる本筋と係りなき、自然の描寫を排斥する。その求むる自然は、作中の人物と共に生きてゐる自然でなければならない。作中ににじんで生動し、その功果を擧げる自然でなければならない。紅葉における自然は、偶然視覺に映つて、僅か一日都人の眼を樂しませる樣なものを、作品に一寸のせたにすぎなかつた。

國木田獨歩が、『獨歩文集』中の「紅葉山人」と題した一文中に

紅葉山人のみならず、洋裝文學の勝利者等は、其筆を洋の寫實者流に用ゐ、其材を此明治に取り、人を描き人情を寫すに於て大に力を用ゐ、而して紅葉は實に眼覺しき成功をなしたけれど、彼等は遂に其描く所の人物を社會の一員として見るの外共以上の觀察を加へなかつた。この原因は何んでもない。彼等自身が則ち共で、彼等は遂に自家を社會の一員として見、且つ學び且つ力め且つ戰ひ、且つ笑ひ且つ泣き且つ叫ぶの外、此不思議なる、此無窮無邊なる天地の間に介立して、其の玄とその妙とその大とを痛感し、而して煩悶するが如きことを多くなさなかつたらしい。則ち彼等の寫す人生は社會と個人との交渉たるに過ぎない。

といつてゐるのだが獨歩の言ふ、「此不思議なる、此無窮無邊なる天地」なる萬象の上の觀念的な、自然の中に生きた人物より更に、現實的な所謂自然環境によつて、生れた人間や事件も問題にはならなかつた。

硯友社における自然の字義は「風景」或は「景色」の謂ではなかつたらうか。その意味で、單純に自然を

描いたのは、大橋乙羽と江見水蔭である。

乙羽のは趣味的なスケッチであり、水蔭はすでに二十八年八面樓主人宮崎湖處子が『國民之友』(明治二十八年九月十三日第二六二號)で「自然は單に人生とその犧牲と觸れ合ふ場處、卽ち舞臺の上の道具立に過ぎざるが如き觀なきにしもあらず。」と多く『金色夜叉』の鹽原の描寫の役割をなすものの如く見てゐるが、そこより尙自然の外光が人物をも包んで行く道へ進んだ。

水蔭は自然について『硯友社と紅葉』中に

天然描寫(自然描寫と同じ意味だが、自然主義と混じるのを避けて)天然美を主とした人間の淸淨味を、潔癖的に描寫したい。單なる都會中心の戀愛問題を捕へて、婦人の服裝を明細に記すのに餘分の腦力を盡すとか、文字の使用に忠實過ぎるとか、そんな末技に餘計な努力をするのが――それは紅葉等の、僅かに一微細な缺點で有つたらうが、それが不服で成らなかつた。

と云つてゐる。彼は楚々たるリリシズムを自然に汲んだ。

要するに硯友社の作家は、市井の人情の世界に遊びすぎた。人情心理に深く入ればそれでもよからう。しかしそれもできない垣の內であつた。その外にさまよひすぎた。柳浪は前掲『唾玉集』中で、

私は今までの所では種々の人物を活現させたいと言ふのが一番の願ひであつたからして、座敷の形容だとか、景色だとかいふものには殆ど注意をせずに書いてゐたのです。自分は人物描寫といふ一方の極端に走つてゐたのです。今後は景色だとか、其外の所にも注意する考へです。

と言つてゐる。彼は尙、自然も「雛蓋の道具立」として、心掛けて見ようと考へたらしい。自然によつて事件が動かされ、人が動く深さまでは思ひを及ばせる事が出來なかつたのだ。

これ等の態度が總じて硯友社の自然に對する態度なのであつた。

三　社會に對する態度

作家も、社會の文化活動を營む人間である以上、作品を通して、何らかの意味で社會と相渉り、その理想への關心を持つべき筈だ。

近代の小說は、藝術の爲の藝術から人生の爲の藝術また社會の爲の藝術への傾向を持つ。社會への關心、もろもろの社會の不義不正へ對する憎惡、正しく、淸く、朗かな社會の建設への作家の憧憬や熱情は藝術の根底をなす時、その藝術を力强きものにするであらう。文學を露骨に功利的な、道德とか政治の支配下におく事は勿論、與しがたい事であるが、優れた作家はその心魂に、理想主義的な高貴な鑛脈を保ち、それが、作品にあらはれて、一つの輝きを示してゐると思ふ。藝術家としての良心を持つ者は、特に、その思想感情を、文字なる表現方法によつて、大衆にうつたへる事の多い小說家は、一層社會の現實を洞察すべきであり、正しき認識と批判を持つてゐなければならぬ。我々は偉大な作家たちが、凡て深い人生や社會へ對する思想の上に立つて、その藝術を生してゐる事を知つてゐる。また人類や社會や、國家やへ對して、彼等の關心が深くあればある程、その藝術も大きくまた深められてゐた事を知つてゐる。優れた作家は、時代を嚙む白い

齒の樣に、凄く銳い社會へ對する認識を持つてゐるのだ。

さて硯友社の作家は、社會へ對し如何なる態度をとつたか。その最初の戲作者の態度を好んだ頃は無論何等の關心がなくて、その後次第に生長し、日淸戰爭以後表面的ながら、社會の動いてゐる面へ近接して行つたと思ふ。その水蔭等の戰爭文學の創作態度はあまりに淺い、ジアナリズムに支配されたもので、ここに云ふ社會的關心とは、異るものであるが、彼等の動いてゐる社會への接近の第一步であつたとは思はれる。そしてその段階としてのそれだけの價値はあらうと思ふ。

紅葉の作品が、讀者に喜ばれた事は、小市民的な彼の社會觀が常識的で、溫健な道德性をもつて、世間と平行してゐた事もその理由の一つである。紅葉の社會觀は、むしろ處世訓とでも言ひたいもので、豫言者的な風格や反逆性はみられないが、寫實主義の立場によつて往々その時代を暴露したものがある。例へば『紅白毒饅頭』には、玉蓮敎會なる邪宗門の性欲物質欲の伏魔殿ともいふべき內部を、描きつくして、當時——明治二十五年頃、宗敎の自由と共に續出した邪敎を批判してゐると見られる。又その作中に「萬病に禱りて効驗ある神は醫者樣なり」とか「神が疾病を治すものならば、神と同商賣でござる」とか、常識的ではあるが時代性のある意見を點出して、讀者の漸進的な思想に應じてゐる。

また『男ごころ』には、「人は欲を節し、費を省きて、金は溜むるに如くことなし。宵越の錢をつかはぬことは手柄にあらず。たま〳〵獲る錢を一日の酒食に換へ、年中の風車を見得にして、人の顏だに見れば、憑據もない太平樂を抒ぶるを、奇なりと稱へ、高しと賛むるは、畸人傳などゝいふ愚書の不了簡。胸中に如何樣の

大經綸ありとも、懶惰漢では用ゐられぬ今の世なり。儉は德といへり。平生の心懸を大事にして、茶屋女に祝儀やらで嗤はるゝとも、名譽に關はることにはあらず。五十錢なりとも餘裕を製艦費に献じて、國民たる義務の萬分の一を盡さば、寢心の好きことなるべし」といつた風の意見であるが、彼の思想が見られるのはかかる作品中に含まれた西鶴から學んだやうな、一句一節の、常識的な訓戒で、むしろ目障りになる。しかして作全體の主題が、彼の積極的な社會觀に具象的に裏付けられ、讀後、讀者の胸に波うつものではない。

彼自ら『唖玉集』で次の樣な事を言つてゐる。

私は人生がすべつたの轉んだの、と考へてかくことはない。其れで小說は一體かけるもんぢやないんだ。其れア自分にしても、世の中を見て何も考へないことはない、社會は斯ういふもので、斯うあるべきものだ位考へないことはない。爲永が人情本をかき、京傳がしやれ本をかいたのどは無論考へは違つてゐる。人生觀が何うしたの、世界觀が斯うしたのと、ひどく大業なことを云つたつてしやうがない。其れで又小說が出來るもんぢやないんだ。詰り文法を講じながら文章をかくやうなものだ。私も不斷は世の中のことを考へて見ることなきにしもあらずだ、が趣向を立てるにあたつて、其なことを考へたことはない。

紅葉は、その藝術觀の根本において、その作家の持つ高い思想が、如何にその藝術を深め豊かにするか、その作品が別に露骨な作者の意圖を盛らなくとも、偉大な作家は、無意識に人生や社會にある啓示を與ふることを知らなかつた。この事は半面紅葉が、極めて世間的な常識的な作家であり、深奥な思想を持たなかつ

た事實を暴露したにすぎないのである。彼は表現に思ひをひそませる程、現實への思索をなさなかつた。

寫實的立場に立つ時、その題材の取方によつて、樣々な社會惡を暴露する事は、紅葉の『紅白毒饅頭』の如き効果があるが、同樣江見水蔭の三十五年二月作の『紫海苔』には娼妓病院の內部を描いて「地獄の中での地獄、牢屋の中での牢屋といふのは娼妓病院の內部である。人生の猿心しさを共儘に藏して居る所で、裝飾無き人間の實體をして、餓鬼以上の下劣の行爲を、餘儀なく仕ずには居られぬ樣に感染して來る一種の空氣が流動してゐる。」といふ書き出しで、そこにうごめく娼妓達の樣子を見せ、又三十六年六月の『地底の人』は新炭會社を計畫して失敗した父をもつ男を主人公として、その辿つた道――先東京へ出て父の友人である辯護士の世話になつてゐたが、その人も失敗したので、その家を出て、新聞配達、牛乳配達、點燈夫、撒水夫、俥夫あらゆる都會の自由勞働をへて、海員たらんとしたが駄目だつたので、遂に紀州の三沼山炭坑の坑夫として、地底の生活を五年續けたが彼は遂一生光明世界へ出られない罪を侵した。彼が壓迫を常にうける千五百の坑夫の代表となつて、鬼の樣な監督長を殺したからである。

この作品はかく今日の所謂プロレタリヤ文學の要素をさへ自然發生的に含んでゐるかの如く思はれるので水蔭はそこに說明的に「監獄部屋」の暴露をしてゐる。少し長いがその一部分を引用する。

坑內には聖代の法律は行はれないのである。人權といふものは、トロツコから溢れた粉炭同樣、誰の足にも蹂躪せられて、人間の自由といふものは、レールから外へは脫れられぬのである。第一に信書の秘密といふ事は狀袋の厚い薄いに關らず破り棄てられて、社會との交通は全く無いのである。牢獄中の人

よりも甚いのである。

暗い朝、穴に入つて、暗い夜、穴を出るのである。地底何千尺の下で、通風器から與へられる生温い空氣を呼吸して、石炭中に眞黑に働き、光明が何處に認められやうぞ。坑夫の虐待!!役員の橫暴!!坑夫が役員の爲に毆殺されたのは、幾人あるか知れぬ。勿論坑夫も役員を殺した。

坑夫同志も喧嘩し殺し合つた。

それ等の屍骸は皆廢坑の奥へ投捨てられて了つて、何千年の後には骸骨の石炭が賣出されやう。一度坑夫に爲つたら死んだからとて坑口の外へは、到底出られる事ではないのだ。

餘程以前に高島炭坑の事が世間の大問題と爲つた。それは、事實だ、否虚構だといふので、大爭論もあつた。それから後の今日まで、何年經過して居るだらう。

監督の官署も設けられた。鑛山條例も發布せられてある。其今日であるから、決して其樣な野蠻の世界は無い。法律の光は隅から隅まで達して居る、行屆いて居ると、斯う世人が安心したら、それは恐らく間違ひの甚だしいものであらう。

かかる表現には、藝術家としての義憤の火花さへとびちつてゐるが、それは深い理性におちついたものでなく、一時の感情である。無論藝術家は、思想家の樣に理論にのみ拘泥せず、主として感情に生きるものである故に、感情をも尊重せねばならないが、根底のない、即ち深い本性的な思想によらない時、この作家の

折角の感情も人をうつに不足する熱をしかもたないのである。感情を支配する主知的態度の不足である。

水蔭の社會の客觀による、その暗黑面の暴露は、深い根本的思想を土臺としないで、唯彼の眼にうつつたまま、感情的な義憤によつて寫されたものに外ならぬ。

硯友社中で概念的に「社會」を摑んだもの、そしてその姿を描かうとつとめたのは柳浪と眉山であつた。「社會」は彼等にとつて壓迫者の如く見えた。暗いもろもろの罪惡を産む巢の如く思へた。かくて二人は常に壓迫に堪へかね、おしつぶされやうとするたよりない箇人の味方であつた。彼等が一時的に、その時代を作つた觀念小說や深刻小說は、かかる社會と箇人の對立を取扱ひ、「社會」といふ觀念が、我々に强くせまる下層の社會を背景として多く描いたのであつた。

是等を描く態度として、凡そ二つの態度があると思ふ。一つは單にその側面より描出して世にはかかる社會におしつぶされた人間がゐる、可哀さうなものだとの同情を寄せ、從つて讀者の淚をも彼等へ注がせる態度と、も一つは、如何にしたらこのみぢめな人々のうごめく暗い社會を光明あるものにひきあげるかの啓示である。

柳浪の如く、前にあげた新しい社會小說へ對する理想主義的な意見もあつたやうに、硯友社の中には、かなり進んだ態度を社會へ對しもつてゐた者もゐた。が多くは自然に對すると同樣、社會にも思索の淺かつた彼等に、深い社會觀の求むべくもない事は明かであらう。

四　女性に對する態度

小說家の最も描かうとする强い關心が、人間にあり、その世態人情にあるならば、人間の半ばの女性と、男性の闘連が、最も作品の題材を提供してゐることは自然の歸決であるだらう。
さうした女性に對して、又從つて戀愛について、硯友社の作家は日常如何なる態度をとり、その作品の上に之を具體的に示したらうか。

兩性の問題についての深い思索は、作家として重要な修養である。その作品に、多く男性と女性の葛籐を描く事に努力した、彼等の戀愛へ對する理解――理想と實際を今見たいと思ふ。

先紅葉には、純粹に戀愛の苦惱、女と男のいがみ合ひも、單に痴情としか見えなかつたのではなからうか。戀愛を神聖視するといふ様なことも、彼においては、むしろ外國かぶれの齒の浮く様な、痴事にしか見えなかつたのではなからうか。

戀愛が美しく見えるのは、ただ彼の趣味にあつた、古風な浪漫的な戀愛、たとへばお夏淸十郎の面影を思はす『戀の蜕』や、或は『色懺悔』の繪卷物の様な、色彩にとんだもののみであり、しかる時は割に純粹な、淸らかな筆致でそれを書いてゐるやうに思へる。

彼は、屢々戀愛至上主義者の口吻をもらす。「噫、戀無き夫婦は一生不治の病を患はむごとし。一日永らへば一日の苦あり。」（男ごころ）とか、あるひは「戀は阿片の如し。其味を知らねば知らでも濟むべきに、唯

一時の一口より心亂れて(月も花も何でもない事戀の道)世界廣けれども萬物多けれども、是に換ふ可きものなく、此一念驕るほどにおもしろき世も味氣なく、果敢なく、愁く、恨し。男女、智、鈍、何れにしても初戀の相手の懷しさは、死しての曉、白骨に其人の名を記せし處は、灰の中にも焚殘るべし。」(おぼろ舟)など、あちこちの頁に散見されるものであるが、それ等は、その日の筆の踊り工合で、常識生活を愛し、世間を氣にし、世俗に馴れた、善良なる小市民性を持つた紅葉は、戀愛の焔に身を燒かれる樣な事などは又痴事に見えたのであらう。それは、一には自身の烈しい戀愛の經驗のなかつたらう事と、時代の戀愛への輕蔑的な封建思想の觀念が頭に巢くつてゐたためであらう。その時代に調子を合せて步き、反逆の牙を持たなかつた彼としてはそれは必然的なものである。

彼の描く戀愛の、當事者の微溫さを見るがいい。每朝會ふ俥上の令孃に、想をよせて、それに會ふ事を、そして傍觀してゐる事を唯一の樂みにしてゐる『拈華微笑』の主人公とか、讀んでゐてもじれつたくなる『多情多恨』の主人公の態度、すべて積極性を持つ事を嫌つたこれ等の反映するものは、初期から後期を貫く戀愛に對する紅葉の氣持である。『金色夜叉』の貫一の戀愛の烈しさは、かなり胸をうつが、その態度も、復讐の手段の女々しさにも、やはり消極性を見せてゐる。また滿枝をこばむ貫一の態度は、すでに彼の初期の作品『此ぬし』の主人公なる大學生が、隣家の令孃をこばむ一種のヒロイズムで、それの延長である。この事は戀愛の蔑視でなくてなんであらう。

詰る所、紅葉は純粹な戀愛に對してあまり興味を持たず——寧ろ冷笑の立場をとつてゐるのだ。

女性の一生へ對しても彼の初期の作『夏痩』に書いたやうに「女の一生を二つに分けて、嫁入前は花盛。色の香のと左や右ういはれながら、己からも浮々して、冬も秋も此世にあるを知らざる景色、餘所目は只美麗なり。嫁入後は實熟りて姿風情に構はず、苦勞多ければ仔細らしくなりて、雪霜を心待に恐るる姿なり。この二季を較ぶるに、花盛の短き事風の過ぐる如く、實を持ちてから枯木の烟をふすぶるまではやゝ長ければ、前に愁くとも後には樂しかるべきこそ願はしけれ。」と極めて常識的な見方を出でないのであつた。

かくて、彼が好んで描いた女性は、多く情痴の世界の淫蕩的な空氣に染まつた群である。それは一つには時代のせゐであつたらう。紅葉自身が好んだ女では無論なく、只かかる女性に興味を持つたらう、讀者の滿足を買ふための試みであつたらう。精神的欲及のない、あまりに肉體的要素の濃い女性たちであつた。もとより、女性に對する彼の理想は、傳統的な、家族主義の立場より語られる。若やかな戀の相手としての女人は子供つぽく、更に阿片の如くに、魔醉せしめてくれる淫蕩の世界の中へも沈み得ず、求むる女性はつつましく端座する家庭の人としてのそれであつた。『唾玉集』の『戀愛問答』中にも、

女に就いて言つて置きたいことは、遊藝も着物を縫ふこともいらないが、教育がなくちや宜けない。詰り溫かな兩親の間にうまれて、溫かな家庭の教育を受けた者でなくては宜けない、斯ういふ女は米の飯のやうなものだ、教育と言つても、理學の教育でも、文學の教育でもない、家庭的教育なんだが、可なり手紙もかけ、筆跡も餘りまづくなく、假名なしで新聞位は讀める位のが宜い。金縁の眼鏡をかけて、被布などを着るやつは、家庭を修めることが出來ない。誰だか才なきは女の德なりと言つたが實際才は

ぢけた奴は困る。男は少々ねぢくれてゐても世間と交際するから、自分を磨く機會は幾等もあるが、女はそうはいかない、娘からすぽんと妻君になる、素直でないのは實にこまる。顏なぞは一年と持たないもんで、色々用向きが出來て忙しいから白粉を附けてはゐられない、長く色を保つことは、商賣人と違つて素人には望まれない。生涯不滅なものは詰り精神なんだ。

家庭的な、あまりに家庭的な女性である。所謂る良妻賢母である。そこにはつまり紳士らしい紅葉の風貌が描かれるだらう。彼の生活の規帳面さが思はれる。かかる立場からまた、

考へて見れあ、女房程結構なものはないね、商賣人でも家に入れやうとすると、全裸體なやつを連れて來ても、三百や四百の金はどづかれる。是れに比べて見れア安直もんで、實に結構なものさ。唯でないがしかの着物も附いて、文久も出さないで貰つて、お三どんの役も勤め、お妾の役もするつてんだ。其れで給金なしだ。手をついて禮拜しても宜い位のもんだ。

氣輕に出でたこの言葉も、女性の冒瀆でなくてなんであらう。彼が女性の權利を認むるのは、一つの感情による。彼は女性が何故に男性の下にあるか、正當なるその地位は如何にあるべきか、深い省察はよくする所ではなかつた。漠然とその生活經驗より、男性の勝手な振舞に對して、從順奴隷の如き女性の態度に勿體ないと、ふと思ひ、ふと次には忘れる彼であつた。

即ち彼は言ふ。

女房は同じ人間でありながら、亭主が足を投げだして、足袋をぬがせろと云へば、脫せるだらう。勿體ない

次第ぢやないか。それでお前、給金なしで働いてるんだぜ。僕なんぞは金さへあれア、妻君に給金を出したい位なもんだ、私はそこが西洋主義なところだが、男女同權論者だね、但し女の方から主張させるんでなく。弱いやつだから、此方が同權にしてやるんだね、同權にして置いて、ひいひつぱたく、其恐縮してゐる奴を助けて、同權に致してやるんだ。手綱の取方が肝腎だね。

彼のこの考へ方はその作品にも見えて『男ごころ』に

丸裸でも千圓以上の價値ものに、相應の荷物まで添物まで添へて、無料で遣らうとは、古來からの風習とは謂ひながら、理窟を謂へば、世中にこれほど勘定に合はぬ話のあるものにあらず。家內に入れて火鉢の前に坐らせたらば、猫ほどの益にも立たぬ切店の女郞請出すにも、若干か身代は拂ふべし。本來ならば婿の方より、相當の代金出して、一言は禮いひて、戴いてゆくべき理なるに、途方も無いこと、

とその娘を嫁にやらうとしてゐる父親の氣持を書いてゐるが、これが結婚についての彼の思想だ。當事者の意志を拒否し、家族制度の立場よりなされた結婚が、功利的見解に及ぶことは當然である。紅葉はただその結果より、漠然たる疑惑をもつて、男性の有利な立場に勿體なく思つたにすぎず、その根本への追究までには至らなかつたのである。

最後に彼の理想の女性を、彼の作品中に求むるならば『多情多恨』の女主人公お種の性格に、少々のコケツトリイを加味した女である事を自らいつてゐる。『戀愛問答』中門下の柳川春葉の問への答へである。

マア然だね……阿種のやうに不人相ぢや宜けない。餘り淋し過ぎて宜けないね。更少しさばけて、外の

者には云はなくても、己にだけは洒落の一つも云つて、「ヨウ」てなことを聞にあ云つて呉れなけア困る。これに説明を加へる必要もない。かかる世間並の紅葉の戀愛、結婚、女性へ對する態度であつた。硯友社中で最も人生派的に深かつたと思はれる柳浪、眉山の態度はどうであつたらうか。

柳浪は、紅葉を描いた世界が、情痴であつたとすれば、之に對し、愛欲と名付けたい世界を描いてゐる。彼にあつては戀愛は、燃え上つた情熱の崇高さと、逆に暗いじめじめとした、蛇の様にしつこい人間の本性として取扱はれてゐる樣である。抱擁と接吻とに甘い二人の微笑すら見られない。と言つて氷河の樣な深刻な輝きも見られない。根强いいがみ合ひ、永遠の兩性の暗闘である。それは單なる性的本能のあらはれでもなく、また世紀末のデカタンの陶醉し切つたそれとも異る。しつこい、死にまでもせまつてゆく、そして相手を吸ひつくし、觸手でからめつくしてしまふ人間の愛欲である。

「戀愛」といふ言葉が、精神的な概念を多く含み、精神的昂揚を感ずるけれど、柳浪は戀愛の持つ浪漫性、昂揚性を表面的のものとして、しつこい、あくどい内部へ入つて行つたのである。

前に言ふ如く、兩性の快い握手でなく、怨敵の樣に相容れない、兩性の相食まんとする闘ひの姿である。彼の所謂深刻小說には男と女はかかる關係をつづけてゐる樣に描かれた。然し、かかる愛欲のしつこい闘ひも、次第に精神的要素をもつて押へて『紫被布』『二人やもめ』を通じた女主人公は、前いふ如く、いくつかの愛欲の過程をへた後に、一つの純情に生きたい希望を抱く樣子を、次の樣な會話で示してゐる。最初が女主人公の言葉だ。

「最初が先づ山川さんさ。それから種々の目に逢つた揚句が、あの翁堂だらうぢやないかね。對手で虚言を吐きやア、此方でも吐きたくなるし、欺されりア、欺したくなるしね、其様な事ばかり爲て居たつて、面白くも可笑くもないんだもの。」

「ほゝほ。其處が面白い處なんだよ、互に手があればこそ、漸次深くもならうてんだから其が無くつちや、人形を情夫に持つた方が可い位なもんさ。」

「全く左様なの。人形なら私が迷ふかも知れないけれども、もう〳〵手があるとか何があるとか、其様な男にや眞平だね。泣いたり笑つたりして、手管の遣りつ競を爲たつて、何の男も〳〵、悉皆同一でね。詰りは捨てるか拾られてるか爲て居たつて、何の面白い事があるもんかね。私や世間を知つてる男なら、何様好男子だつて、振向いて見様とも思はないよ。」

「ほゝほゝゝ。酷く御悟なんだね。」

「悟つてゐるのか、迷つてるのか、自分で自分の事は知れなからうけどもね、私やもう他の云ふ色戀なんぞ、ふつ〳〵可厭だと思ふの。」

人間の愛欲の根强さを知つてゐた柳浪も、然し自らは、かかるものに觸れることを恐れ、古い封建的な格律に閉ぢこもつてゐたのではなかつたらうか。さればもし、三角關係の場合、義理と人情にはさまれた際、義理に忍從する犠牲――もしそれが出來なかつたら、死を撰ぶといふ考へ方を持つてゐたのではないか。それは『松原饅頭』の芳江に具現される。彼女は落ぶれた現在ではあるが、元は名家の娘である。彼女は毎日

饅頭を賣つて生活してゐる。彼女の父に恩を受けてゐる、孝八といふ男の息子京二郎は、東京で醫學を修めてゐる。孝八は京二郎を芳江と一緒にし、芳江の家の養子にしようとするが、京二郎は、町の金滿家の娘お光と東京で仲よくなつてゐる。その二人の愛を知つて、芳江は自ら退いて二人の幸福を思ふといふのだが、かかる古風な芳江の氣持に、柳浪は同感してゐたのであらう。そこには、自己本位な、或は戀愛本位な、燃えあがる近代的な個人の意志は見られない。故にその貞操觀も前に言つた如く、極めて嚴格に、『兄の煩悶』の場合の兄の氣持、一度あやまつて貞操を破られたら、一生獨身をせよと妹に一圖にせまる兄への同意の保持者であつたらう。

柳浪も尙、男女のことに深く掘下げた觀察は示したが、舊い傳統に拘泥しすぎて、新しい戀愛への態度に展開は見せなかつたと思はれる。

次に眉山であるが、年と共に彼は同人中一番思想的につきつめて行つた。苦しんだ。しかしその苦悶は人生問題と藝術との交錯である。紅葉にみる藝術一面と異り、それと人生との一元に苦しんだ。

彼はその若き日、自らの秀麗な容貌を誇つてゐた事は、彼に接した人々の記す所である。その故に女性に對しての自信があつたらしい。若い女性たちの愛撫に、若い日を送つた彼に、格別、戀愛の苦惱、それに燒かれた體驗の深さといふものがなかつたらう。彼はまた、紅葉の如き情痴の世界も、柳浪の如き愛欲の世界をのぞいて書く事も、性格的な氣品によつて、餘り好む所ではなかつたらう。

公賣『我樂多文庫』の第二號に彼の戯文『戀』がのせられてある。前半を揭ぐるに、

心は思のかなふを願ひ、戀は思のまゝならぬを命として、よろづの物の哀れとはなれりける。待宵の閨に月の影傾くをかこち、後朝の別れに鳥の聲まだきを恨む、松の葉の變らぬ色を賴み、葛の葉のうらみあかす身を敢果なみ、耳なしの池に深き思を沈め、生田の川にあはれなる名を流し、大幣の引手あまたに胸をいため、行水に數かく敢果なさに心を悩まし、夜の衣を返して寢しより夢てふものは憑みとなりて紀の關守が手束弓の不思議も有けん柴垣の隙間より紫の若草を慕ひ、車の下簾よりほのかなる俤を戀ふなど、いづれもとり〴〵の哀れなるべし。其品々を僻分くれば初戀は恥かしく、待戀はもどかしく、忍戀は人目の關守に鳥の空音をはかり、絕戀は團扇をかざして秋の月に向ふ、日高川に蛇となるは恨戀なり、天の河を七夕に渡るは稀戀なり、逢戀增戀隔戀、名立戀など品變りて淵瀨の深淺はあれども其の水上はおなじたに河の水の流れと情の道は今に絕えず――

この文章に見らるるやうな、若い時の、浪漫的な古風な態度は、永く彼の作品に見られた。彼が戀愛に對する、その才と美貌で、常に容易な勝利者であつたらう事が、女性に對しての遊戲的態度を示してゐる。

『眉山美文集』に收められた、九華へあてた青年時代の書信の一節に、

いつもの事ながら婦人の儀につきかれこれ忙しく、返書も大きに遲はり申候。嗚呼好男子には誰がなる、御存じかは知らねど、誠にうるさきものにて候、何だつて君、あつちでもチヤ……、こつちでもホヤ……

とふざけたものがある。かかる態度の彼は女性への暴君であつた。同書の彼の日記の斷片二十五年十月十三日の條に、

――〇〇宇都宮へ行きて〇〇と改めて出でたる由を聞く。彼の下谷を去りたるも我が爲にはあらざりしが、彼の情はあはれなりき。彼は我を怨むならん。ゆるせ〳〵、我は爾の如き低き愛を容るる能はず、我は情を弄びけん、我が罪いと深し。

と恐らく彼がつれなくした女性のその後の流轉を聞いて自らをとがめてゐる。

思ふに、彼には女性も戀愛も大した問題ではなかつた。一切を含めて、人生の第一義は藝術であつた。藝術によつて人生をそこに知らうとした。それであるから、前掲二十三年九月五日附の小波宛の手紙に「こぼす事勿れ、歎く事なかれ、此時誠に虎穴なり龍肥なり、今一ト握にして虎子を得べし。珠玉を得べし。ただただ心氣をして臍輪、氣海、丹田、腰脚の間に充たしめ、巨鼻を眞向に振かざして、勇進突戰するに於ては、本望成就、得度成佛疑ひあるべからず。」と失戀の友を激勵したが、むしろ失戀などで、惱むのは不甲斐ない極みに見えたのであらう。

彼には女性や戀愛は、手をのばせばすぐ採れる果實ではなかつたらうか。それに較べて、藝術への憧憬の烈しさ。それが若き日の彼の胸の焰だつたのだ。

「展開」を論ずる場合にも述べた事だが、『靑葉』の主人公なる詩人が、その戀人英子を「英子は美人なり。しかも我が好む際の美人なり。其裏美しく、匂深く人に越えたる誠實ある、いとせめて物優しき中に動かぬ處ある、或處は豊かに或處は氣高く、取立てていはば尙盡きぬ可憐らしき心根の、かかる人と末長く語盡さば、我が世は又上もなく樂しかるべきに、さらば我は應ずべきか。」と言つてゐる。英子はこの詩人を通じて、

眉山の、理想的な女であつたらう。けれどひとたび女性より、藝術の神の奴隷となつた眉山が、奔放な「或時は烈火の如く、或時は死灰の如く、變幻極りなき詩人」の狂兒の如き態度の爲に、つつましきこの女性に悲しき思を抱かしめることを恐れる。

これ等はあまりに浪漫的な考方であるが、彼は次第に女性を、藝術家らしい態度で眺め直す傾向を持つた。現世に見る輕蔑すべきあまたの女性の存在に氣を腐らした彼の創造した「永遠の女性」の影を持つてゐるが、それを更に自らの密室にいざなひ入れた場合の幻滅をも彼は知つてゐたのであらう。

眉山は、三十四年八月『梅紅葉』において、青年畫家に淡い戀をもつた女性がゐても、畫家はただ藝術家としての觀察を彼女の上に冷く加へたままで、何の心のときめきを起さなかつた事を筋としてゐるが、これは一面眉山の進步で、女性を見る時、ある浪漫的な、空想のベールをもつてその上をつつんだ日より、質實な心境となつた事を示すのである。

眉山は、その最後に、たしかに藝術に行きつまつてゐた。あらゆる自己を、さらけ出す態度を持たない性格の作家の終りに襲はれる破綻である。核心にまで入り得ない、彼等の寫實主義の破綻である。眉山は、後年色々の型の女性を描いたが、彼にとつては、女性も作品に必要な、藝術のための女性で、彼の全體をもつてぶつからうとせず、表面よりの觀察で、滿足したのでなかつたらうか。優れた舞臺監督は、舞臺にその女優を自由に用ゐるために、その女性としての凡てを知るといふ。彼女の生活、過去、性質、特徵はおろか、全身までも。眉山は藝術のためにとて、かかる眞劍な體驗にひたりえなかつた。表面的な——心理も外貌も、

その客觀にすぎなかつた。

彼の惱みは、かく自己が直接手を出さず自身を濡らさずして、自己の創作に眞實を描かうとして、果せなかつた爲であつたと思ふ。

とはいへ眉山は、總ての浪漫的作家のごとく、精神的方面に、進歩した女性を描かうとした樣におもへる。紅葉の描かうとした粹とか柳浪の描かうとしたまごころとかと異つた、近代的な、精神の匂のある女性を描かうとした事である。

つまり彼も、その日常生活では、女性を輕蔑してゐたが、作品では尊敬すべきものを見出さうとした女性を描いてゐる。日常生活で見られぬ夢を作品に見たのであらう。また語を變れば日常生活で知つた女性への失望からの結果であらう。この意味で、淡いながら「永遠の女性」にあこがるゝ藝術家の一人であつたのだ。

藝術を通じてよき女性を、よき戀愛の相手を空しく描く淋しさが汲まれよう。彼は晩年『自我』なる短篇中にS・Mといふ、理學者の手紙の形式にして、次の樣な句を記してゐる。

> ああ烈しく渦卷く新しい時代の思潮は世の青春男女を何處の岸に吹きつけるであらうか、地上の花と歌はれた『若い女』の星の樣な瞳に、温かい愛の色と懷しい情の閃きとは最う已に消えて居る。見ゆるものはただ深刻なる寂寥と、哀愁の影とである。そして僕は竊かに思ふ。十九世紀の露西亞の如く、今の女學生は男子のそれよりも遥かに急進的な思想（ソート）を抱いて居ないか――そして亦自然科學の影響や、哲學の感化を受けることが深くはないかと。

彼の死の直前の發表であり、自ら「烈しく渦卷く新しい時代の思潮」に漂うてゐた彼は、さうした主觀によつて、苦悶してゐる若い女の群を思つたのであらう。そして同じ惱みを分ちたい氣持がしたのであらう。かく見れば、眉山は紅葉の好んだ如き女性を蔑視し、もつと近代性を見る女性を尊んだと思ふ。その意味で女性崇拜家といふべきであらう。彼が理智的な聰明さを持つた樋口一葉に對して、憧れの心を抱いたことは前に述べたところである。この事實も彼の女性觀の移動に明らかな證左を與へてゐる。

以上主として硯友社で最も深い思想を持つたと思へる作家について論じたのであるが、より低い他を論ずるまでもなからうから、結論に急ぐ事とする。

結論

今日世界の國々に於ける、あらゆる文化現象は、その國獨特の傳統を繼承しながら、他國の文化を攝取して、時代と共に、益々國際的な關係を密接ならしめてゆく傾向を持つものである。そこには國際人としての觀念や、經濟事情を基礎としてたとへば交通機關の進步に伴ふ、各國間の著しい短縮された距離等の關係など色々理由があらう。日本も明治に入つて、政治方面、經濟方面、科學方面、すべて國際的になつた如く、等しく文化現象の藝術方面も國際的な一線上への進出をなした。

明治以前の文學は、支那、印度の影響を受けつつ、いはば東洋的文學の一部としての位置を占めながら尙日本的なものであつたが、明治に入つて海外の文物の流入は、文學にも、必然その形式內容に影響を受けつつ、國際的な文學となつた。勿論、日本に生產された文學は、あくまでも日本固有の土地の色彩を示し、人情を持ち、日本の言葉の陰影を保つものであることは、當然であるけれど、ここでいふ國際的文學の謂は、その內容、その形式の國際的な流通を言ふのであつて、たとへば萬葉集や、源氏物語が、日本的な文學でありながら、世界に類を見ないものだとか、セクスピアの作品が、英國人のみならず、世界の人々の心を動かす作品だといふ樣な意味の世界的とか、國際的だといふのと概念を異にするものである。

さうして、日本のみならず地球の國々の文學は、一面國民的な傳統をひくかたはら、次第に國際的に內容

形式の流通を見、すでに一世紀の昔、ゲーテの高唱したやうに、世界文學への理念への上昇の跡が見られるやうに思ふ。

科學界において、すでに一國の科學は世界の科學であるやうに、社會思想も、一國の思想家は、各國共通にその思想を汲むやうに、文學的思考も、その頂點を今は共通に、各國の文學者に頒ち與へてゐる。その結果として作品の生産にも勿論、强いその意識が見出される。

最早や一國の專門の文學者は、一、二の外國語は通達して、新しき世界の文學思想の動向を、知悉して、親しい隣人の觀をもつて、自己の文學の推進に苦心してゐる。

一方專門的職業までに變化した外國文學の飜譯は、盛んなる出版企業と結合して、市場に充ち餘技的職業當時に見られぬ技術的進步を示してゐる。

今日の日本文學は、各國と等しくすでに統一されようとする世界文學の、頂點へ至る一段階としての、國際的連鎖の一環の位置を占めてゐる。

德川期までの文學を理解するに、東洋の思想、東洋の文學と截斷して、考へられなかつたやうに、明治以後の文學は、海外の文學との相關に於て、考へねばならないであらうと思はれる。

さてこの國際的な文學として明治時代に、日本の文學が如何なる過程を經て、合流して行つたか、凡そ次の三つの時期に區劃されるだらう。

前期　初年より二十年頃まで

中期　二十年より三十五年頃まで

後期　三十五年の後

即ち前期は輸入された諸外國の文學と、日本傳統の文學と未だ合致し得ず、水と油との樣に分離して、そのまま流れてゐた時代で、輸入する態度もまだ定まらず、純文學以外の文化への効用の立場からなど、專らなされる傾向もあつたが、中期に至つて次第に接近し相觸れ、或は相反撥し、相融合し、とにかく國際的文學の大きな流れに、合流せんとする最も激しいざわめきだつた過渡期であつたが、尙合流をさけて一條、油の樣な江戸文學の流を固守する人々もあつた。然し時代の大勢に捲かれて、後期三十五六年以後、西歐に水源をもつ自然主義文學の流通をもつて、日本文學はやや完全に國際的な存在となつた如く思はれる。

我々がその展開の跡をみた硯友社の時代は、この明治文學の中期――しかもその時代の主軸をなしてゐた文學であつた。即ち日本文學が、國際的文學たらんとする、進出の瀨戸であつたのである。

されぱこそ硯友社作家の作品には、凡そそれまでの傳統的な文學の要素と共に、新しき外國文學の要素が烈しい混合を示す。反撥と融和に混沌としてゐる。その混沌たる渦卷のさなかから、硯友社の作家は浮びあがらんがために戰ひ、苦しみ通したのだ。

在來の批評家の中には、餘りに彼等のこの立場、苦悶を認めない者が少くはなかつた樣に思へる。そして在來の傳統を固守した如くさへ思つた人もないではない。それは誤謬だ。私は彼等の斷間なき跛足を、その作品に見る。そこに苦し氣な彼等の呼吸を聞く。

私が「硯友社の展開」の、四つの章に論じた事は、この駈足とその歩度、呼吸を示す意圖に外たらなかつた。文壇を如何に自己の手に維持するかといふ事は、如何にして新しき時代に適應した、文學を創造するかといふ事と、裏表盾の二面の如きものであらねばならぬ、政權欲に執着した、政治家の陋劣な政策を弄する態度とは、自らわけが違ふであらう。硯友社の人々の中には、肉體をもつて藝術に殉じた、眞摯な藝術家としての良心を持つた作家もあつたのである。

國際的な文學への合流のためには、各國の作家は、他國の文學を研究する事が最も大切である。紅葉が外國文學へ親しんだ事は前に述べた事だ。眉山等もまた熱心にその事に從つてゐた。彼等は專門の外國文學研究者ではなく、飽くまで作家であり、そこからその文學の實驗にその要素を摸索した。そして良しとするものを攝取して自らの作品の生長を計つた。

かかる努力をもつて、硯友社の人々は共時代に生きて、日本文學の國際的進出への下積の石となつた。

我々は最後に、かくの如き重要な時期にたつた、彼等硯友社同人の、社會及び文學につくした功績の幾つかを、實際的に拾ひあげて見ようと思ふ。

一、文學者の社會的地位を向上せしめた事。

彼等以前、德川時代の作家の多くは、社會より、一種の氣まぐれな輕薄兒、蕩兒の如く見なされた、同じ文學に從事する者でも、學者や歌人に比して、所謂軟文學の作者は甚だその地位を卑く評價され、よき家庭をもつ人々から爪彈されてゐた。それは多くその描く作品の故でありその作品の描く世界を、善良な家庭の

人に見せたくない爲であつた。そしてその世界――淫蕩な遊廓とか男女のもつれあひを、親しく見聞してゐる作者に、碌な人物はゐないといふ考へからであつた。事實爪弾さるべき教養修養のない戯作者が多かつた。一面作家の地位の低い評價も、當然な理由もあつたのだ。

所が、硯友社の作家には、その當時のかなり上層的な教養ある人が多かつた。最高學府の門を出ぬまでも、くぐつた人も多かつた。その爲、在來の作家によつて生じた概念にあてはまらぬ紳士的態度を持つてゐた。それに統率者紅葉は、政治的な鮮かな手腕で朝野の人と交つた。それ等の事と當時外國思想の影響によつて、外國に於ける文學者の地位が凡そ如何なるものかが知られ、それと適應する硯友社作家の態度が、位冠はなくとも、作家が尊敬さるべき者である事を、社會に認めさせたのである。

二、文學の社會化

文化の開發に從ひ、文學を愛好する人々の增加するは當然であるが、硯友社の人々はよく、この傾向に應じて、その作品を發表した。彼等の作品には、時代を嚙む樣な先驅者の指導性はなかつたが、低級な傳統の作品を驅逐し、漸進的な、そして適度の道德性、新鮮性を持つたもので、それが大衆的な新聞雜誌の發表機關を通じて、文學と社會を密接にむすびつけた。

以上はその社會へ對する功績であるが、文學の史的展開の上にも次の樣な役割をつとめた。

三、表現上の功績

文學が廣く社會化するため、又完全な作者の意圖を表現するためには、社會の日常語になるべく接近した

表現を用ひて作品が書かれねばならない。この要求を硯友社の作家が主力となつて果してくれた。言文一致體をひきずり、それを完成への過程を、二葉亭、美妙に次いでその同伴者として彼等は歩いて行つた。

表現といふ事が硯友社の人々の最初全力をそそいでかかつた仕事であつた。紅葉の作品の內容に、不滿を唱へる人も、必ずその文章には感心するやうだ。言文一致を含めて表現へ對する彼等の態度、特に紅葉のそれは敬服に價する。『紅葉遺稿』に載せられた『疊字訓』は彼の苦心を如實に示してゐる。試みにその最初の頁――一一一頁を開いて見よう。

あたふた　周章　倉皇　遽蹶
あらあら　疎漫
あらあらし　疎暴
あかあか　煌々
ありあり　歴々　昭々　了々（如目前）
あぶあぶ　喚喁
あけすけ　明白（明々地）暴露
あやふや　曖昧

折々執筆の相間に氣づいてかかれたかかる字句が五十頁程記されてあるが、かかる言葉に對する態度でこそ、初めて彼の表現が生れたのである、言文一致の先驅者は二葉亭と、同じ硯友社に出た美妙であつたが、

これを完全に、そして廣く社會的に育てあげたのは、硯友社作家の不斷の努力によるものが多い。

四、素材、內容の進展

前章、硯友社作家の文章へ對する態度について述べた時、記したやうに、素材に對する視野は、彼等において著しく擴大され、また、思想的な內容は、卓拔したものはなかつたけれど、單に小說を消閑の具として見た以前に比して、それ以上に出で少くとも作者の意圖を讀者に傳へて、何かを示さうと努力した跡がある。柳浪、眉山の社會の暗黑面への關心も、一つの重大な面を描いた事になる。又小波の少年文學の創作も特筆すべきであらう。

五、心理描寫、性格描寫の開發

近代の小說の特徵の一つは、是等を深く掘さげてゆく事にある。作家の解剖するメスの縱橫の擴がり、その深さは、その才能を示すものでなければならぬ。そこには豐富なる體驗と、直觀力の非凡性を要する。硯友社の作家は初め人間の觀察を、多くその外貌にのみ寄せ、服裝などについてのペダントリイを競つた觀があるが、後年やうやく心理解剖、性格描寫の方面に手をつけて行つたのである。

六、構成技法の進步

所謂プロツトの立て方である。單に筋の興味にも、在來のものは、小說的な、餘りに小說的なものが主を占めてゐたが、硯友社の作家は多く次第に寫實主義への立場をとつたので、筋も、如何にも現實性をおび、自然性をおびてきた。現實性への切迫にあてるため、色々の技法を試みた。

プロツトの最も平明なものは、事件を側面から離れて見て、AがBとなりBがCとなりDで解決すると、客觀したままを記述するのであらうが、小說技巧の進步は、ABCDの位置を樣々かへてみたり、作者の觀察する場所を、前後、左右、上下或ひは事件の中に飛びこむなど樣々に變へてみる。それ等によつて、作品の價値を增減せしめる事が多い。

ここに硯友社の作家の作品を通讀する間に氣附いた、技法の幾つかを擧げて、この方面へ向けられた彼等の注意を記しておかう。これは勿論彼等の專有したものではないが、その作品に多く見出される形式である。

1、作の主人公自ら物語る形式。

作者自身の眞實の經驗でもいいし、或は作者が物語の當事者と、假になつて述る場合もある。例をあぐれば、柳浪の『殘菊』眉山の『ゆふだすき』紅葉の『不言不語』思案の『わが戀』水蔭の『蛇ぎらひ』『非常線』『湖心の戀』『軍事記者』など凡てこの形式である。

2、物語の進行中に時々作者の顏を出して間接に關係するとか、或は傍觀してゐるといふ形式。例へば眉山の『小妾記』には、作者は、その住宅の隣家に住む妾と、その主人である老人の嫉妬騷ぎを傍觀してゐるが、後で出入の男からそのいきさつの起りを聞くといふ技法をとり、柳浪は『昇降場』で、作者が出征兵士を送る爲に行つた停車場のプラツトホームで、側らに戰爭反對を述べてゐる女や、貧し氣な妻子が、その夫を勵ましてゐるのを、傍觀してゐる情景を描いてゐる。

この一、二の形式は凡て作品に生々しい現實感を與へて讀者に迫らうとする技法で、これに類した技法に3

の場合がある。

3、第三者がその經驗をかくかく語つた。それを次に記すといふ方法で、勿論それは事實聞いたのでなく、作者の空想に眞實性を見せる場合などが多い。紅葉の作品に例を求めるならば

「わが友靑木某、此一事は神にも親にも秘めど、仔細ありて我一人に語りき。」

と書出して山の溫泉場の娘との戀物語をする『巴波川や』

「お斷り致して置きますが、此物語は小說ではない、實話だと言ふので、昨年某會社のロンドン支店に出張してをりました友人の土産話でありますが……」と斷り書した『西洋娘氣質』、また桑田氏といふ老人が、述懷する社會事情に應じて銀の二十年間の價値の變遷を語る『銀』などがある。これに類するに乙羽の『小夜衣』では、流してくる新內語りに、その過去を語らせるといふのである。

4、斷片的なものを記して、それから讀者に統一したものを得さしめる技法。日記とか、往復された書翰とかのモンタージュであつて、事件の順序に並べるといふ方法などで、小波の『すみれ日記』は、獨逸にゐる日本の學生が、ロザといふ文具店の娘への思慕を、毎日の日記に記してゐるのをそのまま示してゐる形式をとつてゐる。日記とか、手紙には眞情が現れる。そこからそれを配列し作品の現實感を汲ませる方法なのである。書翰の形式には眉山の「自我」なる作品がある。

此等の技法は、凡て近代の小說の特徵をなす、作品の現實性を、如何にして如實に讀者に感銘さすべきかを、或は外國の或は日本の文學から學び來つて用ひたのである。

その他本格的に筋を述る場合にも、單純に事件にぶつつかつてゆかず、作中の人物についても、くどい説明を省略して、近所や周圍の噂より、事件や、人物の外貌、性格の輪廓を讀者に與へて、その豫備智識から本筋へかかるといふ方法を眉山等は『綾小町』『裏座敷』などに用ひてゐる。即ち『綾小町』は四節からなるが一節は筋に何等關係なく、小説の女主人公のすむ家の近所で、近所の人が世間話をしてゐる。そこへふと戸外を女主人公が通るのをみて話が移つて彼女の身上に及ぶのであつて、二、三、四はこれを切離れて本筋をなすのである。『裏座敷』は下男と倬夫が、その雇はれてゐる家の主人夫婦に關する噂話から本筋に入つて、この家の若い妻と、世話になつてゐる青年の關係が描かれてゐるのである。

これらの數例でもみられる樣に、硯友社の作家は樣々構成技法の上に工夫をなしてゐる。

以上硯友社の文學運動の主流をなす、小説に就てであるが附隨的に新體詩、俳句、少年文學の分野に於ても、夫々重大なその史的價値を持つてゐたことは、それを述る際に記した如くである。

かく、簡單に列記する樣な、功績を文學史の上に止めてゐる。今日の眼からみたら、不滿不足は夥しく見出されるけれど、流れ來り、流れ去る文學史の展開、またその存在した日の社會の事情を基にして見直す時、彼等にはかかる功績があつたのである。

かくて硯友社は日本文學の國際的文學へ流入する瀨戸であり、橋梁である。彼等は自ら掲げた明白な文學上のイズムはなかつたが、この役割をその作品の實踐によつて爲し遂げた。島國的に鎖國された日本文學よ

り、國際的文學に合流する激流の最中に立つて、近代的な文學獨自の相や機能に思ひをひそませ、過渡期の重要な役割を果した彼等の奮鬪、犧牲はかかる立場に立つて見れば十分認められ、そこに明らかな價値がある。たとへ彼等の生産した多くの文學作品が、巨巖の如く偉大でなかつたにせよ、又ささやかながら珠玉の如き光彩を放たずとも、その壘々と積まれた多くの作品には、文學史上に無刻のままに殘されたものがあつてもその捨石的な存在が、やうやく幾つかの作品を水準以上に現しながら、明治の文學の展開を構成してゐるといはねばならない。又ひいては廣く日本文學の史的展開に確固たる足跡をふみつけてゐるといはねばならない。

硯友社年譜

（上欄數字は明治の年號にして、硯友社關係事項を示し、下欄は一般社會及び文學界の動向を示す。☆は彼我比較、交渉の暗示のため海外文學についての覺書なり。）

1（西暦一八六八年）
★尾崎紅葉二歳（慶應三年十二月六日生）
★石橋思案二歳（慶應三年六月二日生）
★廣津柳浪六歳（文久元年六月八日生）

2（一八六九）
★川上眉山生る（三月五日大阪にて）

3（一八七〇）
★巖谷小波生る（六月）

★江戸を東京と改め新しく首府となす。
★山田美妙、北村透谷、內田魯庵、德富蘆花生る。
★夏目漱石、幸田露伴、正岡子規、齋藤緑雨二歳なり。
☆ポオル・クロオデル、ゴールキイ、ロスタン生る。フランス自然主義の烽火フロオベルの「マダム・ボヴァリイ」出でて既に約十五年。英國のゴルスワアジイは前年、ウエルズは前々年に生る。

★藩籍奉還。
★出版條例、新聞條例發布さる。
★府縣に小學校設立。
★福澤諭吉「世界國盡」出づ。
☆サント・ブウヴ逝き、アンドレ・ヂイド生る。テエヌの「藝術哲學」成る。

★庶民の帶刀を禁ず。

4（一八七一）

★假名書魯文「西洋道中膝栗毛」出づ。
☆ドストエフスキイ「罪と罰」四版出づ。（初版は一八六六年）チャールス・デッケンス逝く。
★廢藩置縣。
★文部省を置く。
★高山樗牛、島村抱月、國木田獨歩・土井晩翠、德田秋聲、田山花袋生る。
☆エミール・ゾラ、ルウゴン・マッカアル叢書に著手。
☆ポオル・ヴアレリイ生る。

5（一八七二）

★太陰曆廢止、十二月三日を明治六年一月一日とす。
★徵兵令發布。
★島崎藤村、樋口一葉、河東碧梧桐生る。

6（一八七三）

★東京外國語學校創立。
★岩野泡鳴、與謝野鐵幹、綱島梁川、泉鏡花生る。
☆マルセル・プルウスト生る。ランボオの「地獄の一季節」出づ。

7（一八七四）

★讀賣新聞、明六雜誌創刊。

★廣津柳浪九州より上京、麹町番町小學校入學。

★高濱虚子、上田柳村生る。
★服部撫松「東京新繁昌記」出づ。

8（一八七五）

★露國と千島交換條約を交換す。
★小栗風葉生る。
☆ヴィトル・ユゥゴオ逝く。

9（一八七六）

★熊本、秋月、萩の亂あり。
★蒲原有明生る。

10（一八七七）

★西南の役起る。
★薄田泣菫、中村吉藏生る。
☆ドストエフスキイ「カラマゾフの兄弟」ツルゲーネフ「處女地」出づ。

11（一八七八）
★柳浪病んで、大學豫備門を退き商人たらんと大阪へ赴く。

★東京府會を開く。
★有島武郎、與謝野晶子生る。
★リットン作丹羽純一郎譯「花柳春話」出づ。
☆ストリンドベリイ「赤い部屋」を出す。

12（一八七九）

★學士會院設立さる。

13（一八八〇）

★既に上京せる川上眉山、本郷小學校を卒業、府の一中入學。同窓に丸岡九華あり。

★柳浪大阪より上京す。

★眉山進文學舍に入學。同窓に九華、石橋思案あり。坪內逍遙、高田半峰ここに教師たり。

14（一八八一）

15（一八八二）

16（一八八三）

★正宗白鳥、長塚節、永井荷風生る。

★東京大學初めて文科卒業生を出す。

★六合雜誌創刊。

☆フロオベル逝く。

★明治二十三年を期し、帝國議會開設の詔勅下る。

★東洋學藝雜誌發刊。

★自由黨結黨さる。

★小山內薰生る。

☆ドストエフスキイ死す。

★早稻田に東京專門學校創立。

★時事新報創刊。

★外山ゝ山等「新體詩抄」出づ。

☆アナトオル・フランス處女作「シルベエストル・ボナアルの罪」發表。

★紅葉一ツ橋大學豫備門に入る。久我龜石の紹介で思案九華等を知り、文友會を作る。
★柳浪五月父を、六月母を失ふ。

17（一八八四）

★大學豫備門にて、紅葉、美妙、眉山等相識る。

18（一八八五）

★三月、美妙、紅葉、思案、九華等硯友社を起し、五月「我樂多文庫」を出す。

19（一八八六）

★山田美妙編「新體詞選」八月に刊行、九華、紅葉も協力す。

★新聞條例の改正。
★初めて官報發行さる。
★坪内逍遙の「自由太刀餘波鋭鋒」中江兆民「維氏美學」
矢野龍溪「經國美談」等出づ。
★志賀直哉生る。
☆ツルゲーネフ逝く。

★華族令を定め五爵を設く。
★かなのくわい起る。
★成島柳北死す。荻原井泉水生る。

★官制改革され、內閣設置さる。
★ローマ字會起る。
★逍遙の「小說神髓」「書生氣質」出づ。
★三世柳亭種彥死し、武者小路實篤生る。

★帝國赤十字條約に加盟。
★帝國大學令發布。
★明治學院創立。
★反省雜誌創刊。
★末廣鐵腸の「雪中梅」出づ。

20（一八八七）
★紅葉帝大法科へ入學。
★六月柳浪處女作「女子參政蜃中樓」東京繪入新聞に掲ぐ。

21（一八八八）
★五月より「我樂多文庫」公賣となる。
★江見水蔭入社す。
★美妙社より離る。
★眉山、帝大、法科に入り、一年にして文科へ移りやがて退學せるが、二月處女作「魂膽祕事枕」を「我樂多文庫」十六號に掲ぐ。
★柳浪、蒲池壽美子と結婚す。

22（一八八九）
★一月新著百種第一號に紅葉の「二人比丘尼色懺悔」出づ。
★三月「我樂多文庫」を「文庫」と改題、吉岡書籍店より發賣。

★二世爲永春水死し、谷崎潤一郎、石川啄木生る。
☆トルストイ「闇の力」を發表す。

★東京音樂學校、美術學校創立。
★徳富蘇峰等の「民友社」起り「國民之友」創刊。
★長谷川二葉亭「浮雲」出づ。
☆ストリンドベリィ「父親」「痴人の告白」著手。翌年發表。

★樞密院を設く。
★博士號を設く。
★東京朝日、大阪毎日創刊。
★二葉亭の「あひびき」「めぐりあひ」發表さる。
★山田美妙の「夏木立」出づ。
★雜誌「都の花」「大和錦」等創刊さる。

★二月十一日憲法發布さる。
★東京專門學校に文科創立。
★幸田露伴讀賣新聞に入社。
★露伴「風流佛」篁村「むら竹」を發表す。

☆紅葉大學を退學す。
☆柳浪「殘菊」を發表。
★十一月「小文學」を發行す。
★十二月紅葉は讀賣新聞に入社す。

23（一八九〇）
★同人の芝居を催す。
☆眉山の「墨染櫻」出づ。
★六月「江戸むらさき」を發行す。

24（一八九一）
★紅葉樺島菊子と結婚す。「伽羅枕」を發表す。
☆巖谷小波は少年文學第一編として「こがね丸」を出す。
☆六月「千紫萬紅」を發行す。

25（一八九二）
★紅葉「三人妻」を發表す。

★森鷗外の「しがらみ草紙」春陽堂の「新小說」創刊。
★高田半峰の「美辭學」出づ。
☆菊池寬生る。
☆トルストイ「クロイツエル・ソナタ」を書く。

★七月一日衆議院議員の選擧初めて行はる。十一月二十九日國會開く。
★國民新聞創刊。
☆鷗外の「舞姬」露伴の「一口劍」宮崎湖處子の「歸省」等出づ。

★「國民之友」しきりにトルストイを紹介す。

★「早稻田文學」創刊。
★緑雨の「かくれんぼ」「油地獄」露伴の「五重塔」中西梅花の「新體梅花詩集」出づ。
★田山花袋、初めて紅葉、水蔭と相知る。
★川上音次郎等の新派劇起る。
☆ハウプトマン「寂しき人々」出版。

★正岡子規の俳句、落合直文の短歌の各革新運動起る。

★小波京都日出新聞に入社す。
★十一月水蔭「小櫻縅」を發行。

26（一八九三）
★紅葉、乙羽、花痩、水蔭等近畿地方を旅行す。
★眉山家庭的事情で性陰欝となる。

27（一八九四）
★紅葉「心の闇」言文一致の「むらさき」を發表。
★小波京都より歸り「少年世界」の主筆となる。

28（一八九五）
★紅葉「不言不語」を發表す。角田竹冷等と俳句研究の

★探偵小説、撥鬢小説の流行。
★萬朝報、文學界創刊。
★鷗外の「水沫集」出づ。
★芥川龍之介生る。
☆ショオ處女作「鰥の家」發表。マアテルリンク「ペレアスとメリサンド」發表。

★民友社の十二文豪、博文館の世界文庫發刊、海外文學を紹介す。
★内田魯庵譯ドストエフスキーの「罪と罰」高山樗牛の「瀧口入道」出づ。
★古河黙阿彌逝く。
☆モウパッサン逝く。

★日清戰爭起る。
★「しがらみ草紙」廢刊。
★逍遙「桐一葉」出づ。
★北村透谷自殺し假名書魯文逝く。
☆ダヌンツィヨ「死の勝利」出づ。

★四月十七日日清講和條約調印なる。

「秋聲會」を起す。
★眉山「大盃」「書記官」「暗潮」など發表す。樋口一葉を知る。「文學界」の人々との交遊しきりなり。
★柳浪「變目傳」「黒蜴蜓」「龜さん」等を書く。
★水蔭「女房殺し」發表。

29（一八九六）
☆紅葉「青葡萄」「多情多恨」を發表。
★柳浪「河内屋」「今戸心中」「淺瀨の波」などの力作を次々發表。
★秋聲會より十一月「俳諧秋の聲」を發行す。
★紅葉小西増太郎共譯「名曲クレーツエロフ」出づ。

30（一八九七）
☆一月眉山は三浦半島を放浪し水蔭の片瀨の家に止ること半歳、彼の「ふところ日記」はこの旅に得た。
☆七月紅葉は「金色夜叉」を讀賣に掲げ初める。
★柳浪「非國民」「あにき」「靑大將」「畜生腹」など發表。

★「帝國文學」「太陽」「文藝倶樂部」「文庫」「青年文」等多くの雜誌創刊さる。
★一葉の「にごり江」「たけくらべ」鏡花の「夜行巡査」など出づ。
★南新二逝く。
☆フランスに映畫發明さる。

★日本郵船會社の歐洲、米國、濠州航路開く。
★「めさまし草」「新聲」創刊「新小說」再刊。
★鷗外の論文集「つき草」出づ。
★若松賤子、末廣鐵腸、樋口一葉等逝く。
☆ヴエルレエヌ逝く。

★京都帝國大學を開く。
★一葉全集刊行さる。
★島崎藤村の「若菜集」獨步の「源おぢ」出づ。
★森田思軒逝く。
★「文學界」廢刊。
☆アルフォンス・ドウデ逝く。

31（一八九八）
★柳浪妻壽美子を失ふ。
★水蔭この年より二年間神戸新聞にあり。

32（一八九九）
★紅葉夏季を北越より佐渡への旅をなす。
★中村花瘦逝く。

33（一九〇〇）
★紅葉「金色夜叉」後編を一月より發表。
★九月小波伯林大學附屬東洋語學校敎師として渡歐。
★大橋乙羽歐米を巡歷す。
★文學ロ演會を催す。

34（一九〇一）
★六月一日大橋乙羽逝く。

★「心の花」「ほとゝぎす」創刊。
★「國民之友」「早稻田文學」廢刊。
★魯庵の「暮の二十八日」鏡花の「辰巳巷談」風葉の「戀慕流し」出づ。
☆マラルメ逝く。

★鷗外の「審美綱領」出づ。
★德富蘆花の「不如歸」幽芳の「己が罪」鏡花の「湯島詣」高山樗牛の「時代精神論」出づ。
★「反省雜誌」「中央公論」と改題す。

★北淸事變起る。
★「明星」「小天地」創刊。
★浪漫主義的詩歌盛んなり。
★外山ヽ山、小西操山逝く。

★獨步の「武藏野」「牛肉と馬鈴薯」蘆花の「思ひ出の記」天外の「はやり唄」出づ。
★晶子の「亂れ髮」藤村の「落梅集」等出づ。
★ゾラとニイチェの聲評壇に起る。

35（一九〇二）

★紅葉四月「金色夜叉」の續篇を揭げ初め、讀賣を退き十月二六新聞へ入社。

★柳浪高木潔子と再婚。「雨」等發表す。

★小波十一月に歸朝す。

36（一九〇三）

★紅葉胃患重く、二月大學病院に入り三月退院十月三十日逝き十一月二日靑山に葬らる。

★八月眉山里見鶯子と結婚、十二月二六新聞へ入社。

37（一九〇四）

★「紅葉全集」出づ。

★紅葉「病骨錄」出づ。

★「紅葉山人俳句集」出づ。

★中江兆民、福澤諭吉逝く。

★日英同盟なる。

★永井荷風の「地獄の花」花袋の「重右衛門の最後」鷗外の「即興詩人」出づ。

★透谷全集出づ。

★正岡子規、高山樗牛逝く。

☆エミール・ゾラ逝く。アンドレ・ヂイドの「背德者」出づ。

★日露の風雲急なり。

★露伴の「天うつ波」獨歩の「女難」天外の「魔風戀風」出づ。

★落合直文、市川團十郎、尾上菊五郎等逝く。

★二月日露開戰。

★「新聲」の後身「新潮」發刊。

★木下尙江の「火の柱」「良人の告白」藤村の「水彩畫家」「樗牛全集」等出づ。

★齋藤綠雨、原抱一庵、市川左團次、逝く。

☆アントン・チエホフ、ラフカヂオ・ヘルン逝く。

38（一九〇五）

39（一九〇六）

★柳浪厭世的傾向強く創作情熱失す。

★「紅葉書翰抄」出づ。

★眉山「觀音岩」を出版す。

40（一九〇七）

★三月十日我が陸軍は奉天に、五月二十七日海軍は對馬海峡に大勝す。

★夏目漱石の「吾輩は猫である」風葉の「青春」など出づ。

★「獨歩集」、上田敏の「海潮音」薄田泣菫の「二十五絃」落合直文の「萩之家遺稿」魯庵譯の「復活」梁川の「余が見神の實驗」など出づ。

☆イプセン逝く。

★京都帝大文科を設く。

★文藝協會成立す。

★「早稲田文學」復刊。「文章世界」創刊、自然主義活動を起す。

★二葉亭「其の面影」天外の「コブシ」獨歩の短篇集「運命」漱石の「草枕」出づ。

★泡鳴の「神祕的半獸主義」岩城準太郎の「明治文學史」出づ。

★福池櫻痴逝く。

★自然主義やうやく旺んなり。田山花袋「蒲團」眞山青果の「南小泉村」風葉の「戀ざめ」二葉亭の「平凡」等

41（一九〇八）
★六月十五日眉山自殺す。
★柳浪長篇「心の火」を二六新聞へ掲ぐ。
★「十千萬堂日錄」出づ。

42（一九〇九）
★柳浪ほとんど文筆を捨つ。
★「眉山全集」刊行さる。

43（一九一〇）

出づ。
★小山内薫の「新思潮」創刊。
★綱島梁川、陸羯南逝く。
☆ユイスマン逝く。
★十月戊申詔書下る。
★長谷川天溪「自然主義」出づ。
★藤村の「春」花袋の「生」白鳥の「何處へ」等出づ。
★「アララギ」創刊。「明星」廢刊。
★國木田獨歩、服部撫松逝く。

★鷗外等の「スバル」創刊。
★花袋の「田舍敎師」森田草平の「煤煙」荷風の「冷笑」蘆花の「寄生木」等出づ。
★荷風の「ふらんす物語」鷗外の「ヰタセクスアリス」發賣禁止。
★歌壇にも自然主義の影響あり。
☆小山内薫、市川左團次等の自由劇場起る。
★長谷川二葉亭、依田百川逝く。
☆ブルンチエール、シング、スヰンバン、メリデス等逝く。
★韓國倂合さる。

44（一九一一）

★「紅葉遺稿」出づ。

45（一九一二）

★「眉山美文集」出づ。

★「白樺」「三田文學」創刊。

★藤村の「家」秋聲の「足跡」花袋の「緣」泡鳴の「放浪」漱石の「それから」長塚節の「土」等出づ。

★啄木の「一握の砂」出づ。

★「二葉亭全集」、「獨歩全集」出づ。

★大和田建樹、山田美妙逝く。

☆トルストイ、ビエルンソン逝く。

★文部省文藝委員會官制發布。

★平塚雷鳥等女流作家「青鞜」を出す。

★幸徳秋水等死刑となる。

★秋聲の「黴」白鳥の「泥人形」出づ。

★谷崎潤一郎集「刺青」出づ。

★七月三十日明治天皇崩御。大正と改元。

★自然主義やうやく下火となる。

★武者小路實篤「世間知らず」志賀直哉「留女」厨川白村「近代文學十講」等新しき展望を文壇に與ふ。

★高崎正風、石川啄木死す。

☆ストリンドベリイ逝く。ロマン・ロオラン「ジヤン・クリストフ」出づ。

著者のあとがき

硯友社の文學の展開を眺めることは、明治の前半期の文學の過半の分野を眺めることだ。私はここに、その中から、集團としての硯友社の一團の動向を浮彫にするとともに、またその內部における箇々の作家の獨り獨りの姿を知りたいと思つた。生彩あるその動きを描きながら、彼等の歩んだ當時の、時代の眼に映つたところを知りつつ、一方今日の私の眼から批判して行きたいと思つた。

私は烈しい勞作をもつて、知識的にこの國の文學を研究してゐる人たちを尊敬できる。しかし神を研究しつつ神の實體を掴まうとする、古風な神學者に等しい不幸を感じてゐないかと氣づかふ。それと共に、私自らの性向としては、抽象的理論に硬化した、或は單なる知識の羅列に過ぎないやうな類の、それ等の記述には退屈してゐる。私は例へばブランデスの文學主潮史や、クロポトキンの露西亞文學の理想と現實に見出すやうな、とりあげられた作家の、生々しい精神と生活と、その作品とを交錯させて、それに對する豊かな理解に充ちては渾然たる情熱の文字を愛する。ここに私はできるだけ生々しい具象性を記錄しつつ、そこより自らに與へられた强弱の感動を記して、硯友社の作家の歩みを批判したかつた。

かくて、思ひ出は五年の過去に走る。本郷の大學で、國文學について藤村作博士、久松潛一先生の御示教を受けてゐた日、ささやかな硯友社についての草稿をまとめようと、江見水蔭氏を訪問した折に氏は若々しい情熱で、さまざまな話をして下さつたことを思ひ出す。

この稿に、をりをり文學史上の氏に對する非禮な文字があつたとしても、この書の性質上許容して下さるに違ひない。またこの仕事に著手した頃、ある古典の研究者が金色夜叉なんて兒守が寢ころんで讀める小説を讀んでと、輕蔑されたことを間接に聞いて、年若い私をすつかりくさらせ、怒らせたことを覺えてゐる。然し祝詞を讀む神官の讀みかたが、古典研究者の讀みかたに異つてゐるならば、兒守の寢ころんで金色夜叉を讀む讀みかたと、また他に異つた讀みかたのあることは言をまたない。われわれは結局、文學史の流れの中で自らを刺激し、自らを生かす部門に最も關心を持ち、新しき創造の資を求める外はない。思へば過去に硯友社作家の情熱を探つてゐる中に、未來の文學に對する私の夢が注がれてゐたやうにも思ふ。しかしもはやかうした迷妄の人たちの、明治文學研究に對する反動的言辭にかかはらず、近代的意義に眼覺めた明治文學研究は續々と飛躍し、進行してゐる。さうした進行の波の中に、いま「明治文學研究叢書」の一篇として、この小著を上梓する機會を得た。かつての草稿に、この歳、春より夏にかけて、五年の時間を經てその後いくらか成長した私の精神をもつて新しい資料をまとめ、かかる構成を得た。この書が明治文學の研究の上に幾分かの役割を果しうることを信じてゐる。

最後にこの書のなるについては、ひとへに御校閲を得、その上序文をも戴いた恩師藤村作博士、及び久松潛一先生に負ふこと多く、また鹽田良平學兄に樣々の刺激を受け勞をかけた事を銘記する。資料方面で、江見水蔭氏、前田曙山氏、形田藤太氏を初め色々御教示を得たその他の人々に併せて感謝の意を表する。

昭和七年盛夏、東京・長崎町にて

福田清人

索引

〔各項中初めは人名・その後は書目その他の事項。ゴチックは特に主要なる記述ある頁を示す。〕

ア

イ(ヰ)

カ（ガ）

キ（ギ）

ク（グ）

サ（ザ）

シ（ジ）

ス

セ

ユ

ヨ

リ

ル

レ

ロ

ワ

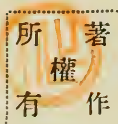
昭和八年二月十五日印刷
昭和八年二月十八日發行

硯友社の文學運動
明治文學研究(1)
定價金貳圓參拾錢

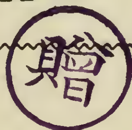
編者　藤村作
著者　福田清人

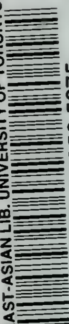
東京市神田區北神保町廿一番地
發行者　來島正時

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　小笠原秀雄



東京市神田區北神保町廿一番地
發行所　山海堂出版部
電話九段一三一〇番
振替東京二一六九一番




EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02952 5375